

第1章 研究の目的と方法

木下尚子

1. 研究の背景と共同研究の目的

広田遺跡は1957年から2006年までに実施された5回の発掘調査によって168体（本書第I部第3章1による）の人骨と、4万5千余点の貝製装身具が得られ、その埋葬習俗を含めて種子島および周辺地域の歴史に豊富な資料を提供している。これまでに指摘されている広田遺跡の特徴は以下のようにまとめることができるだろう。

1. 広田人の形質に関するもの
 - ・低身長、過短頭、低顔による均一的な形質的特徴をもつ集団である。
 - ・高い施工率を示す抜歯風習をもち、抜歯型式が左右非対照である、人工的な頭蓋変形の習俗をもつなど、身体加工にかかわる独特の風習をもつ。
2. 埋葬習俗に関するもの
 - ・一次葬が主体の下層の埋葬から、二次葬が主体の上層に変化する。
 - ・骨を焼く習俗が存在する。
 - ・墓では、同時期の種子島の在地墓（覆石墓）とは異なるスタイルの埋葬が主体をなす。
3. 土器編年に関するもの
 - ・弥生時代終末期から古墳時代後期末に至る種子島の在地土器が副葬・供献されている。
4. 貝製品にかんするもの
 - ・貝符、竜佩型貝製垂飾など他に例をみない形状の装身具が存在する。
 - ・夥しい数の貝珠を消費し、これらが上半身を覆うような着習俗をもつ。
 - ・貝符や腕輪の表面に精緻な彫刻が施される。
5. 地域間交流に関するもの
 - ・南九州との交流があった（南九州の型式の土器、ガラス小玉、管玉の存在による）。
 - ・奄美・沖縄の貝殻を大量に消費した（サンゴ礁域の巻貝類を使った貝製品による）。

広田人とその文化は、身体加工、埋葬習俗、装身習俗において、種子島の在地的な側面をもつ一方で、これとは不連続なきわめて独自性の強い面をもつことが特徴である。またこれらの習俗は連続的に変化しながら350年前後継続している。種子島の一地に数世代にわたって居住した広田人とはどのような集団で、特色ある文化をどのようにして形成したのだろうか。

広田人の生活の痕跡を留める集落がわかれば、その実態はより近づきやすいものになるであろう。今のところその情報は乏しいが、彼等が貝殻を採取するために島内外の沿岸を移動した足跡や、隣接する集団との交流、南下した琉球列島に残した文物が、その行動の軌跡を伝えている。今回の共同研究ではこれらの痕跡に注目して、広田人の移動ルートを、土器と埋葬習俗から追った。広田人の物質文化については、これを代表する精緻な彫刻をもつ貝符を取り上げ、その彫刻技術、工具について実験を交えて追究した。以上に加えて、広田人の人骨そのものについて今日的な問題意識による再検討と、その生育環境を反映する分析を行った。

本共同研究は、広田遺跡のこれまでの発掘調査で得られた遺物について、「人の形質、技術、移動」

をキーワードに、形質人類学、彫刻技術の復元のための文化財科学的・実験考古学的試み、遺物・遺構の考古学的分析によって、広田人の実像の解明を目指すものである。

2. 共同研究の方法

2.1. 研究組織 (○印は分担統括者)

総括班：木下尚子

土器班：型式学的調査・検討：○石堂和博、具志堅清大

胎土分析による検討：○篠藤マリア、ヨハネス・シュテルバ、石堂和博、具志堅清大

貝符班：彫刻痕跡の観察と検討：○山野ケン陽次郎

貝符作成実験：○比嘉保信

人類班：個票の作成：○高椋浩史、米元史織、岩永省三

ストロンチウム同位体比分析と検討：○米元史織、高椋浩史、足立達朗、岩永省三

広報班：共同研究の経過と成果の発信：○小脇有希乃

2.2 人類班

人類班では人骨の悉皆的な観察と記録を行い、個体ごとの埋葬状況の明らかな下層人骨に加えて、二次葬を含む上層人骨についても観察結果を個別に記録し、これらすべてについての個票を作成した。

広田人の集団内の交流等についての情報を得るために、人骨のストロンチウム Sr 同位体比分析を実施した。分析や観察においては、隣接する同時期の遺跡である鳥ノ峯遺跡や椎ノ木遺跡の人骨標本も適宜分析対象とした。

2.3. 土器班

土器班では広田遺跡出土の全ての土器を再検討し、弥生時代後期から古墳時代後期における種子島の編年を整理して大隅諸島系土器の時期的空間的位置付けを確認し、その上で型式学的方法と胎土分析による二つの方法で、種子島産土器の移動痕跡を追求した。

型式学的方法では、広田人との関わりが考えられる種子島北部、沖縄諸島伊江島、久米島において出土土器の悉皆的な再調査を実施した。胎土分析では、広田遺跡の土器、沖縄諸島の大隅諸島系土器、在地土器について中性子放射化分析 (NAA) を実施した。NAA は種子島において最初の事例であるため、今後の分析に備えるデータベース作成の意味も兼ねている。分析はウィーン工科大学で実施した。

2.3. 貝符班

貝符班では、下層人骨に伴って出土した貝符の彫刻技術の詳細を、肉眼観察とデジタルマイクロスコープによって記録し、彫刻の特徴を把握して、これに対応する工具を推測した。三次元計測の可能なデジタルマイクロスコープによって、微細な彫刻痕跡や彫刻の断面形状が可視化され、彫刻技術の比較が実現した。これと併行して、大型イモガイによる貝符の復元的製作を実施した。石材による貝殻の擦切截断によって板状の貝符素材を得、文様彫刻では、刃先を鉄によるものと複数種類の石材 (種子島産硬質砂岩、屋久島産石英、メノウ、サヌカイト等) によるものとの彫刻し、これらの痕跡と貝符の痕跡を比較した。

2.4. 広報班

広報班では、共同研究メンバーと協力して本共同研究の内容および進行状況を地元住民にむけて発信した。具体的には以下を行った。

- ・ 広田遺跡ミュージアムにおいて、共同研究内容を紹介するパネル展示を行った。
- ・ 南種子町広報誌に関連記事を掲載した。
- ・ 「広田遺跡ミュージアム語り部の会 facebook」において関連記事を掲載した。
- ・ 2019年度に広田遺跡にかかわる博物館講座を開催した。

「平成31年度国宝重要文化財等保存整備補助金（町内埋蔵文化財 地域の特色ある埋蔵文化財活用事業）」による「南種子町埋蔵文化財普及啓発事業」の一部として以下を実施した。

広田遺跡科研に伴う講座・体験学習（2019年度）

	講座名	対象	講師	内容	期日
1	たねがしま古代塾 「化学分析で分かった 広田遺跡の謎ー土 器の分析ー」	一般 Jr. 学芸員 (小学生)	篠藤 マリア 具志堅 清大 石堂 和博	篠藤: 土器は何で出来ているのか、成分を調べれば何が分かるのか。中性 子放射化分析の方法について 具志堅: 種子島の弥生～古墳時代の土器と沖縄の土器の違いについて 石堂: 種子島の土器の特徴について 体験学習: 実体顕微鏡で土器の胎土を観察し、種子島の土器の特徴である 雲母等の鉱物の観察	8月3日
2	Jr. 学芸員講座 「骨からわかる 最新 の研究！」	Jr. 学芸員 (小学生)	足立 達朗 高椋 浩史	足立: 種子島の成り立ち、地質と岩石について、歯の化学組成と地質の関係 について 高椋: 体験学習「人骨からわかること～ホネホネウッチングin広田遺跡～ 人骨模型を使ったパズル、男女の骨の違いなど、骨から分かることについて	9月8日
3	たねがしま古代塾 「骨からわかる 最新 の研究！」	一般	足立 達朗 高椋 浩史	足立: 種子島の成り立ち、地質と岩石について、ストロンチウム同位体分析 について 高椋: 人骨模型を使った骨からわかること、広田遺跡のストロンチウム同位 体分析からわかったことについて	9月8日
4	Jr. 学芸員講座 「貝のひみつ」	Jr. 学芸員 (小学生)	山野ケン陽次郎	貝製品についての広田遺跡での研究成果について 体験学習: 貝の分類を通して貝の特徴や生息域などを学習し、どのように貝 製品が作られているかを考える	12月8日
5	たねがしま古代塾 「広田遺跡の謎を紐解 く」	一般	山野ケン陽次郎	広田遺跡の貝製品について紹介、製作工程についての研究内容及びその 成果について	12月8日

3. 調査

調査は研究班ごとに実施し、その経過と成果をそれぞれ報告編に示した。とくに広田遺跡第1～3次調査の人骨が一括して保管されている九州大学総合研究博物館では、人骨ごとに整理されたケース内において、土器片、貝製品等が人骨に混在して確認されたため、人類班、土器班と貝符班がともに調査を行った。また指定文化財を保管する鹿児島県立歴史資料センター黎明館においても、土器班と貝符班がそれぞれ遺物の調査を実施した。

九州大学総合研究博物館において新たに確認した土器片と貝製品等は、報告編にそれぞれ収録した。

第2章 広田遺跡の土器の分析

1. 中性子放射化分析による胎土分析の方法と意義

篠藤マリア
ハイデルベルグ大学
ヨハネス・シュテルバ
ウィーン工科大学

Maria Shinoto
Universität Heidelberg
Johannes H. Sterba
Atominstitut, TU Wien

はじめに

モノの交流を検討することは自然科学的考古学（archaeometry）の典型的な応用の一つであり、土器の「産地同定」はその中で長い伝統を持つ。方法は数多くあるが、中性子放射化分析とこれに伴う解析方法は非常に信憑性の高い方法であり、ヨーロッパの考古学では土器の産地同定のあるスタンダードになってきた。中性子放射化分析での測定は、精度と検出レベルが高く（Daszkiewicz & Schneider 2014, Sterba 2018）、その解析方法は、土器の特別な状況に合わせて行うことができる。しかも、測定用のサンプル量は非常に少なく、広田遺跡のような貴重な文化財にふさわしい方法だと思われる。ヨーロッパでは1980年以来、活発に開発され応用されてきた方法だが（Mommsen 1988, Beier & Mommsen 1994, Schwedt & Mommsen 2004, Mommsen & Sjöberg 2007, Sterba など 2009, Mommsen 2012）、最近では日本でも採用され（Sterba 2015）、今までの産地同定のイメージを超える結果（Shinoto & Nakamura 2016）も提供しつつある。

広田遺跡を初めとする種子島産の土器には型式学的特色のほかに、胎土において肉眼でわかる著しい特色—胎土は非常に荒く、黒雲母や砂一般の大きな粒子が多く含まれている（石堂2020）—がある。今回の分析においても46点中2点にこの特色が見出された（具志堅2020）。今回分析対象とした土器では型式を特定できる資料はないため、自然科学的分析によって胎土の由来、言い換えれば土器の由来を確認することになった。

1. 産地同定の論理的原理と分析方法

ある土器の産地を調べるに当たっては、以下の二つの情報が必要である。

- ① 産地で現れる特色
- ② 別な遺跡で発見した土器の特色

産地の研究が進んだ研究環境の場合は（1）についてのデータベースに十分なデータが揃っているため、（2）の新しく発見した土器だけを分析し、分析結果をデータベースにあるデータと比較すれば良い。しかし、今回の対象である種子島の土器の特色はまだデータ不足であるため、①と②を同時に検討する必要がある。今回は、広田遺跡などの種子島の遺跡の土器の分析と、種子島産と推測された土器2点（沖縄県具志原貝塚出土）の分析を平行して行った（本書第2章2参照）。

土器の産地に関する研究と今回応用した方法を理解するために、胎土の特色、生産過程、生産と消費などの関係について説明したい。

2. 土器の原材料、生産と消費地

2.1. 原材料の採掘状況と土器の胎土

土器の原産地を調べるのに、採掘した材料、元々の土を理解する必要があるという考えは考古学者の間でよく見られる。しかし、材料の元々の性質は産地同定にとってあまり意味のない情報である。土器の産地を確認するのに、それぞれの原材料の特色について調べる必要はない。なぜかという、これは土器生産の特色に理由がある。

つまり、土器の素地を作るのに、様々な土や砂などをブレンドしたり、水をかけたり、寝かしたりし、原材料と関係が薄くなったペーストを作り上げる。元々の材料の特色が焼成前に著しく変るが、焼成時も若干の変化が起こる可能性がある（石田2014, Raith & Hoffbauer 2015）。しかし、全ての変化は自然法則に基づき起こるため、我々が現在分析する破片の胎土に同じ特色として現れる。言い換えれば、土器の産地同定にあたって分析するものは、産地の焼成済みの土器片と消費地の焼成済みの土器片だけで十分であり、原材料の情報は要らない。

2.2. 生産地と消費地

ここで、ある土器群の産地はどこかという疑問が生じる。例を挙げれば、須恵器のような土器では、「生産地」が須恵器の窯跡や横の灰原のような生産遺構がある場所である。こういう遺構から出土した破片は、失敗したものを含めて、ここで製作したもので、この生産の特徴を持つものである。「消費地」は、この特色に共通する土器が出土する他の遺跡である。

広田遺跡で出土する軟質土器の場合は、生産遺構が須恵器ほど発見されていない。なぜかという、軟質土器の焼成遺構は発見しにくい上に、焼成痕跡らしいものがある場合でも、焼成済みの破片をその中に見つけるのも滅多にないからである。須恵器のような土器は場合によって遠くまで運ばれた例が多いのに対して、軟質土器はだいたい、家庭レベルや集落レベルで生産され、同じ狭い地域でも利用されたと思われる。つまり、「生産地域」と「消費地域」は一致するので、ある遺跡に集中する土器群または胎土は、この遺跡の周りで生産した、ということである。

つまり、広田遺跡はこういう狭い地域の消費地と言えるので、ここで検出できる土器の特性は、この周辺で生産した土器の特性であると言えよう。広田遺跡はある広さの墓地で、様々な集落や家族が利用した可能性もある。期間を考えれば、数世代を超える遺跡である。これは土器の型式の多様性に現れるが、もちろん、土器の胎土の多様性も予測できる。本研究にあたって、広田遺跡を代表する胎土は一つ以上を予測する。

3. 土器の「化学的指紋」

3.1. 土器の鉱物と元素

土器は鉱物からなり、鉱物は元素からなる。鉱物は5,000種類以上が確認されているのに対して、自然に存在する元素は92しかない。しかし、土器で確認できる主な鉱物は数少なく、量的な測定も難しい。しかも、土器の生産過程において、鉱物は変化し、特に焼成温度や窯内の焼成雰囲気（還元性か酸化性か）によって、胎土に元々見られた鉱物が別な鉱物に変化する。この現象は焼成温度や焼成時間などを推測するのに便利なので、土器の生産過程を理解するのに鉱物は最適である。軟質土器の場合は、低い焼成温度のために、土や追加した砂の混和材の元々の外観が残っている場合があり、これを肉眼観察（エジプト出土土器観察スタンダード：Arnold & Bourriau 1993, 篠藤2015, 石堂・具志堅2020）や薄片の分析（Daszkiewicz 2014）を基に検討できる。広田遺跡や種子島などにはよく、黒雲母を多く含み、元々の形に近そうな混和材が観察できるので、「種子島産」ということもある程

度推測できる。しかし、薄片分析を使っても、これは今回選んだ、数量化できる、信憑性のある方法ほどの確実さを提供するとは言えない。鉱物は土器の起源を探るためには、一般的には元素ほど適切でないと言える。

元素は、主に「土器の三角グラフ」という図によく見られる Ca, Mg, Si, Al、場合によって Fe などであり、胎土の多くの部分を占める (Klenk 1987, Noll 1991, 篠藤&ホッフバウアー2000)。これらの元素によって土器の可塑性、耐火性なども決められるので、機能的な元素で、土器生産の場合に、ある程度意識して選ばれると思われる。例えば、粘土鉱物の多い胎土を目指す時は、必ず粘土鉱物に伴う Alが増加したり、鉄分による赤味を抑えたいと思えば、Caを増やしたりする。同じ効果を目指す陶工(生産者)はどこでも同様にするであろうから、これらの元素は産地同定にはあまり役に立たない。したがって産地を同定するためには「指紋」のような、機能と関係のない、たまたま生じる元素-特に微量元素に絞ればよい。微量元素は土器の性質や機能など関係なく、それぞれの地域の地質のレイヤーにユニークな組み合わせで若干含まれるものであり、土器の「指紋」に繋がる。

3.2. 土器の「化学的指紋」と「レシピ」

このような「指紋」は、人間の指紋と同じように、隠れて存在し、土器の機能上は何の効果もないものである。人間の指紋は完全に唯一無二と思われるが、土に含まれる微量元素の組み合わせはどれほどそうであるかは判断しにくい。土器の場合は、様々な材料をブレンドするのは普通だと思われるが、このブレンドももちろん、ユニークな組み合わせを形成する。元素は鉱物と違って、生産過程によって別な元素には変化しないが、水簸や焼成時における脱水などの原因で元々の元素の組み合わせが変わる場合がある(石田2014など)。しかし、これは自然法則に基づく均一な変化なので、生産物に残った元素の組み合わせはまた有意義な「指紋」を示す。

土器の「化学的指紋」とは、焼成後の胎土の元素の組み合わせ、特に、微量元素の組み合わせである。人間の指紋は1人に指一本に一つしかないが、胎土の場合は違う。自然の中の土は、地質学的形成過程などの原因があって、広い範囲で構成が変わらないものと、狭い範囲で同じ地層でも微量元素が変動するものがある。これらをブレンドするときに、前者の場合は数回や何年間繰り返しても変わらない構成になるものがあるが、後者の場合は、毎回若干変わって、新しい「指紋」が生じる。

日本では最近、鹿児島の中岳山麓の須恵器窯跡群において中性子放射化分析を行なっているが、初めから多くの指紋ができる傾向があり (Sterba 2015)、窯や支群と関係するような傾向も最近わかってきた (Shinoto & Nakamura 2016)。広田遺跡の場合は、軟質土器なので須恵器ほどの材料に関してのこだわりはなかったと予測できるが、そうであれば、材料の均一性を重視せずに若干違う性質の土を掘って、素地を作るときに毎回、若干違う「指紋」になりやすいと予測した。そのために、広田遺跡のような、数少ない土器を伴う遺跡には、いくつかの指紋を観察できると考え、ある程度の代表的なグループは観察できないと危惧した。しかし、グループ02は、予測より多くのサンプルを含み、広田遺跡を代表する一つのグループである (Sterba 2020)。こういう指紋に基づくグループは、ブレンドしたので「レシピ」とも言う。

4. 「化学的指紋」の測定と解析

4.1. 蛍光 X 線分析と中性子放射化分析

産地同定に必要な「化学的指紋」は主に微量に存在する元素を測るので、検出レベルや測定精度の非常に優れた方法が必要となる。中性子放射化分析は半世紀以上前から応用されてきたが、考古遺物の産地を調べるのに、アメリカのパールマンらがこの方法をちょうど50年前に導入した (Perlman &

Asaro 1969)。日本でも1970年代半ばといった、比較的早い段階から須恵器の産地同定のために導入したが、1970年代後半から蛍光 X 線分析で測定するようになった。日本ではつい最近まで支配的な方法であったが、この60年代から始まる現在まで続く流れは1980年代以来代表的な研究者の三辻利一氏の文献を追求すればわかる (<https://ci.nii.ac.jp/nrid/1000040031546>, 検索2019年12月21日)。

土器の化学的成分を測定する方法はいくつかの種類がある。蛍光 X 線系において、WDXRF (wave dispersive X-ray fluorescence spectroscopy) 分析は EDXRF (energy dispersive X-ray fluorescence spectroscopy) 分析より微量元素の検出レベルと測定精度が著しく高いが、中性子放射化分析ほどではない。自然科学的考古学において主に利用される方法の中には、質量分析計 (mass spectrometry) 系の方法だけが同じレベルの結果を提供するが、その中で ICP-MS が現時点で最も応用され、日本にもこういう系統 (LA-ICP-MS) の研究が行なわれている (石田 2014 など)。主な測定方法の比較と評価に関する研究もある (Daszkiewicz & Schneider 2014) が、測定できる微量元素が完全には重ならないが、ICP-MS は中性子放射化分析に匹敵するような良質なデータを提供することに違いない。ICP-MS も中性子放射化分析も同時に多くの元素を測定できるが、産地同定のためには大体25から28の元素を測定する。中には、別な研究と比較できるなどの理由があって、微量元素でない元素も含む。今回の研究では、典型的な考えに従い一般的に観察する28元素を測定した (Sterba 2018)。

今回の測定において中性子放射化分析にした理由はいくつかある。まずは日本の研究史の先行研究が挙げられる。1990年代初頭には、高宮らがすでに、九州と琉球列島をカバーする中性子放射化分析の研究を行った (Takamiya など1991)。また、2014年以降、鹿児島県の中岳山麓窯跡群の須恵器に対し中性子放射化分析を徹底的に行い、産地の様子を把握し、琉球列島への分布を確認できた (Sterba 2015)。別な研究も途中段階であるが、琉球列島では比較できるデータが増加している。

4.2. 「化学的指紋」の測定

自然科学的分析は大体の場合、以下の二つの段階に分けることができる。

- ① 測定
- ② 解析や統計学的分析

今回の場合、①では非常に高い検出レベルと測定精度を保証する中性子放射化分析を、②では中性子放射化分析と同時に開発されてきた土器のための分析方法を選んだ (Mommsen など1988, Beier & Mommsen 1994, Mommsen & Sjöberg 2007, Sterba など2009)。後者は、普通の統計学的分析より、40年間に様々な研究者がしてきた分析方法である。第1段階の方法と第2段階の方法は互いに依存しない。従って、①の測定の段階において別な方法で中性子放射化分析と同じような良質なデータが得られれば、②の解析をこれに当てはめることもできる。また反対に、①の段階で中性子放射化分析によって得られたデータに対し、②の段階では別の解析方法も応用できる。しかし、本研究では、考古学で主に応用する測定方法と解析方法の組み合わせを選んだ。

4.3. サンプリング

具体的なサンプリング方法は、今回の資料に最適だと思われる。中性子放射化分析に必要なサンプル量は他の測定方法に比べて著しく少なく、普通100mg で、土器の内面や底部などのような隠れた場所からドリルで表面だけを開けて、サンプルを取ることができる。「非破壊」とは言えないが、これに近い形なので、ヨーロッパでは文化財指定レベルの貴重な遺物も博物館から運ばなくて、その場でサンプリングできる方法として一般的である。今回の研究対象は指定文化財の広田遺跡で、しかも古い発掘から得られた破片は数少なく貴重であり、最小限のサンプル量で済む測定方法を選んだ。ただし、広田遺跡の軟質土器は非常に荒く、胎土が不均一なので、100mg だけでは、代表的なサン

ルを取ることができない。ドリルで 0.5cm^3 のサンプル粉末を目指したが、穴は2箇所以上になる傾向だったので、破壊を限定するために大体 0.3cm^3 でサンプリングを留めた。しかし、この量でも意義のある測定結果を得られた。

4.4. 「化学的指紋」の解析

産地同定の解析のために、できるだけ多くの有意の変数（元素）とサンプルを集めて分析すれば、意義のある結果が期待できる。統計学における主成分分析やクラスター分析のような典型的な多変量解析は探索的に利用できるが、最終的なグルーピングを決めるのに不適切である。1980年代以来、土器の生産過程の特別状況を考慮し、適切な解析方法が開発されてきたが、その決定的な特色を簡潔に述べたい（Mommsen など1988, Beier & Mommsen 1994, Mommsen & Sjöberg 2007, Sterba など2009）。つまり、(1) 石英を主に含む混和材が微量元素の割合を「希釈」すると思われ、フィルターをかけて、初めて比較できる元素の割合がわかり、「指紋」ができる。ある程度類似する指紋からグループを形成するのに、(2) 誤差を含むマハラノビス距離 Mahalanobis distance を利用する。(3) 28の元素を代表する28次元の空間の位置を検出する。そのために全てのサンプルを遺物ごとに、反復プロセスで計算する。サンプル2点がマハラノビス距離2以下に近ければ、これをグループと判断し、繰り返して他のサンプルに対し、このグループの中心値からの距離を測定する。最終的に、28次元の空間にいくつかのグループが形成される。しかし、全ての中心値からマハラノビス距離2より離れている、孤立したサンプルもある。今回のように数少ないサンプルに基づく研究では、こういう遺物はまだ多く残っているが、研究が進めば進むほど、グループ相手が現れることが期待できる。

孤立するサンプルの数は、この分析方法が非常に慎重なものだということにも由来する。すなわち、統計学的分析は必ずエラーを考慮しないとイケないが、エラーには2種類ある。一つは「そうである」という結果になった場合は、本当はそうではない場合であり、あと一つは「そうではない」という結果になったのに、本当はそうであるという場合である。産地同定の場合、前者は「産地はXである」といって、本当はXではなく、後者は「産地はXではない」といって、本当はXである。本研究に利用した方法は後者の方のエラーを選ぶ。これも孤立したサンプルが残る理由の一つである。前者を選んで結果を出すことにすれば、これは場合によって、歴史的に解釈するとき、誤解を招く危険性がある。例えば、沖縄に出土した破片を間違って「広田産」と判断し、本当はそうではないと想像すれば、これは考古学の上でかなりの影響がある。しかし、今回のように「広田産とは言えない」と判断した場合、未熟な歴史的解釈ではあるが、将来の研究の可能性が残っている。

以上の解析方法は、土器の胎土の特別な状況に合わせた、中性子放射化分析が可能にした細かい解析である。ヨーロッパの考古学者の間では、「中性子放射化分析」は、元々の測定だけではなく、この解析過程もよく、この意味に含まれている。

5. 今回の分析結果の位置付け

本研究の課題は、広田遺跡と関係する人間の集団と琉球列島間の交流を、土器を基にして追求することである。今回検討できた破片は、充実したデータベースには満たないが、種子島の広田遺跡と鳥ノ峯遺跡で期待した以上の結果が出た。広田遺跡や種子島一般から南に運ばれた可能性のある2点の土器については、自然科学的分析において、この土器と広田遺跡との関係は証明できなかった。言い換えれば、この土器の化学的指紋は広田遺跡で検出できた胎土グループに合致しないということである。種子島で検出したグループに合致する土器の発見を期待する。しかし、広田遺跡と鳥ノ峯遺跡の土器分析では、以下に示すように、それぞれ異なった非常に意義のある結果が出たと思われる

(Sterba 2020)。

- ・ 広田遺跡にはサンプル数が少なく、サンプルの分布にも偏りがあったが、有意な胎土グループになりつつあるものを検出できた。今後サンプル数を増やし、研究対象の地区も増やせば、広田遺跡の全体像がより明確になり、産地同定以外、当時の社会や技術を検討できるだろう。
- ・ 鳥ノ峯遺跡の分析はサンプルが最も少なかったが、すでに期待できるような結果を見せている。つまり、同じ埋葬遺構に出土した、同じ型式の甕から同じ胎土グループの2点を確認できた。消費者や製作者、土器の形式、時期などは胎土グループと結びつけられる可能性があり、これから鳥ノ峯遺跡の土器を幅広く検討する価値があると考えられる。

本研究のデータは一般性を持つ。今後同様の研究が行われ、本データの価値が高まることを期待している。

文献

- 石田智子 2014『土器動態から見た弥生時代地域社会構造の研究』九州大学 (<https://doi.org/10.15017/1455993>)
- 石堂和博・具志堅清大 2020 「広田遺跡出土土器の新資料」『『広田遺跡の研究』平成29～令和元年度科学研究費補助基盤研究(B)研究成果報告書』(本報告書)
- 篠藤マリア 2015 「土と砂 -成川式土器を作る素材」橋本編『成川式土器ってなんだ?』鹿児島大学総合研究博物館、46-52。
- 篠藤マリア & ホッフバウアー・ラーデグント 2000 「鹿児島県吹上町辻堂原遺跡の成川式土器の鉱物学的研究」『人類史研究』12号、91-104、人類史研究会
- Arnold, D. & Bourriau, J. 編 1993『An Introduction to Ancient Egyptian Pottery』上・下、Deutsches Archäologisches Institut Kairo, Sonderschrift 17.
- Beier, T. & Mommsen, H. 1994 「Modified Mahalanobis filters for grouping pottery by chemical composition」『Archaeometry』36-2号、287-306.
- Daszkiewicz, M. 2014 「Ancient Pottery in the Laboratory : Principles of archaeoceramological investigations of provenance and technology」『Novensia』25号、177-197。
- Daszkiewicz, M. & Schneider, G. 2014 「Analysis of Chemical Composition of Ancient Ceramics」『Novensia』25号、199-206。
- Klenk, G.B. 1987『Geologisch-Mineralogische Untersuchungen zur Technologie frühbronzezeitlicher Keramik von Lidar Höyük (Südanatolien)』Münchener Geowissenschaftliche Abhandlungen, B集3号, Verlag Friedrich Pfeil.
- Mommsen, H. 2004 「Short Note: Provenancing of Pottery — The Need for an Integrated Approach?」『Archaeometry』46-2号、267-271.
- Mommsen, H. 2012 「The importance of a reliable grouping — Neutron activation analysis (NAA) data of Mycenaean pottery sherds re-evaluated with the Bonn filter method」『Journal of Archaeological Science』39-3号、704-707.
- Mommsen, H.; Kreuser, A. & Weber, J. 1988 「A Method for Grouping pottery by chemical composition」『Archaeometry』30-1号、47-57.
- Mommsen, H. & Sjöberg, B. L. 2007 「The Importance of the 'Best Relative Fit Factor' when evaluating elemental concentration data of pottery demonstrated with Mycenaean sherds from Sinda, Cyprus」『Archaeometry』49-2号、359-371.
- Noll, W. 1991『Antike Keramiken und ihre Pigmente』Schweitzbart'sche Verlagsbuchhandlung.

- Perlman, I. & Asaro, F. 1969 「Pottery analysis by neutron activation.」 『Archaeometry』 181号, 21-52.
- Raith, M. & Hoffbauer, R. 2015 「Mineralogical research on production and provenance characteristics in the Nakadake Sanroku kiln site cluster」 中村&篠藤編 『中岳山麓窯跡群の研究』 75-105、鹿児島大学埋蔵文化財調査センター。
- Shinoto, M. & Nakamura, N. 2016 「Nakadake : Forschungen in einem japanischen Töpferzentrum」 『Blickpunkt Archäologie』 2016-4号、298-307.
- Schwedt, A. & Mommsen, H. 2004 「Clay paste mixtures identified by Neutron Activation Analysis in pottery of a Roman workshop in Bonn, Germany」 『Journal of Archaeological Science』 31-9号、1251-1258.
- Sterba, J.H. 2015 「Neutron Activation Analysis of samples from pottery, kilns and soil in Nakadake Sanroku and related sites in South Japan」 中村&篠藤編 『中岳山麓窯跡群の研究』 67-74、鹿児島大学埋蔵文化財調査センター。
- Sterba, J.H. 2018 「A workflow for Neutron Activation Analysis of archaeological ceramics at the Atominstitut in Vienna, Austria」 『Journal of Radioanalytical and Nuclear Chemistry』 316号、753-759.
- Sterba, J.H. 2020 「Neutron Activation Analysis of the ceramic sherds from the Hirota site」 『広田遺跡の研究』（本報告書）、平成29～令和元年度科学研究費補助基盤研究（B）研究成果報告書
- Takamiya, H. & Pavlish, L.A. & Hancock, R.G.V. 1991 「Instrumental Neutron Activation Analysis (INAA) of Okinawan Pottery : Can it be used to indicate prehistoric contact?」 『Bulletin of the Indo-Pacific Prehistory Association』 10号、292-306。
- Sterba, J. H. & Mommsen, H. & Steinhäuser, G. & Bichler, M. 2009 「The influence of different tempers on the composition of pottery」 『Journal of Archaeological Science』 36号、1582-1589.

2. 広田遺跡・鳥ノ峯遺跡・具志原貝塚出土土器の中性子放射化分析

ヨハネス・シュテルバ
ウィーン工科大学
篠藤マリア
ハイデルベルグ大学
石堂和博
南種子町教育委員会
具志堅清大
沖縄県立埋蔵文化財センター

Johannes H. STERBA
Atominstitut, TU Wien
Maria SHINOTO
Universität Heidelberg
ISHIDO Takahiro
Minamitane Town Board of Education
GUSHIKEN Seita
Okinawa Prefectural Archeological Center

琉球列島における3～7世紀の大隅諸島産土器の分布と動向を追究するために、土器班のメンバーは、大隅諸島産の可能性のある土器片を、種子島と沖縄諸島の遺跡出土遺物から肉眼観察によって抽出し、Johannes H. Sterba（以下シュテルバ）に中性子放射化分析を依頼した。以下にその結果を報告する。

1. 測定資料

今回、分析を行った資料は、46点である。内訳は、九州大学総合研究博物館収蔵の広田遺跡出土土器が9点、中種子町教育委員会所蔵の鳥ノ峯遺跡出土土器が6点、南種子町教育委員会収蔵の広田遺跡出土土器が27点、沖縄県立埋蔵文化財センター所蔵の土器が4点である（表1）。

資料の選定は、石堂・具志堅・篠藤と南種子町教育委員会の小脇有希乃氏が共同で行い、サンプリングは、シュテルバ・篠藤が行った。中性子放射化分析はシュテルバが行った。

分析を行った土器のうち、大隅諸島産の土器は、広田遺跡出土土器と鳥ノ峯遺跡出土土器の合計42点である。分析の結果、これらの土器は5つのグループを形成した。

広田遺跡では、3～4世紀に造墓された北側墓群と3～7世紀に造墓された南側墓群の2つの墓群が認められる（石堂ほか2007）。また、鳥ノ峯遺跡でも、弥生時代後期後半～古墳時代初頭の第二次調査地点と弥生時代終末～古墳時代前期の第一・三次調査地点の2つの墓群が認められる（橋口1996）。今回、確認された5つのグループは、それぞれの墓群内でグループを形成した。また、遺構内で共伴した同じ型式の甕が同一グループを形成した事実は、在地の土器胎土選択における一定の規範を示している可能性がある。

なお、グループを形成するに至らなかったものは、single と表記してあるが、これらの土器も、今後、土器の胎土分析サンプルが増えていくことで、新たなグループを形成する可能性がある。

琉球列島の種子島以外の資料として、沖縄諸島伊江島に所在する具志原貝塚出土土器4点を分析対象とした。具志原貝塚では、大隅諸島の弥生時代後期後半～古墳時代並行期に位置付けられる甕形土器に胎土や形態が類似する脚部資料が確認されている（具志堅・石堂2017）。分析を行ったのは、この甕形土器の脚部と胴部片の2点、甕形脚部と同じ層から出土した在地土器底部2点である。今回分析した土器については、第2章3でも紹介しているので、参照されたい。

2. 測定結果

分析を実施したシュテルバ氏によるレポートを以下に示す。具体的な分析の数値は文末データ（表2）を参照されたい。

表1 中性子放射化分析資料一覧

遺跡名	出土区	サンプル名	出土地点・遺構	胎土グループ
広田遺跡	北側墓群	P001	surface	Single
		P002	ST09, No29	Group01
		P003	ST09, No4	Group01
		P004	trench 10, No5	Single
	南側墓群	P005	trench 1, surface	Single
		P006	trench 1, surface	Single
		P007	D-I-A	Group03
		P008	unknown	Single
		P009	trench E	Group02
		P010	101 A3 25	Group02
		P011	D-I-B5	Single
		P012	4-II	Single
		P013	A6 12	Group02
		P014	113	Group02
		P015	A-8	Group02
		P016	No 91, trench 10, layer 6	Single
		P017	trench 1 surface	Single
		P018	trench 1 surface	Single
		P019	A-4	Single
		P020	A-8 (under A8 bones)	Single
		P021	D-I-4	Group03
		P022	A-4, No 1	Group02
		P023	D II B	Single
		P024	A-11	Group02
		P025	A-10	Group02
		P026	D-II	Single
		P027	D-I-A	Group03
具志原貝塚 (85)	西区	P028	F-10 第2層、Fig14-13	Single
	不明	P029	不明	Single
	西区	P030	C-10 第2層、PL15 タイプD	Single
	西区	P031	G-11 第2層、PL15 タイプC	Single
広田遺跡	南側墓群	HIR001	Hirota 114b2	Group02
		HIR002	Hirota 114b1	Group02
		HIR003	Hirota A bone4	Group02
		HIR004	Hirota 114b5	Group05
		HIR005	Hirota 114b7	Group02
		HIR006	Hirota 114b115-1	Single
		HIR007	8.27 A3 Pottery No20	Group05
		HIR008	C171 Hirota A-11	Single
		HIR009	C197 D-I-3	Single
鳥ノ峯遺跡	第3次調査 地点	TOR001	10号墓 No35b	Group04
		TOR002	10号墓 No36	Single
		TOR003	10号墓 No35a	Group04
		TOR004	5号墓 No33	Single
鳥ノ峯遺跡	第2次調査 地点	TOR005	7号墓 NO23	Single
		TOR006	14号墓 No29	Single

Neutron Activation Analysis of the ceramic sherds from the Hirota site

Johannes H. Sterba

Presentation and explanation of the work done, including statistical analysis and grouping.

Introduction

Neutron Activation Analysis (NAA) as a tool for the chemical investigation of archaeological artefacts has been introduced in the late 1960ies (Perlman and Asaro 1969) and has been applied since then to a variety of materials with continuous success for establishing the provenance. NAA has been proven as an ideal tool for provenancing investigations due to the small sample volume necessary (usually less than 150 mg), the large number of geochemically significant major-, minor and trace-elements measurable and the high precision and reproducibility of the measurements. Detection limits, especially for trace elements, are often less than 1 $\mu\text{g/g}$, resulting in an extensive, so-called, chemical fingerprint of the objects under examination.

At the Atominstitut in Vienna, Austria, NAA has been performed for more than two decades on various objects of geological and archaeological origin. (Polinger-Foster et al. 2009; Bichler 1992; Bichler et al. 1997, 2006; Bichler, Huber, and Warren 2007; Steinhauser, Sterba, and Bichler 2007; Sterba et al. 2009; Steinhauser et al. 2010; Sterba, Munnik, and Pearce 2011) In the case of objects with unaltered geological origin, like obsidian or pumice, simple comparison of the chemical fingerprint measured to that of the suspected source leads to a clear provenance. For ceramics, the original chemical fingerprint of the clay bed used was usually intentionally altered by the ancient potters to better suit the intended use of the ceramic by levigation and/or tempering. Furthermore, the firing process can change the chemical composition due to the volatility of some elements.

Thus, for the provenancing of ceramics, an extensive statistical examination of the raw chemical fingerprints is necessary to arrive at meaningful chemical groups. One such approach was developed in the 1980ies in Bonn, Germany (Mommsen, Kreuser, and Weber 1988; Beier and Mommsen 1994; Mommsen and Sjöberg 2007; Sterba et al. 2009; Mommsen 2012) and expanded upon since then. The statistical filtering algorithm developed has been applied successfully in numerous studies to ceramics from Bronze Age Greece (e.g. Mountjoy and Mommsen 2015), the Levante (e.g. Zuckerman et al. 2010) or Egypt (e.g. D'Ercole and Sterba 2018).

At the Atominstitut, a full workflow, incorporating the experience of the last two decades and covering the full procedure from sampling to statistical analysis, was developed (Sterba 2018). This workflow was applied to a total of 46 sherds from Hirota and Torinomine site on Tanegashima as well as the Gushibaru shellmound on Okinawa.

Samples

The ceramic sherds were all sampled either by drilling with a alumina drill or by breaking off small pieces of approximately 0.5 cm³ and homogenization in an agathe mortar. Sample powder was then dried overnight and an aliquot of 100 mg was weighed into Suprasil quartz glass vials for

irradiation. The measurement procedure, including detection limits, is described in detail in Sterba (2018).

Results and Discussion

The results of the Neutron Activation Analysis can be found in Table 1. From the statistical analysis of the data, one large group of 13 samples could be formed as well as four small groups of two or three samples, each. The following samples belong to the five groups found:

- Group01: P002, P003
- Group02: HIR001, HIR002, HIR003, HIR005, HIR006, P009, P013, P014, P015, P022, P024, P025
- Group03: P007, P021, P027
- Group04: TOR001, TOR003
- Group05: HIR004, HIR007

The means and spreads of those five groups can be found in Table 2. Separation into groups was done by iteratively calculating the modified Mahalanobis distance (Mommensen, Kreuser, and Weber 1988) and grouping samples with a distance of $d < 2$ into one group. Once a group was formed, the center of the group and the Mahalanobis distances of each sample to the center of the group was calculated. If new members ($d < 2$) were found, the center was recalculated. This process was repeated until no further samples with a sufficiently small distance to the group center could be found.

Table 2: Mean and spread of the group centers for the five groups found in the dataset. All values are in $\mu\text{g/g}$.

Sample	Group01	Group02	Group03	Group04	Group05
	6267 +/- 83.8	8006 +/- 677	8892 +/- 430	8649 +/- 429	6359 +/- 210
K	28303 +/- 1260	21611 +/- 2182	26086 +/- 959	38099 +/- 2658	22024 +/- 151
Sc	11.8 +/- 0.241	20.4 +/- 0.686	16.5 +/- 0.987	12.7 +/- 0.326	20.2 +/- 0.294
Cr	28.6 +/- 1.71	37.8 +/- 1.7	41.5 +/- 2.62	27.7 +/- 3.48	49.8 +/- 0.413
Fe	36700 +/- 1058	53463 +/- 2148	46924 +/- 1487	34341 +/- 722	54397 +/- 841
Co	8.7 +/- 0.223	9.93 +/- 0.852	10.2 +/- 1.41	7.9 +/- 0.893	14.4 +/- 0.145
Ni	15.2 +/- 3.62	11 +/- 1.93	20.1 +/- 1.18	14 +/- 1.1	20.8 +/- 0.32
Zn	58.1 +/- 1.7	65.2 +/- 7.22	72.6 +/- 6.15	63.3 +/- 4.98	84.7 +/- 2.08
As	21.1 +/- 1.51	16.8 +/- 6.02	22.7 +/- 5.42	11.4 +/- 0.186	24 +/- 1.31
Rb	218 +/- 4.12	130 +/- 14.8	157 +/- 4.24	229 +/- 5.23	113 +/- 11.6

第 I 部

Sr	98.9 +/- 6.39	215 +/- 50.2	176 +/- 6.32	214 +/- 24.6	207 +/- 5.91
Zr	171 +/- 12.1	153 +/- 16.5	191 +/- 20.5	156 +/- 13.7	167 +/- 1.21
Sb	0.395 +/- 0.0107	0.421 +/- 0.0502	0.513 +/- 0.0297	0.334 +/- 0.015	0.726 +/- 0.022
Cs	24.4 +/- 0.49	13.9 +/- 2.32	15.8 +/- 0.499	21.1 +/- 0.154	9.55 +/- 0.903
Ba	277 +/- 3.05	260 +/- 16.3	328 +/- 26.7	549 +/- 18.8	393 +/- 14.4
La	33.2 +/- 0.595	27.6 +/- 2.77	27.2 +/- 1.19	43.1 +/- 5.15	21 +/- 0.305
Ce	83.1 +/- 5.75	66.5 +/- 4.48	56.6 +/- 1.83	84.3 +/- 6.35	68.6 +/- 1.45
Nd	20.7 +/- 3.79	11.1 +/- 7.7	24.1 +/- 2.19	37.8 +/- 2.05	17.5 +/- 2.18
Sm	5.63 +/- 0.183	5.34 +/- 0.42	5.68 +/- 0.0751	7.45 +/- 0.599	3.61 +/- 0.186
Eu	0.7 +/- 0.0133	0.778 +/- 0.0534	0.947 +/- 0.0538	1.27 +/- 0.075	0.832 +/- 0.0105
Tb	0.664 +/- 0.029	0.681 +/- 0.0905	0.779 +/- 0.0143	1.1 +/- 0.0539	0.483 +/- 0.00778
Yb	2.27 +/- 0.0384	2.76 +/- 0.569	3.29 +/- 0.209	4.49 +/- 0.205	2.11 +/- 0.0536
Lu	0.362 +/- 0.0388	0.461 +/- 0.0949	0.531 +/- 0.0412	0.677 +/- 0.0549	0.354 +/- 0.0108
Hf	4.88 +/- 0.215	5.64 +/- 0.487	6.26 +/- 0.324	6.53 +/- 0.858	6.87 +/- 0.086
Ta	2.03 +/- 0.0306	1.68 +/- 0.0737	1.71 +/- 0.0704	1.84 +/- 0.0412	1.06 +/- 0.0328
W	2.93 +/- 0.631	2.71 +/- 0.459	2.21 +/- 0.243	3.26 +/- 0.173	2.38 +/- 0.325
Th	17.6 +/- 0.892	16.4 +/- 1.08	13.9 +/- 0.307	15.9 +/- 0.4	14.8 +/- 0.326
U	3.43 +/- 0.118	3.23 +/- 0.618	3.43 +/- 0.154	3.91 +/- 0.182	2.24 +/- 0.107

Figure 1 shows a histogram of the Mahalanobis distances between the center of Group 02 and all samples in the dataset. Samples already associated with the group are indicated in color. It is easy to see the gap at approximately $d=2$ in the histogram between samples belonging to the group and all others. The gap is a good indicator that no more samples belong to the group.

A similar presentation of the groups found is displayed in Figure 2 which depicts a dendrogram that was calculated by using the Mahalanobis distances between each sample. With a cutoff at $d=2$, the groups mentioned above are formed.

All other samples in the dataset could not be associated with any other sample and are called “chemical singles”. The number of singles in the present study is either due to the small total number of samples or to the production process that did not produce uniform clay paste.

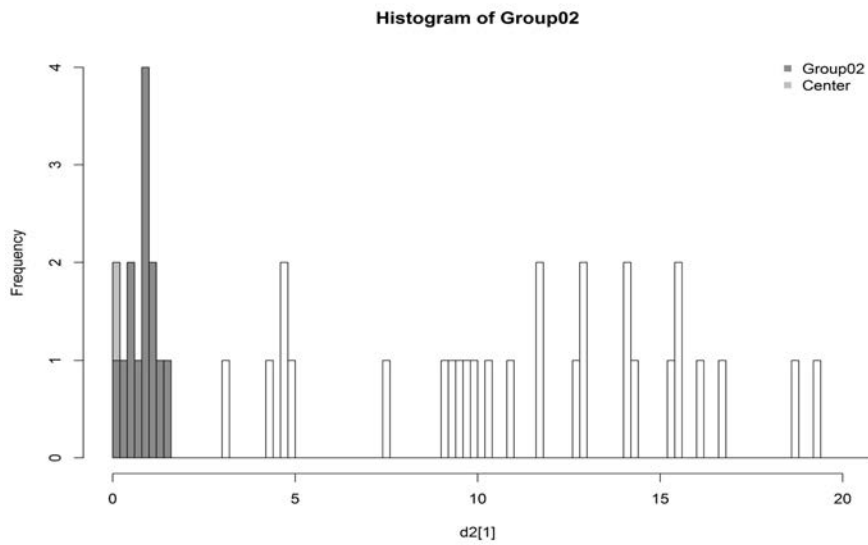


Figure 1: Histogram of Mahalanobis distances between the center of Group 02 and all samples in the dataset. Samples belonging to Group 02 are indicated.

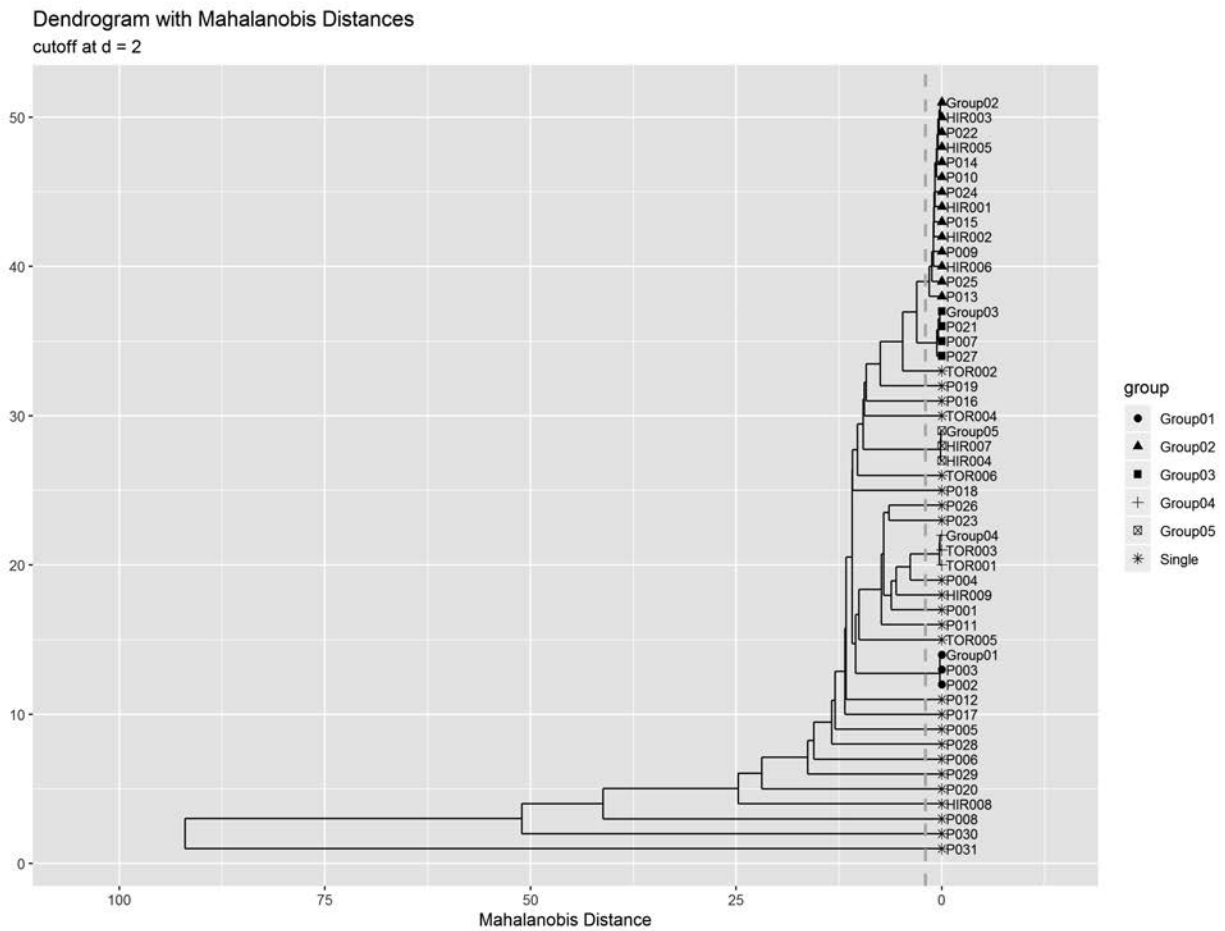


Figure 2: Dendrogram formed from Mahalanobis distances between all samples. Cutoff is set at $d=2$.

Conclusion

Considering the small number of samples (46) in the dataset, a clear fingerprint of a production site, consisting of 13 samples, could be found. Four additional pairings (or triples) of samples are visible in the data that could, if more material becomes available for analysis, form other groups indicating further production sites or different ways of clay paste preparation by the potterer.

References

- Beier, T., and H. Mommsen. 1994. "Modified Mahalanobis Filters for Grouping Pottery by Chemical Composition." *Archaeometry* 36 (2): 287–306. <https://doi.org/10.1111/j.1475-4754.1994.tb00971.x>.
- Bichler, M. 1992. "Purification of Activated Charcoal for Use as Sorbent in NAA for Trace Elements in Volcanic Exhalations." *Journal of Radioanalytical and Nuclear Chemistry* 166: 31–40.
- Bichler, M., K. Breitenacker, G. Steinhauser, and J. H. Sterba. 2006. "Zur Identifikation von Bimssteinfinden Aus Grabungen in Tel Megadim Und Aegina Kolonna." In *Timelines: Studies in Honour of Manfred Bietak*, edited by Ernst Czerny, Irmgard Hein, Hermann Hunger, Dagmar Melman, and Angela Schwab, 3:253–60. Leuven: Orientalia Lovaniensia Analecta 194.
- Bichler, M., H. Egger, A. Preisinger, D. Ritter, and P. Stastny. 1997. "NAA of the Minoan Pumiceat Thera and Comparison to Alluvial Pumice Deposits in the Eastern Mediterranean Region." *Journal of Radioanalytical and Nuclear Chemistry* 224: 7–14.
- Bichler, M., H. Huber, and P. M. Warren. 2007. "Project Thera Ashes — Pumice Sample from Knossos." In *Proceedings of the 2nd Euroconference Sciem2000*, edited by M. Bietak and Ernst Czerny, 59–64. Vienna: Verlag der österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- D'Ercole, Giulia, and Johannes H. Sterba. 2018. "From Macro Wares to Micro Fabrics and Inaa Compositional Groups: The Pottery Corpus of the New Kingdom Town on Sai Island (Northern Sudan)." In *From Microcosm to Macrocosm. Individual Households and Cities in Ancient Egypt and Nubia.*, edited by Julia Budka and Johannes Auenmüller, 171–84. Leiden: Sidestone Press.
- Mommsen, Hans. 2012. "The Importance of a Reliable Grouping — Neutron Activation Analysis (NAA) Data of Mycenaean Pottery Sherds Re-Evaluated with the Bonn Filter Method." *Journal of Archaeological Science* 39 (3): 704–7. <http://www.sciencedirect.com/science/article/pii/S0305440311004043>.
- Mommsen, H., A. Kreuser, and J. Weber. 1988. "A Method for Grouping Pottery by Chemical Composition." *Archaeometry* 30 (1): 47–57. <https://doi.org/10.1111/j.1475-4754.1988.tb00434.x>.
- Mommsen, H., and B. L. Sjöberg. 2007. "The Importance of the 'Best Relative Fit Factor' When Evaluating Elemental Concentration Data of Pottery Demonstrated with Mycenaean Sherds From Sinda, Cyprus." *Archaeometry* 49 (2): 359–71. <http://dx.doi.org/10.1111/j.1475-4754.2007.00306.x>.
- Mountjoy, P. A., and H. Mommsen. 2015. "Neutron Activation Analysis of Aegean-Style Iic Pottery from 11 Cypriot and Various Near Eastern Sites." *Egypt and the Levant* XXV: 421–508.
- Perlman, Isadore, and Frank. Asaro. 1969. "Pottery Analysis by Neutron Activation." *Archaeometry* 11: 21–52.
- Polinger-Foster, Karen, Johannes H. Sterba, Georg Steinhauser, and Max. Bichler. 2009. "The Thera Eruption and Egypt: Pumice, Texts and Chronology." In *Time's Up! — Dating the Minoan Eruption of Santorini*, edited by David A. Warburton, 171–80. The Danish Institute at Athens, Athens.
- Steinhauser, Georg, Johannes H. Sterba, and Max Bichler. 2007. "'Chemical Fingerprints' of Pumice from Cappadocia

- (Turkey) and Kos (Greece) for Archaeological Applications.” *Appl. Radiat. Isotopes*. 65 (5): 488–503. <http://www.sciencedirect.com/science/article/B6TJ0-4MNYW1-2/2/7b0fbfde3faedd78a4cbecl4e1326a4d>.
- Steinhauser, Georg, Johannes H. Sterba, Eliezer Oren, Michaela Foster, and Max Bichler. 2010. “Provenancing of Archeological Pumice Finds from North Sinai.” *Naturwissenschaften*, Die 97 (4): 403–10. <http://dx.doi.org/10.1007/s00114-010-0645-3>.
- Sterba, J. H. 2018. “A Workflow for Neutron Activation Analysis of Archaeological Ceramics at the Atominstitut in Vienna, Austria.” *Journal of Radioanalytical and Nuclear Chemistry* 316 (2): 753–59. <https://doi.org/10.1007/s10967-018-5803-7>.
- Sterba, J. H., H. Mommsen, G. Steinhauser, and M. Bichler. 2009. “The Influence of Different Tempers on the Composition of Pottery.” *Journal of Archaeological Science* 36: 1582–9. <http://www.sciencedirect.com/science/article/B6WH8-4VWB1DR-8/2/fba2add290f4071e945b509ef34ef21d>.
- Sterba, J. H., Frans Munnik, and Nick J. G. Pearce. 2011. “Raising the Temper - μ -Spot Analysis of Temper Inclusions in Experimental Ceramics.” *Journal of Radioanalytical and Nuclear Chemistry* 291 (1): 25–35. <https://doi.org/10.1007/s10967-011-1208-6>.
- Zuckerman, Sharon, David Ben-Shlomo, Penelope A. Mountjoy, and Hans Mommsen. 2010. “A Provenance Study of Mycenaean Pottery from Northern Israel.” *Journal of Archaeological Science* 37 (2): 409–16. <https://doi.org/doi:10.1016/j.jas.2009.10.005>.

3. 結語

型式学的な検討によって大隅諸島系土器の可能性が指摘されている具志原貝塚出土の胴部片 (P029)、脚台 (P028) は、今回測定した広田遺跡、鳥ノ峯遺跡の土器とは、同じ胎土グループに分類されなかった。また、同時期の在地の大当原式甕底部2点 (P30、P31) とも胎土グループは異なり、それぞれが孤立したものとなった。P028と P029のマハラノビス距離は、大当原式よりも大隅諸島系土器に近いが、このことは両者が大隅諸島産であることを直ちに意味するものではない。また、今回の結果は、これらの土器が大隅諸島産ではないということを示すものではなく、今回測定した広田遺跡、鳥ノ峯遺跡の土器とは胎土グループが異なるという事実を示したということである。今後、より多くの大隅諸島系土器を分析することで、大隅諸島系土器と同じ胎土グループを形成する可能性は残る。なお、分析を行った具志原貝塚資料は、4点の破片すべてが、マハラノビス距離が非常に大きく、意義のある比較を現状で行うことは困難である。

広田遺跡では時期と空間の異なる2つの墓群 (南側墓群・北側墓群) が確認されている。今回の分析で、それぞれの墓群において胎土グループが形成され、墓群を超えたグループは認められなかった。広田遺跡南側墓群においては、group02が代表的なグループとなる。今後、サンプル数が増加することで、group03、group05もより明確なグループとなると予想される。

北側墓群の group01を形成する P002、P003は同一遺構から出土したものである。土器の観察、分析結果の両者から同一個体である可能性がある。また、北側墓群はサンプル数が5点と少なく、安定的な解釈を行うためには、まずは、サンプル数を増やす必要がある。

鳥ノ峯遺跡も時期と空間の異なる2つの墓群 (第2次調査、第1・3次調査) が確認されている。group04は、同一遺構に供献された同一型式の別個体の甕からサンプリングされた TOR001、TOR003が形成したグループである。このケースの解釈としては、以下が予想される。

- ・同型式の土器は、同じ胎土になる、同じ素地を使い、混和材の割合・混入方法等も一致する。

第 I 部

- ・同一様式内、もしくは複数の型式の土器が、同じ胎土になる、同じ素地を使い、混和材の割合・混入方法等も一致する。
なお、本来は、上記の規範があったとしても、下記の理由で、胎土グループが分かれる場合がある。
- ・粘土の採掘が長期にわたる等の理由で、採掘の穴が深く、広くなることで地質が変化し胎土に反映する場合。
- ・同時に数カ所の採掘地点を利用している。これは、異なる集落、家族、「陶工」が土器を生産する、器種毎に異なる素地を作る、両者が同時に行われた場合などがその要因として想定される。

中性子放射化分析による胎土分析では、このようにこれまでの考古学的手法だけでは追及することが難しかった情報を得ることが可能で、墓地を営んだ社会についての興味深い解釈を可能とする。また、胎土の選択に時期的な違いが認められれば、土器編年においても有益な情報を提供できる。型式学と胎土グループの組み合わせから、より細かく安定した編年を構築できることが期待される。

今回の分析結果は、南島の胎土の粗い軟質土器についても、中性子放射化分析が有効であることを示したものであるといえ、今後、琉球列島において中性子放射化分析法により分析事例が増えることを期待したい。

文献

- 石堂和博・徳田有希乃・山野ケン陽次郎 2007 『広田遺跡』 南種子町教育委員会
橋口達也 1996 『種子島鳥ノ峯遺跡』 中種子町教育委員会

3. 広田遺跡出土土器の新資料

石堂和博
南種子町教育委員会

TAKAHIRO Ishido
Minamitane Town Board of Education

はじめに

本科研の資料調査の過程で、九州大学総合研究博物館が所蔵する広田遺跡出土品の中に、未報告の貝製品・土器・写真等が存在することが明らかとなった。土器はすべて小片であることから、人骨を取り上げる際に人骨に混在して一括して取り上げられたものとみられる。資料的な価値が高いことから、実測・写真撮影を行い以下に報告する。調査は平成30年1月9日と令和元年7月17日に九州大学において行った。

1. 土器（図2、写真1～3、表1）

土器は、いずれも1957-59年の発掘調査に伴い出土し、九州大学総合研究博物館に人骨と共に保管されていたもので、20点確認された。その胎土には、総じて金雲母、石英、長石等を含み、搬入品はなく、全て在地で製作されたものとみられる。この時期の種子島の在り土器は、その器種が、ほぼ甕に限定され、大型のものと小型のものがある。なお、20は実物を未見のため、搬入品の可能性が残る。1、2、4、7、8、13、14、16、17は中性子放射化分析による胎土分析を行った。

1～9は、同一の遺物袋に収納されたもので、広田114b 図と遺物カードに記載されている。それぞれの土器に1～7の数字が注記されているが、4のみ欠番である。なお、6は鉛筆書きで7と注記され、7は赤鉛筆で7と注記されていて両者は区別されている。8と9は、鉛筆書きで115図1、115図2と注記されていて、両者は、114b 図の遺物袋に入っているが、本来は115図に伴う遺物であることがわかる。当時の調査原図をすべて当たったが、114b 図に該当するものは保管されていなかった。一方で、調査日誌には、1958年9月6日に、「AV地区の実測に伴い（「114b 図」）、上層タイプの貝符8点を取り上げる。」、同9月7日に「AV地区、AVI地区の集骨を実測する（「第114b 図」、「第114c 図」）、同9月8日に「AV地区において114b 図、114c 図を作成して1日を終わる」の記述が認められ、本資料は114b 図作成時にとりあげられたことがわかる。なお、翌年の調査が中層石組からはじまっていることを見ると、この年の114b 図作成時のAV・VI区の調査は、上層埋葬を主体としたものであった可能性が高い。よって、114b 図は、AV～AVI地区の上層集骨とその周辺の実測図であったことが推測される。115図は現存し、「Plate115 A 区6号人骨の海側（深層）Kanaseki」と記載された図面（図3）をさすとみられる。Kanasekiは、金関丈夫氏をさし、図面には石組とその周辺に散布する土器が記録されている。調査日誌によると、A 区6号人骨は、AVI地区を掘り下げたところ、A 地区4号人骨のさらに南で確認された人骨である。A 地区を海側に拡張した区域は、A' 地区と呼称されていて、調査の最終日に、A' VI地区の深層の石組の一部を実測したことが記載されている。本図は、その際に図化されたものとみられる。この図は、2003報告書で未報告のため、図化した（図3）。なお、調査日誌によると、深層は下層に対応するとみられる。

以上から、1～7はAV～AVI地区の第2集骨とその周辺から出土した可能性が高い資料である。1は甕の胴部片で、縦のハケメ調整が認められる。2は、甕の胴部片で、二条のヘラ描きによる横位の沈線文を施し、下部の沈線文に接して、沈線による重弧文と斜めの短沈線が施される。3は甕の胴部片である。4は小型甕の口縁部である。外面調整は、肩部下で縦位のハケメ調整、口縁部は横位

第I部

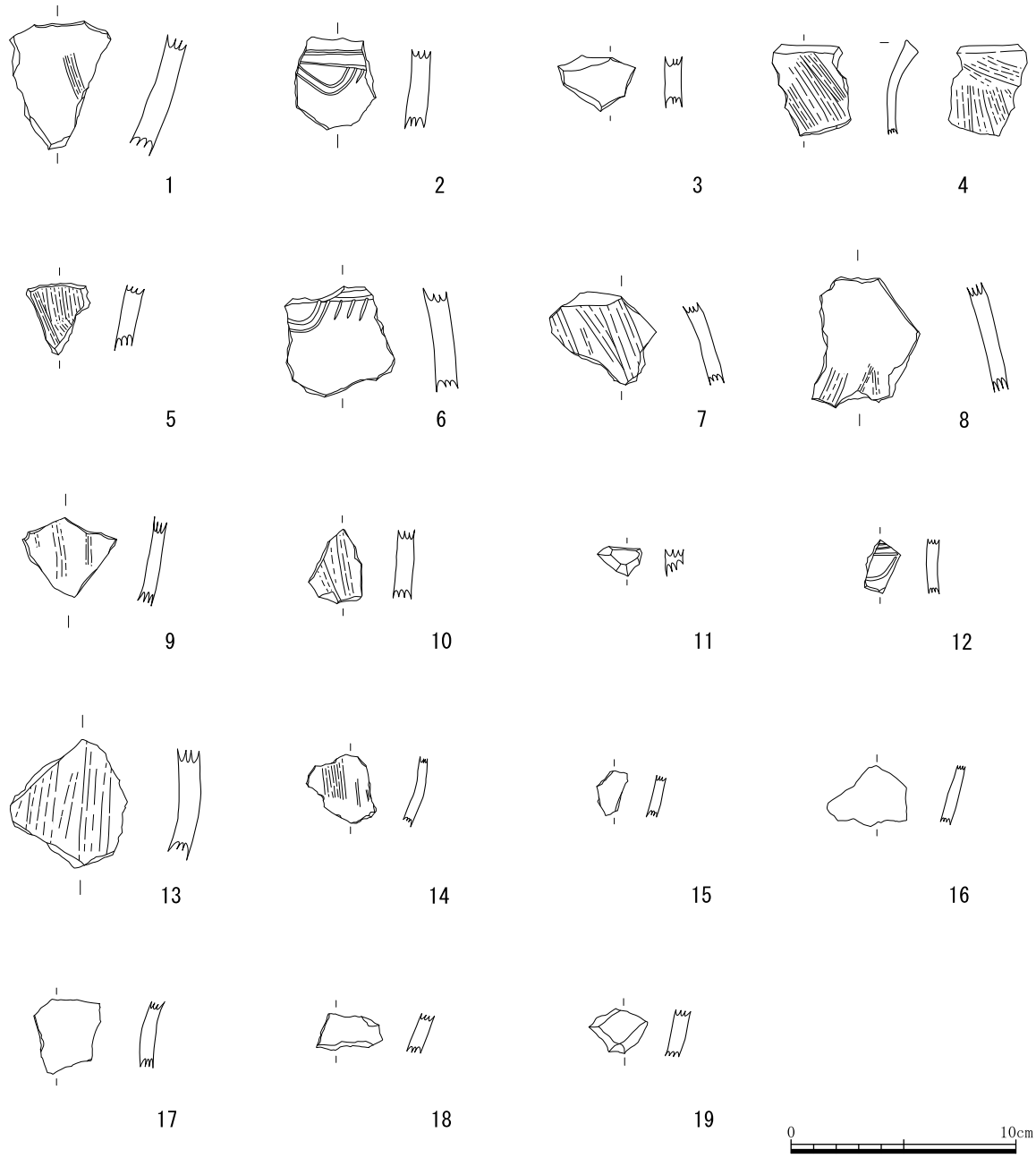


図2 九州大学総合研究博物館所蔵土器実測図

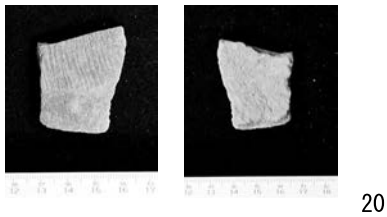


写真1 九州大学総合研究博物館所蔵土器写真



1



2



3



4



5



6



7



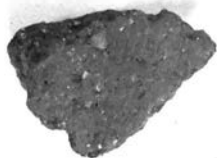
8



9



10



11



13

写真2 九州大学総合研究博物館所蔵土器写真2



13



14



15



16



17



18



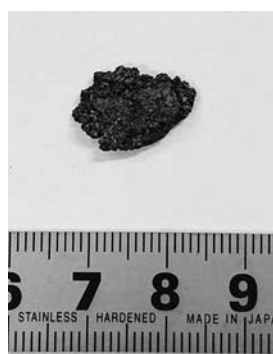
19



21



22



23



24



25

写真3 九州大学総合研究博物館所蔵土器・鉄器・石器

のハケメ調整が認められる。内面は縦位のハケメ調整が施される。5は、甕の胴部片で縦位のハケメ調整が認められる。6は、胴部片で、一条のへら描きによる横位の沈線文を施し、下部の沈線文に接して、沈線による重弧文と斜めの短沈線が連続して施される。7は甕の胴部片で縦位のハケメ調整が認められる。

8と9は、A地区6号人骨の海側で検出された石組の周辺で出土したもので（図3）、下層（深層）から検出された。いずれも甕の胴部片で、縦位のハケメ調整が認められる。

10～13は、広田A区人骨と記載されたカードの入った遺物袋に収納されており、1～4の注記がされている。10、11、13は、甕の胴部片で縦位のハケメ調整が認められる。12は甕の胴部片で、三条のへら描きによる横位の沈線文を施し、下部の沈線文に接して、沈線による重弧文が施される。

14～15は、甕の胴部片で縦位のハケメ調整が認められる。14は、8.27 A3 土器 No20、15は8.27 A3 土器 No21とそれぞれ注記がされ、ラベルには37と記載されている。注記の8.27は、8月27日をさし、A3はAⅢ地区をさすとみられる。3次に渡る広田遺跡の発掘調査で、8月27日にAⅢ地区の調査を行っているのは、第2次調査だけであり、本資料は、1958年8月27日に発掘された資料であろう。調査日誌には、AⅢ地区から8月27日こそ土器片出土の記載はないものの、8月16、17、19日に、土器片が出土した記載がある。取り上げ番号を示すとみられるNo20、No21について、当時の調査原図による確認を試みたが、第2次調査A地区は調査図面や写真の多くが所在不明であり、情報を得ることはできなかった。なお、A3は、A地区3号人骨を示す可能性がある。しかし、A地区3号人骨は

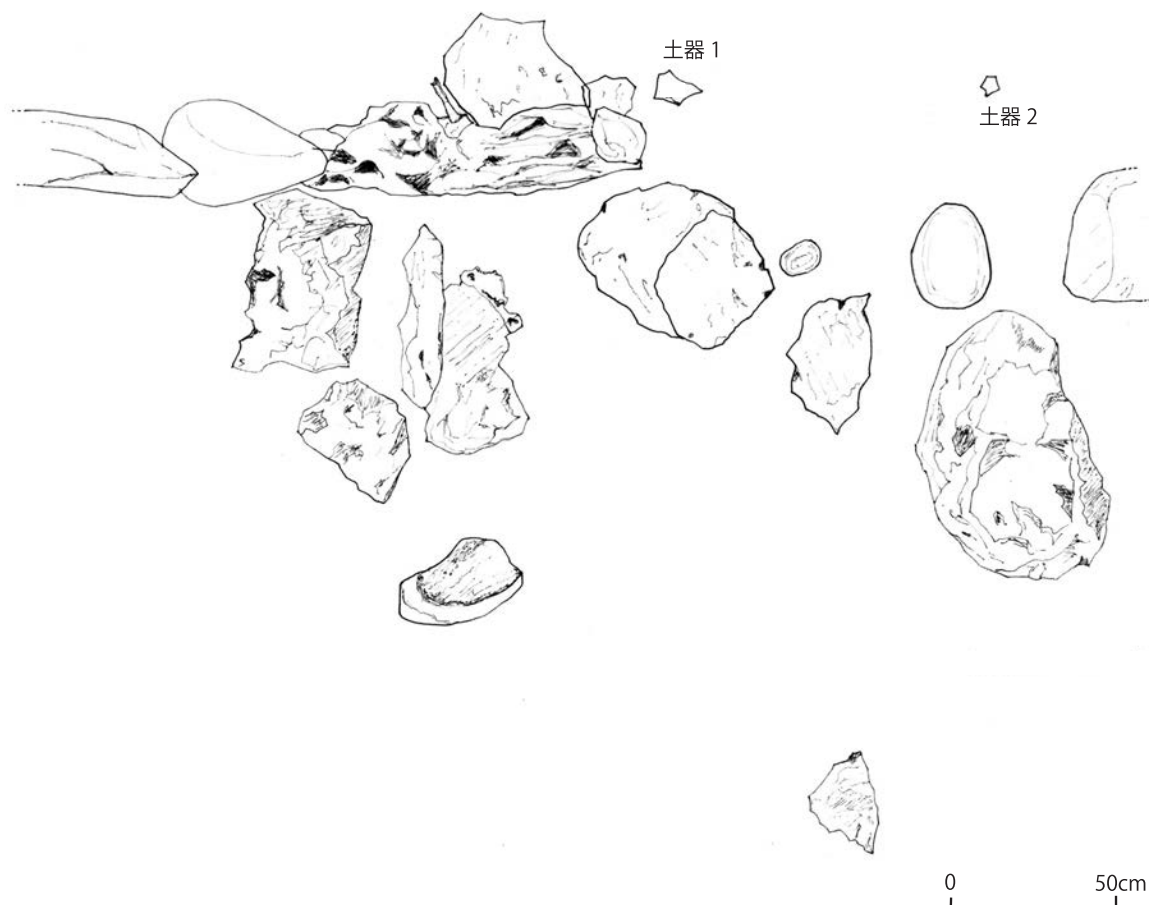


図3 A区6号人骨の海側（深層）

伴出資料として土器の記載はなく、調査日誌によると8月27日には調査対象となっておらず、8月31日に頭部のみ取り上げられ、9月1日に写真撮影がされ、全体が取り上げられている。よって、A3はAⅢ地区を示すと考えるのが妥当であろう。また、後述する鉄片・石片の遺物カード記載が、B-7でBⅦ地区をさしていることからAⅢ地区をさすとみられる。

16は、甕の胴部片で、C171 広田 A-11と遺物カードに記載がある。本資料は、A 地区11号人骨に伴うものと考えられる。

2003報告書によると、本遺構には、石組構造の中から、土器片5点（胴部）が伴うとされる。また、人骨周辺からも土器片十数点が出土している。2003報告書では、A 地区11号人骨に伴う土器は未報告である。

17～19は、甕の胴部片で、C197 D-I-3と遺物カードに書かれている。20は、本科研の最終段階で新たに発見されたものである。実物は未見で、写真による資料紹介のみ行う。4B7号人骨59.8.22と注記がされている。調査日誌によると、同日に、DIV地区7号人骨からの遺物取り上げが報告されていることから、4B7号人骨は、DIV地区7号人骨をさすとみられる。

表1 九州大学総合研究博物館収蔵土器観察表（図2に対応）

*1 外器面/内器面、Aナデ調整、Bハケ目調整

*2 B:黒雲母(biotite)、Q:石英(Quarz)、F:長石(feldspar)

番号	遺物カード	注記	調整*1	器種	胎土*2	胎土分析	備考
1	広田114b図	114b1	B/A	甕	緻密 B,Q,F	実施(HIR002)	
2		2	AB/AB	以下同じ		実施(HIR001)	沈線文
3		3	A/A				
4		5	B/B			実施(HIR004)	口縁部
5		6	B/B				
6		7	B/B				
7		7	AB/AB			実施(HIR005)	沈線文
8		115図1	B/B			実施(HIR006)	
9		115図2	B/B				
10	広田A区人骨	1	B/B	甕	緻密 B,Q,F		
11		2	B/B	以下同じ			
12		3	B/B				沈線文
13		4	B/B			実施(HIR003)	
14	8.27 A3 土器 No20	8.27 A3 土器 No20	B/B	甕	緻密 鉢物 B,Q,F	実施(HIR007)	ラベル番号37
15	8.27 A3 土器 No21	8.27 A3 土器 No21	B/B	以下同じ			ラベル番号37
16	C171 広田A-11	-	B/B	甕	緻密 B,Q,F	実施(HIR008)	
17	C197 D-I-3	-	B/B	甕	緻密 B,Q,F	実施(HIR009)	
18		-	B/B	以下同じ			
19		-	B/B				
20	-	-	-	-	-	-	-

3. 鉄器・石器（写真3）

21～24は腐食の著しい鉄小片で、25は滑石小片である。21～25は、遺物袋のラベルには14、15と同様に37とあり、遺物カードには、8.19B-7 No27と記載されている。8.19は、1958年8月19日をさし、B-7はBⅦ地区をさすとみられる。調査日誌によると、この日にBⅦ地区から鉄片、滑石片の出土記載はないものの、BⅦ地区から木炭小片が散見されたとする記述がある。また、この日は、前日までの調査で出土した遺物の写真、実測、取り上げが行われていて、鉄製釣針2点（BV・Ⅵ地区）や滑石製模造品（BV地区）の取り上げが行われている。BⅦ地区では、8月17日に鉄小片が出土していることが調査日誌の記載から分かることから、本資料は、1958年8月19日にB7地区から取り上げられた資料とみてよいだろう。なお、8月19日前後に調査されたBⅦ地区の木炭小片が散見される層位は、上層遺構ないしは、それより新しい中世の包含層とされる。

4. 大隅諸島系土器の分布とその意味

石堂和博

南種子町教育委員会

具志堅清大

沖縄県立埋蔵文化財センター

ISHIDO Takahiro

Minamitane Town Board of Education

GUSHIKEN Seita

Okinawa Prefectural Archeological Center

1. はじめに

3～7世紀の埋葬址である種子島広田遺跡では、消費された貝殻の産地、広田遺跡特有の貝製品の奄美・沖縄での分布、南九州の型式の土器の存在から、広田人と奄美・沖縄地域及び九州島との間に継続的な人的交流のあったことは明らかである。

この時期の大隅諸島に展開するのは、「大隅諸島系土器」（新里2009）と呼ばれる様式の土器群で、幅広突帯・沈線文・充実脚台に象徴される甕を主体とした独自の土器群である。大隅諸島系土器は、大きく鳥ノ峯式、広田式、上能野式に分けられ、種子島、屋久島、馬毛島にほぼ限定的に分布するとされる（本書石堂論文）。本節では近年新たに確認された資料に加え、沖縄における調査によって新たに確認した大隅諸島系土器の事例を報告し、その分布の意味を検討する。

2. 九州と琉球列島における大隅諸島系土器の分布

大隅諸島系土器は3～8世紀の在り土器様式であり、共伴関係や型式学的な検討から鳥ノ峯式（弥生時代後期後半～古墳時代前期前半）、広田式（古墳時代前期後半～後期前半、広田遺跡下層期）、上能野式（古墳時代後期後半～8世紀、広田遺跡上層期段階）に大きく分けられる（盛園1961、本書石

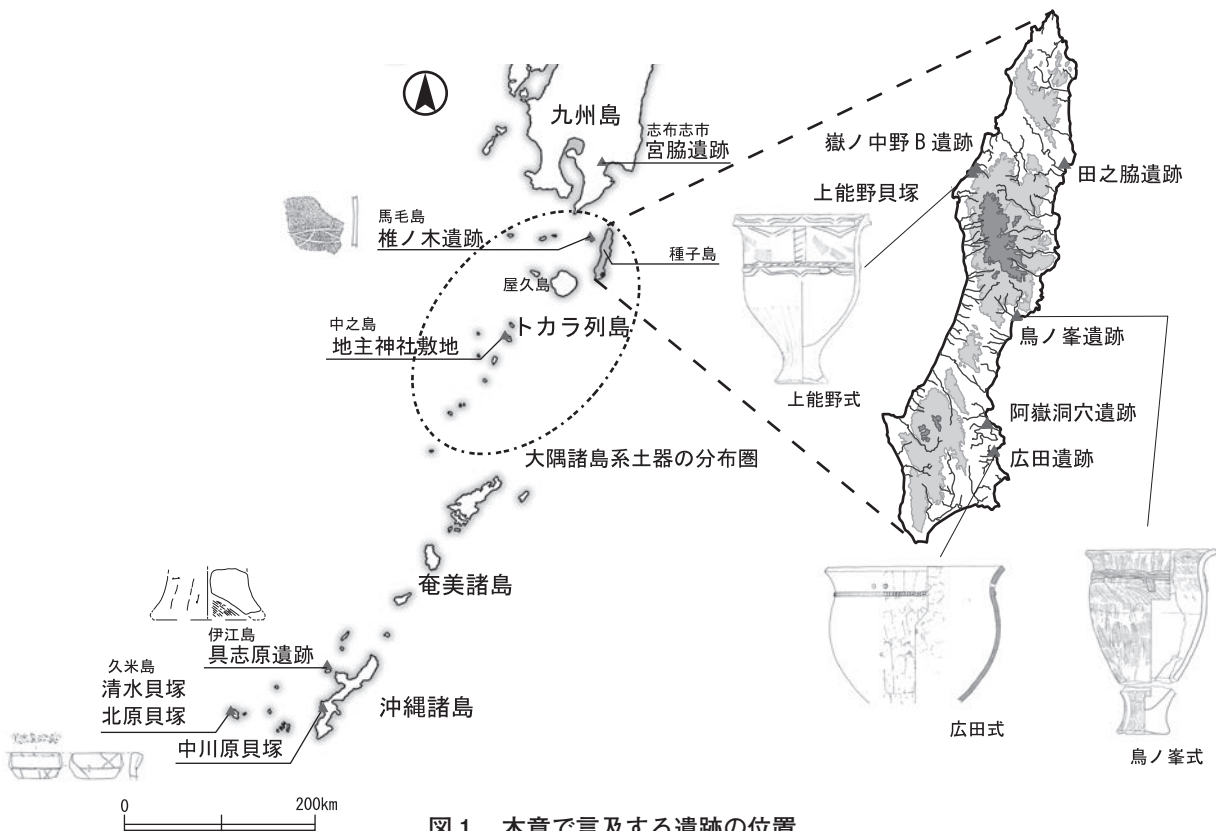


図1 本章で言及する遺跡の位置

堂論文)。鳥ノ峯式は、免田式～中津野式、広田式は下層タイプ貝符、上能野式は上層タイプ貝符の時期と概ね一致する。これらの土器型式は、九州島からの土器・ガラス小玉の搬入や、奄美・沖縄地域と共通する貝符習俗を有するにも拘わらず、その分布域は大隅諸島に限定されると理解されてきた。

2.1. 大隅諸島、トカラ列島、九州島、奄美群島における分布

大隅諸島系土器が出土する遺跡は、大隅諸島で24遺跡、トカラ列島で1遺跡が知られるものの、九州島では出土例がない(表1)。近年の調査で、トカラ列島中之島の地主神社敷地内で鳥ノ峯式～広田式の甕が出土し(新里2017)、大隅諸島系土器はトカラ列島まで分布することが明らかとなった(図1)。トカラ列島出土の大隅諸島系土器は、その胎土にトカラ列島に産しない金雲母を多く含み、全体の雰囲気からも大隅諸島で作られ、搬入されたものである可能性が高い。

なお、筆者(石堂)は、2014年に中之島地主神社敷地内で、成川式(東原式)とみられる甕の口縁部を1点表面採集している。この資料もその胎土から南九州で製作された搬入品とみてよい。奄美群島では、マツノト遺跡から出土した肥厚口縁状を呈する甕型土器口縁部片2点に上能野式の影響が認められ、川口によって報告されている(川口2019)。この資料の肥厚口縁の形状は断面方形に近く、上能野式新段階に類似する。

大隅半島の肝付平野では、志布志市宮脇遺跡の笹貫式甕に縦位の貼付文が施されるものが報告されている(相美2014)。川口は、志布志市安良遺跡出土の甕形土器口縁部片2点について、上能野式の搬入品の可能性が高いとし、相美が指摘した宮脇遺跡例や上苑A遺跡の甕形土器口縁部片の口縁部を肥厚化させる製作技法と縦位の貼付文に、上能野式の影響を想定している(川口2019)。相美・川口が指摘するように、縦位の貼付文は成川式及び本土周辺地域に見出し難しく、現状では、上能野式ないしは兼久式の影響と理解することが妥当である。また、川口が上能野式の搬入品の可能性が高いとした安良遺跡出土の甕形土器は、確かに胎土の雰囲気や肥厚化した口縁部の形状などが上能野式中段階に類似する。筆者も実見したが、上能野式の影響を受けたものか、搬入品の可能性があるという指摘は同意できる。一方で、この資料のような金雲母と混和材として粗く白みがかかった砂粒を含む胎土のありかたは、大隅半島の花崗岩起源の砂を混和材として使用した大隅半島在地の土器胎土にも認められる。さらに、川口も指摘しているが、これらの資料は口縁部の肥厚帯が短く、肥厚化も顕著ではないため、疑いなく上能野式の搬入品と認められるものではない点に課題が残る。中性子放射化分析などの理化学的手法によるクロスチェックや、資料の増加に期待したい。なお、川口・相美の指摘する縦位の貼付文は、現状では上能野式の中段階以降に認められるものであり、本資料も上能野式中段階に類似し、この段階以降で類例が増加する。(石堂)

2.2. 沖縄諸島における分布

沖縄諸島には、九州弥生地域との「南海産貝交易(木下1989)」によって九州本土や奄美群島から多数の搬入土器がもたらされている。一方で、大隅諸島系土器については、これまでに沖縄諸島における明確な出土事例は報告されていない。

大隅諸島系土器が沖縄諸島にどの程度搬入されているのかを把握するため、当該時期に並行関係にある沖縄貝塚時代後期遺跡出土資料の再確認を行った(表2)。資料調査は、搬入土器を中心に報告書の再確認及び可能な限り実見した。資料調査の結果として僅かに大隅諸島系土器に類似する資料を確認したため、当該資料の特徴について紹介する。

具志原貝塚 伊江島南海岸の砂丘に形成された貝塚で、沖縄諸島で初めて弥生土器が発見され、当該期の九州島と沖縄諸島との交渉を明らかにした著名な遺跡である(友寄・高宮1968、友寄1970)。

以前に筆者らは具志原貝塚出土の甕形土器脚部資料について着目し、弥生時代後期後半～古墳時代

並行期に位置付けられる大隅諸島の甕形土器に胎土や形態が類似することを述べた（具志堅・石堂2017）。昭和59年度の沖縄県教育委員会による発掘調査出土資料で、在地土器は大当原式主体、搬入土器として免田式土器や後期～古墳時代壺が出土している。この他、広田上層タイプの貝符のほか、搬入品として鉄鉱石やガラス玉も出土している（沖縄県教育委員会1985）。報告書未掲載資料を含め、資料の確認を行った結果、以前報告した甕形土器脚部資料の同一個体とみられる胴部片を確認した。

図2-1の胴部は内外面に粗い刷毛目状の調整痕が認められる。内面は煤により黒色を呈している。2の脚部は、以前に大隅諸島産の可能性のあるものとして紹介した資料である（具志堅・石堂2017）。外面は刷毛目状調整後に、入念にナデ消しを行っている。脚部内面は、指おさえと粗い刷毛目状調整が認められる。1・2は胎土の特徴から同一個体とみられる。黄橙色で多量の雲母を含む胎土の特徴から、搬入土器と考えられる。

中川原貝塚：読谷村渡慶次字中川原の海浜砂丘地に立地する遺跡で、平成2年度に読谷村教育委員会により発掘調査が行われている。上層ではアカジャンガー式、下層では浜屋原式が出土している。当該貝塚を含む読谷村内遺跡出土の弥生土器・弥生系土器が報告されている（仲宗根ほか2001）。図2-3は、弥生中期中葉の弥生土器（入来Ⅱ式～山ノ口Ⅰ式段階）の模倣土器として、胎土・色調が大隅諸島的であると報告されている資料である。甕形土器の口縁部で、赤褐色の砂質で多量の雲母を含む胎土の特徴は、大隅諸島の胎土によく似ている印象を受けるものである。

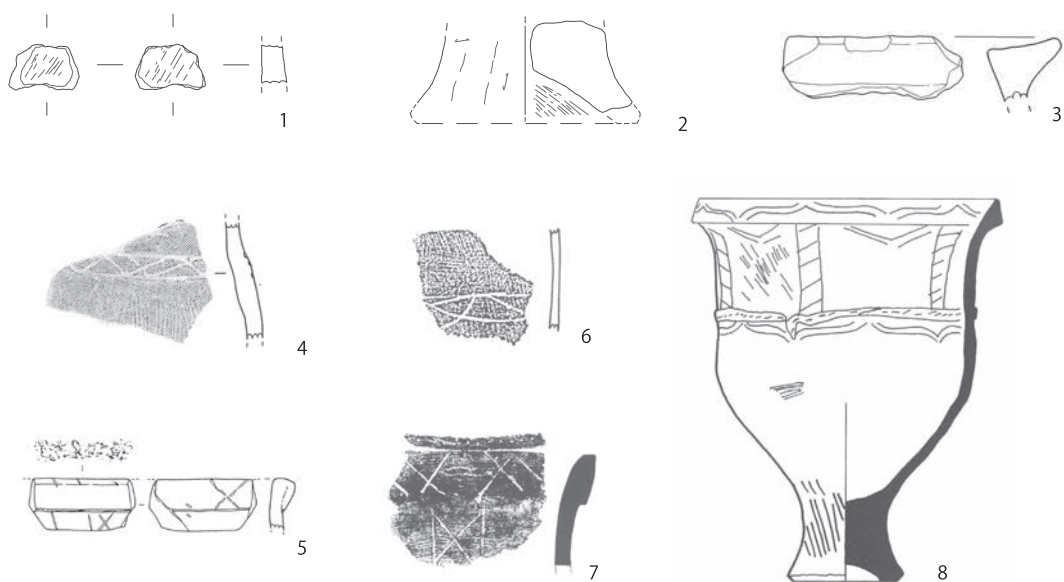
北原貝塚：久米島町具志川字北原の久米島空港周辺一帯に所在する遺跡で、昭和48年度に沖縄県教育委員会により調査が行われている（沖縄県教育委員会1992）。在地土器は無文尖底からくびれ平底土器の過渡的段階（大当原式～アカジャンガー式）で、遺構内において尖底とくびれ平底・平底が共伴しており、有文資料が少なく型式判断は難しいものの主体はアカジャンガー式とみられる。有文資料には貝符類似文様が認められる。当該調査では広田上層タイプ貝符や開元通寶が得られている。

当該貝塚出土資料に上能野式に類似する土器および模倣土器が認められる。

図2-4は、甕形とみられる胴部片で、上能野式に類似する資料である。外面の並行沈線内に弧状・V字の沈線を一部重複させながら単位事に施すもので、大隅諸島の在地土器文様「相交弧文（新里1999）」に類似する。類例は馬毛島椎ノ木遺跡出土資料（図2-6）にみられる（熊本大学文学部考古学研究室1980）。外面下部には、刷毛目状の調整痕が見られる。内面は指おさえによる指頭痕が残る。多量の雲母を含む胎土の特徴から搬入土器と考えられる。このような文様は奄美・沖縄の在地土器にみられないもので、兼久式・アカジャンガー式では基本的に鋸歯状あるいは波状の文様を横位で連続的あるいは一筆書的に施文することが多い。当該資料と椎ノ木遺跡出土資料はどちらも破片資料で文様モチーフ全体を窺えるものではないが、単位毎に施すか、連続的に施すかという文様意匠の観点からも、奄美・沖縄在地土器の文様と区別は出来るものといえ、大隅諸島産の可能性を指摘できる。

当該資料は、遺構内一括資料として、尖底・くびれ平底土器と共伴しているとされるが、調査報告書が刊行されていないことから、出土状況の詳細については不明であるものの、概ね大当原式～アカジャンガー式の過渡期段階に位置づけられよう。また、椎ノ木遺跡出土資料は、上能野式の古段階に位置づけられており（石堂2015・2019・本書石堂論文）、今後大隅諸島と沖縄諸島の並行関係を探る検討資料の一つとなり得る。

図2-5も、甕形土器の口縁部片で上能野式の文様モチーフに類似する資料である。口縁部外面に粘土帯を貼り付け肥厚させ、外面肥厚部下に横位沈線、その下に縦位の平行沈線文+「X」字状文様を施す。内面も横位沈線と「X」字状文様を施す。口唇部には刻目が施される。口縁肥厚部外面にも斜沈線のような痕跡がみられるが判然としない。胎土は、灰色の泥質で沖縄在地土器である。



1・2：具志原貝塚、3：中川原貝塚、4・5：北原貝塚、6：馬毛島椎ノ木遺跡
7：西之表市国上、8：上能野貝塚

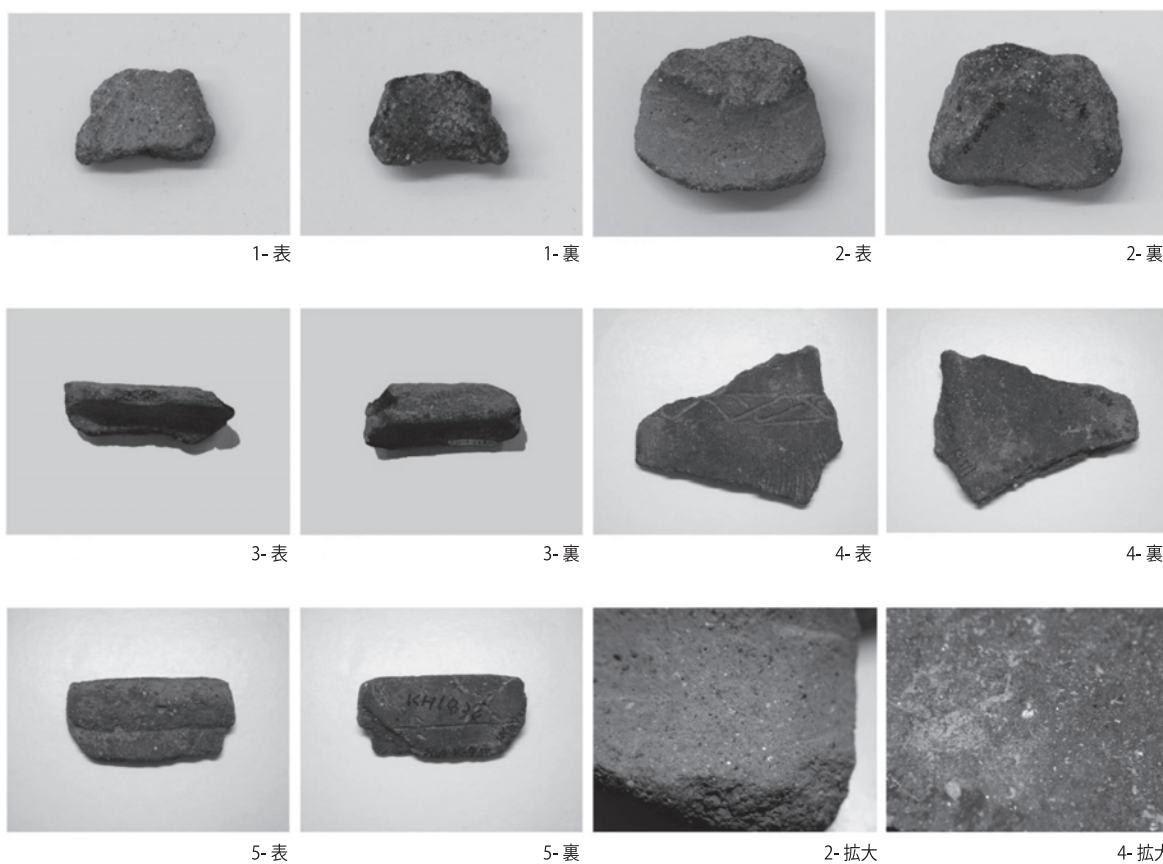


図2 南島における広田遺跡関連土器資料

上能野式は口縁部外面に粘土帯を貼付けし、断面三角形状・あるいは方形状に肥厚させることが特徴であるが、当該資料の肥厚口縁部のつくりは沖縄在地的で上能野式のものとは異なる。一方で小片のため判然としないものの、上能野式の文様モチーフ（図2-7・8）に類似する（河口1973、旭1975）。上能野式の文様モチーフを模倣、あるいは影響を受けた沖縄在地土器と考えられる。

今回の調査では、少ないながらも大隅諸島系土器に類似する資料を見出すことができた。北原貝塚の上能野式類似・模倣土器は、上能野式土器文化圏との直接的あるいは間接的な接触・交流を類推させるものである。北原貝塚からは、広田上層タイプ貝符や開元通寶が出土していることも興味深い。

具志原貝塚出土資料は胎土の雰囲気が大隅諸島産のものに類似するものの、口縁部形態や文様属性といった型式学的観点から大隅諸島系土器に断定することは出来ない。また、中川原貝塚出土資料も大隅諸島の土器胎土への類縁性を感じるものの、南九州の土器様式に含まれることと大隅諸島・南九州大隅半島産ともに胎土に雲母が混入される特徴があるため、大隅諸島産と区別することは非常に難しい。これまでに南九州産として認識されている資料に大隅諸島産が含まれている可能性もあり今後の検討課題としたい。

九州本土や奄美群島から沖縄諸島への土器搬入状況と比較すると、大隅諸島から沖縄諸島への土器搬入量は僅少といった状況である。今後も資料調査の継続、資料蓄積に伴い大隅諸島系土器に類似する資料は追加していくものと思われる。肉眼観察による胎土・色調からの判断は、個人的な主観によってしまうため慎重な検討が必要であり、客観的な判断基準を設定することが求められる。胎土分析といった自然化学分析なども踏まえた検討が必要であろう。（具志堅）

3. 土器からみた3～7世紀の南島における種子島人の動向

鳥ノ峯～広田式期には、トカラ列島中之島まで確実に分布するが、この時期の九州島及び奄美群島では、大隅諸島系土器は認められず、沖縄諸島では、伊江島具志原貝塚で、この時期の大隅諸島系土器の可能性が高い資料が2点確認されているものの、中性子放射化分析では、大隅諸島系土器と現状では同一の胎土グループを形成していない。また、トカラ列島における大隅諸島系土器は搬入品で、主体となる土器は奄美系の土器とされる（新里2019）。

つづく、上能野式期の確実な例は大隅諸島に限定される。上能野式は、古・中・新の三段階に細分されるが、上能野式古段階の影響を受けた土器が沖縄諸島（久米島北原貝塚）で認められる。この時期の南島の土器様式は、沖縄諸島・奄美群島・大隅諸島で異なる上、排他的な様相を示しており（新里2009）、様式間の並行関係を捉えることが困難であった。本例は、両者に共通する文様モチーフを見出したものであり、南島における広田人の移動痕跡を示すだけでなく、広域編年を検討するうえでも重要なものといえよう。上能野式中段階以降の影響を受けたとみられる土器は、大隅半島志布志湾周辺（安良・上苑A・宮脇遺跡）、奄美群島（マツノト遺跡）で認められる。これらのうち、安良遺跡、北原貝塚例は、大隅諸島からの搬入品の可能性もある。

鳥ノ峯～広田式は、広田遺跡の下層埋葬とほぼ重なる時期の土器型式で、上能野式は、広田遺跡の上層埋葬とほぼ重なる時期の土器型式である。広田遺跡の下層・上層段階では、いずれの段階においても、奄美群島・沖縄諸島からは多量の南海産の大型巻貝、九州島からはガラス小玉等が大隅諸島に搬入され、両者に人的交流があったことは明らかである。一方で、土器の分布や密度、動態からは、3～7世紀の南島における種子島人の動向は低調にみえ、種子島と奄美群島の間に点在するトカラ列島の島々において、大隅諸島系土器は、少なくとも鳥ノ峯～広田式の時期は客体であり、その主体は奄美系の土器である。こうした土器様式の動態が示すものについて、今後、更に検討をしていきたい。（石堂）

文献

- 新里貴之 2009 「貝塚時代後期文化と弥生文化」『弥生時代の考古学1 弥生文化の輪郭』、pp.148-154、同成社
- 新里貴之 2017 「トカラ列島の弥生時代と平安時代－中之島地主神社敷地内発掘調査成果から－」『日本考古学協会第83回総会研究発表要旨』日本考古学協会 P178-179
- 相美伊久雄 2014 「南九州東端域における7～8世紀の土器様相－志布志湾北岸域の甕型土器を中心に－」『Archaeology from the south』II 新田栄治先生退職記念論集、pp.221-238
- 川口雅之 2019 「大隅諸島上能野式土器の年代及び兼久式土器成立の背景について」『中山清美と奄美学－中山清美氏追悼論集－』、pp.83-95、奄美考古学会
- 旭慶男 1975 「種子島における弥生式土器」『旭慶男君著作集』、pp.11-101、旭慶男君著作集刊行会
- 安座間充 2000 「琉球弧からみた弥生時代併行期の九州との交流様相－当該期搬入土器群および「弥生系土器」の再検証を中心に－」『地域文化論叢』第3号、pp.1-46、沖縄国際大学大学院地域文化研究科
- 安座間充 2019 「沖縄出土の兼久式土器・類似土器－付 アカジャンガー式土器出土遺跡集成－」『中山清美と奄美学－中山清美氏追悼論集－』、pp.111-121、奄美考古学会
- 沖縄県教育委員会 1985 『伊江島具志原貝塚の概要』沖縄県文化財調査報告書第61集
- 沖縄県教育委員会 1992 『新空港・空港拡張建設計画予定地内の遺跡－新石垣空港・久米島空港拡張建設計画予定地内の分布調査報告書－』沖縄県文化財調査報告書第106集
- 石堂和博 2014 「大隅諸島の先史文化にみられる生業の特徴と変遷」『琉球列島先史・原史時代の環境と文化の変遷』琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集第2集、pp.159-170、六一書房
- 石堂和博 2015 「古墳時代後期並行期～奈良時代における九州本土と大隅諸島の交流～古墳時代後期並行期から奈良時代における大隅諸島の様相を中心に～」『平成27年度 第6回 奄美考古学会（種子島大会）研究発表資料』、奄美考古学会
- 石堂和博 2019 「古墳時代後期並行期から8世紀における大隅諸島と九州本土及び奄美、沖縄諸島との交流」『中山清美と奄美学－中山清美氏追悼論集－』、pp.99-110、奄美考古学会
- 木下尚子 1989 「南海産貝輪交易考」『生産と流通の考古学－横山浩一先生退官記念論文集－』、pp.203-249、横山浩一先生退官記念事業会
- 木下尚子 2019 「小湊フワガネク遺跡と広田遺跡－奄美大島の鉄器導入期の考察－」『中山清美と奄美学－中山清美氏追悼論集－』、pp.162-164、奄美考古学会
- 河口貞徳 1973 「上能野貝塚発掘概報」『鹿児島考古』第7号、pp.59-68、鹿児島考古学会
- 具志堅清大・石堂和博 2017 「伊江島具志原貝塚出土の甕形土器脚部資料について」『南島考古』第36号、pp.161-168、沖縄考古学会
- 熊本大学文学部考古学研究室 1980 『馬毛島埋葬址－西之表市椎ノ木遺跡－』研究室活動報告6
- 新里貴之 1999 「南西諸島における弥生並行期の土器」『人類史研究』第11号、pp.75-106、人類史研究会
- 新里貴之 2009 「貝塚時代後期文化と弥生文化」『弥生時代の考古学 1 弥生文化の輪郭』、pp.148-164、同成社
- 新里貴之 2012 「貝塚時代後期文化と古墳文化」『古墳時代の考古学 7 内外の交流と時代の潮流』、pp.146-158、同成社
- 新里貴之 2015 「南西諸島の土器と成川式土器」『成川式土器ってなんだ？－鹿大キャンパスの遺跡で出土する土器－』、pp.31-38、鹿児島大学総合研究博物館
- 友寄英一郎・高宮廣衛 1968 「伊江島具志原貝塚調査概報」『琉球大学法文学部紀要』社会篇第12号、pp.37-76、琉球大学法文学部

第 I 部

- 友寄英一郎 1970「沖縄出土の弥生土器」『琉球大学法文学部紀要社会篇』第14号、pp.47-55、琉球大学法文学部
- 仲宗根求・西銘章・宮城弘樹・安座間充 2001「読谷村出土の弥生土器・弥生系土器について」『読谷村歴史民俗資料館紀要』第25号、pp.59-79、読谷村歴史民俗資料館
- 中園聡 2000「沖縄諸島出土の九州系弥生土器－様式の同定と解釈－」『琉球・東アジアの人と文化』上巻 高宮廣衛先生古希記念論集、pp.111-130、高宮廣衛先生古希記念論集刊行会
- 中村直子 2013「ナガラ原東貝塚出土の成川式土器の位置づけ」『ナガラ原東貝塚の研究』、pp.259-268、熊本大学文学部
- 西之表市教育委員会 2019『内城址・上能野貝塚 西之表市埋蔵文化財発掘調査概報 市内遺跡発掘調査等事業に伴う発掘調査概報』
- 宮城弘樹 2000「貝塚時代後期土器の研究（Ⅱ）－後期遺跡の集成－」『南島考古』第19号、pp.45-62、沖縄考古学会

表2 3～8世紀の沖繩貝塚時代後期遺跡一覧

(凡例は表末に記す。)

No. 遺跡名	所在地	時期	在土器			在土器		備考	実見
			九州本土の型式	大隅諸島の型式	奄美群島の型式	土器型式	貝付類似文様		
1 宇佐浜B貝塚	国頭村字辺戸中畑	後期前半	弥生中期壺・壺、須玖式類似	-	-	浜屋原式主体、くびれ平底	-	貝付未製品	○
2 安田遺跡 (80)	国頭村字安田	後期後半	-	-	-	アカジャンガー式?	-	-	△
安田遺跡 (87)	国頭村字安田	後期後半	-	-	-	アカジャンガー式	-	-	△
安田遺跡 (15)	国頭村字安田	後期前半～後期中頃	-	-	スセン常式類似	-	-	-	△
3 安波貝塚 (87)	国頭村字安波	後期後半	-	-	-	フェンサ下層式	-	-	△
安波貝塚 (15)	国頭村字安波	後期中頃～後期後半	-	-	-	大当原式、アカジャンガー式	-	-	△
4 辺土名兼久遺物散布地	国頭村字辺土名	後期後半	-	-	-	フェンサ下層式	-	-	△
5 喜如嘉貝塚 (79)	大宜味村字喜如嘉	後期後半	-	-	-	アカジャンガー式主体	○	-	△
喜如嘉貝塚 (94)	大宜味村字喜如嘉	後期後半	-	-	兼久式類似	アカジャンガー式主体	○	-	○
6 大兼久遺跡	大宜味村字大兼久	後期後半	-	-	-	フェンサ下層式主体	-	-	△
7 根路銘遺跡	大宜味村字根路銘	後期後半	-	-	-	フェンサ下層式主体	-	-	△
8 田名西貝塚北側地点	伊平屋村字田名	後期前半	-	-	弥生系	浜屋原式主体、大当原式?	-	-	△
9 東原貝塚 (86)	伊平屋村字田名	後期後半	-	-	-	フェンサ下層式主体	-	ヤコウガイ札状製品	○
東原貝塚 (90)	伊平屋村字田名	後期中頃～後期後半	-	-	弥生系	フェンサ下層式主体	-	-	○
10 瀧川原貝塚	伊平屋村字我喜屋	後期中頃～後期後半	-	-	-	大当原式、フェンサ下層式	-	-	○
11 伊是名貝塚B地点 (78)	伊是名村字伊是名	後期後半	-	-	-	アカジャンガー式	-	-	△
伊是名貝塚A地点 (84)	伊是名村字伊是名	後期後半	-	-	-	くびれ平底	-	-	△
12 アギギタラ貝塚 (78)	伊是名村アギギタラ岩山	後期後半	-	-	-	アカジャンガー式	-	-	△
13 具志川島遺跡群西地点	伊是名村具志川島	後期中頃～後期後半	-	-	-	大当原式～アカジャンガー式	○※表探	-	△
14 具志原貝塚 (68)	伊江村字川平小字下原	後期前半～後期後半	山ノ口式、中期後半～後期初頭壺	-	-	浜屋原式～アカジャンガー式	-	広田上層タイプ貝付	△
具志原貝塚 (78)	伊江村字川平小字下原	後期前半～後期後半	-	-	兼久式類似	大当原式、アカジャンガー式	-	-	△
具志原貝塚 (85)	伊江村字川平小字下原	後期前半～後期中頃	弥生中期壺、後期刻目突帯壺、後期後半～古墳初期壺、免田式	弥生後期～古墳時代	-	大当原式主体、アカジャンガー式	-	広田下層タイプ貝付、広田上層タイプ貝付、無文タイプ貝付、ガラス玉、鉄鉱石	○
具志原貝塚 (97)	伊江村字川平小字下原	後期前半～後期後半	入来Ⅱ式、山ノ口式	-	弥生系、兼久式類似?	浜屋原式～アカジャンガー式	-	-	○
15 阿良貝塚 (83)	伊江村字東江前小字阿良	後期前半	山ノ口式	-	-	浜屋原式主体	-	-	○
阿良貝塚 (99)	伊江村字東江前小字阿良	後期前半	-	-	弥生系	浜屋原式主体	-	-	○
16 浜崎貝塚	伊江村字東江前小字浜崎原	後期前半～後期中頃	-	-	弥生系・スセン常式類似	大当原式主体	-	-	○
17 ナガラ原東貝塚 (99)	伊江村字川平小字ナガラ原	後期中頃～後期後半	-	-	-	アカジャンガー式	-	-	○

No.	遺跡名	所在地	時期	畿内土器および模倣・類似土器			在出土器			実見
				九州本土の型式	大隅諸島の型式	奄美群島の型式	土器型式	貝付類似 文様	備考	
	ナガラ原東貝塚 (熊大調査)	伊江村字川平小字ナガラ原	後期中頃～後期後半	成川式	-	スセシ管式類似、兼久式類似	大当原式新～アカジャンガン式	-	広田下層タイプ貝符、 広田上層タイプ貝符、 無文タイプ貝符、鉄 製品	○
18	ナガラ原西貝塚	伊江村字川平小字ナガラ原	後期前半～後期中頃	-	-	スセシ管式類似、兼久式類似	大当原式主体	-	無文タイプ貝符	○
19	ナガラ原第三貝塚	伊江村字川平小字ナガラ原	後期前半	-	-	-	浜屋原式～大当原式	-	-	○
20	カヤ原遺跡 A 地点	伊江村字川平小字カヤ原	後期中頃～後期後半	-	-	兼久式類似	アカジャンガン式主体	-	広田上層タイプ貝符	○
21	運天貝塚	今帰仁村運天	後期後半	-	-	-	アカジャンガン式 ンサ下層式	-	-	△
22	渡喜仁浜原貝塚	今帰仁村字渡喜仁	後期後半	弥生系	-	-	アカジャンガン式主体、フェ ンサ下層式	-	-	△
23	仲尾次貝塚	今帰仁村字仲尾次	後期前半	弥生系	-	-	尖底土器	-	-	△
24	具志堅貝塚	本部町字具志堅片蒲原	後期前半	入来式、山ノ口式、黒髪 式、弥生系	-	-	浜屋原式主体、大当原式	-	-	△
25	備瀬貝塚	本部町字備瀬	後期前半～後期後半	入来式	-	-	大当原式～アカジャンガン式	-	-	△
26	アノチの上貝塚 (05)	本部町字瀬底安地原	後期前半～後期中頃	刻目突帯文藝、入来式	-	弥生系	阿波連浦下層式～アカジャン ガン式	-	-	△
	アノチの上貝塚 (09)	本部町字瀬底安地原	後期前半～後期中頃	黒髪式、弥生系	-	-	阿波連浦下層式～大当原式	-	-	△
27	兼久原貝塚	本部町字崎本部兼久原	後期中頃～後期後半	-	-	-	アカジャンガン式主体、大当 原式	-	広田上層タイプ貝符、 開元通寶	△
28	具志堅新里洞穴遺跡	本部町字具志堅	後期後半	-	-	-	アカジャンガン式	-	-	△
29	済井出長佐久貝塚	名護市字済井出	後期後半	-	-	-	アカジャンガン式、尖底土 器？	-	-	△
30	大堂原遺跡	名護市字済井出	後期前半～後期中頃	板付式蓋、山ノ口式蓋、 入来 I・II 式蓋、鬘棺	-	弥生系、スセシ管式、 兼久式類似	大当原式主体、阿波連浦下層 式、浜屋原式	○	広田下層タイプ貝符、 イモガイ円盤状製品	○
31	屋部前田原貝塚	名護市字屋部小字前田原	後期前半～後期後半	入来式、弥生系	-	-	阿波連浦下層式～大当原式、 フェンサ下層式	-	-	△
32	名護貝塚 (県 85)	名護市名護大兼久原	後期後半	-	-	-	アカジャンガン式	-	-	△
	名護貝塚 (市 85)	名護市名護大兼久原	後期後半	-	-	-	アカジャンガン式	-	-	△
33	溝原貝塚 (89)	名護市東江	後期中頃～後期後半	-	-	-	大当原式～アカジャンガン式	-	-	△
	溝原貝塚 (15)	名護市東江	後期前半～後期後半	-	-	-	浜屋原式～アカジャンガン式	-	-	△
34	部瀬名貝塚 (96)	名護市字喜瀬部瀬名原	後期前半	入来 II 式、山ノ口式	-	-	浜屋原式	-	-	△
	部瀬名貝塚 (01)	名護市字喜瀬部瀬名原	後期後半	-	-	-	フェンサ下層式	-	-	△
35	久志貝塚	名護市久志	後期後半	-	-	兼久式類似	アカジャンガン式、フェンサ 下層式	○	-	△
36	前原遺跡	宜野座村字松田小字前原	後期前半	弥生系	-	-	浜屋原式～大当原式	-	-	△

No.	遺跡名	所在地	時期	畿入土器および模倣・類似土器			在出土器			実見
				九州本土の型式	大隅諸島の型式	奄美群島の型式	土器型式	貝付類似 文様	備考	
37	前原貝塚	宜野座村字松田小字前原	後期前半～後半	弥生中期壺、免田式	-	弥生系・スセシヤンガース式、兼久式類似	スセシヤンガース式、大当原式	○	-	○
38	漢那ウエーヌアスアタイ遺跡	宜野座市字漢那	後期後半	-	-	-	フェンサ下層式	-	-	△
39	西先謝原遺物散布地	金武町字金武西先謝原	後期後半	-	-	-	フェンサ下層式主体	-	-	△
40	飛留喜原B遺跡	金武町字並里飛留喜田原	後期後半	-	-	-	フェンサ下層式主体	-	-	△
41	伊武部貝塚	恩納村字名嘉真	後期前半	-	-	-	大当原式	-	-	-
42	熱田貝塚 (69)	恩納村字安富祖	後期後半	-	-	-	アカジャンガース式、フェンサ下層式	-	-	△
	熱田貝塚 (79)	恩納村字安富祖	後期後半	-	-	-	アカジャンガース式主体	○	開元通寶	△
43	久良波貝塚 (92)	恩納村字久良波	後期中頃～後期後半	-	-	-	大当原式、アカジャンガース式、フェンサ下層式	-	-	△
	久良波貝塚 (94)	恩納村字久良波	後期後半	-	-	-	フェンサ下層式	-	-	△
44	塩屋貝塚	恩納村字真栄田塩屋	後期前半	-	-	-	浜屋原式	-	-	△
45	昆布貝塚	うるま市具志川字昆布	後期前半	-	弥生中期壺	-	大当原式	-	-	○
46	宇堅貝塚 (80)	うるま市具志川字宇堅小字岩地原	後期前半	弥生中期壺、免田式	-	-	浜屋原式主体、大当原式	-	-	○
47	アカジャンガース貝塚 (60)	うるま市具志川小字具志川	後期後半	-	-	-	アカジャンガース式主体	-	-	△
	アカジャンガース貝塚 (80)	うるま市具志川小字具志川	後期中頃～後期後半	-	-	スセシヤンガース式類似	大当原式、アカジャンガース式	-	-	△
	アカジャンガース貝塚 (04)	うるま市具志川小字具志川	後期前半	-	-	-	大当原式主体	-	-	△
48	前原遺跡	うるま市具志川小字田場	後期後半	-	-	-	フェンサ下層式	-	-	△
49	具志川グスク	うるま市具志川	後期後半	-	-	兼久式類似	アカジャンガース式～フェンサ下層式	○	-	△
50	具志川グスク崖下	うるま市具志川	後期中頃～後期後半	松木壺式壺、中津野式壺	-	-	大当原式、アカジャンガース式	-	-	○
51	喜屋武グスク	うるま市具志川字仲嶺	後期後半	-	-	-	フェンサ下層式主体、アカジャンガース式？	-	-	△
52	平敷屋トウハバル遺跡 (96)	うるま市勝連字平敷屋小字板武座	後期前半～後半	成川式	-	スセシヤンガース式類似	大当原式主体、阿波連浦下層式～フェンサ下層式	○	-	○
	平敷屋トウハバル遺跡 (04)	うるま市勝連字平敷屋小字板武座	後期中頃～後期後半	-	-	-	大当原式、アカジャンガース式	-	-	△
	平敷屋トウハバル遺跡 (14)	うるま市勝連字平敷屋小字板武座	後期後半	-	-	-	アカジャンガース式	-	-	△
53	津堅貝塚 (61)	うるま市勝連字津堅	後期前半	-	-	-	大当原式主体	-	-	△
	津堅貝塚 (03)	うるま市勝連字津堅	後期中頃	-	-	-	大当原式	-	-	△
	津堅貝塚 (04)	うるま市勝連字津堅	後期中頃～後期後半	-	-	-	大当原式、アカジャンガース式	-	-	△

No.	遺跡名	所在地	時期	畿内土器および模倣・類似土器			在出土器			実見
				九州本土の型式	大隅諸島の型式	奄美群島の型式	土器型式	貝付類似 文様	備考	
	津堅貝塚 (05)	うるま市勝連字津堅	後期中頃～後期後半	-	-	兼久式類似	大当原式、アカジャンガー式	-	-	△
54	津堅第二貝塚	うるま市勝連字津堅	後期中頃～後期後半	-	-	-	大当原式～アカジャンガー式	-	-	△
55	浜貝塚	うるま市勝連字浜	後期後半	-	-	兼久式類似	アカジャンガー式	-	-	△
56	勝連城跡 (65)	うるま市勝連南風原	後期後半	-	-	-	アカジャンガー式	-	開元通寶	△
	勝連城跡四の曲輪北区	うるま市勝連南風原	後期後半	-	-	兼久式類似	アカジャンガー式主体	-	無文タイプ貝符、開元通寶	△
	勝連城跡四の曲輪西・東区	うるま市勝連南風原	後期後半	-	-	-	アカジャンガー式、フエンサ下層式	-	開元通寶	△
57	勝連城南貝塚 (66)	うるま市勝連南風原	後期後半	-	-	兼久式類似	アカジャンガー式、尖底土器	-	-	△
	勝連城南貝塚 (84)	うるま市勝連南風原	後期後半	-	-	-	アカジャンガー式	-	広田上層タイプ貝符	△
58	桃原貝塚	うるま市与那城字桃原	後期前半?後期中頃	-	-	-	大当原式主体、アカジャンガー式	-	-	△
59	池原上田原・仕明原遺跡	沖縄市字池原	後期前半	-	-	-	大当原式	-	-	△
60	室川貝塚	沖縄市字室川	後期後半	弥生前期～中期土器	-	弥生系	フエンサ下層式	-	-	△
61	浜屋原貝塚 (77)	読谷村字字座小字浜屋原	後期前半	-	-	スセシキ式類似	浜屋原式主体、大当原式	-	-	△
	浜屋原貝塚 B 地点 (06)	読谷村字字座小字浜屋原	後期前半	-	-	-	大当原式主体	-	漢式三翼鏡	△
	浜屋原貝塚 B 地点 (13)	読谷村字字座小字浜屋原	後期前半	-	-	-	浜屋原式、大当原式	-	-	△
62	大当原貝塚	読谷村字波平小字大当原	後期前半	-	-	-	大当原式主体	-	-	○
63	中川原貝塚 (A 地点)	読谷村字波平小字中川原	後期前半～後期後半	前期末～中葉頃壺・甕	-	弥生中期模倣甕	浜屋原式、アカジャンガー式	-	-	○
	中川原貝塚 (B 地点)	読谷村字波平小字中川原	後期前半	入来 I・II 式、黒髪式	-	入来 I 式模倣	-	-	-	○
64	大久保原遺跡	読谷村字波平小字大久保原	後期前半	山ノ口式、入来 II 式、入来 I 式、松木園式	-	-	-	-	-	○
65	高知口原貝塚	読谷村字高知口原	後期前半	入来 I 式、松木園式	-	-	-	-	-	○
66	吹出原遺跡	読谷村字長浜吹出原	後期後半	-	-	-	アカジャンガー式	-	-	△
67	連道原遺跡	読谷村字高志保連道原	後期中頃～後期後半	-	-	兼久式類似	尖底土器、アカジャンガー式	-	-	△
68	木綿原遺跡	読谷村字高志保連道原	後期前半	弥生中期壺	-	-	浜屋原式主体、大当原式	-	-	△
69	伊礼原遺跡 (低湿地区)	北谷町字伊礼平小字伊礼原	後期中頃～後期後半	-	-	-	大当原式～フエンサ下層式	-	-	△
	伊礼原遺跡 (砂丘区)	北谷町字伊礼平小字伊礼原	後期前半	突帯文壺、弥生系	-	-	阿波連浦下層式～大当原式	-	札状製品、諸岡型貝輪、翡翠、イモガイ 円盤状製品	△
70	伊礼原 A 遺跡	北谷町字伊礼平小字伊礼原	後期前半～後半	弥生中期壺、須玖式甕	-	スセシキ式類似	阿波連浦下層式～大当原式、くびれ平底	-	無文タイプ貝符	○
71	伊礼原 B 遺跡	北谷町字伊礼平小字伊礼原	後期後半	-	-	-	くびれ平底	-	-	△
72	伊礼原 D 遺跡 (08)	北谷町字伊礼平小字伊礼原	後期前半～後半	弥生系	-	弥生系	浜屋原式、大当原式、アカジャンガー式	-	広田上層タイプ貝符	△

No.	遺跡名	所在地	時期	畿入土器および模倣・類似土器			実見		
				九州本土の型式	大隅諸島の型式	奄美群島の型式			
						在出土器			
94	鏡水菟飼原 A 遺跡	那覇市鏡水	後期前半、後期後半	-	-	-	浜屋原式、くびれ平底	-	○
95	那覇原遺跡	那覇市字安次嶺	後期後半	-	-	-	フェンサ下層式主体、アカジャンガー式	-	△
96	ガジャンピラ丘陵遺跡 (83)	那覇市字小椋	後期後半	-	-	-	フェンサ下層式主体	-	△
	ガジャンピラ丘陵遺跡 (97)	那覇市字小椋	後期前半	-	-	-	フェンサ下層式主体	-	△
97	大嶺村跡 (12)	那覇市字大嶺	後期前半?	-	-	-	浜屋原式、大当原式	-	-
	大嶺村跡 (19)	那覇市字大嶺	後期前半、後半	-	-	-	浜屋原式、フェンサ下層式?	-	○
98	伊良波東遺跡	豊見城市字伊良波先祖原	後期後半	-	-	-	フェンサ下層式主体	-	△
99	与那城貝塚	西原町字小波津	後期後半	-	-	-	フェンサ下層式主体	-	△
100	我謝遺跡	西原町字我謝	後期後半	-	-	-	フェンサ下層式主体	開元通寶	△
101	シマシヤーマ貝塚	南城市知念字久高	後期前半	-	-	-	大当原式主体	-	△
102	垣花遺跡	南城市玉城字垣花	後期後半	-	-	-	フェンサ下層式主体	-	△
103	新原貝塚	南城市玉城字百名	後期中頃～後期後半	-	-	-	大当原式新～アカジャンガー式主体	○	△
104	米須貝塚	糸満市字米須東当原	後期中頃～後期後半	-	-	兼久式類似	大当原式新、アカジャンガー式主体	○	△
105	米須第 2 貝塚	糸満市字米須東当原	後期後半	-	-	-	くびれ平底	-	△
106	大度貝塚 (98)	糸満市字大度当原	後期前半	-	-	-	大当原式古段階主体	-	△
	大度貝塚 (03)	糸満市字大度当原	後期前半	-	-	弥生系	浜屋原式主体	-	△
107	真栄里貝塚 (67 調査)	糸満市字真栄里	後期後半	-	-	-	フェンサ下層式主体	-	△
	真栄里貝塚 (96)	糸満市字真栄里	後期後半	-	-	-	アカジャンガー式、フェンサ下層式主体	-	△
108	真栄里兼久原遺跡	糸満市字真栄里小字兼久原	後期後半	-	-	-	くびれ平底	-	△
109	川田原貝塚	糸満市字真栄里	後期前半	-	-	-	大当原式主体	-	△
110	フェンサ城貝塚 (69)	糸満市字名城小字名城原	後期後半	-	-	-	フェンサ下層式主体、布目痕土器	-	△
	フェンサ城貝塚 (18)	糸満市字名城小字名城原	後期前半、後半	-	-	-	フェンサ下層式主体、大当原式	-	△
111	渡嘉志久貝塚 (85)	渡嘉敷村字渡嘉志久	後期後半	-	-	-	くびれ平底	-	△
	渡嘉志久貝塚 (16)	渡嘉敷村字渡嘉志久	後期前半	-	-	-	大当原式、くびれ平底	-	○
112	阿波連浦貝塚 (99)	渡嘉敷村字阿波連	後期前半	-	-	-	阿波連浦下層式→浜屋原式新段階	-	△
	阿波連浦貝塚 (16)	渡嘉敷村字阿波連	後期前半	-	-	-	阿波連浦下層式～大当原式	-	○
113	船越原遺跡 (16)	渡嘉敷村字船越原	後期前半	-	-	-	浜屋原式	-	○
114	大和馬遺物散布地	座間味村字阿佐	後期後半	-	-	-	くびれ平底	-	○

No.	遺跡名	所在地	時期	在土器			貝付類似 文様	備考	実見
				畿入土器および模倣・類似土器	九州本土の型式	大隅諸島の型式			
115	阿嘉貝塚	座間味村阿嘉	後期前半	-	-	-	浜屋原式、大当原式	-	○
116	ウフタタ遺物散布地	座間味村安室島	後期前半	-	-	-	大当原式	-	○
117	松尾原洞穴遺跡	栗国村字西	後期前半	-	-	-	大当原式主体	-	△
118	浜崎原遺跡	栗国村字浜	後期後半	-	-	奄美系?	フェンサ下層式	-	△
119	大道原遺跡	渡名喜村字大道原	後期前半	-	-	-	大当原式主体	-	○
120	西底原遺跡	渡名喜村字西底原	後期後半	-	-	-	フェンサ下層式主体	-	○
121	北原貝塚 (73調査)	久米島町具志川字北原	後期中頃～後半	-	-	上能野式類似	大当原式～アカジャンガー式 主体	○	広田上層タイプ貝符、 開元通寶
	北原貝塚 (95)	久米島町具志川字北原	後期中頃～後半	-	-	-	浜屋原式・大当原式主体、ア カジャンガー式	-	○
122	大原第二貝塚B地点	久米島町具志川字大原	後期前半	入来～山ノ口式壺	-	-	浜屋原式主体	-	五銖銭
	大原第二貝塚C地点 (80)	久米島町具志川字大原	後期前半	-	-	-	浜屋原式～大当原式	-	△
	大原第二貝塚C地点 (00)	久米島町具志川字大原	後期中頃～後半	-	-	-	大当原式～アカジャンガー式	-	△
123	下地原貝塚	久米島町具志川字下地原	後期後半	-	-	-	フェンサ下層式	-	△
124	バケーマシ遺跡	久米島町具志川字ハンタ原	後期後半	-	-	-	フェンサ下層段階?	-	△
125	清水貝塚	久米島町具志川字島清水原	後期前半～中頃	-	-	-	スセム式類似、兼久 式類似	○	広田下層タイプ貝 符・広田上層タイプ 貝符
126	泊貝塚 (75)	久米島町仲里字泊	後期前半	-	-	-	浜屋原式～大当原式か	-	△
	泊貝塚 (96)	久米島町仲里字泊	後期前半	-	-	-	浜屋原式～大当原式か	-	△
127	謝名堂貝塚 (64)	久米島町仲里字謝名堂	後期前半～後半	-	-	-	尖底・くびれ平底、アカジャ ンガー式	-	△
	謝名堂貝塚 (75)	久米島町仲里字謝名堂	後期前半～後半	-	-	-	尖底・くびれ平底	-	△
	謝名堂貝塚 (96)	久米島町仲里字謝名堂	後期前半	-	-	-	浜屋原式～大当原式か	-	△
128	銭田貝塚	久米島町仲里字銭田西銭田原	後期後半	-	-	-	くびれ平底	-	△

・時期区分は沖縄貝塚時代後期中で、尖底土器段階を後期前半、平底土器段階を後期後半とし、尖底～平底過渡期段階を中頃とした。
 ・「実見」の中で、「○」は実見したもの、「△」は実見していないが報告書中に図・写真が掲載されているもの、「-」は報告書記載によるもの
 ・参考文献は遺跡番号に対応する。
 ・本表は、以下の文献を参考に作成した。

宮城弘樹 2000 「貝塚時代後期土器の研究 (II) - 後期遺跡の集成 -」 『南島考古』 第19号、pp.45-62、沖縄考古学会
 安座間充 2019 「沖縄出土土器・類似土器 - 付 アカジャンガー式土器出土遺跡集成 -」 『中山清美と奄美学 - 中山清美氏追悼論集 -』、pp.111-121、奄美考古学会

参考文献

- 1 沖縄県教育委員会1989 『宇佐浜遺跡発掘調査報告』 沖縄県文化財調査報告書第33集
- 2 沖縄大学沖縄学生文化協会1980 『郷土』 第18号
 国頭村教育委員会1987 「国頭村の遺跡 - 詳細分布調査報告 -」 国頭村文化財調査報告書第2集
 国頭村教育委員会2015 「村内遺跡詳細分布調査報告書 (I) - 平成24～26年度調査報告 -」 国頭村文化財調査報告書第4集

- 3 国頭村教育委員会1987「国頭村の遺跡－詳細分布調査報告－」国頭村文化財調査報告書第2集
- 国頭村教育委員会2015「村内遺跡詳細分布調査報告書(1)－平成24～26年度調査報告－」国頭村文化財調査報告書第4集
- 4 国頭村教育委員会2019「村内遺跡詳細分布調査報告書(2)－平成26～28年度調査報告－」国頭村文化財調査報告書第5集
- 5 大宜味村教育委員会1979「喜如嘉貝塚発掘調査報告書」大宜味村文化財調査報告書 第1集
- 沖縄県教育委員会1994「喜如嘉貝塚－国道58号改修工事に係る緊急発掘調査報告－」沖縄県文化財調査報告書第114集
- 6 大宜味村教育委員会1984「大宜味村の遺跡 詳細分布調査報告書」大宜味村文化財調査報告書 第2集
- 7 No.6と同じ
- 8 伊平屋村教育委員会2000「伊平屋村の遺跡－村内遺跡詳細分布調査報告書－」伊平屋村文化財調査報告書第3集
- 9 伊平屋村教育委員会1986「東原貝塚ほか発掘調査報告(圃場整備事業に伴う発掘調査)」伊平屋村文化財調査報告書 第2集
- 伊平屋村教育委員会1990「伊平屋村・東原貝塚発掘調査報告書」伊平屋村文化財調査報告書第3集
- 10 伊平屋村教育委員会1986「東原貝塚ほか発掘調査報告(圃場整備事業に伴う発掘調査)」伊平屋村文化財調査報告書 第2集
- 11 沖縄大学沖縄学生文化協会1978「郷土」第16号
- 12 沖縄大学沖縄学生文化協会1978「郷土」第16号
- 13 伊是名村教育委員会1977「具志川島遺跡群 第一次発掘調査報告書」伊是名村文化財調査報告書 第1集
- 伊是名村教育委員会1978「具志川島遺跡群 第二次発掘調査報告書」伊是名村文化財調査報告書 第2集
- 伊是名村教育委員会1983「具志川島遺跡群」伊是名村文化財調査報告書 第9集
- 14 友寄英一郎1978「具志原貝塚のほなし」『伊江島具志原貝塚』琉球大学法文学部紀要 社会篇第12号、pp.37-76、琉球大学法文学部
- 沖縄県教育委員会1985「伊江島具志原貝塚の概要」沖縄県文化財調査報告書第62集
- 沖縄県教育委員会1997「伊江島具志原貝塚発掘調査報告」沖縄県文化財調査報告書第130集
- 15 沖縄県教育委員会1983「伊江島阿良貝塚発掘調査報告」沖縄県文化財調査報告書第48集
- 伊江村教育委員会1989「伊江島の遺跡 遺跡詳細分布調査報告」伊江村文化財調査報告書第13集
- 16 伊江村教育委員会1980「浜崎貝塚」伊江村文化財調査報告書第9集
- 17 伊江村教育委員会1999「伊江島の遺跡 遺跡詳細分布調査報告」伊江村文化財調査報告書第13集
- 木下尚子2013「ナガラ原東貝塚の研究 5世紀から7世紀前半の沖縄伊江島」熊本大学文学部
- 18 伊江村教育委員会1979「伊江島ナガラ原西貝塚緊急発掘調査報告書」伊江村文化財調査報告書第8集
- 19 伊江村教育委員会2017「カヤ原遺跡A地点 ナガラ原東貝塚 ナガラ原第三貝塚－県営農地保全整備事業(川平第2地区)に係る埋蔵文化財発掘調査－」伊江村文化財調査報告書第14集
- 20 No.19と同じ
- 21 多和田真淳1975「今帰仁村の先史時代」『今帰仁村史』、pp.3-15、今帰仁村史編纂委員会
- 多和田真淳・知念勇1984「多和田真淳調査収集の考古資料(Ⅲ)」『沖縄県立博物館紀要』10
- 22 今帰仁村教育委員会1977「渡喜仁浜原貝塚調査報告書[1]」今帰仁村文化財調査報告書第1集
- 23 多和田真淳1975「今帰仁村の先史時代」『今帰仁村史』、pp.3-15、今帰仁村史編纂委員会
- 24 本部町教育委員会1986「具志堅貝塚 発掘調査報告」本部町文化財調査報告書第3集
- 25 本部町教育委員会1986「備瀬貝塚－下水道工事に伴う緊急発掘調査報告書－」本部町文化財調査報告書第4集
- 26 本部町教育委員会2005「瀬底島・アーンチの上貝塚 発掘調査報告書」本部町文化財調査報告書 第8集
- 27 本部町教育委員会2009「瀬底島・アーンチの上貝塚－個人住宅建設に伴う緊急発掘調査報告書－」本部町文化財調査報告書 第9集
- 本部町教育委員会1977「兼久原貝塚発掘調査報告」本部町文化財調査報告書第1集
- 28 沖縄県立博物館1976「特別展 多和田真淳氏所蔵考古資料」
- 29 名護市教育委員会1982「名護市の遺跡(2) 分布調査報告」名護市文化財調査報告書－4
- 30 名護市教育委員会2005「大堂原貝塚－古宇利屋我地線建設に伴う緊急発掘調査報告書－」名護市文化財調査報告書第17集
- 31 名護市教育委員会2007「屋部前田原貝塚」名護市文化財調査報告書第18集
- 32 沖縄県教育委員会1985「名護貝塚－県道116号線側溝改修工事に伴う緊急発掘調査報告－」沖縄県文化財調査報告書第63集
- 名護市教育委員会1985「名護貝塚緊急発掘調査報告」名護市文化財調査報告－7
- 33 名護市教育委員会1989「溝原貝塚－名護博物館収蔵庫建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報－」名護市文化財調査報告－9
- 名護市教育委員会2015「溝原貝塚2－市道山手線街路事業に伴う溝原貝塚緊急発掘調査－」名護市文化財調査報告－24

- 34 名護市教育委員会1996 『節瀬名貝塚－ブセナリゾーン開発に伴う緊急発掘調査報告－』
 名護市教育委員会2001 『節瀬名貝塚－国道58号・部瀬名線道路線形改良事業に伴う緊急発掘調査報告－』 名護市文化財調査報告書-14
- 35 名護市教育委員会1980 『久志貝塚緊急発掘調査概報』 名護市文化財調査報告書-2
- 36 宜野座村教育委員会1999 『前原遺跡－県道漢那松田線道路整備工事に伴う発掘調査報告書－』 宜野座村乃文化財14集
- 37 宜野座村教育委員会2005 『前原貝塚－村道サ－原線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』 宜野座村乃文化財17集
- 38 宜野座村教育委員会1990 『漢那ウエヌアタイ遺跡－近隣緑地口線建設に伴う発掘調査報告書－』 宜野座村乃文化財9集
- 39 金武町教育委員会2010 『町内埋蔵文化財予備調査報告書』 宜野座村乃文化財9集
- 40 上原静ほか2011 『金武町池原遺跡発掘調査概報』 『沖国大考古』 第15号、pp.24-85、沖縄国際大学考古学研究室
- 41 高宮廣衛ほか1995 『恩納村伊武部貝塚』 『沖国大考古』 第11号、pp.127-142、沖縄国際大学考古学研究室
- 42 高宮廣衛1969 『恩納村熱田貝塚調査概報』 『沖大論叢』 第九巻第一号、pp.323-365、沖縄大学
- 43 沖縄県教育委員会1994 『久良波貝塚－県道6号線拡幅工事に伴う緊急発掘調査－』 沖縄県文化財調査報告書 第23集
- 44 多和田真淳・知念勇1984 『多和田真淳調査収集の考古資料(Ⅲ)』 『沖縄県立博物館紀要』 10
- 45 高宮廣衛1990 『昆布貝塚表層の粗隆文土器』 『九州上代文化論集』 乙益重隆先生古稀記念論文集、pp.117-138、乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会
- 46 具志川市教育委員会1980 『宇堅貝塚群・アカジャンガン遺跡調査報告』
- 47 高宮廣衛1960 『具志川村アカジャンガン遺跡調査概要』 『一九六〇年度文化財要覧』、pp.209-236、琉球政府文化財保護委員会
- 48 上原静2004 『沖国大考古』 第13号 具志川市アカジャンガン貝塚発掘調査概報、沖縄国際大学考古学研究室
- 49 具志川市教育委員会1987 『前原遺跡－石灰岩採掘に伴う緊急発掘調査報告－』
- 50 うるま市教育委員会2006 『具志川グスクI－発掘調査報告概報－』 うるま市文化財調査報告書第4集
- 51 土肥直美2008 『具志川グスク崖下地区の発掘調査』
- 52 具志川市教育委員会1988 『喜屋武グスク公園計画に係る遺跡詳細範囲確認調査概報－』
- 53 沖縄県教育委員会1996 『平敷屋トウハル遺跡－ホワイトビーチ地区内倉庫建設工事に伴う緊急発掘調査報告書－』 沖縄県文化財調査報告書第125集
- 54 勝連町教育委員会2004 『町内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 平成13・14年度 勝連の文化財第22集
- 55 うるま市教育委員会2014 『平敷屋トウハル遺跡－ホワイトビーチ地区燃料施設建設工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書－』 うるま市文化財調査報告書第22集
- 56 高元政秀1961 『津堅貝塚発掘概報』 『一九六一年度文化財要覧』、pp.315-331、琉球政府文化財保護委員会
- 57 勝連町教育委員会2001 『町内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 平成11・12年度 勝連の文化財第21集
- 58 勝連町教育委員会2004 『町内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 平成13・14年度 勝連の文化財第22集
- 59 勝連町教育委員会2005 『津堅貝塚－中城港湾（アギ港湾）港湾改修事業に伴う緊急発掘調査報告書－』 勝連町の文化財第23集
- 60 金武正紀ほか1974 『津堅第二貝塚緊急発掘調査報告』 『昭和49年度文化財要覧』、pp.49-74、沖縄県教育委員会
- 61 勝連町教育委員会2001 『町内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 平成11・12年度 勝連の文化財第21集
- 62 多和田真淳ほか1965 『勝連城跡第一発掘調査報告書』 『琉球文化財調査報告書』、pp.1-87、琉球政府文化財保護委員会
- 63 うるま市教育委員会2011 『勝連城跡－四の曲輪北地区発掘調査報告書－』 うるま市文化財調査報告書第14集
- 64 うるま市教育委員会2014 『勝連城跡－四の曲輪西地区発掘調査報告書－』 うるま市文化財調査報告書第23集
- 65 高宮廣衛ほか1966 『勝連城跡第二発掘調査報告書』 『琉球文化財調査報告書』、pp.1-131、琉球政府文化財保護委員会
- 66 うるま市教育委員会2013 『桃原貝塚－市道サ那城26号線道路整備事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書－』 うるま市文化財調査報告書第18集
- 67 沖縄市教育委員会2008 『屋取集落に生きたる－池原上田原・仕明原遺跡発掘調査報告書－』 沖縄市文化財調査報告書 第34集
- 68 沖縄市教育委員会1997 『室川貝塚－沖縄市総合庁舎建設に伴う崖下地区記録保存発掘調査の報告書－』 沖縄市文化財調査報告書 第20集
- 69 沖縄国際大学考古学研究室1977 『高嶺の考古』 創刊号
- 70 仲宗根求・小原裕也2006 『平成17年度浜屋原貝塚B地点発掘調査の概報』 『説谷村歴史民俗資料館紀要』 第30号、pp.53-65、説谷村歴史民俗資料館
- 71 説谷村教育委員会2013 『説谷村埋蔵文化財発掘調査報告書』 平成21年度～平成23年度村内遺跡発掘調査等』 説谷村文化財調査報告書 第14集
- 72 高宮廣衛ほか1983 『説谷村大当原貝塚発掘調査概報』 『説谷村歴史民俗資料館紀要』 第17号、pp.1-47、説谷村歴史民俗資料館
- 73 仲宗根求・西銘章・宮城弘樹・安座間充2001 『説谷村出土の弥生土器・弥生系土器について』 『説谷村立歴史民俗資料館紀要』 第25号、pp.59-79、説谷村歴史民俗資料館

- 64 No.63と同じ
- 65 No.63と同じ
- 66 読谷村教育委員会1990 『吹出原遺跡 個人住宅建築に伴う緊急発掘調査報告書』読谷村文化財調査報告書第9集
- 67 読谷村教育委員会1979 『読谷村の埋蔵文化財 遺跡分布調査報告書』読谷村文化財調査報告書第7集
- 68 読谷村教育委員会1978 『本郷原 沖繩県読谷村渡具知木綿原遺跡発掘調査報告書』読谷村文化財調査報告書第5集
- 69 北谷町教育委員会2007 『伊礼原遺跡(国指定外) 伊礼原A遺跡ほか発掘調査』北谷町文化財調査報告書第26集
- 70 北谷町教育委員会2014 『伊礼原遺跡(国指定外) 伊礼原A遺跡-桑江伊平土地地区画整理事業に伴う発掘調査報告書第36集
- 71 北谷町教育委員会1989 『伊礼原遺跡(国指定外) モスカラ一地区雨水排水施設工事に係る発掘調査』北谷町文化財調査報告書第8集
- 72 北谷町教育委員会2008 『伊礼原B遺跡-キャンパス桑江北側返還に伴う発掘調査事業(平成10～13年度)-』北谷町文化財調査報告書第28集
- 73 北谷町教育委員会2013 『伊礼原D遺跡-桑江伊平土地地区画整理事業に伴う発掘調査事業(平成18、19年度)-』北谷町文化財調査報告書第35集
- 74 北谷町教育委員会2017 『伊礼原D遺跡-桑江伊平土地地区画整理事業に伴う発掘調査事業(平成18年度)-』北谷町文化財調査報告書第41集
- 75 北谷町教育委員会2010 『伊礼原E遺跡-キャンパス桑江北側返還に伴う発掘調査(平成16・17年度)-』北谷町文化財調査報告書第31集
- 76 北谷町教育委員会2015 『平安山原B遺跡-キャンパス桑江北側返還に伴う発掘調査事業(平成14・15年度)-』北谷町文化財調査報告書第29集
- 77 北谷町教育委員会2016 『平安山原B・C遺跡』北谷町文化財調査報告書第40集
- 78 北谷町教育委員会2009 『小堀原遺跡-キャンパス桑江北側返還に伴う発掘調査事業(平成11～13年度)』北谷町文化財調査報告書第30集
- 79 北谷町教育委員会2012 『小堀原遺跡-桑江伊平土地地区画整理事業に伴う発掘調査事業(平成17～20年度)-』北谷町文化財調査報告書第34集
- 80 北谷町教育委員会2010 『北谷城-伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業-』北谷町文化財調査報告書第32集
- 81 北谷町教育委員会1993 『玉代勢原遺跡-キャンパス瑞慶覧建設工事に係る埋蔵文化財調査業務報告書-』北谷町文化財調査報告書第13集
- 82 沖繩県立埋蔵文化財センター2006 『新城下原第二遺跡-キャンパス瑞慶覧内整備工場建設に係る緊急発掘調査-』沖繩県立埋蔵文化財センター調査報告書 第35集
- 83 宜野湾市教育委員会1989 『土に埋もれた宜野湾』宜野湾市文化財調査報告書第10集
- 84 No.80と同じ
- 85 No.80と同じ
- 86 No.80と同じ
- 87 高宮廣衛ほか1989 『沖国大考古 10号 宜野湾市宇地泊兼久原遺跡発掘調査報告』沖繩国際大学文学部考古学研究室
- 88 浦添市教育委員会1988 『チナフナー-河穴遺跡 範囲確認調査報告書』浦添市文化財調査報告書第12集
- 89 沖繩県教育委員会1985 『牧港貝塚-真久原遺跡-県道153号線バイパス工事に伴う発掘調査報告書-』沖繩県文化財調査報告書第65集
- 90 浦添市教育委員会1980 『うらそえの文化財-遺跡分布調査報告-』浦添市文化財調査報告書第1集
- 91 浦添市教育委員会1993 『竈門貝塚B-牧港補給地区開発工事に伴う緊急発掘調査報告書IV-』浦添市文化財調査報告書第21集
- 92 浦添市教育委員会1991 『竈門貝塚A-牧港補給地区開発工事に伴う緊急発掘調査報告書II-』浦添市文化財調査報告書第19集
- 93 浦添市教育委員会1990 『城間古墓群-牧港補給地区開発工事に伴う緊急発掘調査報告書-』浦添市文化財調査報告書
- 94 那覇市教育委員会1995 『安謝東原遺跡-那覇新都心土地地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告II-』那覇市文化財調査報告書第29集
- 95 那覇市教育委員会2000 『安謝東原遺跡 旧天久村古井戸遺跡-那覇新都心土地地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅷ-』那覇市文化財調査報告書第45集
- 96 那覇市教育委員会2012 『那覇市内遺跡V-崎樋川貝塚B-』那覇市文化財調査報告書第94集
- 97 沖繩県立埋蔵文化財センター2011 『鏡水窪隅原A遺跡-那覇西道路建設に伴う発掘調査報告書-』沖繩県立埋蔵文化財センター調査報告書第57集
- 98 那覇市教育委員会1996 『那覇原遺跡-那覇空港ターミナル用造成工事に伴う緊急発掘調査報告-』那覇市文化財調査報告書第30集
- 99 那覇市教育委員会1983 『ガジャンピラ丘陵遺跡-ガジャンピラ丘陵遺跡発掘調査報告書』那覇市文化財調査報告書第7集
- 100 那覇市教育委員会1997 『ガジャンピラ丘陵遺跡-小椋金城土地地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告-』那覇市文化財調査報告書第36集
- 101 那覇市教育委員会2012 『大嶺村跡-那覇空港消防車庫新築工事に伴う緊急発掘調査報告-』那覇市文化財調査報告書第89集
- 102 沖繩県立埋蔵文化財センター2019 『大嶺村跡-那覇空港事務所管轄庁舎新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』沖繩県立埋蔵文化財センター調査報告書第101集
- 103 豊見城市教育委員会1987 『伊良波東遺跡-伊良波小・中学校建設工事に伴う緊急発掘調査報告-』豊見城市文化財調査報告書第2集
- 104 西原町教育委員会1980 『与那城貝塚』西原町文化財調査報告書第2集
- 105 西原町教育委員会1983 『我謝遺跡-分譲宅地造成に係る緊急発掘調査-』西原町文化財調査報告書第5集
- 106 新垣孫一・川平朝申・国分直一1957 『久高島シマシマ貝塚の調査概報』一九五七年度文化財要覧、pp74-91、琉球政府文化財保護委員会
- 107 南城市教育委員会2008 『垣花遺跡-個人住宅建築にかかると緊急発掘調査報告-』沖繩県南城市文化財調査報告書 第3集

- 103 南城市教育委員会2011『市内遺跡発掘調査報告書－新原貝塚・知名グスク－』南城市文化財調査報告書第10集
- 104 糸満市教育委員会1985『米須貝塚－範圍確認調査報告書－』糸満市文化財調査報告書第5集
- 105 糸満市教育委員会2003『大度貝塚ほか発掘調査報告』糸満市文化財調査報告書第19集
- 106 糸満市教育委員会1998『大度貝塚－国営沖繩本島南部農業水利事業の米須地下ダム建設工事に伴う緊急発掘調査－』糸満市文化財調査報告書第14集
- 糸満市教育委員会2003『大度貝塚ほか発掘調査報告』糸満市文化財調査報告書第19集
- 107 糸満市教育委員会1999『真栄里貝塚 発掘調査報告書』糸満市文化財調査報告書第16集
- 高宮廣衛ほか1983『糸満市真栄里貝塚発掘調査概報－石器篇－』第13号、pp.35-62、沖繩考古学会
- 高宮廣衛1972『糸満市真栄里貝塚』日本考古学年報 20 昭和42年度、pp.125-126、日本考古学協会
- 糸満市教育委員会1996『真栄里貝塚ほか 発掘調査報告書』糸満市文化財調査報告書第12集
- 108 糸満市教育委員会2010『真栄里兼久原遺跡－一般国道331号糸満道路建設工事に伴う緊急発掘調査－』糸満市文化財調査報告書第24集
- 109 糸満市教育委員会1986『川田原貝塚－範圍確認調査報告書－』糸満市文化財調査報告書第7集
- 110 友寄英一郎・高元政秀1969『フェンサ城貝塚調査概報』琉球大学法文学部紀要 社会学篇第13号、pp.55-94、琉球大学法文学部
- 111 新里貴之2018『沖繩 フェンサ城貝塚の研究 2009～2011年度発掘調査』鹿児島大学国際島嶼教育研究センター
- 多和田真淳・知念勇1965『多和田真淳調査収集の考古資料 (IV)』『沖繩県立博物館紀要』第11号、pp.1-14、沖繩県立博物館
- 112 高宮廣衛ほか1999『沖国大考古 第12号 波嘉敷村阿波連浦貝塚発掘調査報告』沖繩国際大学文学部考古学研究室
- 沖繩県立埋蔵文化財センター2016『慶良間諸島の遺跡－平成22～27年度県内遺跡詳細分布調査報告書－』沖繩県立埋蔵文化財センター調査報告書第81集
- 113 沖繩県立埋蔵文化財センター2016『慶良間諸島の遺跡－平成22～27年度県内遺跡詳細分布調査報告書－』沖繩県立埋蔵文化財センター調査報告書第81集
- 114 No.113と同じ
- 115 No.113と同じ
- 116 No.113と同じ
- 117 栗国村教育委員会1997『栗国村の遺跡－遺跡詳細分布調査報告書－』栗国村文化財調査報告書第1集
- 118 栗国村教育委員会2000『西御願貝塚ほか発掘調査報告書 西御願貝塚 浜崎原遺跡 東遺物散布地』栗国村文化財調査報告書第2集
- 119 渡名喜村教育委員会1990『渡名喜村の遺跡Ⅱ－圃場整備事業に伴う遺跡確認調査－』
- 120 No.119と同じ
- 121 沖繩県教育委員会1992『新空港・空港拡張建設計画予定地内の遺跡－新石垣空港・久米島空港拡張建設計画予定地内の分布調査報告書－』沖繩県文化財調査報告書第106集
- 沖繩県教育委員会1995『北原貝塚 発掘調査報告書』沖繩県文化財調査報告書第123集
- 122 盛本勲 1994『久米島大原第二貝塚B地点の発掘調査』『考古学ジャーナル』373、pp.30-33、ニューサイエンス社
- 沖繩県教育委員会1980『大原－久米島大原貝塚群発掘調査報告－』沖繩県文化財調査報告書第32集
- 具志川村教育委員会2000『大原第2貝塚 (C地点) 発掘調査報告書～個人住宅建設に伴う緊急発掘調査～』具志川村文化財調査報告書第3集
- 123 具志川村教育委員会1994『具志川村の遺跡－詳細遺跡分布調査報告書－』具志川村文化財調査報告書第2集
- 124 No.123と同じ
- 125 具志川村教育委員会1989『清水貝塚 発掘調査報告書』具志川村文化財調査報告書第1集
- 126 沖繩大学沖繩学生文化協会1975『郷土』第14号
- 仲里村教育委員会1996『仲里村の遺跡－詳細分布調査報告書第1集
- 友寄英一郎1964『久米島謝名堂貝塚発掘概報』『琉球大学文学部紀要』社会学篇第8号、pp.1-16、琉球大学文学部
- 127 沖繩大学沖繩学生文化協会1975『郷土』第14号
- 仲里村教育委員会1996『仲里村の遺跡－詳細分布調査報告書第1集
- 仲里村教育委員会1996『仲里村の遺跡－詳細分布調査報告書第1集
- 128 仲里村教育委員会1996『仲里村の遺跡－詳細分布調査報告書第1集

第3章 広田遺跡出土貝製品等の新資料

－九州大学総合研究博物館所蔵資料の報告－

山野ケン陽次郎

YAMANO Kenyojiro

熊本大学埋蔵文化財調査センター

Kumamoto University Research Center for Buried Cultural Properties

1. 経緯と調査の目的

1.1 遺物発見の経緯

2017年11月17日、九州大学総合博物館において熊本大学の木下尚子により、「E33」と記された鹿児島県熊毛郡南種子町広田遺跡の考古資料の入った収納箱が確認された。箱中には貝製品や骨製品、土器、ガラス玉などの遺物が含まれており、1950年代の広田遺跡の発掘調査の際に取り上げられた資料の一部と思われる。とりわけ貝製品の内容は充実しており、2003年に刊行された広田遺跡の報告書に記載のない資料が一部含まれると想定された（桑原編2003）。加えて、高椋浩史（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム）、米元史織（九州大学総合博物館）両名による2017～2018年度における広田遺跡出土人骨の整理作業において、人骨の入った箱や人骨に付着した砂の中から貝製品が複数点発見された。貝符班担当の山野ケン陽次郎は木下より本件に関する連絡を受けて、本資料について九州大学総合博物館の米元史織と調整し、現地での整理作業を実施する運びとなった。調査期間は2018年から2019年までの3回、6日間である。調査日程および整理作業従事者は以下の通りである。

- ・2018年1月9、10日：山野、石堂和博（南種子町教育委員会）
- ・2019年7月31日、8月1日：山野、木下尚子（熊本大学人文社会科学研究部）、西野望（矢掛町教育委員会）、渡邊実緒香（熊本大学文学部歴史学科）
- ・2019年10月30、31日：山野、木下

1.2 調査の目的と整理作業

本調査の目的は、遺物の内容を整理して各遺物の出所を明らかにし、広田遺跡に関する新たな考古学的データを提供することである。E33の箱に収納された遺物は、茶封筒やビニール袋に入っており、遺物自体には注記がないものの、多くの場合、遺物カードや封筒表面には遺物に関する情報が記載されていた。また、2017～2018年度の人骨の整理作業の際、人骨などに付着した砂中から得られた貝製品等遺物についてはその人骨あるいは人骨の入った箱に関する情報を記載した。これにより各資料がどの遺構や調査区に伴うかをおおよそ判断することができた¹⁾。遺物の多くは砂が付着した状態であり、一部の資料については九州大学総合博物館の協力を得て洗浄を実施した²⁾。遺物の内容は貝製品、獣牙製垂飾品、土器、鉄器、ガラス玉、自然貝類、魚骨、人骨片などである。本報告ではこのうち、貝製品、骨製品、ガラス玉について概要を報告する。土器については石堂和博の報告に譲りたい。

整理作業では、遺物が入った各袋あるいは封筒に任意で整理番号を付し、内容を精査、一覧表を作成した。そして、これらを貝製品ごとに分類し、整理番号シールを付したチャック付クリアパックに封入した。次に全ての遺物についてスケールの入った俯瞰写真撮影を実施し、貝符や貝輪など重要性の高い遺物については可能な限り実測図を作成した。最後に本資料が未報告資料であるか、または2003年の報告書刊行時の未確認遺物に含まれるかを確認した。報告する資料は2019年3月時点では九州大学総合博物館にて保管されている。

表 1 九州大学総合博物館保管広田遺跡関連資料一覧表

報告 No.	整理 No.	帰属する遺構等	貝符	竜佩状貝製品	二孔板状貝製品	貝輪			玉類		イモガイ製小玉				ツノガイ		備考	袋・カードの記載		
						オオツタノハ	ゴホウラ	貝種不明	マクラガイ	ノシガイ	フトコロガイ	I 類	II 類	III 類	不明	細型			太型	
1	34	A5号人骨											12		16	2		C166 A-5		
2	37	A7号人骨?				1					1	1	4					L-42 広田7.24 A-7 上層人骨		
3	33	A8号人骨									2		36		10	1	人骨片1点	C168 A-8 貝製品		
4	20	A地区人骨							22		1		12		25	6	自然貝1点	広田A区人骨 9・3 114図貝玉		
5	41	A4地区									1						自然?	L-42 広田 2018.01.09 8.16 A4 No.52 貝器 ○		
6	45	A4地区							1			1	1					貝(加工品) A4 No.4 C164		
7	42	A7地区							1				3	15				L-42 広田 A-7 集骨層より		
8	6	B地区上層人骨					1										広田上層型	広田 1B-6 No.28		
9	7	B1地区				3											未成品	8.21. B-1 No.42. 貝輪3個		
10~13	22	B7地区							5	4	1	20	30	99	1		自然貝18点	広田 B-7		
13	2	B地区					6	1									被熱	広田B区33年の取りこぼし 7.23,'59		
14	19	Bトレンチ										2	1				自然貝9点	BトレンチB6or B・N2orB中央		
15	39	D I 地区1号人骨											1					C195 広田 (D-I-1) 1.25 Dt.1B		
16	40	D I 地区1号人骨										1					マガキガイ	C195 広田 (D-I-1) 箱奥側		
17	32	D I 地区3号人骨												102		2	1	自然貝2点	C197 D-I-3 伴出小玉	
18	23	D I 地区4号人骨										2	8	216	6	37	3	人骨片4点 自然貝4点	D-I-4伴出小玉	
19	17	D I 地区5号人骨							20		4					31		獣牙製垂飾2点	D-I-5	
20	36	D II 地区3号人骨														4			C203 D-II-3 頭蓋骨片の袋	
21	1	D III 地区2号人骨									6	14	80			39			D-III-2	
22	11	D IV 地区1号人骨										1	3	19				自然貝1点	1959.8.15 広田D-IV-1及び伴出の小児骨	
23	14	D VII 地区1号人骨		1									1			1	6	ガラス玉1点	広田 D-VII-1	
24	24	D VIII 地区流砂中		1														広田上層式	広田 D-VIII- 流砂中	
25	43	D地区										1							C196 広田 (D-I B-2) D1B92 59.7.29 人骨集葬	
26	5	E II 地区1号人骨			3		1		4										広田EII-1	
27~30	8	E II 地区1号人骨				8												右1~4、左1~4と注記あり	広田 E-2-1 1959.8.27	
31	13	E III 地区1号人骨										1	1	9					59.8.23○ E-III-1号 貝製品	
32	21	E III 地区2号人骨								1		2	17	72	4	1		人骨片3点	59.8.25 E-III-2 伴出小玉	
33	9	E IV 地区1号人骨											1	6		1			広田E-IV-1	
34	3	EX 地区1号人骨												8	1				広田E-X-1(頭辺内)	
35	16	EX 地区2号人骨											2	6		4			広田 E-X-2	
36	10	下層人骨																	広田下層No. 1	
37	15	第3人骨群					2	6										被熱、ゴホウラとオニニシ	3 群棺底焼骨7.22th	
38	4	S1号人骨?					18											人骨片1	B-S1 焼骨中・貝輪・貝小玉	
39	44	1Tr																	貝類3点	8.27 I Tre 埋砂
40	46	1Tr					2											カニ爪1点、人骨焼骨1点、ブダイ類1点	8.27 I Trench 内 埋砂中 C190 広田 (CD) 人骨片)	
41	12	不明					1											不明1	7G	
42	28	不明					1											広田上層型	E29広田 (118図) 9.10-11 118図 48 Tibia49 ulna	
43	29	不明					1												L-42 広田遺跡 A.7.	
44	30	不明										1							L-42 広田遺跡 8.16 AI○○ 1.30m(.50m)	
45	31	不明										1				1			C169 A29人骨AトレンチD側山側	
46	18	不明																アワビ片4点	袋に記載なしカードなし	
47	35	不明																自然貝3点	8.27 A3 土器No.20,21, 貝No.1, No.2 No.3	
48	47	不明																自然貝5点、魚骨3点	C190 (CD人骨片) ラベルなし	

※報告Noと本報告中の写真の数字は対応している。整理Noは整理した際に付した仮番号で、現状この番号のシールを各遺物袋に貼付している。

※イモガイのI~III類の分類は木下2003に従っている。その他名称は山野2012に準じた。

※「袋・カードの記載」には人骨ボックスからの遺物抽出時に書き足した記載も含まれている。

2. 遺物の概要報告

2.1 遺物の概要

整理作業によって、1166点の貝製品が発見された。内訳は貝符1点、竜佩状貝製品1点、二孔板状貝製品3点、未製品を含むオオツタノハ製貝輪12点、ゴホウラ製貝輪33点、オニニシを含む貝種不明の貝輪7点、マクラガイ科製玉類25点、ノシガイ製玉類33点、フトコロガイ製玉類5点、イモガイ科製小玉859点、ツノガイ科製管玉187点である。この他に獣牙製垂飾品2点、ガラス玉2点、自然貝類や魚骨類が得られている。遺物の入った袋や遺物カードの記載から判断し、帰属すると思われる遺構についてA区から順に袋ごとに表へ示した(表1)。貝製品のうち、貝符や竜佩状貝製品、貝輪などについて報告書掲載資料と比較したが、同一個体は確認できなかった。また、報告書に記載されてい

表2 実測遺物観察表

図No.	報告No.	製品名	素材	外径 (cm)		内径 (cm)		厚さ	備考
				縦	横	縦	横		
1	27右	貝輪	オオツタノハ	9.66	7.5	6.22	4.81	0.35	内面研磨顕著
2	30右	貝輪	オオツタノハ	9.75	7.66	6.13	4.78	0.3	内面研磨顕著
3	28左	貝輪	オオツタノハ	10.17	7.85	7.67	5.55	0.31	内面研磨顕著
4	28右	貝輪	オオツタノハ	10.1	7.6	6.95	5	0.52	内面研磨顕著
5	29右	貝輪	オオツタノハ	9.7	7.21	-	4.5	0.34	内面研磨なし
6	30右	貝輪	オオツタノハ	9.77	7.1	6.4	4.75	0.27	内面研磨なし
7	27左	貝輪	オオツタノハ	9.8	7.71	6.3	4.76	0.22	内面研磨なし
8	29左	貝輪	オオツタノハ	9.71	7.95	6.45	4.99	0.3	内面研磨なし
9	9右	貝輪未製品	オオツタノハ	9.4	7.12	3.89	2.75	0.29	外面研磨
10	9中	貝輪未製品	オオツタノハ	7.5	5.81	3.6	2.73	0.22	外面研磨
11	9左	貝輪未製品	オオツタノハ	6.56	4.76	3.62	2.5	0.21	研磨なし
12	42	貝輪	ゴホウラ	8.21	9.2	5.52	6.1	0.25	広田上層型
13	8	貝輪	ゴホウラ	9.5	9.6	4.75	5.4	0.75	広田上層型
図No.	報告No.	製品名	素材	縦・最大径	横・最小径	厚さ	備考		
14	24	貝符	イモガイ科	4.47	2.02	0.31	広田上層式半眼類		
15	23左	竜佩状貝製品	イモガイ科	3.55	1.91	0.36	列点文		
16	26上段左	二孔板状貝製品	イモガイ科?	1.7	2	0.21	列点文		
17	26上段中	二孔板状貝製品	イモガイ科?	-	2.05	0.24	列点文		
18	19右下	貝製玉類	マクラガイ?	1.62	0.85	0.8			
19	19右下	貝製玉類	マクラガイ?	2.08	0.95	0.85			
20	19右下	貝製玉類	サツマビナ	2.2	1.36	1.12	殻底研磨		
21	10右下	貝製玉類	サツマビナ	2.26	1.22	1	殻底研磨		
22	10左下	貝製玉類	サラサマクラ?	1.34	0.74	0.68	殻頂・殻底研磨		
23	10中央	貝製玉類	サツマビナ	1.9	1.62	1.31	殻頂・殻底研磨 列点文、施溝		
24	7右	貝製玉類	ノシガイ	1.42	0.85	0.52	背面研磨		
25	19左上	貝製玉類	フトコロガイ	1.38	0.8	0.65	背面研磨		
26	11上段	貝製小玉	イモガイ科	1.2	1.15	0.42	I類 自然孔		
27	11中段	貝製小玉	イモガイ科	1.01	0.86	0.35	II類 殻頂研磨		
28	11下段	貝製小玉	イモガイ科	0.69	0.68	0.2	III類 殻頂・殻底・側面研磨		
29	18	貝製管玉	マルツノガイ	2.2	0.31	-			
30	4右上	貝製管玉	ツノガイ科	3.6	0.82	-			
31	19上段	獣牙製垂飾品	イヌ歯	2.6	0.81	0.42	歯根に回転穿孔		
32	19上段	獣牙製垂飾品	イヌ歯	-	0.86	0.31	歯根に回転穿孔		
33	23上	ガラス玉	ガラス	0.42	0.42	0.35			

※貝製品の名称は山野2012に準じた。

る未確認遺物の一覧表とも照合したが（桑原編2003、pp.263～264）、明確な対応関係は認められなかった。先述のとおり遺物の多くは砂が付着した状態であり、1950年代に実施された発掘調査の際に埋葬人骨とともに取り上げられたと推定でき、未報告資料である可能性が高い。本報告では、貝符、竜佩状貝製品、二孔板状貝製品、貝輪など資料的重要性の高い遺物について実測を実施し、これに貝製玉類やイモガイ科製小玉、ツノガイ製小玉を加え、計33点の遺物を実測図化した（図1・2）。また、その他の資料については表と写真で報告することとした（表1・2、写真1～6）。

2.2 各遺物の報告

オオツタノハ製貝輪は計12点得られた。このうち「E-2-1」と記載された袋に入っていた8点の貝輪には、鉛筆で「右1～4」と「左1～4」と注記されており、EⅡ地区1号人骨に伴うものと思われる（図1-1～8）。しかし、2003年の報告書中ではEⅡ地区1号人骨について「左右の腕にはオオツタノハ貝輪（K394～401）を4点ずつ装着している。」と記載があり、本調査で発見されたものと異なる風化の著しいオオツタノハ製貝輪8点の実測図が掲載されている（桑原編2003、pp.212～213）。そこで出土状況写真を確認したところ、本人骨の腕に装着されたオオツタノハ製貝輪は、状態が良好かつ環幅の広い資料であることが判明した。とくに人骨右手に装着されたオオツタノハ製貝輪には2カ所の虫食いの痕跡が明瞭に写っており、この特徴が図1-2と酷似している（桑原編2003、PLATE81-1）。一方で報告書掲載の8点中にはこの特徴を持つ貝輪が認められない³⁾。以上の見解から、この8点のオオツタノハ製貝輪がEⅡ地区1号人骨に伴う資料であると判断した。オオツタノハ製貝輪はいずれも最長9.5cmを超える大型品で、中央に内径6cm以上の腕を通すための孔が設けられている。製品によって研磨の程度は様々だが、2のように原貝の放射肋がほとんど残らないものや、7や8のように研磨による稜線が明確に残るものが認められる。右腕に装着されていたと推測される1～4は、表面だけでなく内面にも研磨が行き届いており、左腕に装着された5～8の4点に内面への研磨が認められない点とは対照的である。これらは着装時に貝輪同士が密着するように意図的に研磨加工されたと考えるべきだろう。

9～11はオオツタノハ製貝輪の未製品である（図2-9～11）。「B-1」の記載があり、B1地区からの出土品かと思われるが、報告書によるとB地区からは他の調査区と異なり人骨の埋葬が検出されていないため、本資料が埋葬に伴うとは考えにくい（桑原編 ibid、p81）。広田遺跡ではオオツタノハ製貝輪は下層埋葬の人骨に装着された状態で、完成品が出土することが多い。これに対して本品は、孔が十分に広げられておらず、その内縁も研磨調整が施されていないため、腕輪としての機能を果たせていない。また、広田遺跡において埋葬に伴うオオツタノハ製貝輪の多くは、その外径が9cmを超えるが、10・11は外径が8cmに満たない点も特異といえる。加えて9・10は外面が研磨されており、孔を十分に広げきる以前に研磨調整をすでに終えている点は製作工程上やや妙である。本資料は広田遺跡では希少な粗加工品だが、こうした小型で中央に孔を設けたオオツタノハ製品は西之表市馬毛島埋葬址（西之表市教育委員会編1980、p23）や奄美市マツト遺跡（笠利町教育委員会編2006、p144）などでも出土しており、貝輪以外の機能を有していた可能性も想定しておきたい。

12・13はゴホウラ製貝輪である（図2-12・13）。いずれもゴホウラの背面部を利用しており、本原貝の特徴の一つである一大結節を残し、強調するよう整形されている。ただし、12は中央孔の形状が円形で、一大結節の突出も滑らかなのに対し、13は中央孔が隅丸形状で、一大結節の研磨整形も粗い。また、前者が内面も研磨しているのに対し、後者は螺塔部への研磨は顕著だが、内面まで研磨が行き届いていないという違いも見受けられる。両者はいずれも突起型あるいは広田上層型と呼ばれるが（木下2003）、その加工状況の違いから細分できる可能性がある。

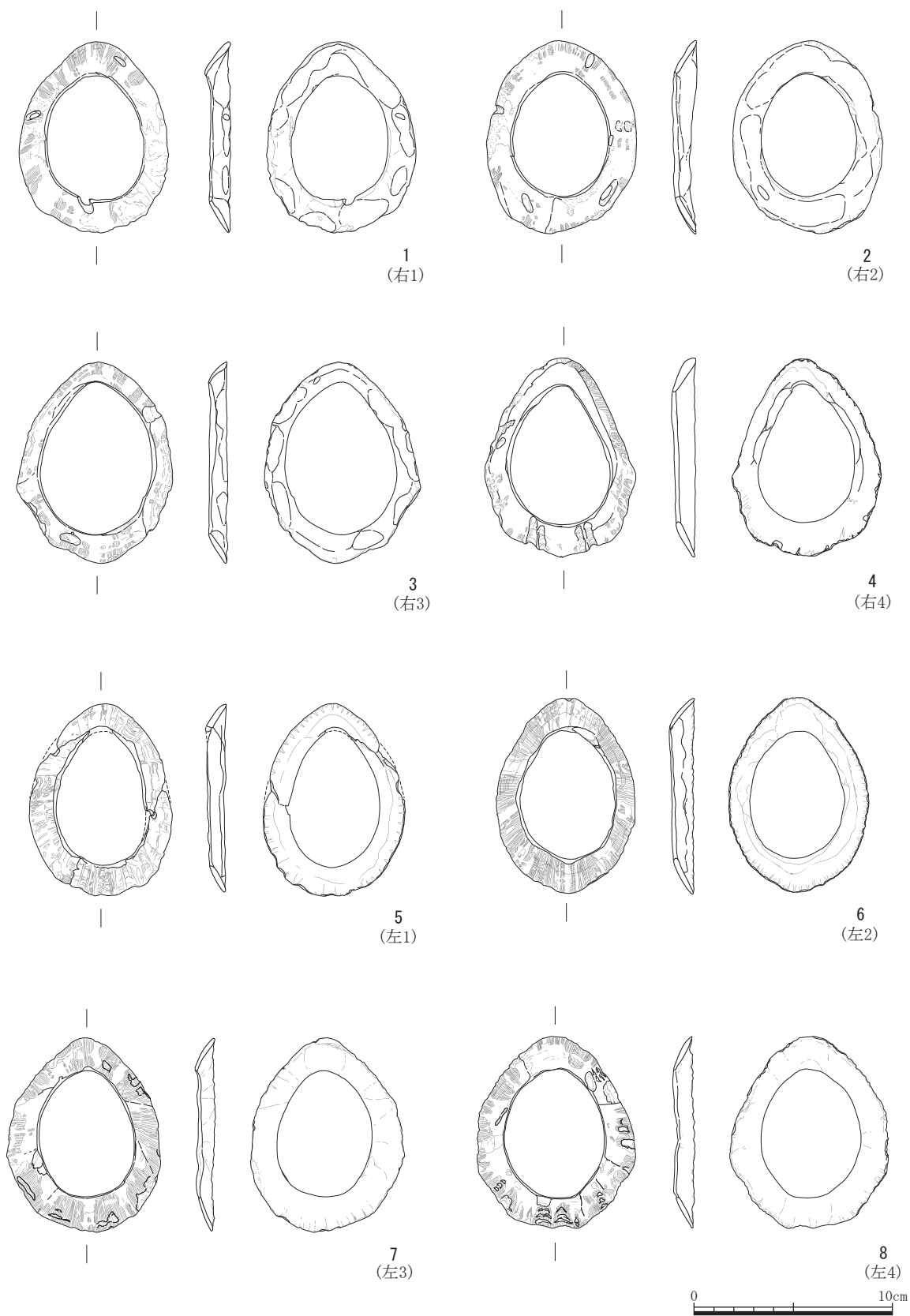


图1 広田遺跡出土貝製品実測図

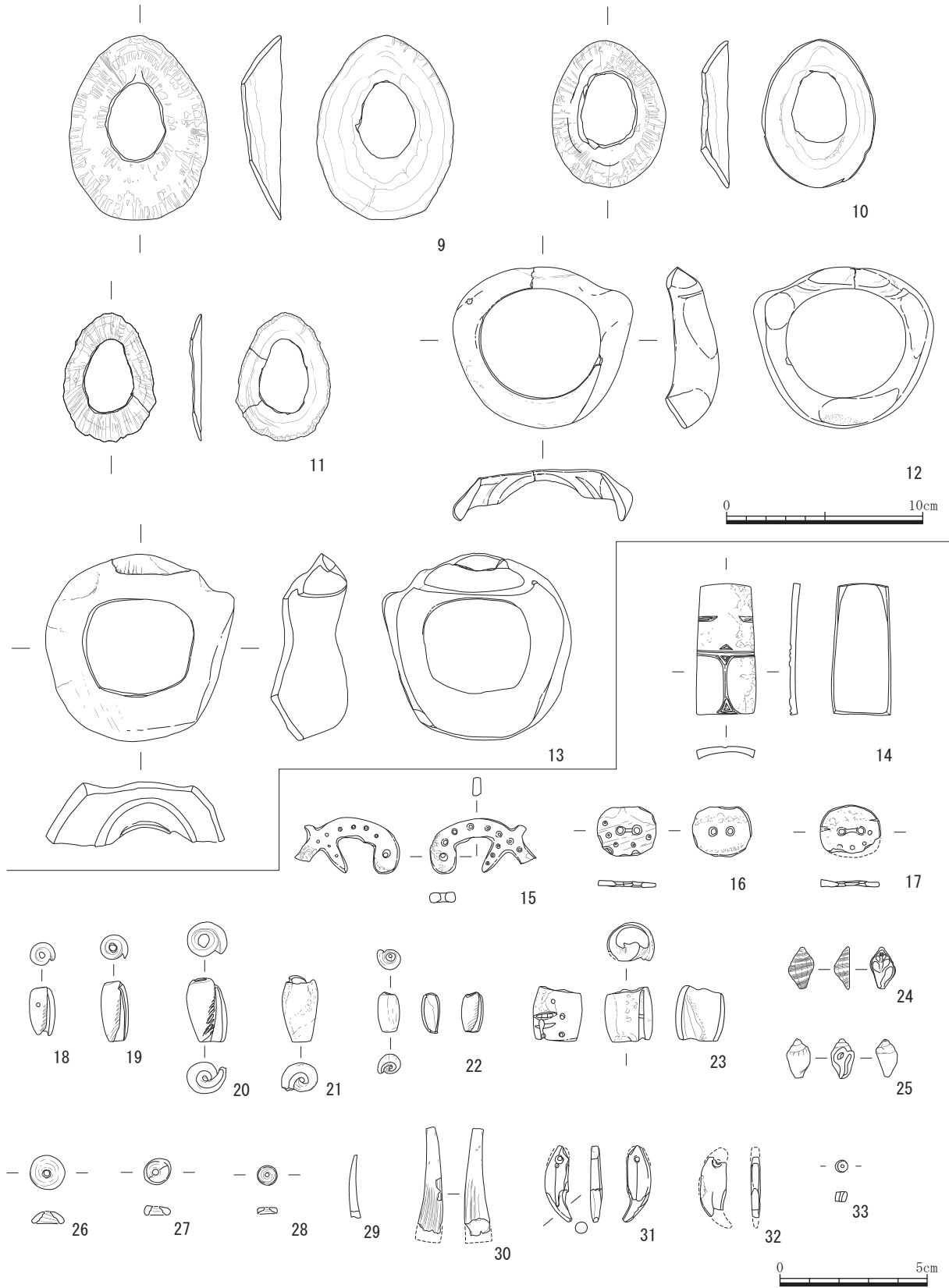


図2 広田遺跡出土貝製品・獣牙製垂飾品・ガラス玉実測図

14はアンボンクロザメやクロフモドキなど大型イモガイ科を用いた貝符である（図2-14）。DⅧ地区の流砂中から検出されたと記載がある。形態は縦に長い台形状で、製品表面には彫刻によって三角文や直線、曲線を用いた文様が施されている。文様と形態から、広田上層式貝符のうち「半眼類」に分類できる（山野2018）。

15は大型イモガイ科の螺塔部を用いた竜佩状貝製品⁴⁾である（図2-15）。記載によりDⅧ地区1号人骨からの出土と想定できる。報告書においてDⅧ地区1号人骨では頸部から3点の竜佩状貝製品が出土したと報告されているが（桑原編 *ibid.*, p189のR77~79）、本資料はこれに新たに加わる資料と考えられる。全体形は勾玉状で尾部側の胴部内外縁2カ所に大小の突起が伸びる。丸みを帯びた頭部中央には回転穿孔が施される。胴部から尾部にかけては両面に円文を並べた列点文が施されており、報告書中のR77の竜佩状貝製品と形態、文様位置ともに類似している。

16・17は二孔板状貝製品である（図2-16・17）。素材は全体が研磨されているため確証はないが、白色を呈し、片面がやや内湾することからイモガイ科を使用していると考えられる。EⅡ地区1号人骨には頭部周辺から二孔板状貝製品が11点出土しており、本資料はこれらに加わる資料と推測できる。形態は隅丸長方形を呈し、中央に孔が2個設けられる。この2つの孔の間には人工的な溝が設けられており、紐通しの溝ではないかと考えられる。製品片面には列点文が施されている。

18~23はマクラガイ科製玉類⁵⁾である（図2-18~23）。18・19・22は小型のマクラガイ科マクラガイあるいはサラサマクラを使用している。20・21・23はマクラガイ科サツマビナを使用している。18~20は記載からDⅠ地区5号人骨に伴うと推測できる。DⅠ地区5号人骨の上半身からは112点のマクラガイ科製玉類が出土しており、本資料もこれらに加わるものだろう。18~20はマクラガイ科の殻頂側に孔が穿たれており、管状を呈することで紐を通した連結式の装飾品となる。使用による摩耗のためか、多くの場合この殻頂側の孔周縁は摩耗しており、自然によるものか人工的加工かの判断が付きにくい。一方、20は殻底側を平滑に研磨加工している。21~23は記載からB7地区からの出土品と想定できる。21は殻頂付近が破損しており、殻底は平滑に研磨加工されている。22は殻頂・殻底の両側が研磨加工されている。23は殻頂・殻底の両側を研磨加工しており、背面には体層を穿つ横溝と列点文が施されている。

24はノシガイ製玉類、25はフトコロガイ製玉類である（図2-24・25）。両者は腹面を平滑に研磨し、内部の螺構造が露出するが、これは孔を設けるための加工である。ノシガイ製玉類はEⅡ地区1号人骨およびEⅢ地区2号人骨の各人骨に伴うことから、これらも各人骨に伴う可能性が高い。また、フトコロガイ製玉類はDⅠ地区5号人骨から55点出土しており（桑原編 *ibid.*, p171）、これに加わるものと思われる。

26~28はマダライモガイやコマダライモガイなどの小型イモガイ科を用いた貝製小玉である（図2-26~28）。広田遺跡で最も多く出土する貝製品で、今回の調査でも859点を得た。貝製小玉は報告書中で大きく3つに分類されている（木下 *ibid.*）。Ⅰ類は海浜で採取されたままの、無加工の小玉である（図2-26）。浅い海底で摩耗し、殻頂に小孔があいたイモガイ類は海岸で容易に拾うことが可能である。Ⅱ類は螺塔部に穿孔を目的とした研磨により平坦面が作り出された資料である（図2-27）。Ⅲ類は丁寧な加工によるもので、上下面や側面が研磨によって整形され自然面をほとんど残さない（図2-28）。整理作業においてこれらの形態分類を実施し、表と写真で示した（表1、写真1~6）。イモガイ科製玉類は広田遺跡の多くの埋葬遺構に伴う上、膨大な数が出土していることから、今回得られた資料について全てが想定される各遺構または地区に伴うとは断言できない。

29・30はツノガイ類製管玉である。ツノガイ類製管玉はマルツノガイやヤカドツノガイ等を用いた

細型と（図 2-29）、ニシキツノガイなどを用いた太型が存在する（図 2-30）。前者は数量が多く 168 点が得られている。細型は種子島の海岸で打ちあがるものを容易に採取することができる。太型ツノガイは頂孔部分を研磨して整えるだけで装飾品となる。

31・32は獣牙製垂飾品である（図 2-31・32）。イヌの牙の歯根端部に回転穿孔が設けられている。本資料が帰属すると想定される D I 地区 5 号人骨には獣牙製垂飾品が 1 点伴っており、広田遺跡ではこの埋葬遺構にのみ伴っていることから、この 2 点も本遺構に共伴すると考えられる。

33はガラス玉である。直径 4 mm ほどの小型品で中央に孔があいており、色調は不透明の淡青色である。報告書によると D VII 地区 1 号人骨にガラス玉は伴わないが、記載からは本遺構に伴う可能性が高い。

3. 結語

本報告では九州大学総合博物館に保管されていた 1950 年代の種子島広田遺跡の発掘調査で出土した貝製品等遺物の一部について概略をまとめた。本資料は 2003 年の報告書には掲載されておらず、全て未発表資料である。資料中には 1950 年代に調査された埋葬遺構に伴う可能性が高いものが多く、新たな知見を与えてくれる。今後、広田遺跡および関連諸分野の研究において重要なデータになることを望む。

謝辞

本報告をまとめるにあたり、九州大学総合博物館の岩永省三副館長、米元史織氏におかれましては、資料準備や整理作業の作業場の提供など多くの便宜を図って頂いたことを心より感謝申し上げます。また、熊本大学文学部の木下尚子先生、矢掛町教育委員会の西野望氏、熊本大学文学部歴史学科の渡邊実緒香氏には遺物の実測作業や表作成においてご協力を得ました。また、遺物のトレース作業において同学科の岩熊拓人氏にご協力頂いた。末筆ながら記して感謝申し上げます。

注

- (1) 表 1 には「袋・カードの記載」を明記し、そこから想定される「帰属する遺構等」を記載した。しかし、報告 No. 2 や報告 No. 38 など、記載や遺物の内容から明らかに広田遺跡の上層埋葬に属する可能性が高い資料がある。これら疑問の生じる資料については「帰属する遺構等」の後ろに「？」を付した。また、多くは「〇〇人骨」とは記載されておらず、「A-5」や「B-7」と記載されていることから、一部は埋葬人骨に伴ったのではなくグリッドごとに取り上げられた可能性がある。表 1 の「帰属する遺構等」はこれらの点を踏まえた上での推測であることを明記しておく。
- (2) 将来の分析方法の進歩を考慮し、遺物の一部について、砂を付着させたまま整理を実施した。
- (3) 報告書に掲載されている 8 点（K394~401）には「仮 A~h」の遺物記載 No. が注記されていることが第 4 表から分かる。1950 年代に調査された広田遺跡出土人骨に装着された貝輪の多くが「右」、「左」と記載され取り上げられているのに対し、この遺物記載 No. は特異であり、本人骨に装着されたものと異なる可能性が高い。
- (4) 報告書中では竜佩型貝製垂飾と呼ばれるが、本報告では山野 2010 に従い「竜佩状貝製品」と呼称する（山野 2010）。また部位名称についてもこれに従う。
- (5) 広田遺跡の報告書中ではイモガイ科やマクラガイ科、ノシガイ、フトコロガイ、ツノガイ類などの連結装身具について「珠」という言葉を用いているが、奄美・沖縄諸島で同様の貝製品に「珠」という言葉を用いることはほばないため、本報告で各遺物の呼称について山野 2012 の遺物名称に従うこととする（山野 2012）。

挿図表出典

表1は山野作成。図1：1・3・7・8は山野実測、4・5・6は木下実測、3は渡邊・山野実測。図2：9～11、19～21・26・30～34は木下実測、12・14・22・23・25・27～29は山野実測、13・15・16～18・24は藤江実測。写真1～6：山野撮影。

文献

- 笠利町教育委員会編 2006『マツノト遺跡』笠利町文化財報告書第28集 笠利町教育委員会
- 木下尚子 2003「7. 貝製装身具からみた広田遺跡」『種子島広田遺跡』pp.329～366 広田遺跡学術調査研究会・鹿児島県立歴史資料センター黎明館
- 桑原久男編 2003『種子島広田遺跡』広田遺跡学術調査研究会・鹿児島県立歴史資料センター黎明館
- 西之表市教育委員会編 1980『馬毛島埋葬址－鹿児島県西之表市馬毛島椎ノ木遺跡』西之表市教育委員会
- 山野ケン陽次郎 2010「竜佩状貝製品再考」『先史学・考古学論究』V 甲元眞之先生退任記念 pp.862～880 龍田考古学会
- 山野ケン陽次郎 2012「種子島広田遺跡の再検討」『古代文化』第63巻第4号 pp.6～26 古代学協会
- 山野ケン陽次郎 2013「琉球列島におけるマクラガイ科製玉類の研究」『奄美考古』第7号 pp.1～17 奄美考古学会
- 山野ケン陽次郎 2018「先史琉球列島における広田上層式貝符の研究」『中山清美と奄美学－中山清美氏追憶論集』pp.169～184 奄美考古学会

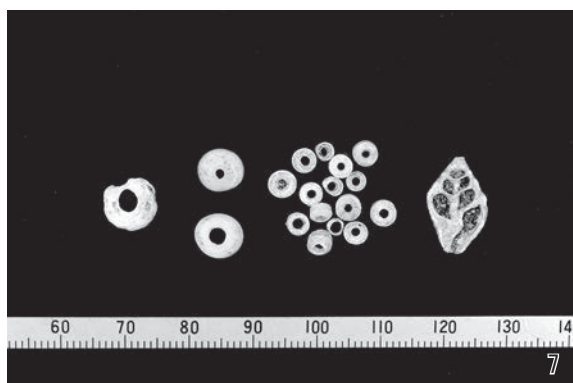
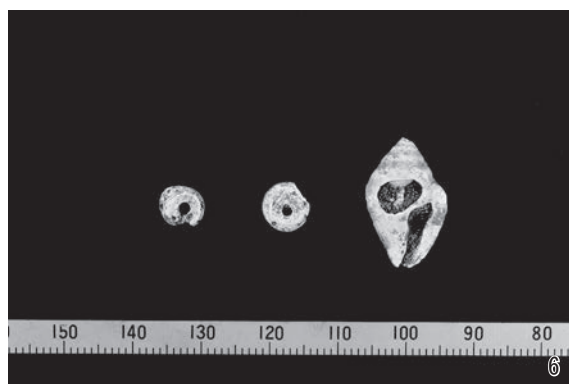
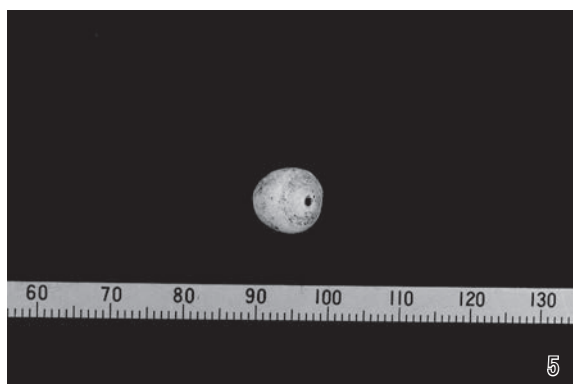
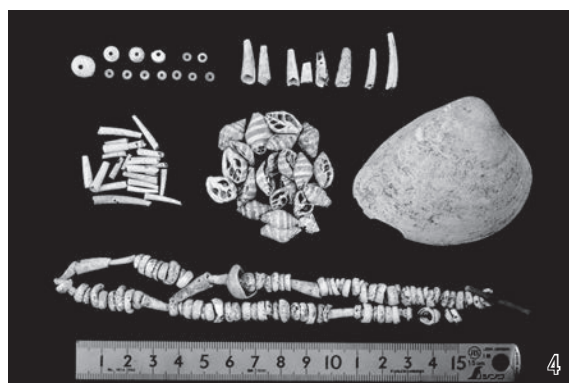
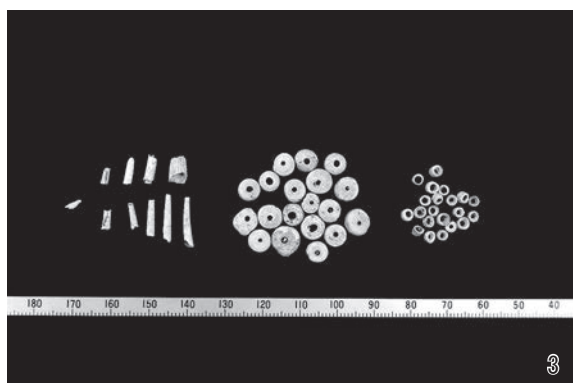
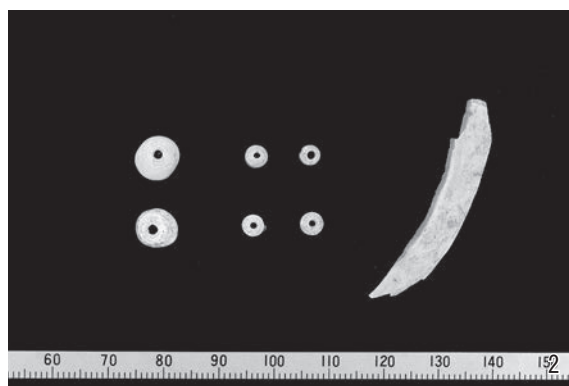
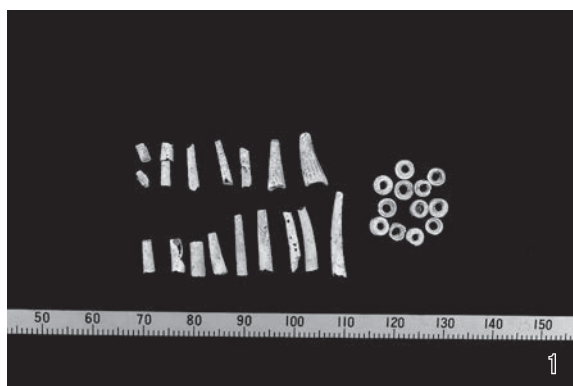


写真1 九州大学総合博物館保管広田遺跡出土貝製品ほか遺物1

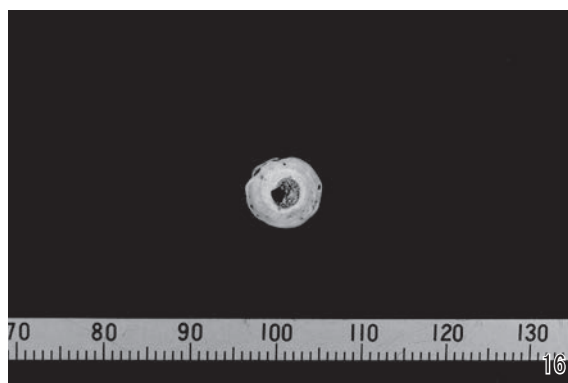
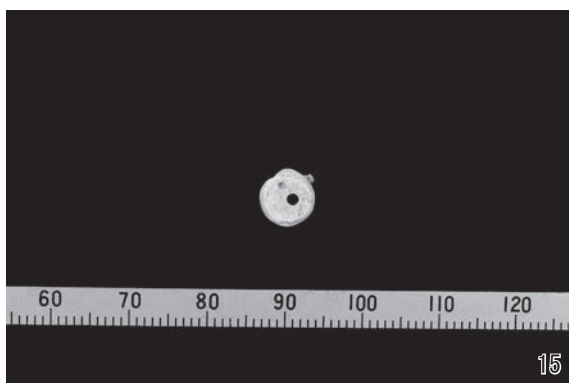
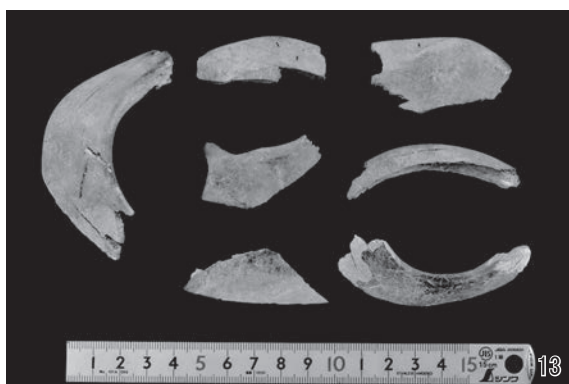
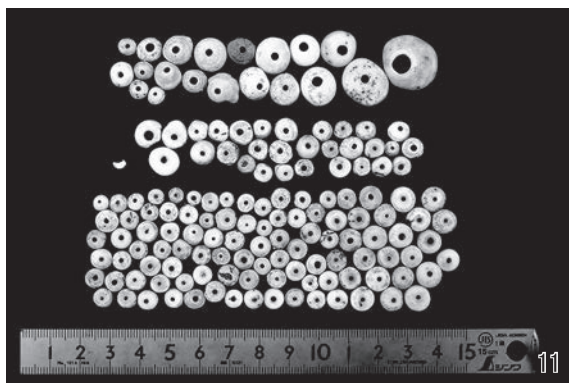
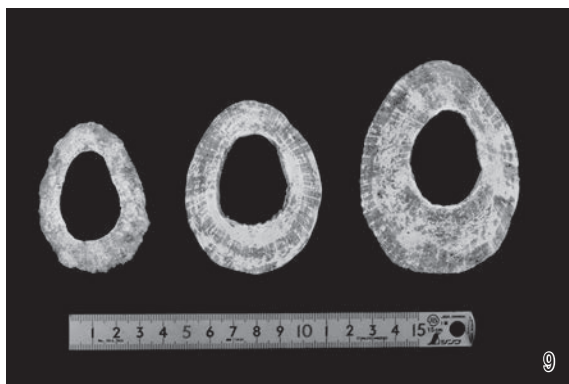


写真2 九州大学総合博物館保管広田遺跡出土貝製品ほか遺物2

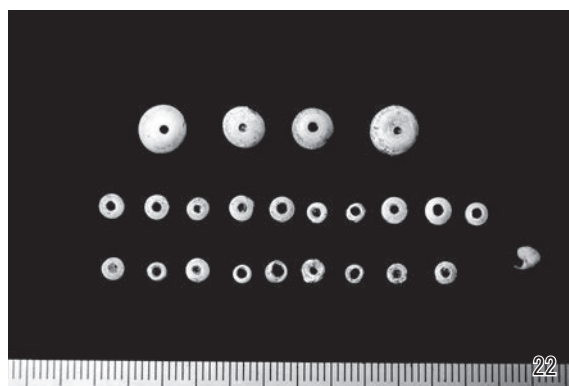
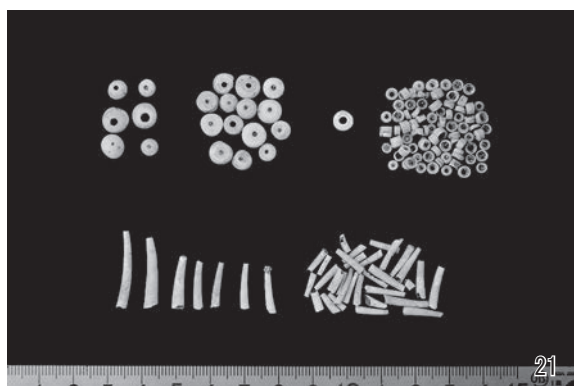
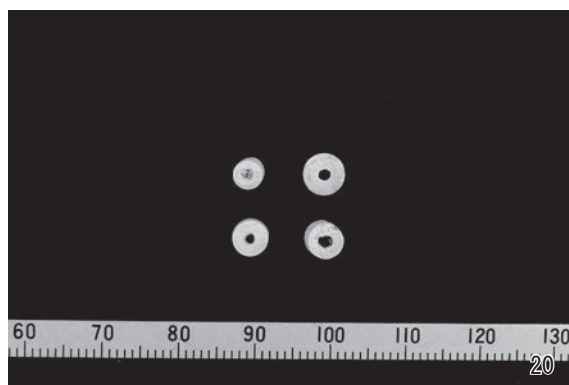
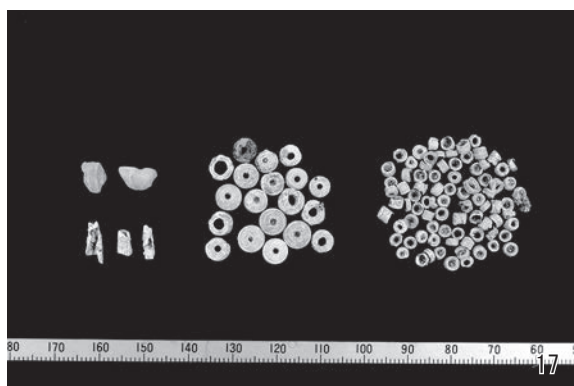


写真3 九州大学総合博物館保管広田遺跡出土貝製品ほか遺物3

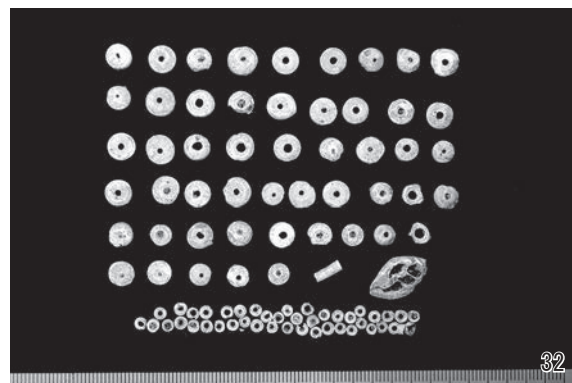
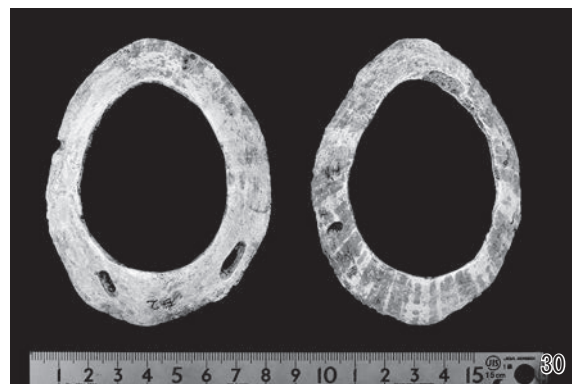
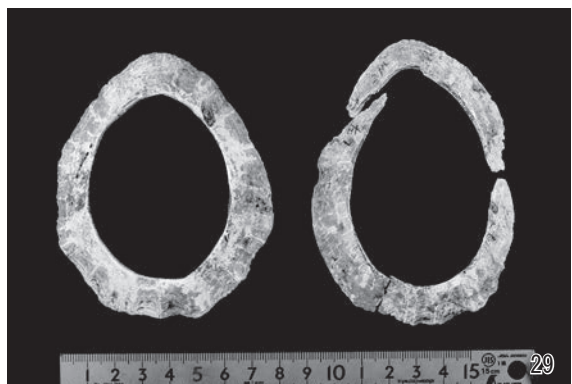
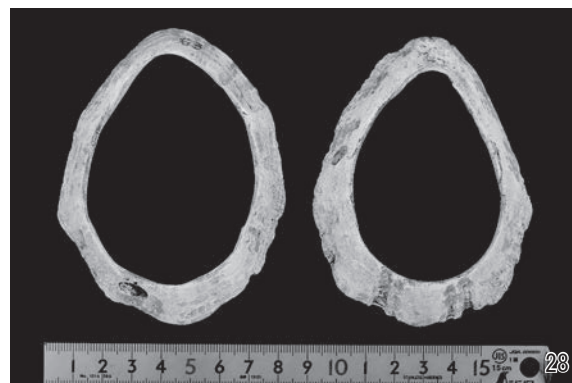
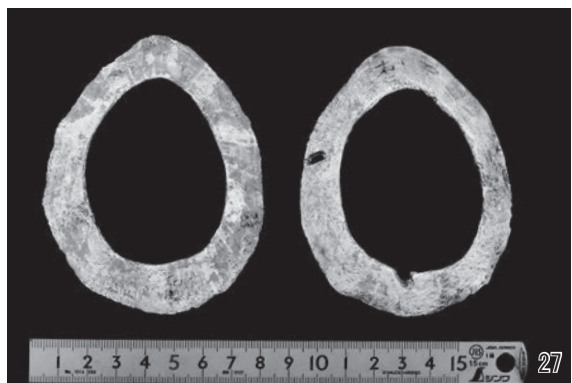
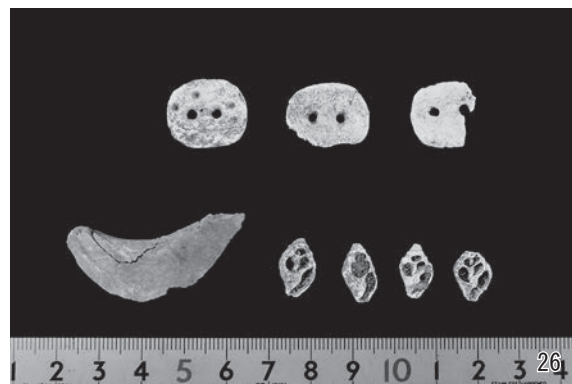
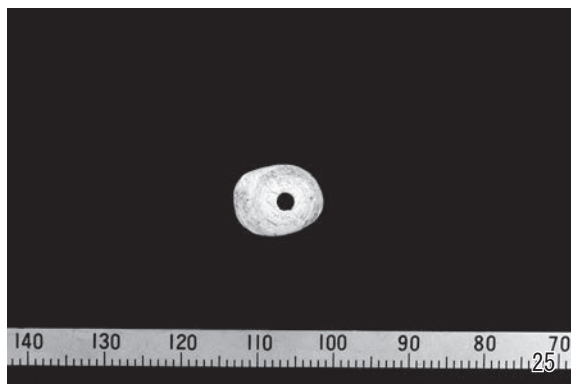


写真4 九州大学総合博物館保管広田遺跡出土製品ほか遺物4

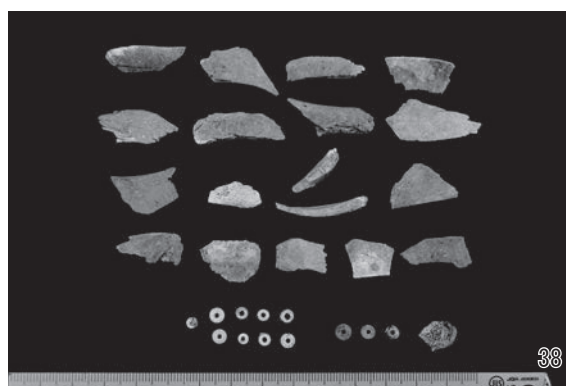
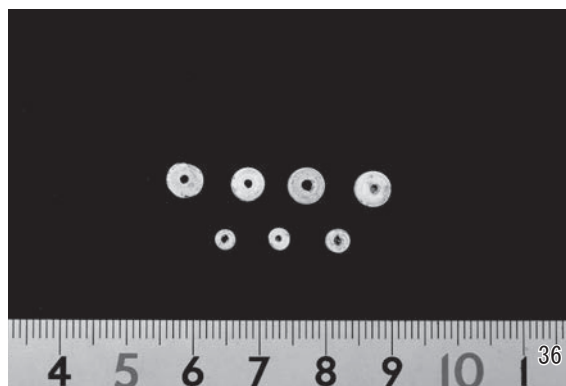
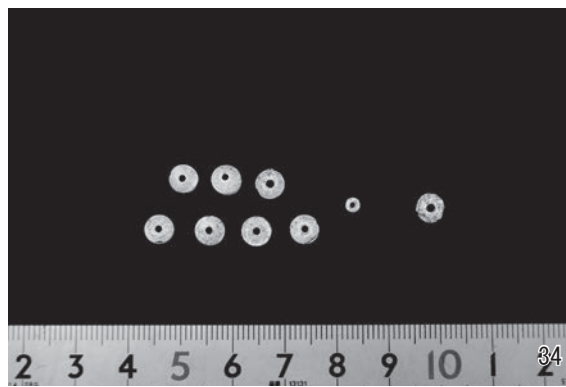
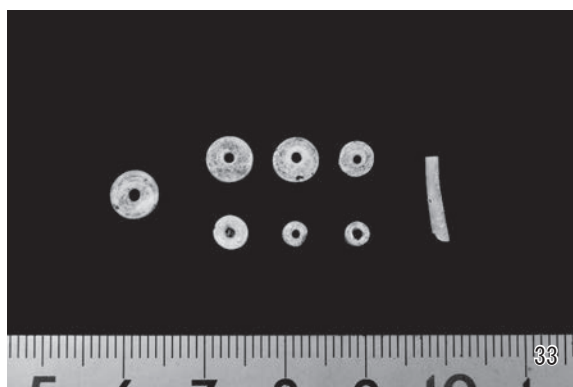


写真5 九州大学総合博物館保管広田遺跡出土貝製品ほか遺物5

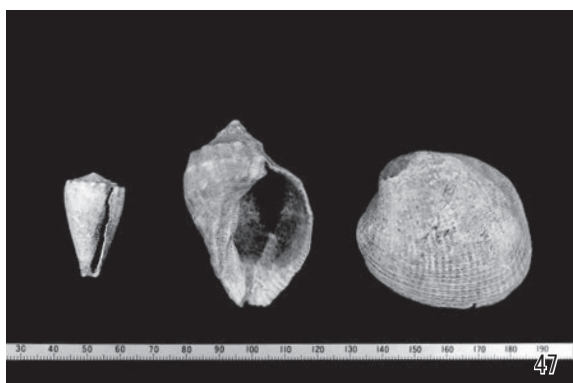
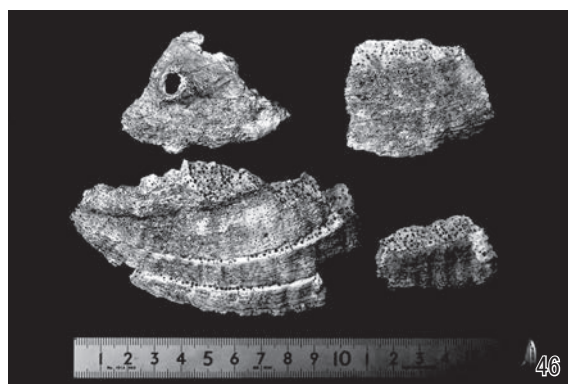
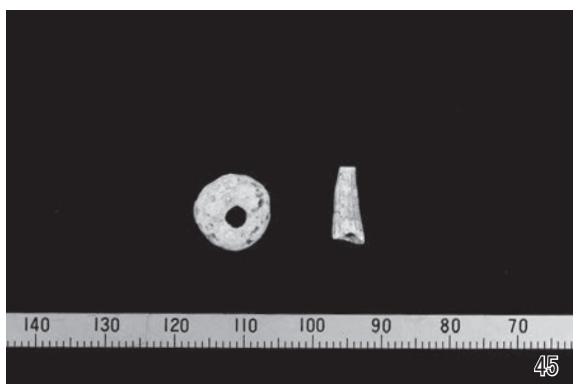
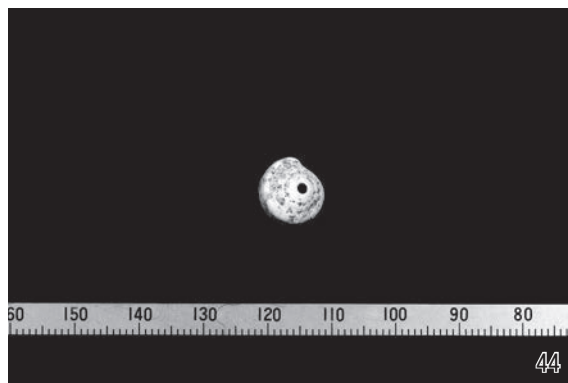
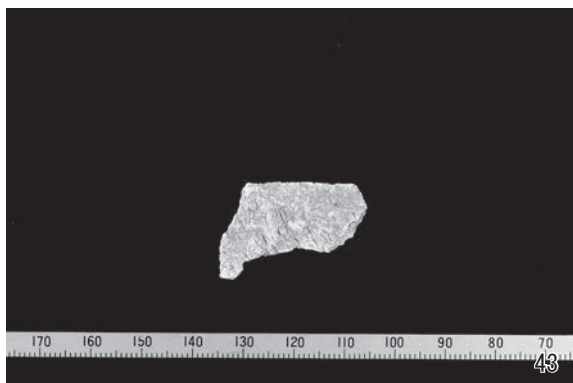
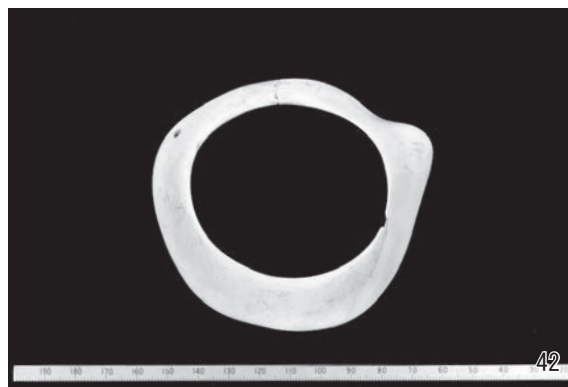
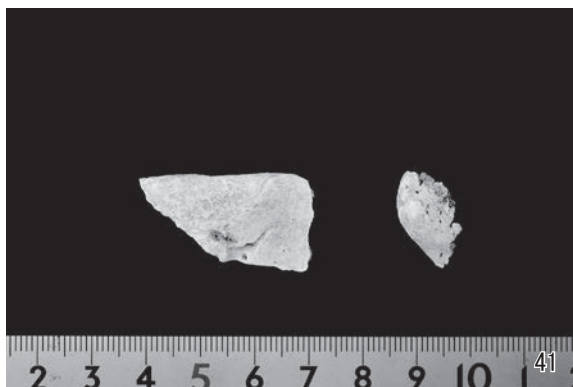


写真6 九州大学総合博物館保管広田遺跡出土具製品ほか遺物6

第4章 1. 広田遺跡下層人骨個票

高椋浩史

TAKAMUKU Hirofumi

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

DOIGAHAMA SITE ANTHROPOLOGICAL MUSEUM

米元史織

YONEMOTO Shiori

九州大学総合博物館

The Kyushu University Museum

本稿は、広田遺跡第1次調査（1957年、昭和32年）から第3次調査（1959年、昭和34年）において出土した人骨について、下層から出土した人骨について記載した個票である。

出土人骨の番号は、2003年に刊行された『種子島広田遺跡』（広田遺跡学術調査研究会編）に依拠した。なお、九州大学総合研究博物館に保管されている資料との整合性をはかるため、「九大人骨番号」もあわせて記載している。出土人骨の情報は、調査次数順に記載している。個票には、出土人骨の個体数と残存部位の認定、性別判定、年齢推定について表記した。副葬品の出土遺構と数量については『種子島広田遺跡』（広田遺跡学術調査研究会編）に依拠した。

なお、紙幅の都合上、オニニシ製貝輪とボウシュボラ製貝輪について、表中では「オニ・ボウ」と一括・省略した。また、副葬品の数量については、発掘調査時の日誌に記された数量と現存する数量が異なるため、『種子島広田遺跡』（広田遺跡学術調査研究会編）の267頁から268頁の一覧表に記された数量を基本的に踏襲し、報告書の本文中の数量と異なる場合は本文中の数量を括弧書きで併記している。

本稿を執筆するにあたり、以下の方々の協力をいただいた。

・人骨個票作成

【九州大学】足達悠紀、内田千種、亀川微香、鈴木沙弥、田中佑希乃、田中利紗、出見優人、唐尚輝、永島さくら、長谷川桃子、諸岡初音、森田雄士、山下理呂、吉原萌

・個票のトレース

【九州大学】惣門みつ子

【土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム】弘重久美子

個票目次

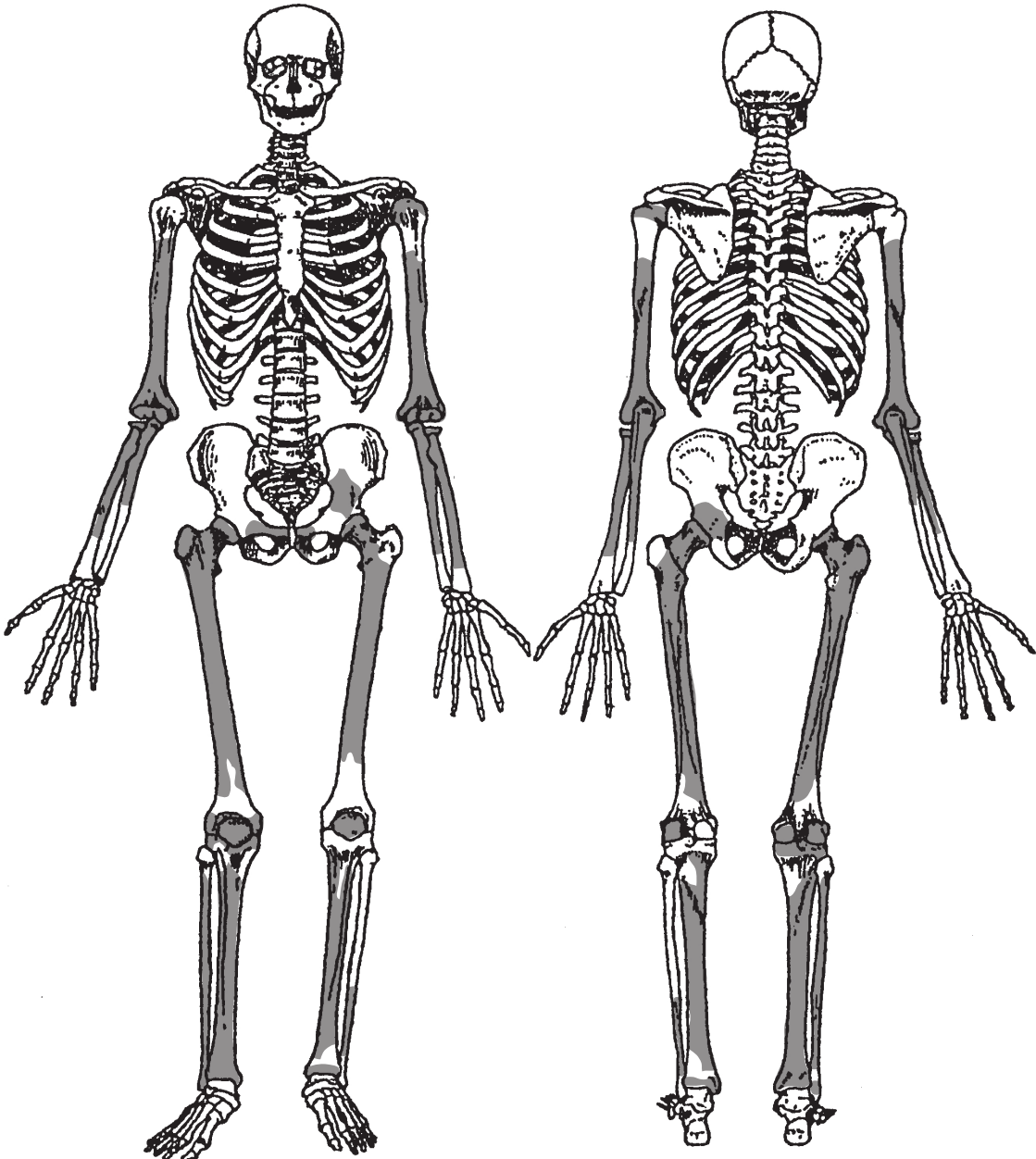
第1次調査	
S1号人骨	68頁
E1号人骨	70頁
E2号人骨	72頁
E3号人骨	74頁
N1-1号人骨	76頁
N1-2号人骨	78頁
IG 廊内下層人骨	80頁
下 I (N-1) 号人骨	81頁

第 I 部

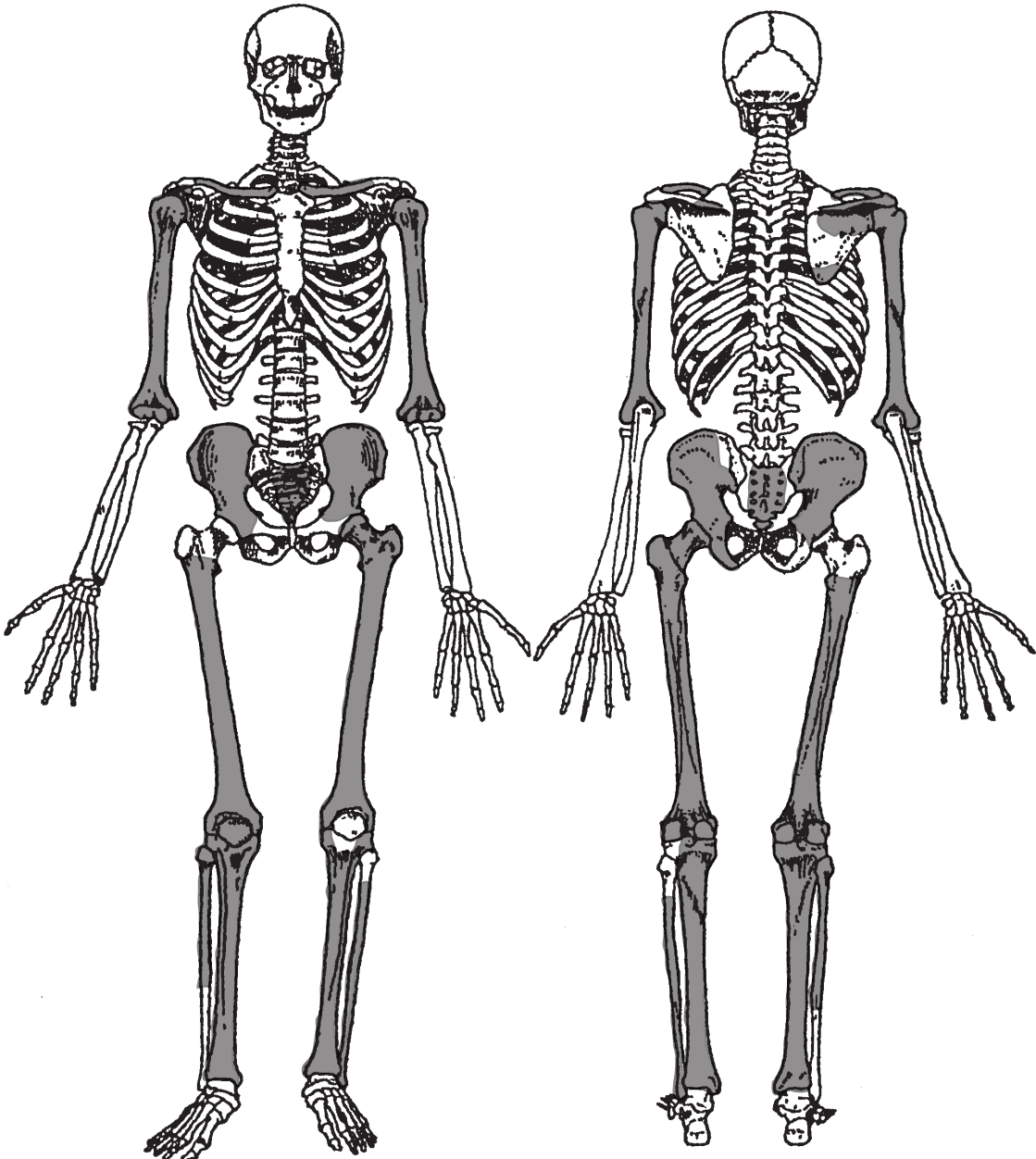
N2号東側人骨	82頁
N2号西側人骨	84頁
N3号人骨	86頁
N5号人骨	88頁
第2次調査	
C地区1号人骨	90頁
C地区2号人骨	92頁
C地区3号人骨	94頁
C地区4号人骨	96頁
C地区5号人骨	98頁
C地区6号人骨	100頁
C地区7号人骨	102頁
C地区8号人骨	106頁
C地区11号人骨	108頁
C地区12号人骨	110頁
C地区13号人骨	112頁
C地区14号人骨	114頁
A地区1号人骨	118頁
A地区4号人骨	120頁
A地区5号人骨	122頁
A地区6号人骨	124頁
A地区7号人骨	126頁
A地区8号人骨	128頁
A地区9号人骨	130頁
A地区10号人骨	132頁
A地区11号人骨	134頁
第3次調査	
D I地区3号人骨	136頁
D I地区4a号人骨	140頁
D I地区4b号人骨	142頁
D I地区5号人骨	144頁
D II地区3号人骨	146頁
D II地区4号人骨	148頁
D II地区5号人骨	150頁
D II地区6号人骨	152頁
D III地区1号人骨	154頁
D III地区2号人骨	156頁
D IV地区1号人骨	158頁
D IV地区4号人骨	161頁

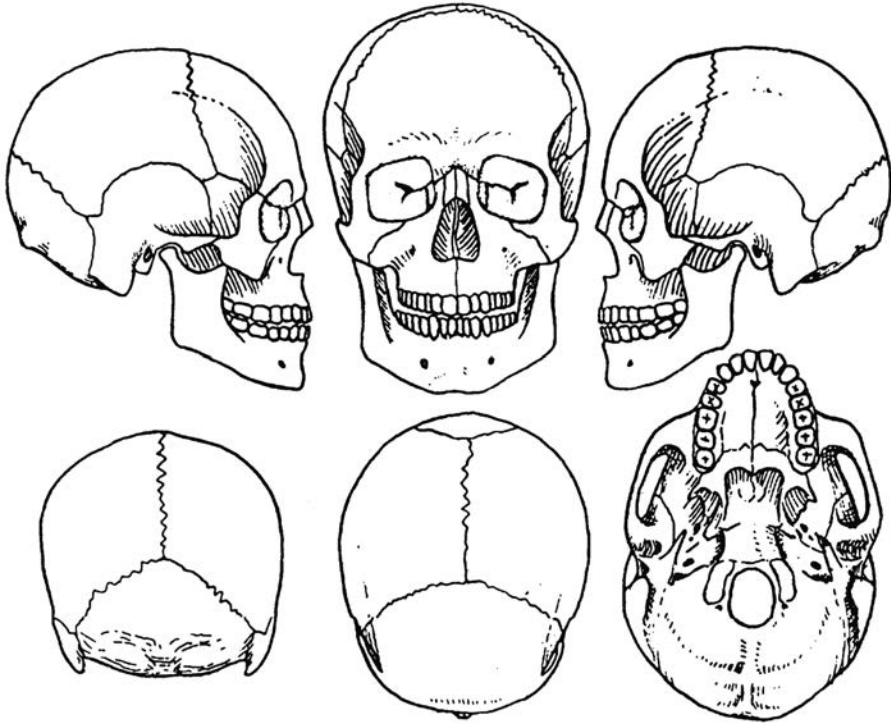
D IV地区5号人骨	164頁
D IV地区6号人骨	166頁
D IV地区7号人骨	169頁
D V地区1号人骨	171頁
D VII地区1号人骨	175頁
D IX地区1号人骨	177頁
E II地区1号人骨	179頁
E II地区2号人骨	181頁
E II地区3号人骨	183頁
E III地区1号人骨	184頁
E III地区2号人骨	186頁
E IV地区1号人骨	188頁
E IV地区2号人骨	190頁
E X地区1号人骨	192頁
E X地区2号人骨	194頁

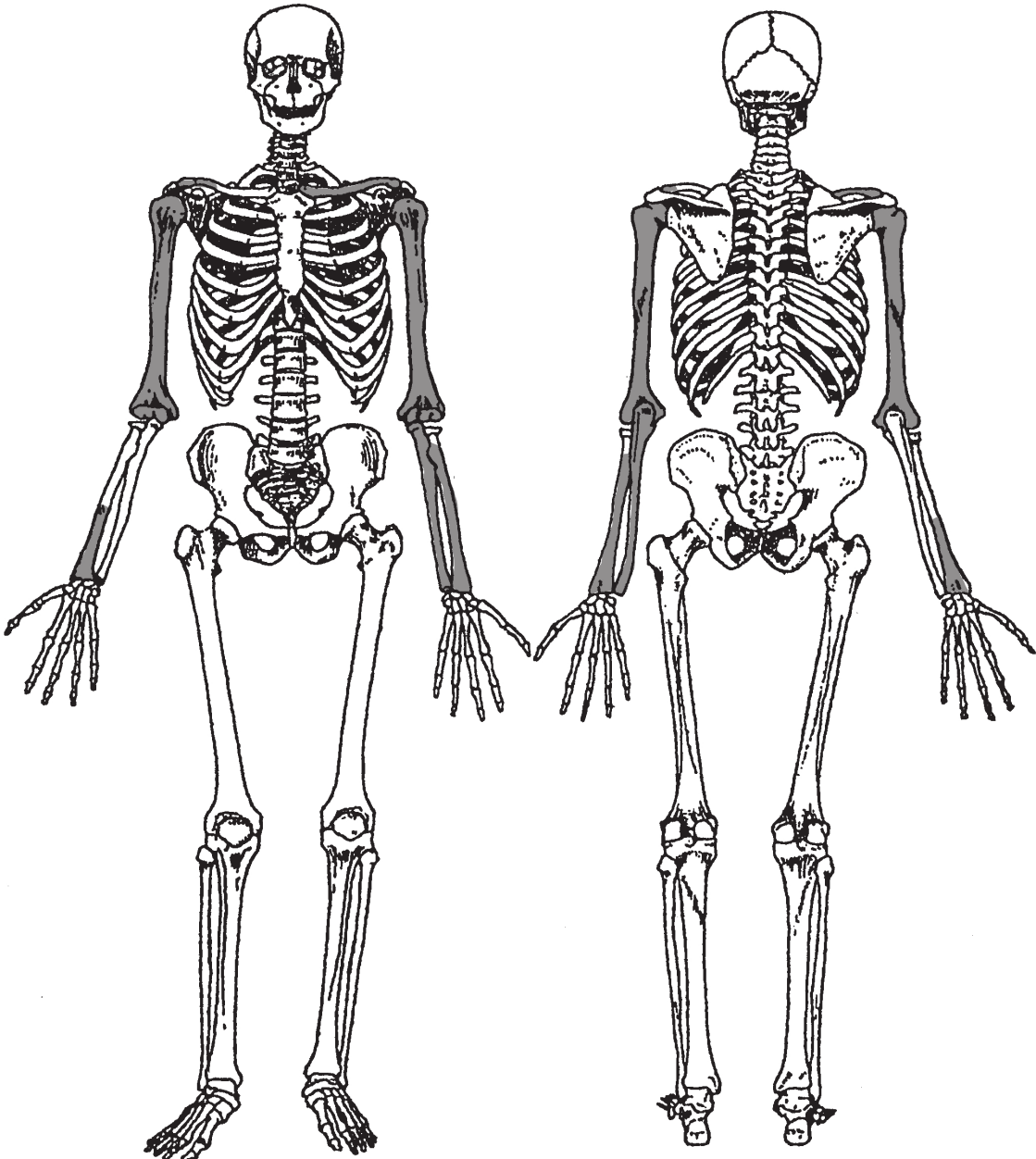
調査次数	第1次	層位	下層	性別	男性？
人骨番号	S1号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	若年
九大人骨番号	S-1	埋葬方法	一次葬	抜歯	不明
副葬品					
貝輪	竜佩	2	ガラス玉		
オオツタノハ	マクラガイ科製玉類		二孔板状貝製品		
ゴホウラ	イモガイ科製玉類	87	円盤状貝製品		
イモガイ	ノシガイ製玉類	3	ヤコウガイ製品	1	
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類	7	土器		
貝符	1	細型ツノガイ科玉類	87		
特記事項					
					

人骨番号	S1号人骨	九大人骨番号	S-1
特記事項			
			

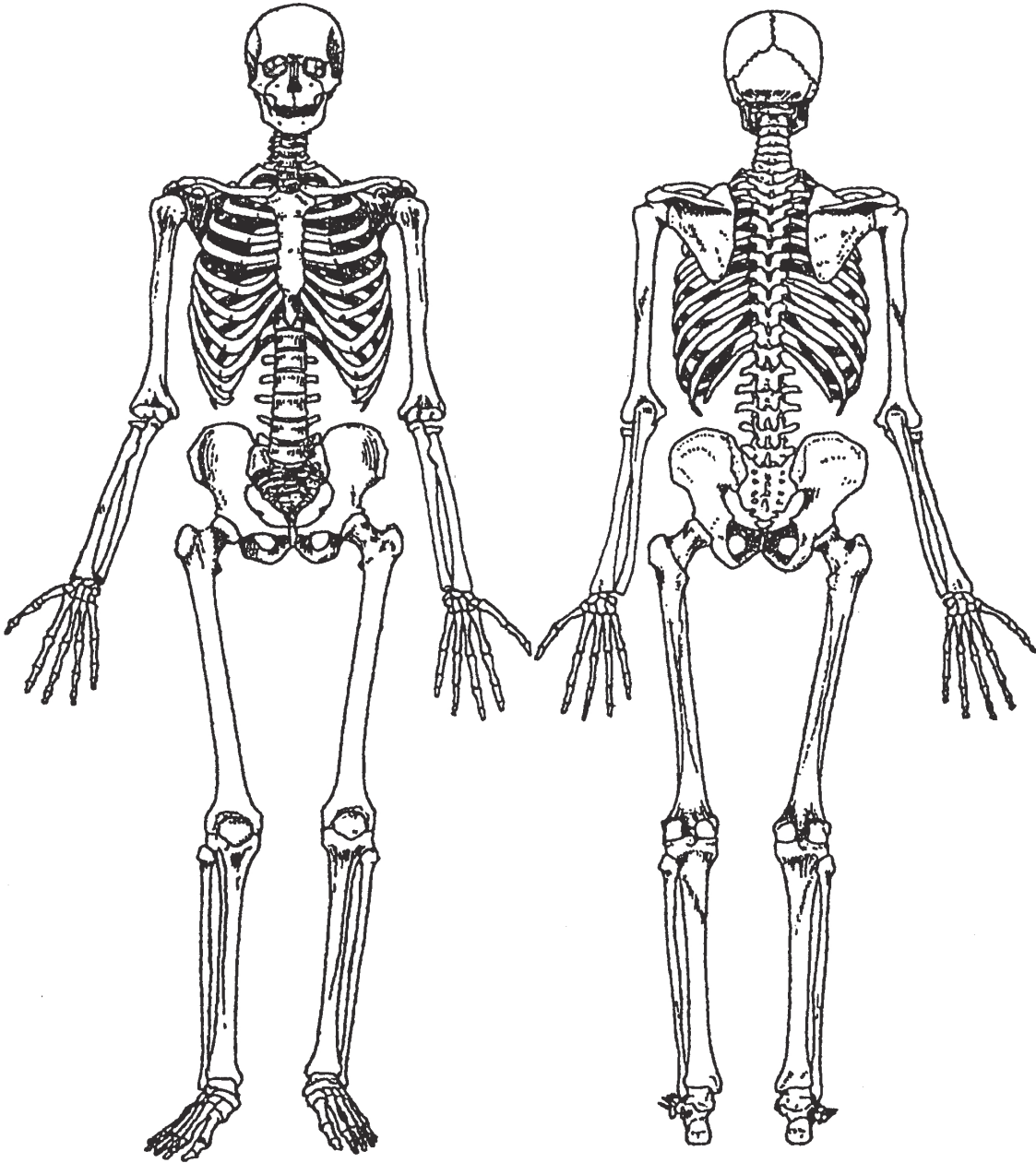
調査次数	第1次	層位	下層	性別	女性
人骨番号	E1号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	老年
九大人骨番号	E-1	埋葬方法	一次葬	抜歯	右上I2C
副葬品					
貝輪	竜佩	ガラス玉			
オオツタノハ 1	マクラガイ科製玉類	二孔板状貝製品			
ゴホウラ	イモガイ科製玉類	円盤状貝製品			
イモガイ	ノシガイ製玉類	ヤコウガイ製品			
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類	土器			
貝符	細型ツノガイ科玉類				
特記事項					

人骨番号	E1号人骨	九大人骨番号	E-1
特記事項			
			

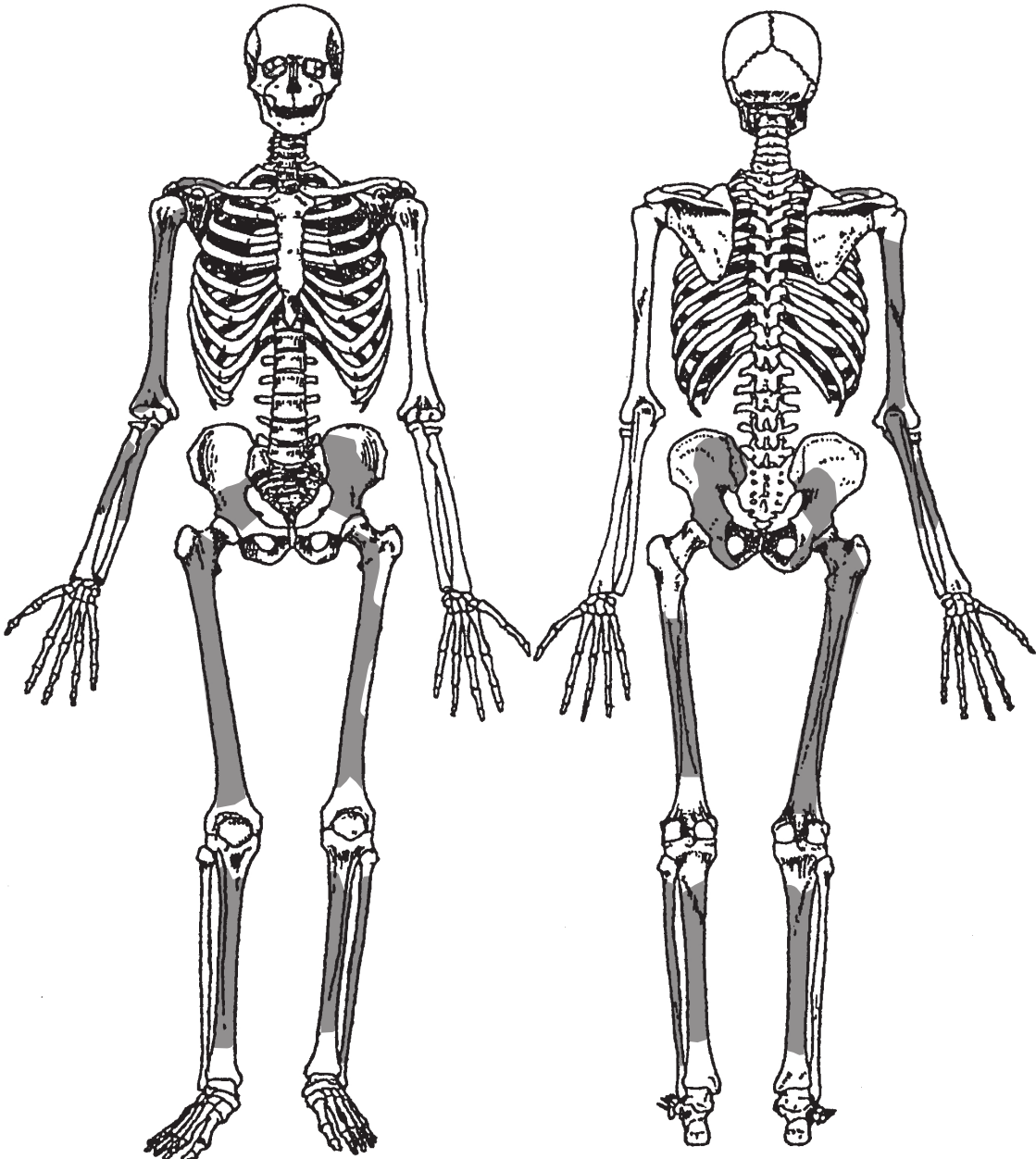
調査次数	第1次	層位	下層	性別	男性
人骨番号	E2号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	不明
九大人骨番号	E-2	埋葬方法	一次葬	抜歯	不明
副葬品					
貝輪	竜佩	ガラス玉			
オオツタノハ 22	マクラガイ科製玉類	二孔板状貝製品			
ゴホウラ	イモガイ科製玉類	円盤状貝製品			
イモガイ	ノシガイ製玉類	ヤコウガイ製品			
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類	土器			
貝符	細型ツノガイ科玉類				
特記事項					
					

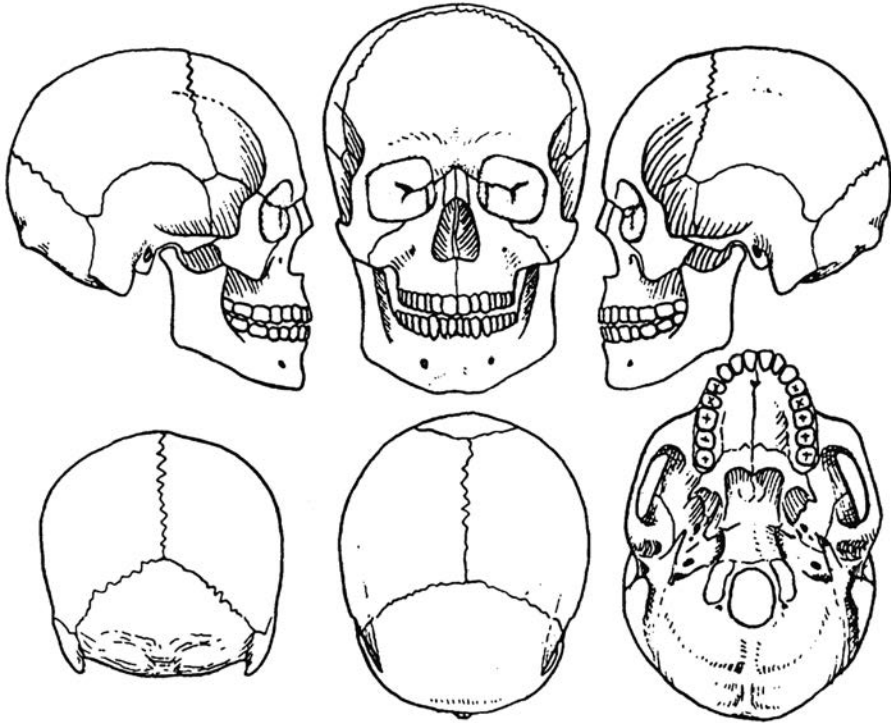
人骨番号	E2号人骨	九大人骨番号	E-2
特記事項			
			

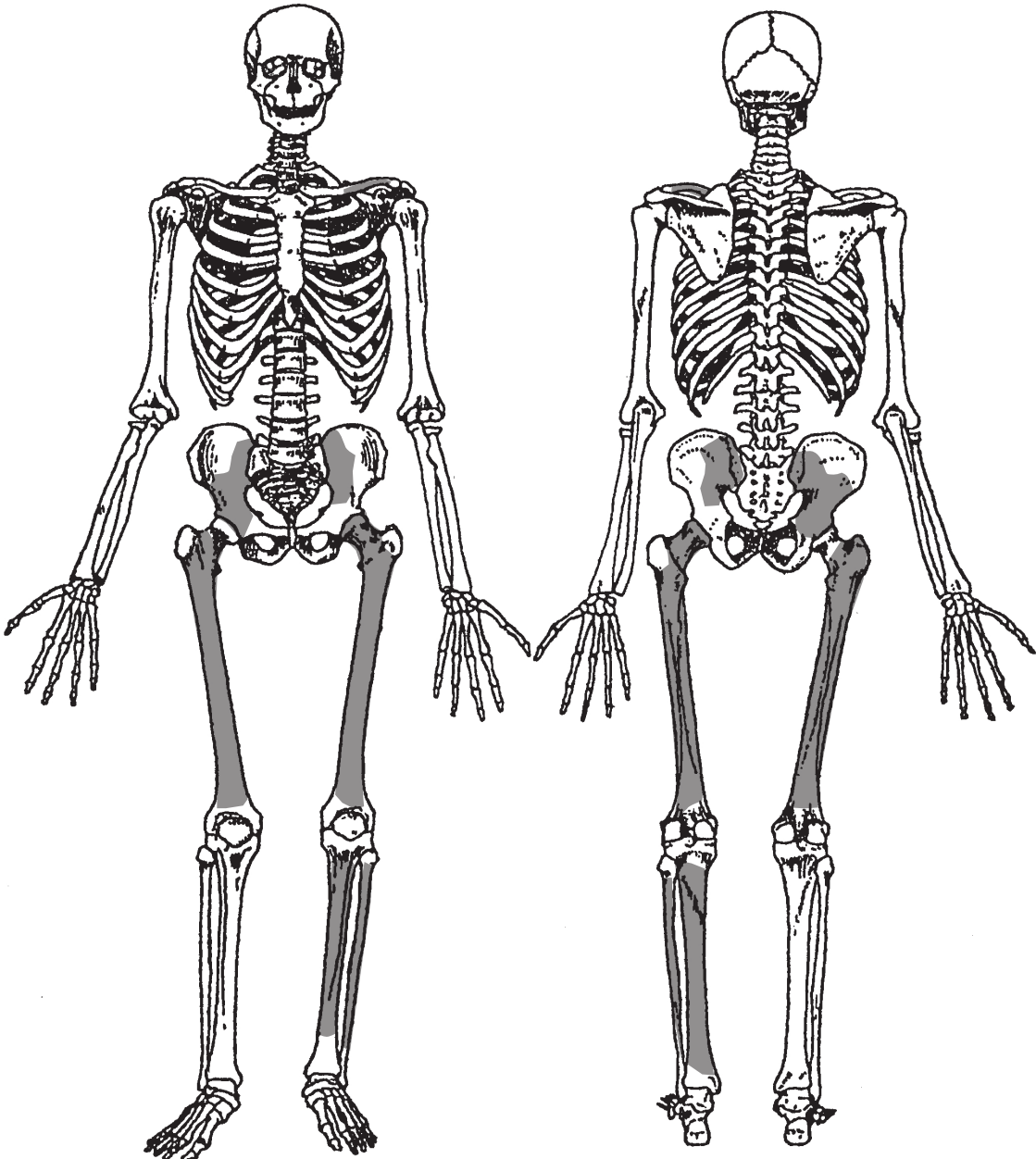
調査次数	第1次	層位	下層	性別	女性
人骨番号	E3号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	成年
九大人骨番号	E-3	埋葬方法	一次葬	抜歯	不明
副葬品					
貝輪	竜佩	ガラス玉			
オオツタノハ	マクラガイ科製玉類	二孔板状貝製品			
ゴホウラ 8	イモガイ科製玉類	円盤状貝製品			
イモガイ 1	ノシガイ製玉類	ヤコウガイ製品			
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類	土器			
貝符	細型ツノガイ科玉類				
特記事項					

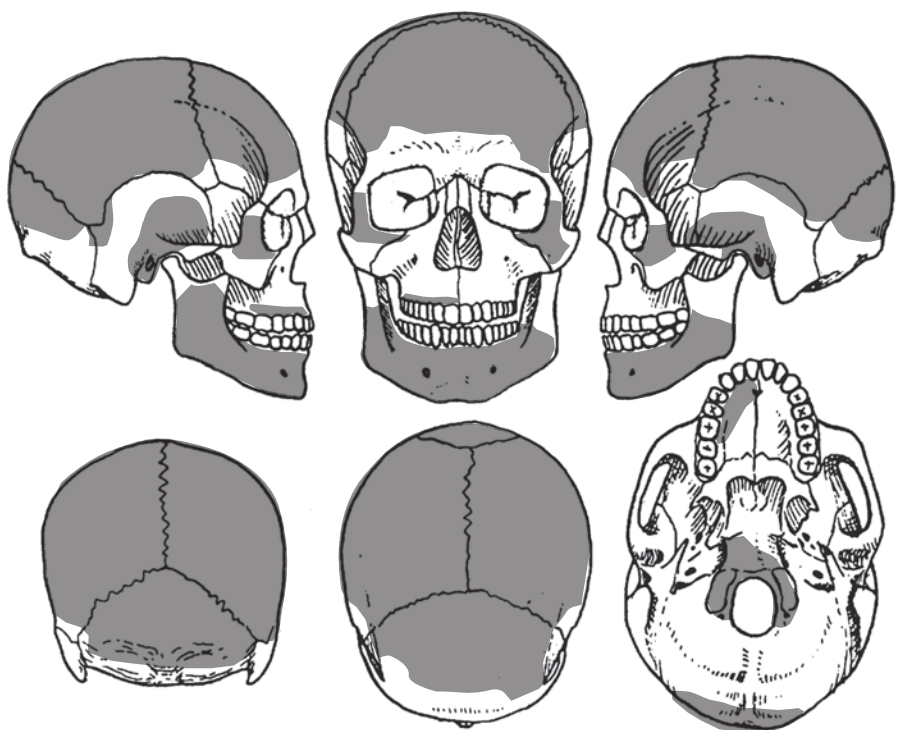
人骨番号	E3号人骨	九大人骨番号	—
特記事項			
			

調査次数	第1次	層位	下層	性別	男性
人骨番号	N1-1号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	若~成年
九大人骨番号	N-1-1	埋葬方法	二次葬	抜歯	不明
副葬品					
貝輪	竜佩		ガラス玉		
オオツタノハ	マクラガイ科製玉類		二孔板状貝製品	1	
ゴホウラ 17	イモガイ科製玉類	869	円盤状貝製品	6	
イモガイ	ノシガイ製玉類		ヤコウガイ製品	2	
オニ・ボウ 1	大型ツノガイ科玉類		土器	1	
貝符 2	細型ツノガイ科玉類				
特記事項					
<ul style="list-style-type: none"> ・二次葬・合葬のため、副葬品の帰属は不明。 ・イモガイ科製玉類の総計はN2号墓との総計。 					

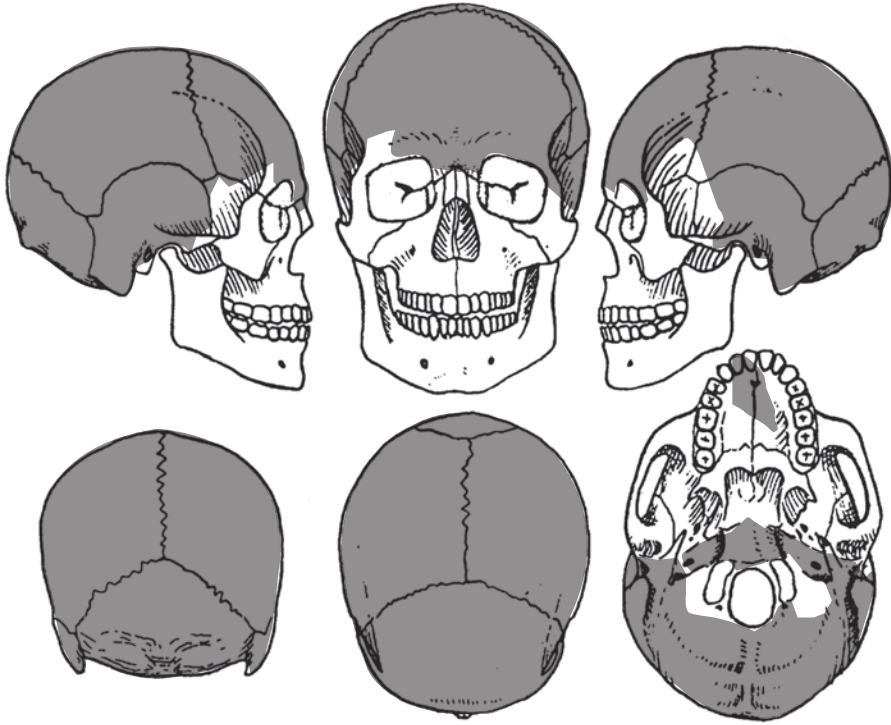
人骨番号	N1-1号人骨	九大人骨番号	N-1-1
特記事項			
			

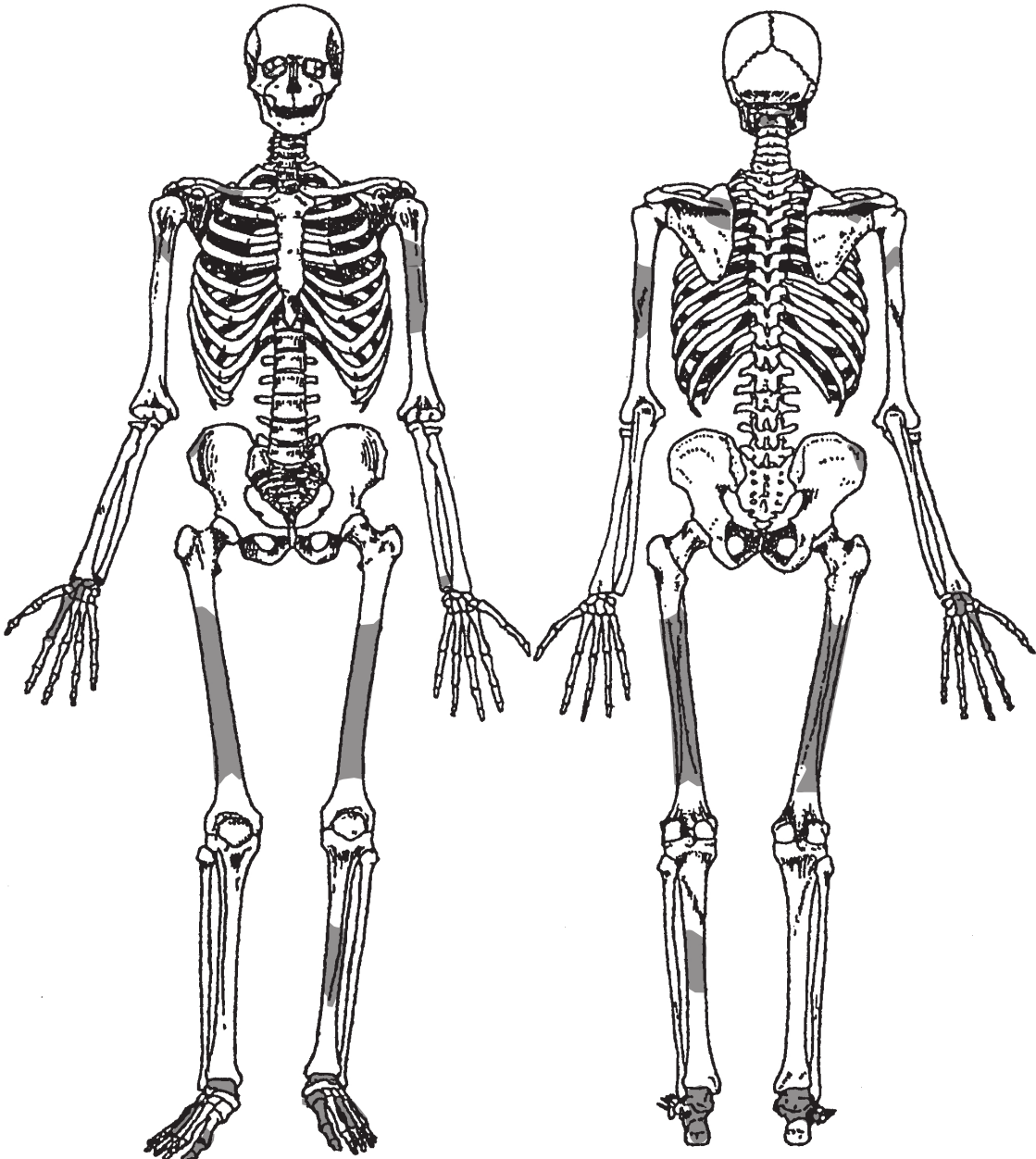
調査次数	第1次	層位	下層	性別	女性
人骨番号	N1-2号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	成年
九大人骨番号	N-1-2	埋葬方法	二次葬	抜歯	不明
副葬品					
貝輪	竜佩	ガラス玉			
オオツタノハ	マクラガイ科製玉類	二孔板状貝製品			
ゴホウラ	イモガイ科製玉類	円盤状貝製品			
イモガイ	ノシガイ製玉類	ヤコウガイ製品			
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類	土器			
貝符	細型ツノガイ科玉類				
特記事項					
					

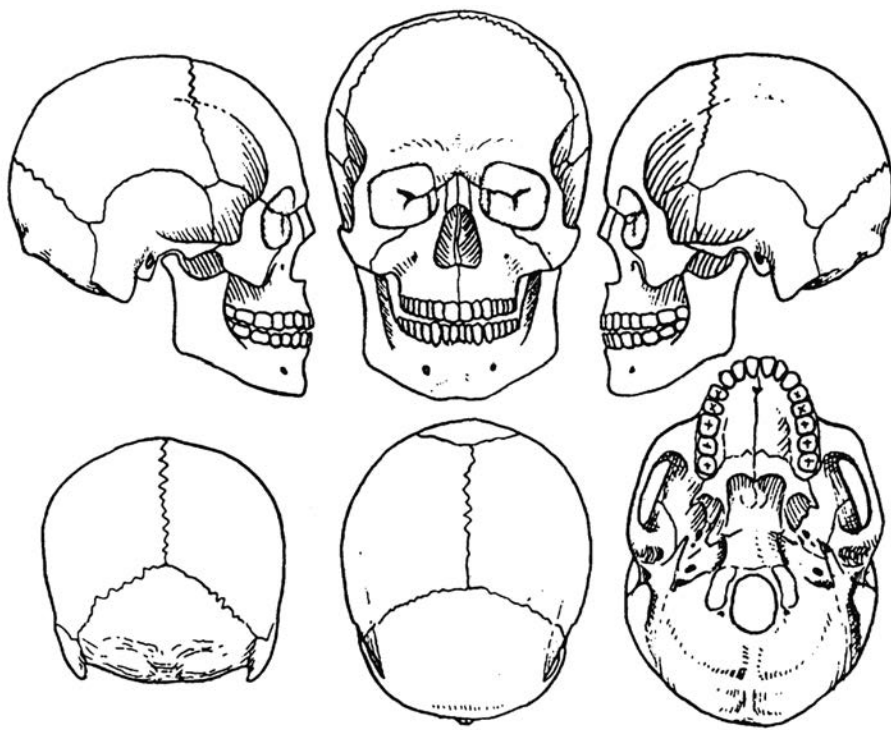
人骨番号	N1-2号人骨	九大人骨番号	N-1-2
特記事項			
			

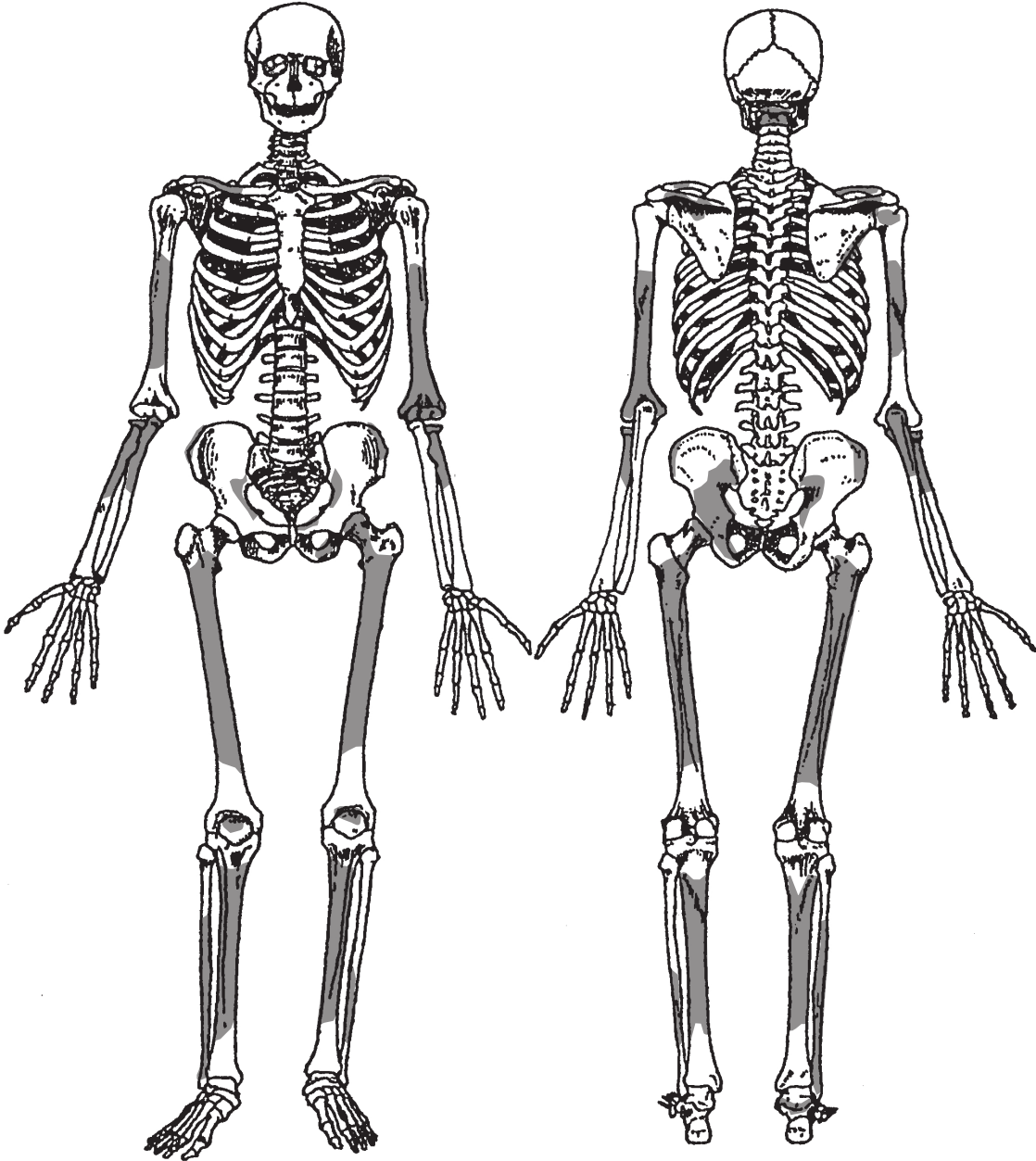
調査次数	第1次	層位	下層	性別	不明
人骨番号	—	埋葬施設	土壙墓	年齢	成人～
九大人骨番号	I G廓内下層	埋葬方法	二次葬	抜歯	不明
特記事項					
					

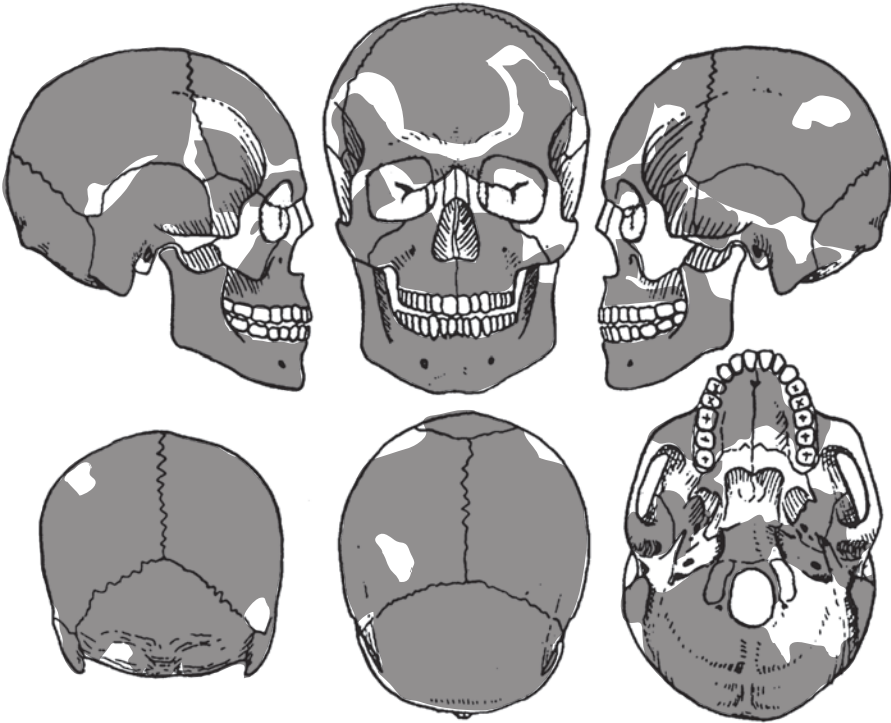
調査次数	第1次	層位	下層	性別	不明
人骨番号	—	埋葬施設	土壙墓	年齢	成人～
九大人骨番号	下I (N-1)	埋葬方法	二次葬	抜歯	不明
特記事項					
・成人骨3体分があり、同一個体かは不明。					

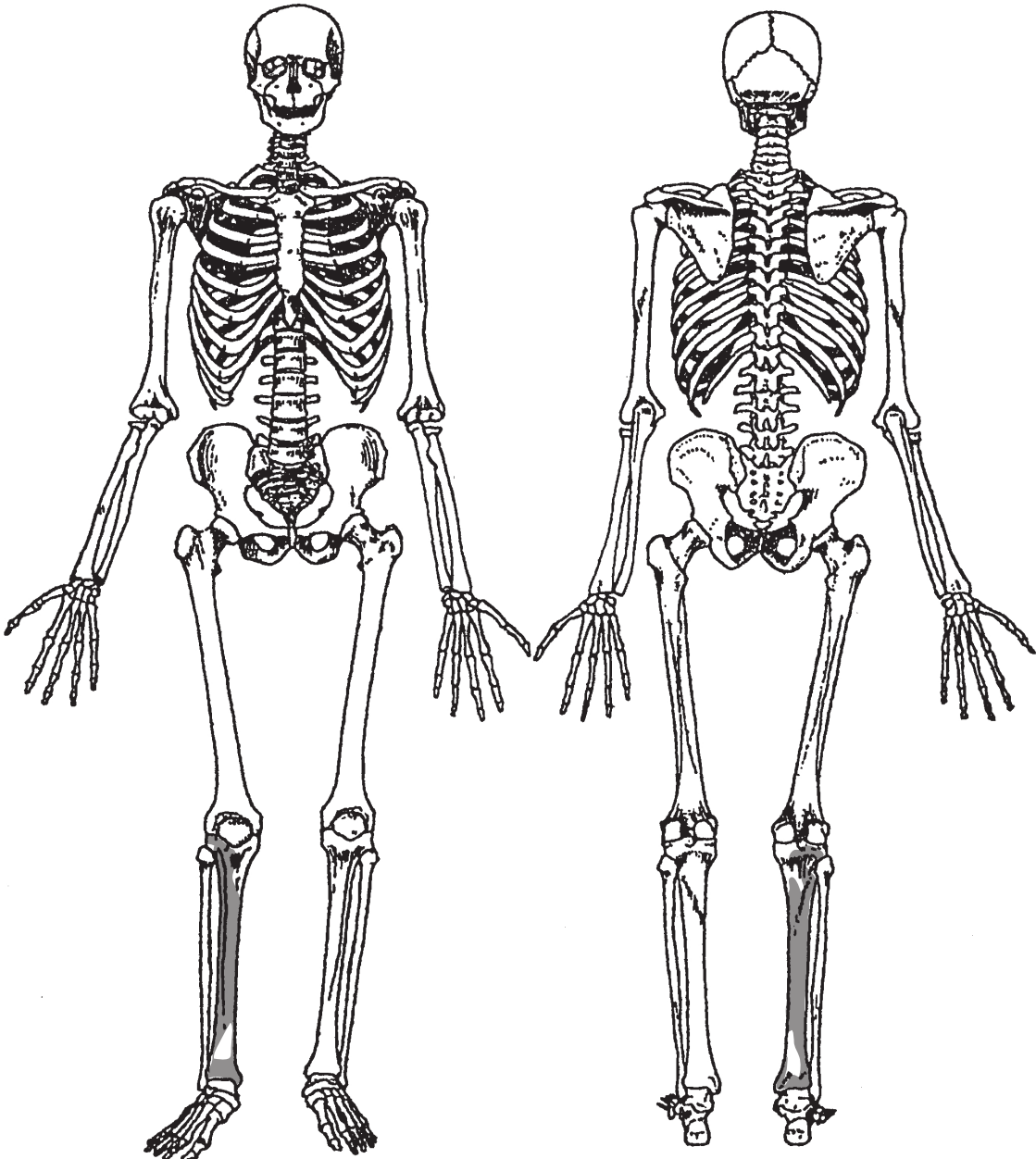
調査次数	第1次	層位	下層	性別	女性
人骨番号	N2号東側人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	成年
九大人骨番号	N-2-E	埋葬方法	二次葬	抜歯	左上C
副葬品					
貝輪	竜佩	ガラス玉			
オオツタノハ	マクラガイ科製玉類	二孔板状貝製品			
ゴホウラ 4	イモガイ科製玉類	円盤状貝製品			
イモガイ 1	ノシガイ製玉類	ヤコウガイ製品			
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類	土器			
貝符	細型ツノガイ科玉類				
特記事項					
					

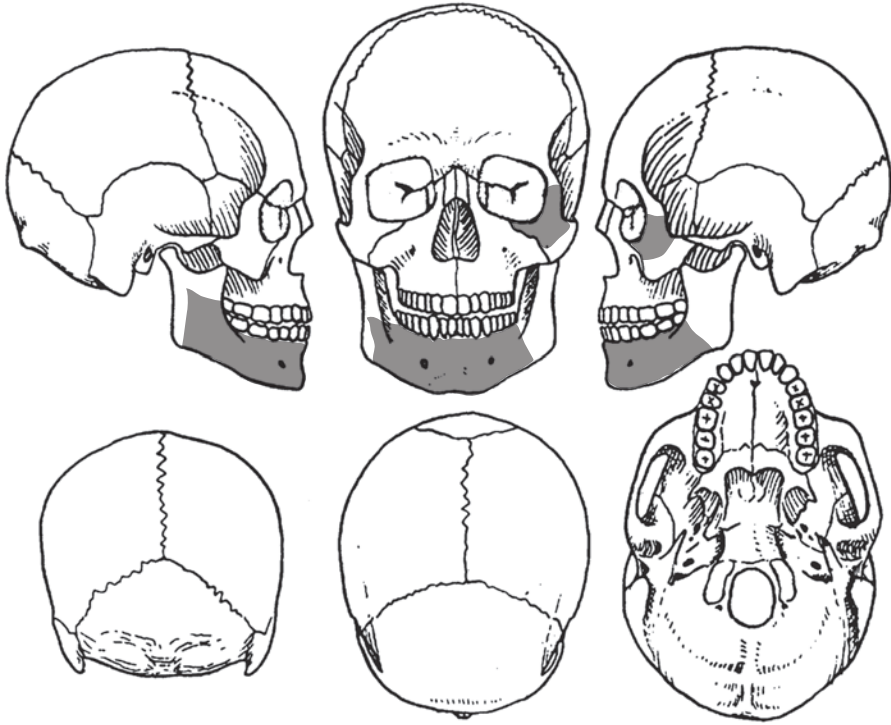
人骨番号	N2号東側人骨	九大人骨番号	N-2-E
特記事項			
			

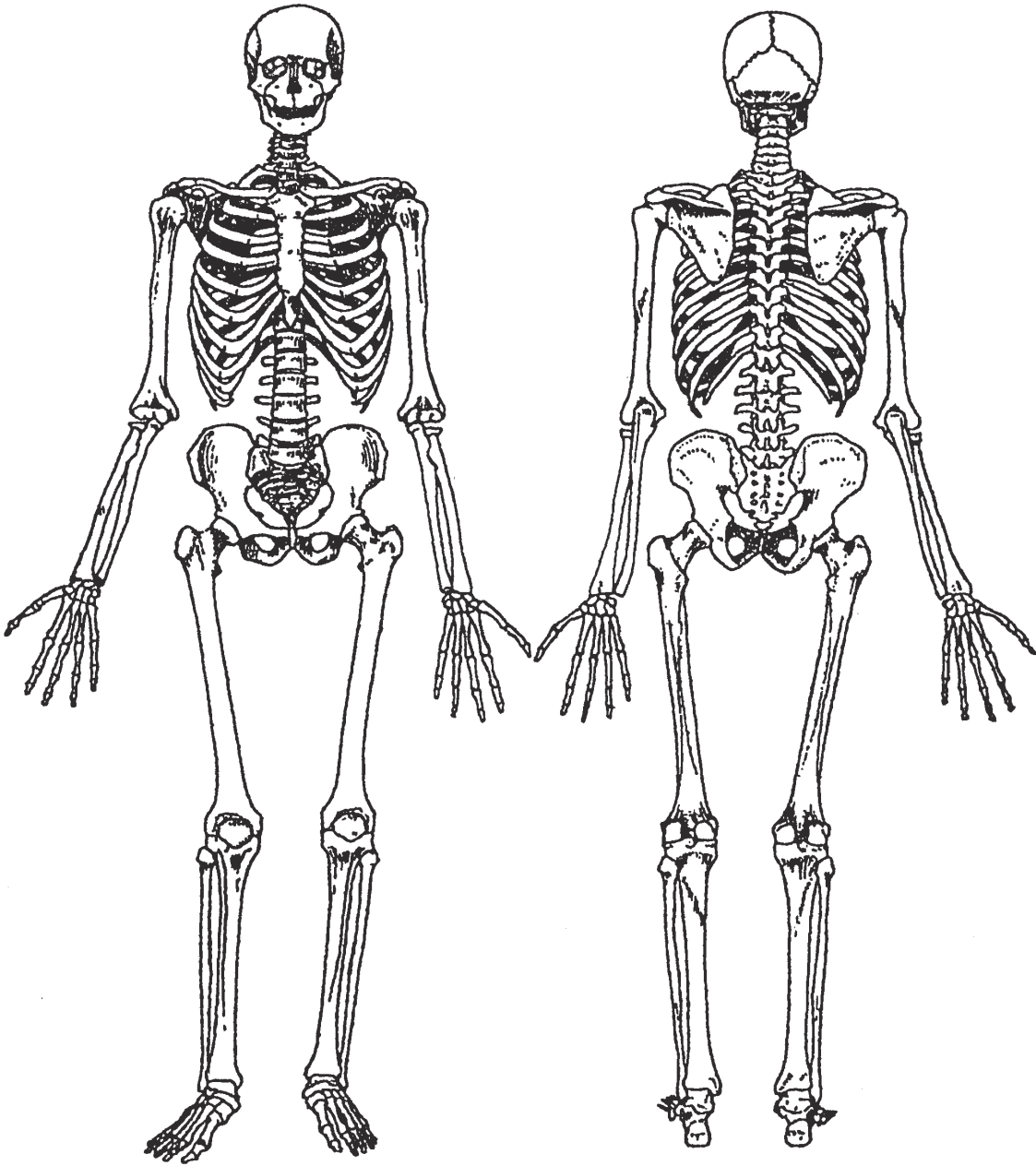
調査次数	第1次	層位	下層	性別	男性
人骨番号	N2号西側人骨	埋葬施設	土壌墓	年齢	熟年
九大人骨番号	N-2-W	埋葬方法	二次葬	抜歯	右上I2
副葬品					
貝輪	竜佩	ガラス玉			
オオツタノハ	マクラガイ科製玉類	二孔板状貝製品			
ゴホウラ 1	イモガイ科製玉類	円盤状貝製品			
イモガイ	ノシガイ製玉類	ヤコウガイ製品			
オニ・パウ	大型ツノガイ科玉類	土器			
貝符 10	細型ツノガイ科玉類 68				
特記事項					
					

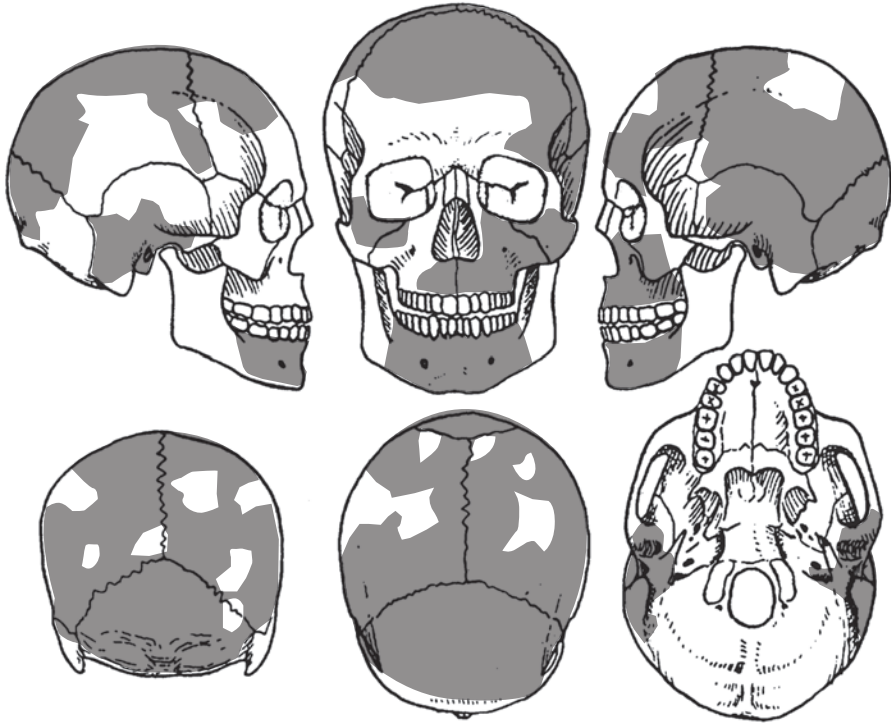
人骨番号	N2号西側人骨	九大人骨番号	N-2-W
特記事項			
			

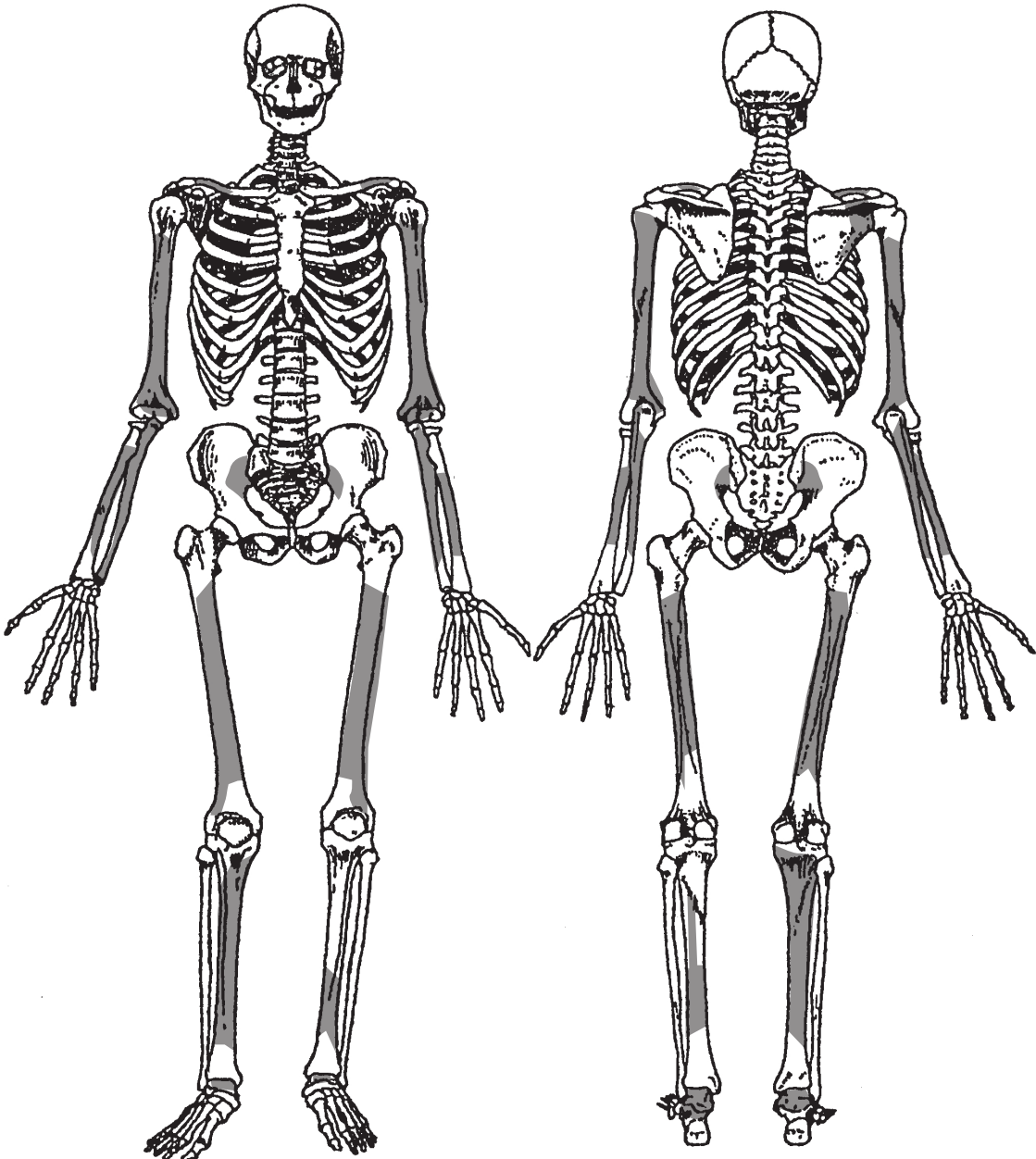
調査次数	第1次	層位	下層	性別	男性
人骨番号	N3号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	熟年
九大人骨番号	N-3	埋葬方法	一次葬	抜歯	なし
副葬品					
貝輪	竜佩		ガラス玉		
オオツタノハ	マクラガイ科製玉類		二孔板状貝製品		
ゴホウラ	イモガイ科製玉類		円盤状貝製品		
イモガイ	ノシガイ製玉類		ヤコウガイ製品		
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類	11	土器	1	
貝符	細型ツノガイ科玉類				
特記事項					
					

人骨番号	N3号人骨	九大人骨番号	N-3
特記事項			
			

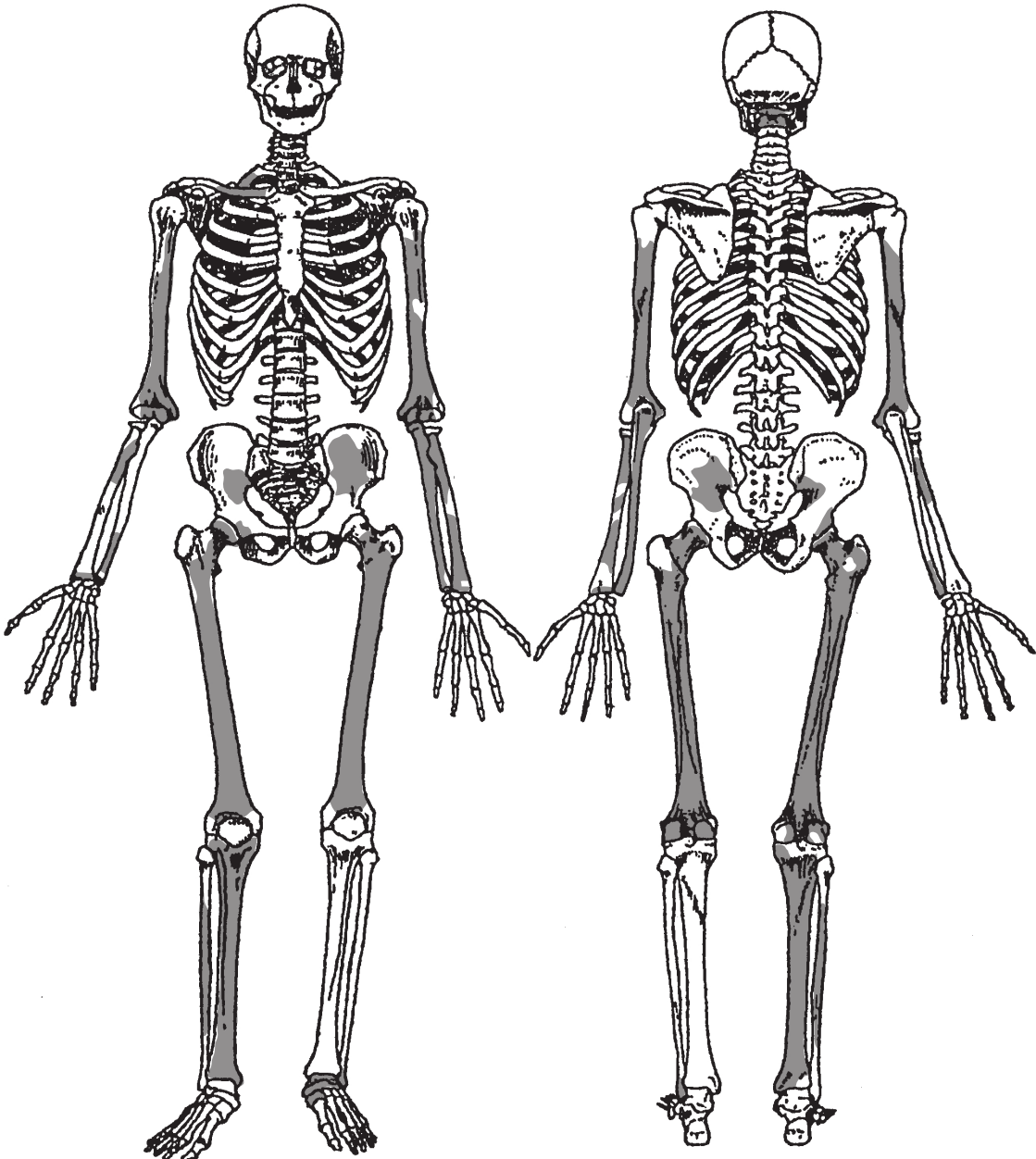
調査次数	第1次	層位	下層	性別	不明
人骨番号	N5号人骨	埋葬施設	不明	年齢	不明
九大人骨番号	No.5	埋葬方法	不明	抜歯	不明
副葬品					
貝輪	竜佩	ガラス玉			
オオツタノハ 3	マクラガイ科製玉類	二孔板状貝製品			
ゴホウラ	イモガイ科製玉類	円盤状貝製品			
イモガイ	ノシガイ製玉類	ヤコウガイ製品			
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類	土器			
貝符	細型ツノガイ科玉類				
特記事項					
					

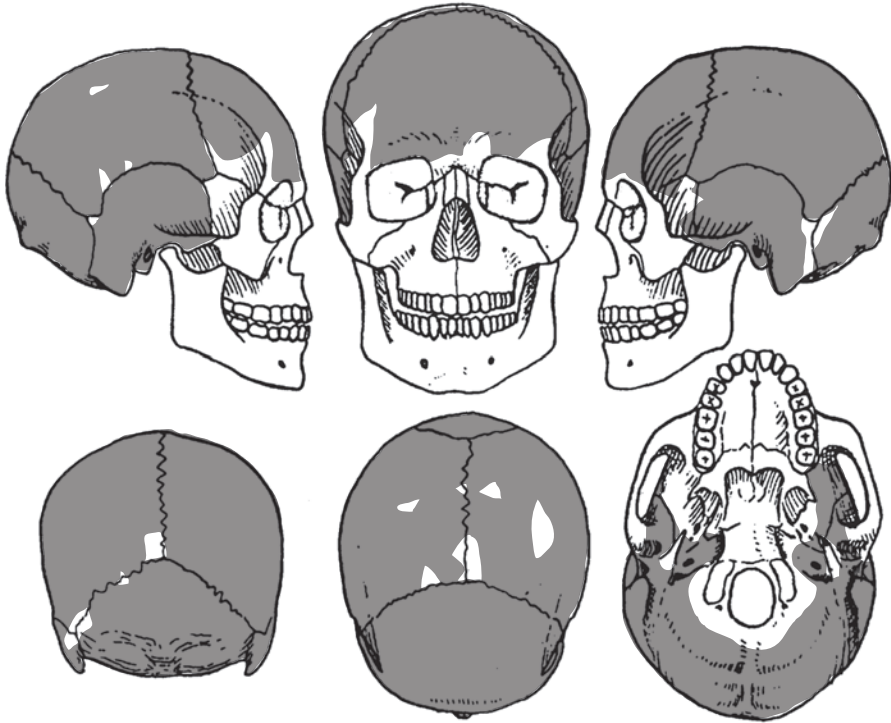
人骨番号	N5号人骨	九大人骨番号	No.5
特記事項			
			

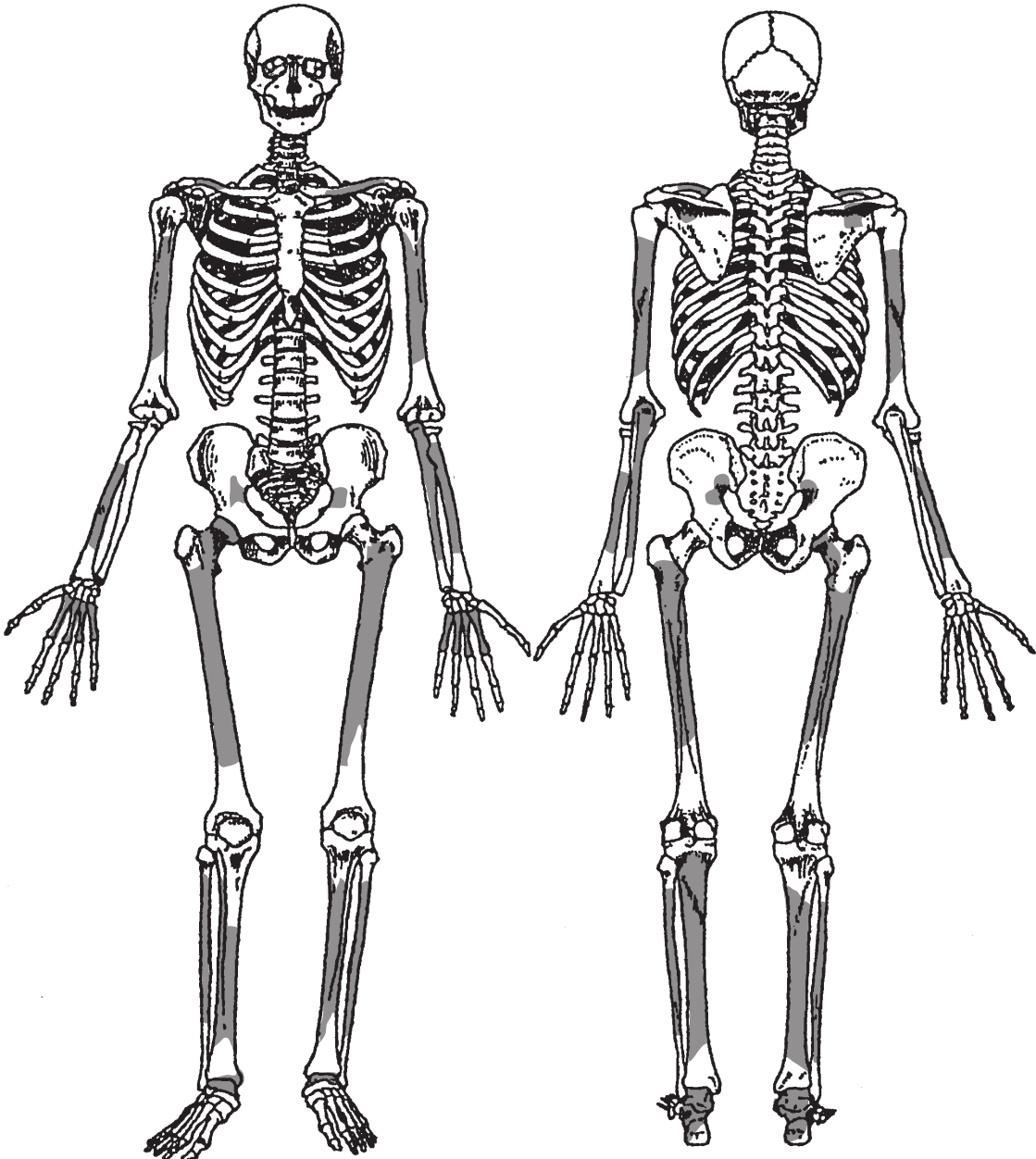
調査次数	第2次	層位	下層	性別	男性
人骨番号	C地区1号人骨	埋葬施設	馬蹄状配石 タイプ?	年齢	熟年
九大人骨番号	C-1	埋葬方法	一次葬	抜歯	右上I2C・左下C
副葬品					
貝輪	竜佩	ガラス玉			
オオツタノハ	マクラガイ科製玉類	二孔板状貝製品			
ゴホウラ	イモガイ科製玉類	円盤状貝製品			
イモガイ	ノシガイ製玉類	ヤコウガイ製品			
オニ・ボウ	1 太型ツノガイ科玉類	土器			
貝符	細型ツノガイ科玉類				
特記事項					
					

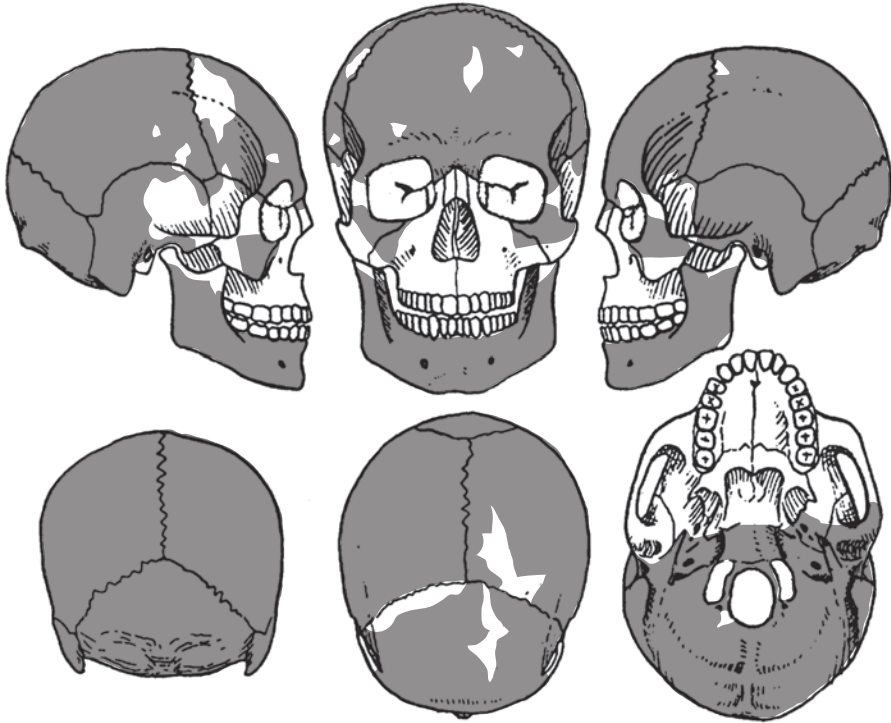
人骨番号	C地区1号人骨	九大人骨番号	C-1
特記事項			
			

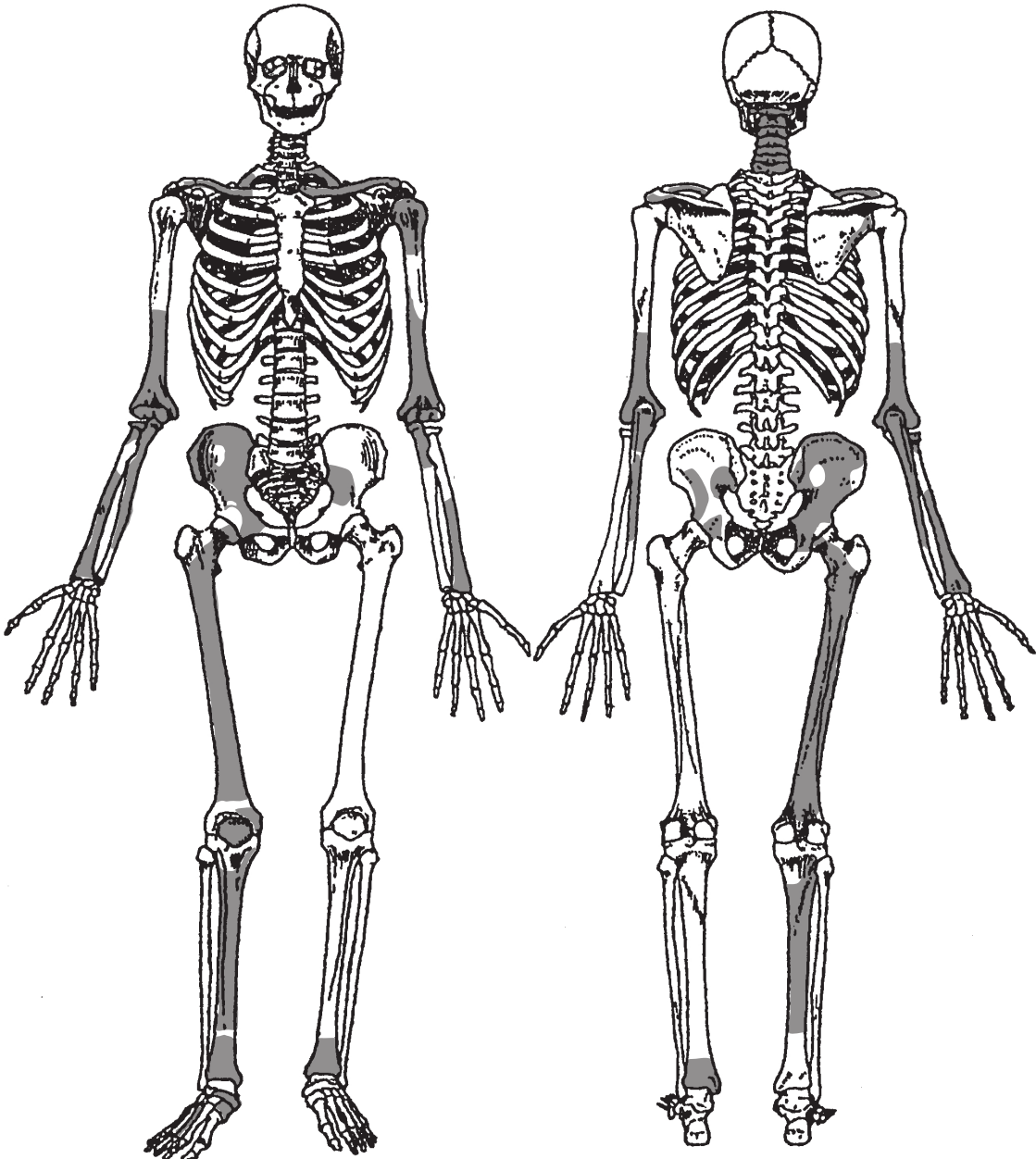
調査次数	第2次	層位	下層	性別	男性
人骨番号	C地区2号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	成年
九大人骨番号	C-2	埋葬方法	一次葬	抜歯	なし
副葬品					
貝輪	竜佩	ガラス玉			
オオツタノハ	マクラガイ科製玉類	二孔板状貝製品			
ゴホウラ	イモガイ科製玉類	円盤状貝製品			
イモガイ	ノシガイ製玉類	ヤコウガイ製品			
オニ・ボウ	1 大型ツノガイ科玉類	土器			
貝符	細型ツノガイ科玉類				
特記事項					

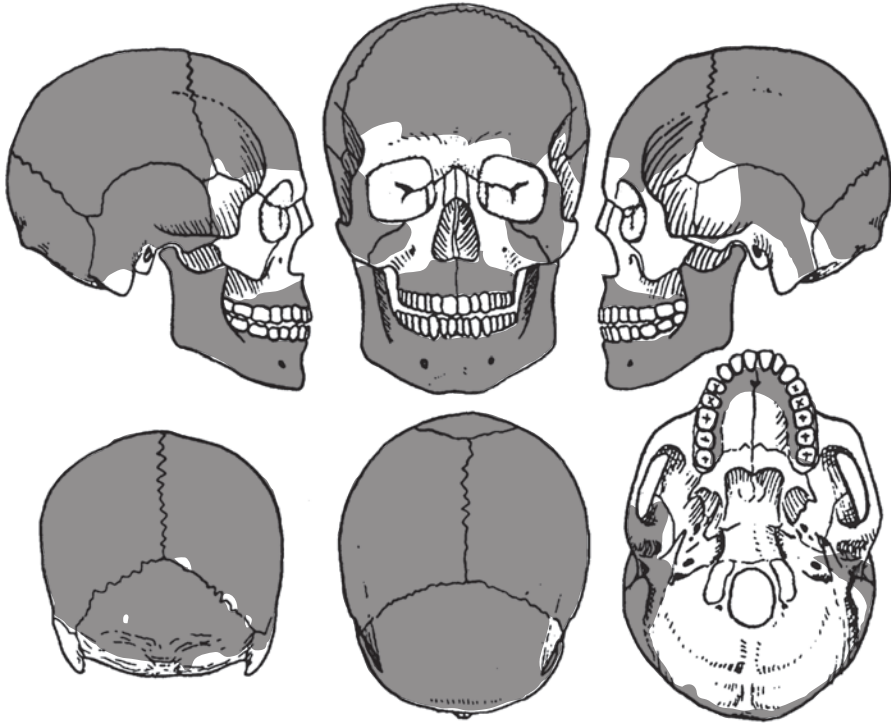
人骨番号	C地区2号人骨	九大人骨番号	C-2
特記事項			
			

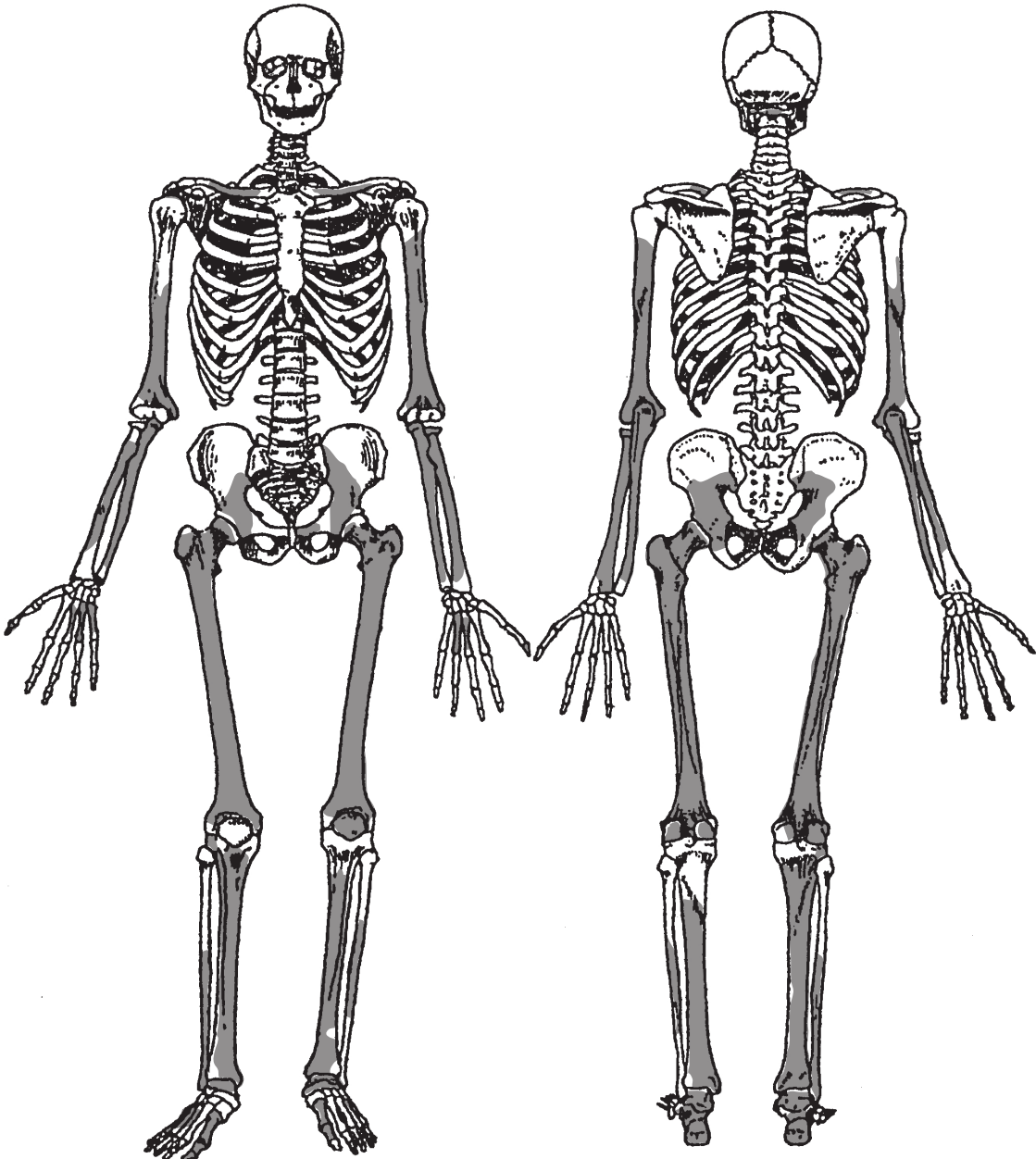
調査次数	第2次	層位	下層	性別	女性
人骨番号	C地区3号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	成年
九大人骨番号	C-3	埋葬方法	一次葬	抜歯	不明
副葬品					
貝輪	竜佩	ガラス玉			
オオツタノハ 2	マクラガイ科製玉類	二孔板状貝製品 13			
ゴホウラ 1	イモガイ科製玉類 9	円盤状貝製品 2			
イモガイ	ノシガイ製玉類 1	ヤコウガイ製品			
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類 1	土器			
貝符	細型ツノガイ科玉類				
特記事項					
・ フクトコブシ2点出土。					
					

人骨番号	C地区3号人骨	九大人骨番号	C-3
特記事項			
			

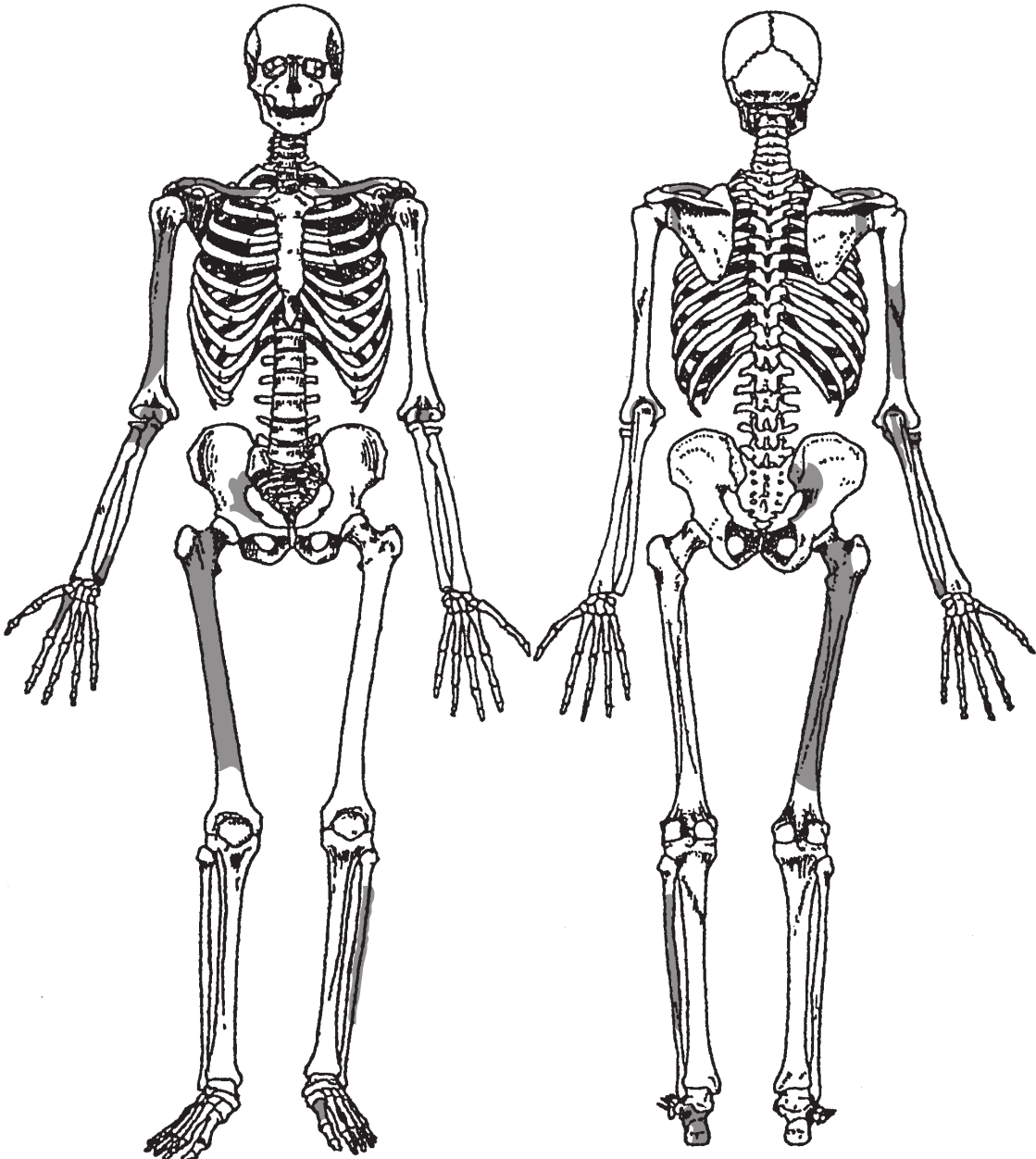
調査次数	第2次	層位	下層	性別	男性
人骨番号	C地区4号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	熟年
九大人骨番号	C-4	埋葬方法	一次葬	抜歯	不明
副葬品					
貝輪	竜佩		ガラス玉		
オオツタノハ 1	マクラガイ科製玉類		二孔板状貝製品		
ゴホウラ 1	イモガイ科製玉類	18	円盤状貝製品		
イモガイ	ノシガイ製玉類		ヤコウガイ製品		
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類	(2)	土器		
貝符	細型ツノガイ科玉類	2(なし)			
特記事項					
					

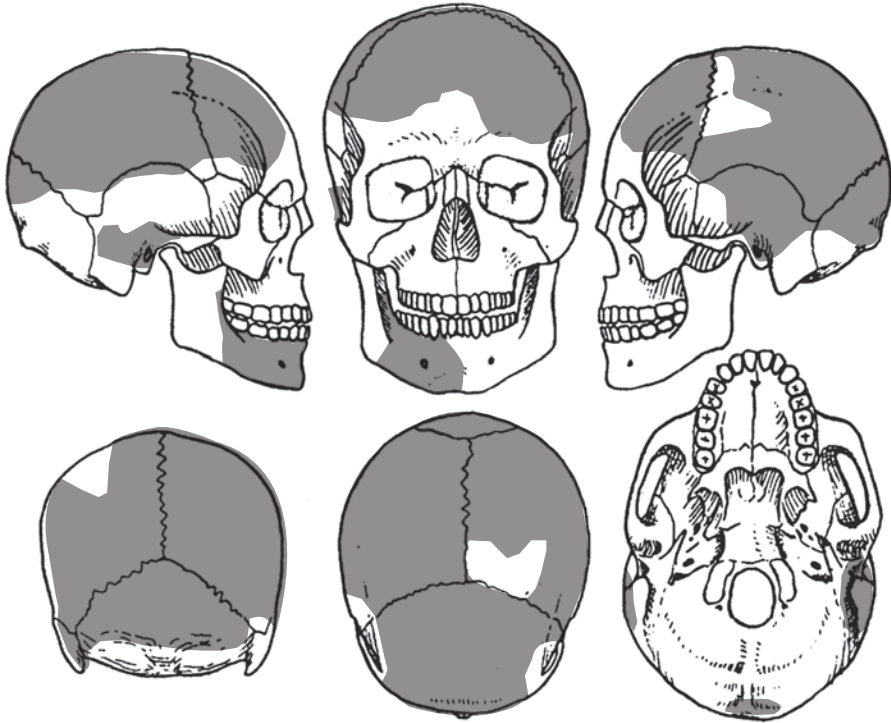
人骨番号	C地区4号人骨	九大人骨番号	C-4
特記事項			
			

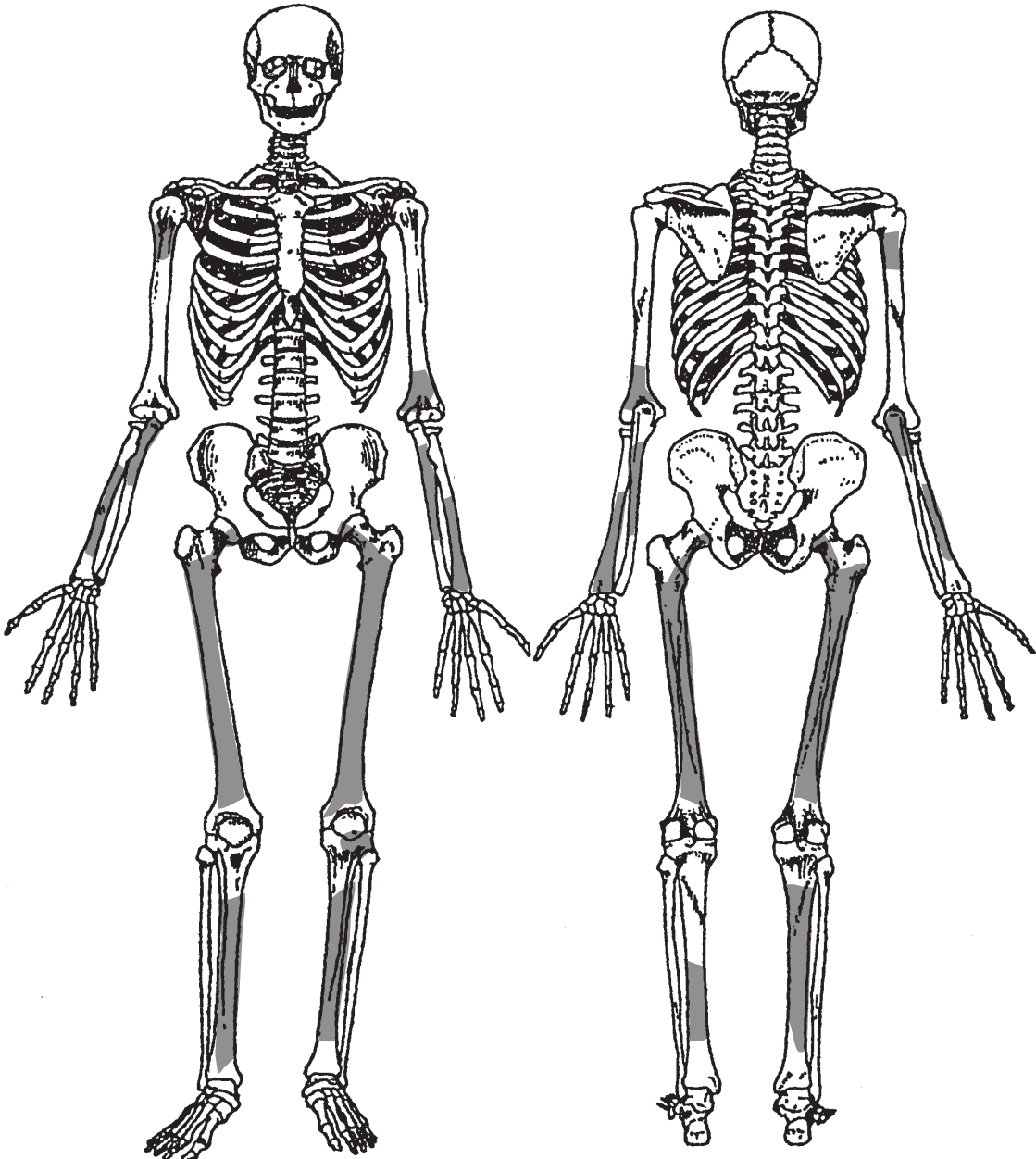
調査次数	第2次	層位	下層	性別	女性
人骨番号	C地区5号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	成年
九大人骨番号	C-5	埋葬方法	一次葬	抜歯	右上I2C
副葬品					
貝輪	竜佩	4	ガラス玉		
オオツタノハ	マクラガイ科製玉類		二孔板状貝製品		
ゴホウラ	イモガイ科製玉類	617	円盤状貝製品		
イモガイ	ノシガイ製玉類	2	ヤコウガイ製品	1	
オニ・ボウ	1 大型ツノガイ科玉類	21(19)	土器		
貝符	6 細型ツノガイ科玉類	110(45)			
特記事項					
					

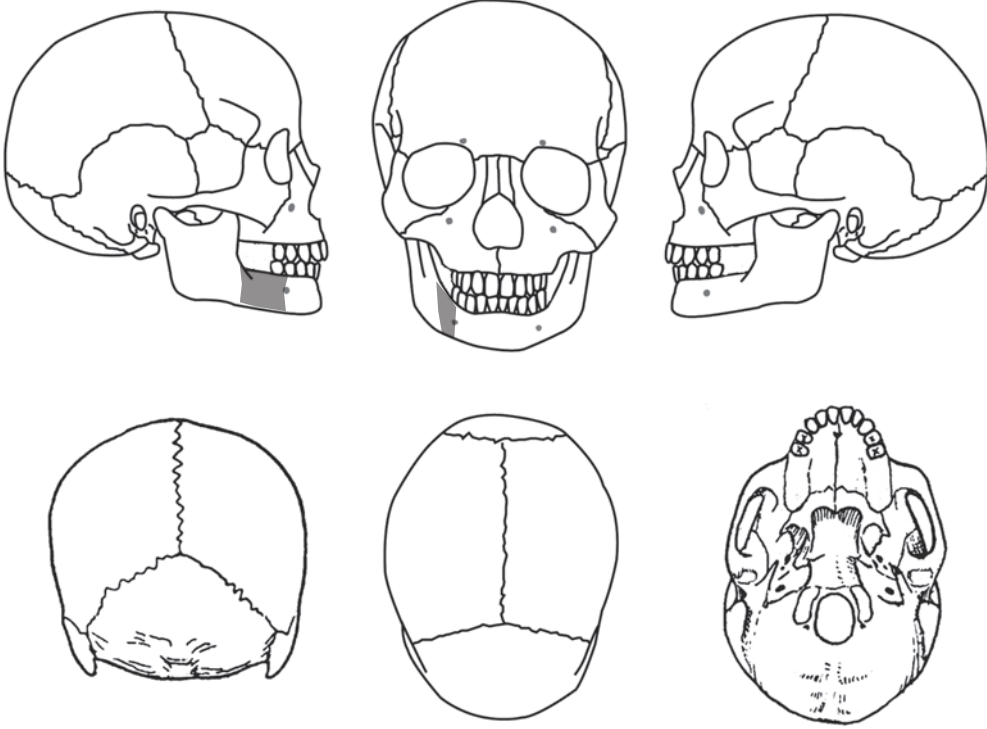
人骨番号	C地区5号人骨	九大人骨番号	C-5
特記事項			
			

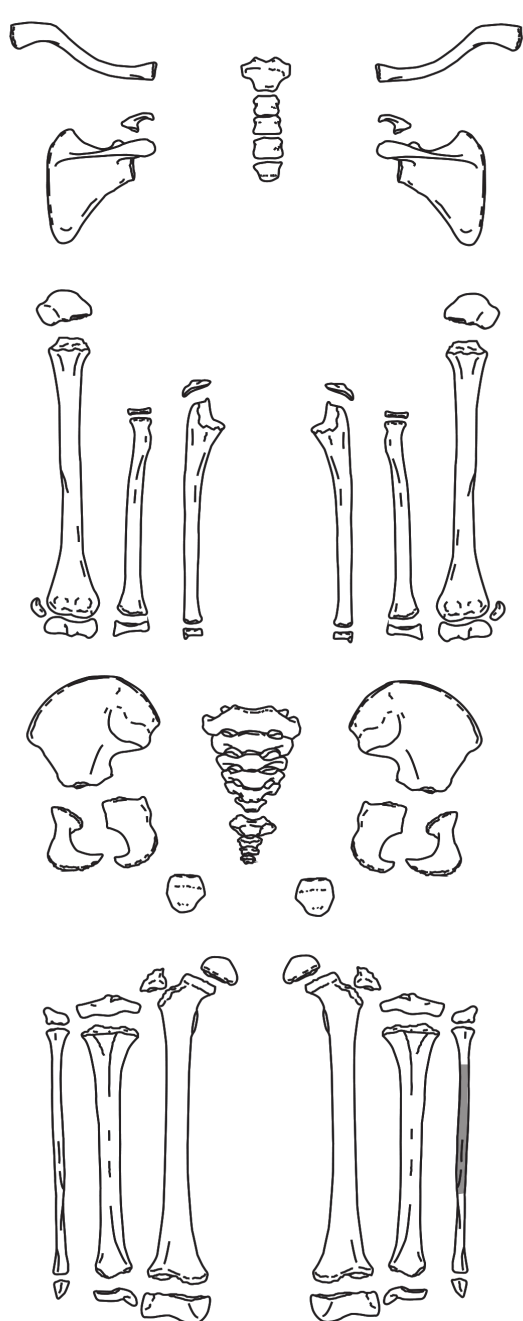
調査次数	第2次	層位	下層	性別	男性
人骨番号	C地区6号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	成年
九大人骨番号	C-6	埋葬方法	一次葬	抜歯	左上I2
副葬品					
貝輪	竜佩		ガラス玉		
オオツタノハ 2	マクラガイ科製玉類		二孔板状貝製品		
ゴホウラ	イモガイ科製玉類	59	円盤状貝製品		
イモガイ	ノシガイ製玉類	3	ヤコウガイ製品		
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類		土器		
貝符	細型ツノガイ科玉類	1			
特記事項					

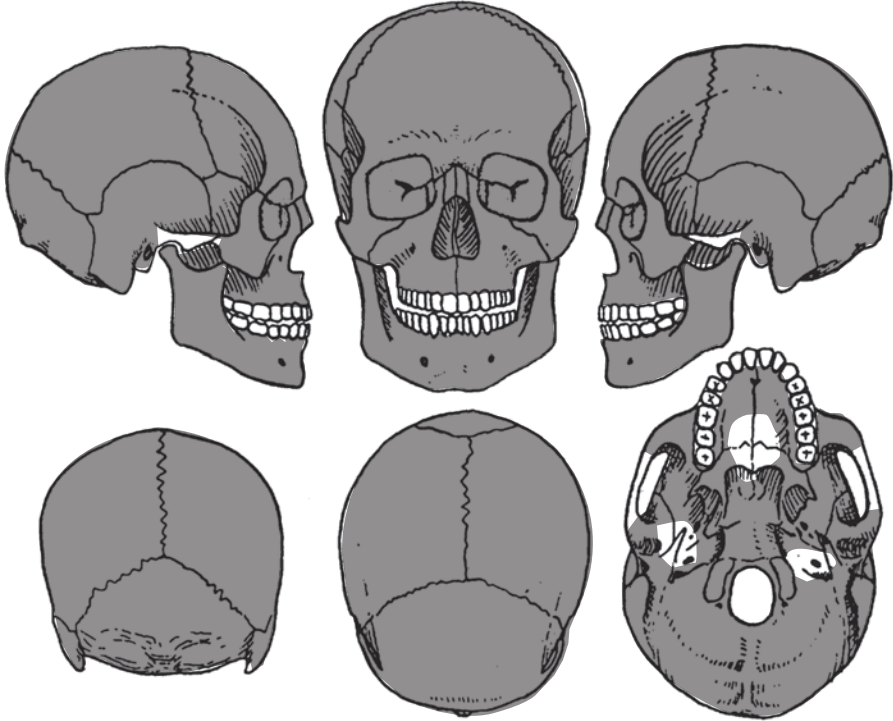
人骨番号	C地区6号人骨	九大人骨番号	C-6
特記事項			
			

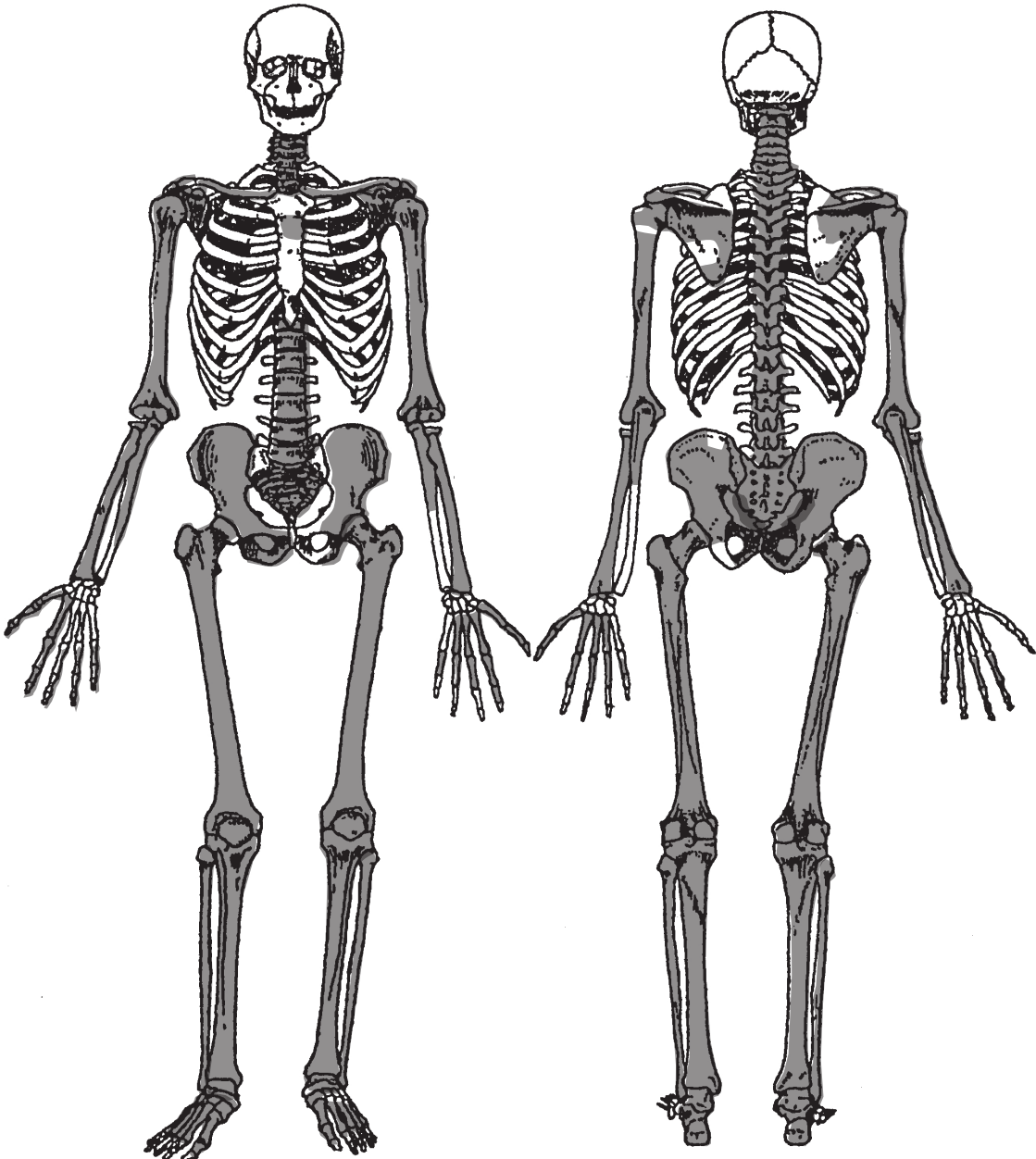
調査次数	第2次	層位	下層	性別	女性
人骨番号	C地区7号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	成～熟年
九大人骨番号	C-7	埋葬方法	一次葬	抜歯	不明
副葬品					
貝輪	竜佩	ガラス玉			
オオツタノハ	マクラガイ科製玉類	二孔板状貝製品			
ゴホウラ	イモガイ科製玉類	円盤状貝製品			
イモガイ	ノシガイ製玉類	ヤコウガイ製品			
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類	土器			
貝符	細型ツノガイ科玉類				
特記事項					
					

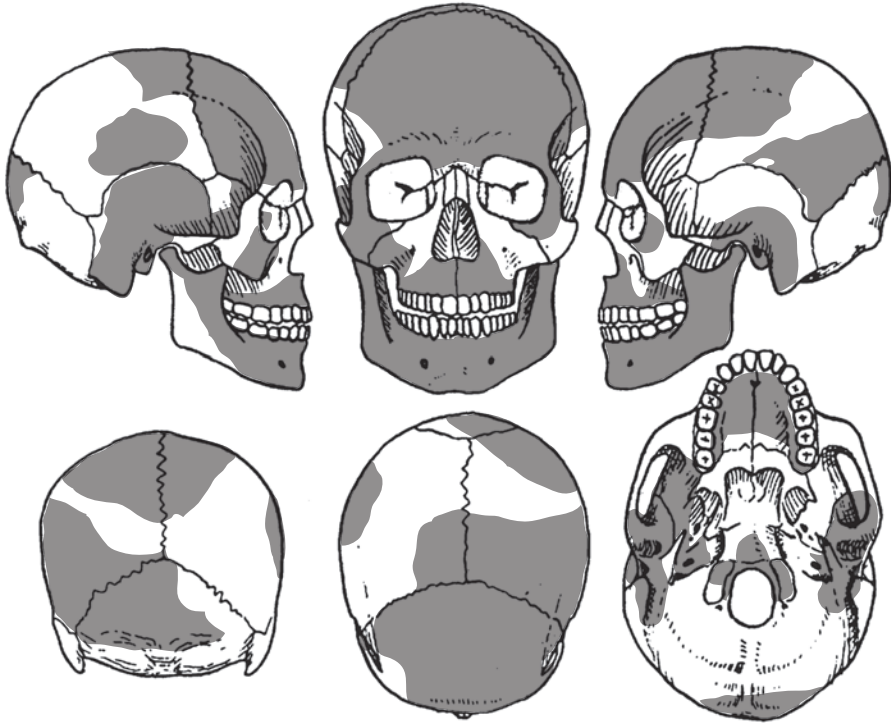
人骨番号	C地区7号人骨	九大人骨番号	C-7
特記事項			
			

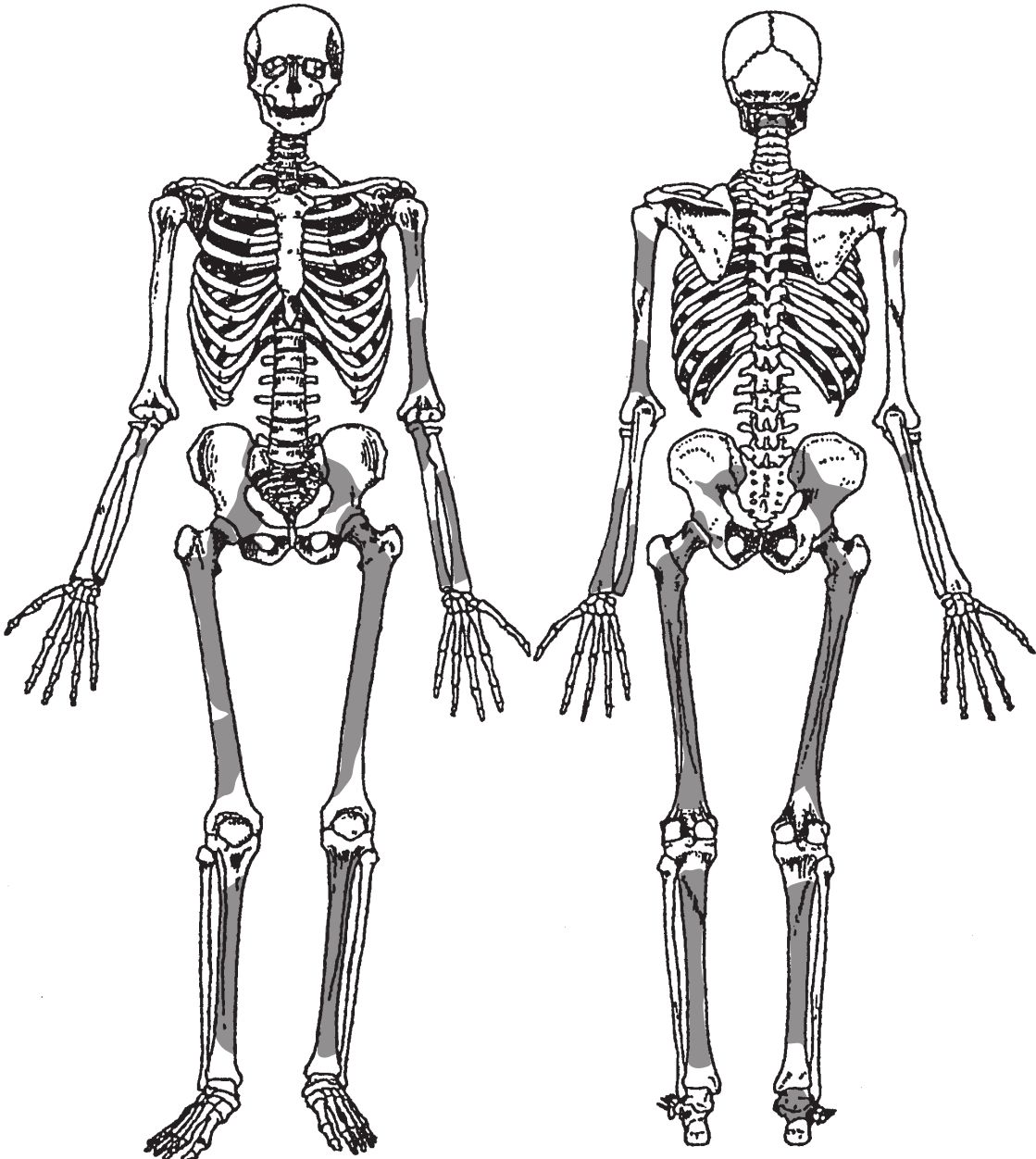
人骨番号	C地区7号人骨	九大人骨番号	C-7
特記事項			
<p>・別個体の未成人骨の頭蓋。</p>			
 <p>The image contains six line drawings of a human skull, arranged in two rows of three. The top row shows lateral, frontal, and right lateral views. The bottom row shows posterior, anterior, and inferior views. The skull is depicted with clear outlines of the cranium, facial bones, and teeth.</p>			

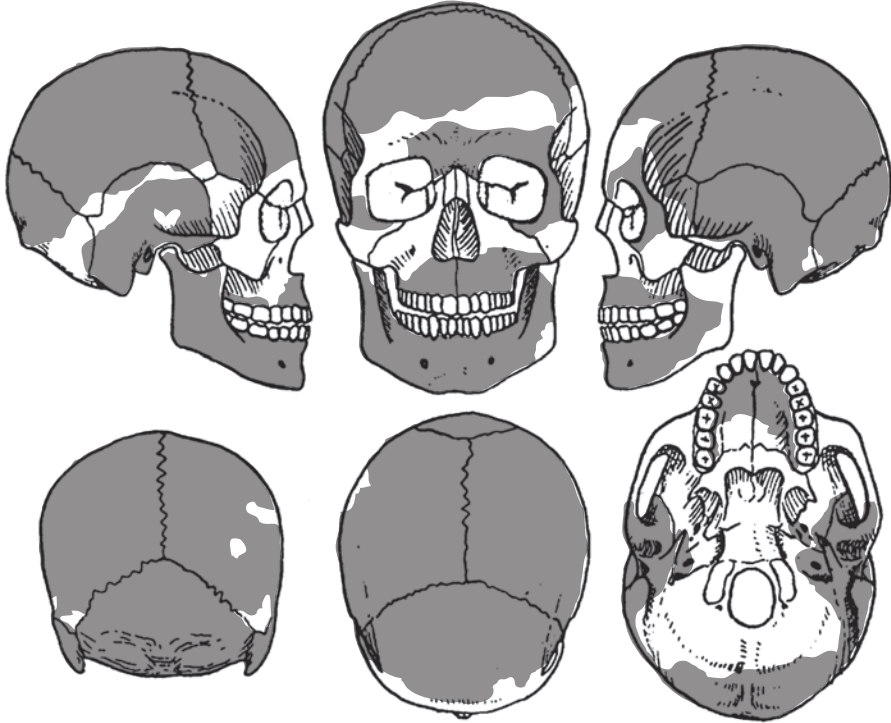
人骨番号	C地区7号人骨	九大人骨番号	C-7
特記事項			
<p>・別個体の未成人骨の四肢骨。</p>			
 <p>The image displays line drawings of skeletal remains arranged in four rows. The first row shows two curved scapulae and a central column of five vertebrae. The second row shows two humeri and two radii/ulnae. The third row shows two skull fragments, a central column of five vertebrae, and two small circular bones. The fourth row shows two femurs and two tibiae/fibulae.</p>			

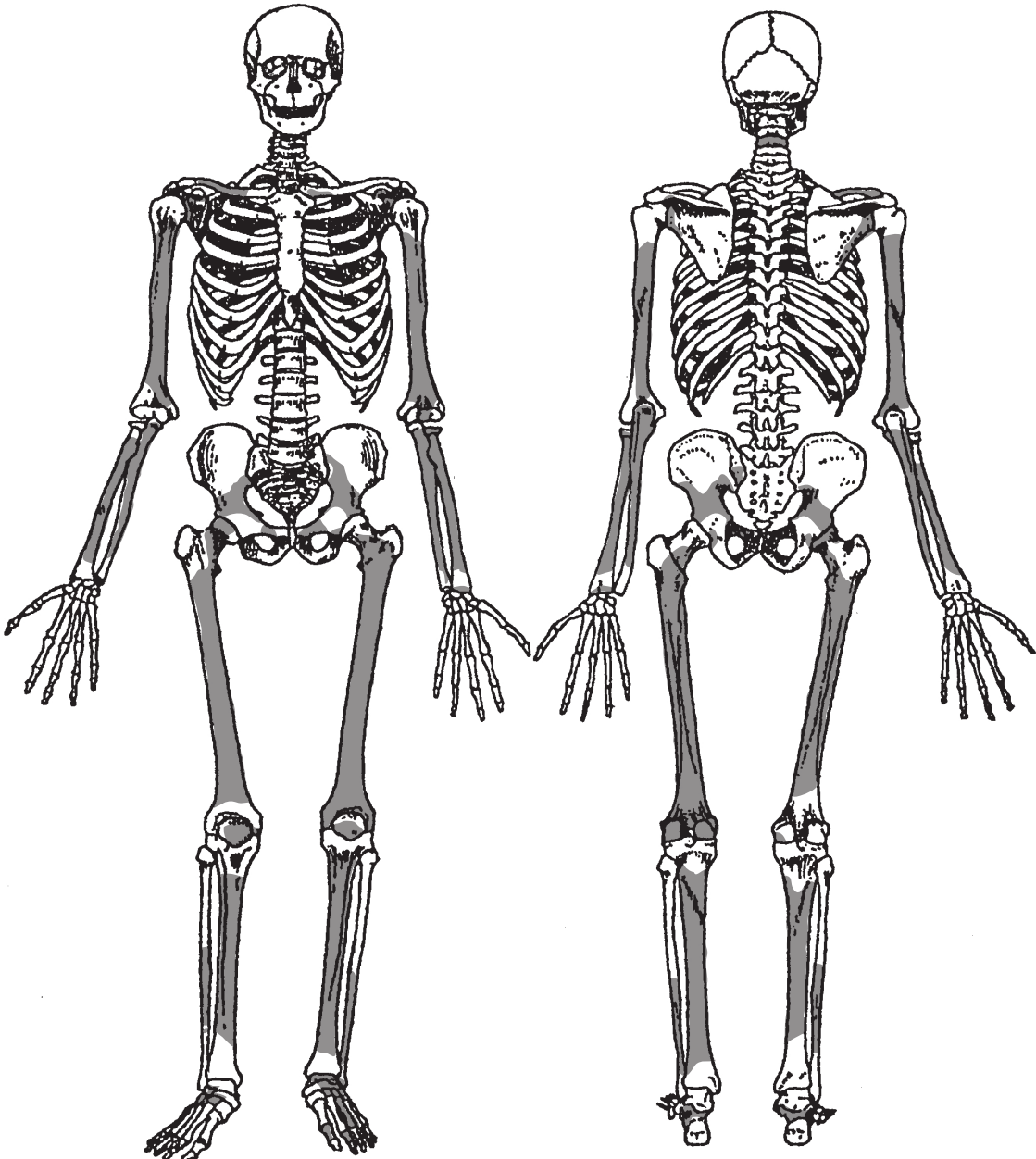
調査次数	第2次	層位	下層	性別	男性
人骨番号	C地区8号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	熟年
九大人骨番号	C-8	埋葬方法	一次葬	抜歯	なし
副葬品					
貝輪	竜佩		ガラス玉		
オオツタノハ 2	マクラガイ科製玉類	19	二孔板状貝製品		
ゴホウラ	イモガイ科製玉類	14	円盤状貝製品		
イモガイ	ノシガイ製玉類		ヤコウガイ製品		
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類		土器		
貝符	細型ツノガイ科玉類	11			
特記事項					
					

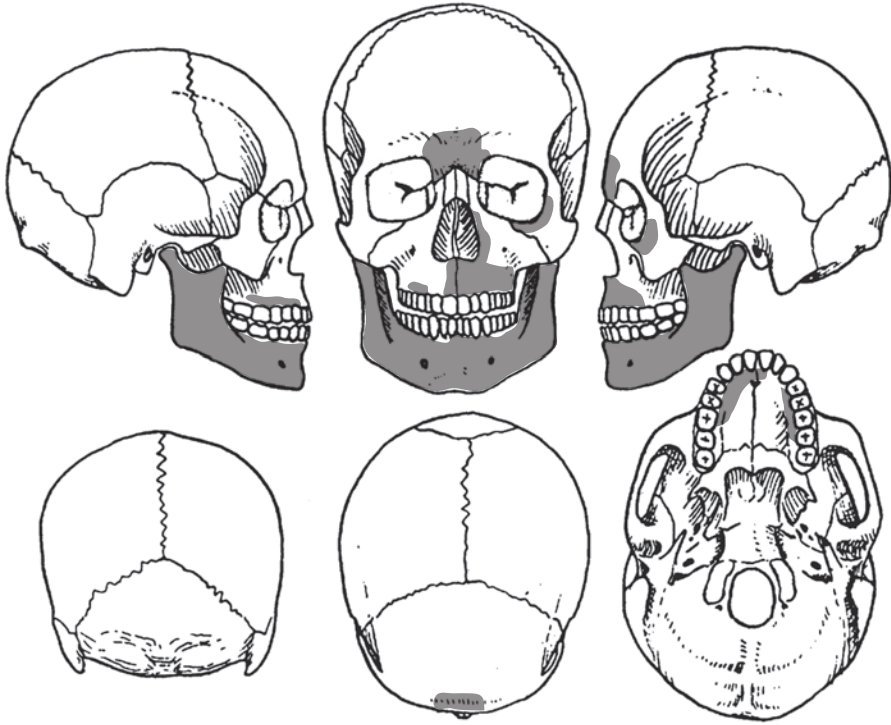
人骨番号	C地区8号人骨	九大人骨番号	C-8
特記事項			
			

調査次数	第2次	層位	下層	性別	女性
人骨番号	C地区11号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	成年
九大人骨番号	C-11	埋葬方法	一次葬	抜歯	なし
副葬品					
貝輪	竜佩		ガラス玉		
オオツタノハ 11	マクラガイ科製玉類		二孔板状貝製品		
ゴホウラ 2	イモガイ科製玉類	1044	円盤状貝製品	2	
イモガイ	ノシガイ製玉類	5	ヤコウガイ製品		
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類	13	土器		
貝符 4	細型ツノガイ科玉類	33			
特記事項					
					

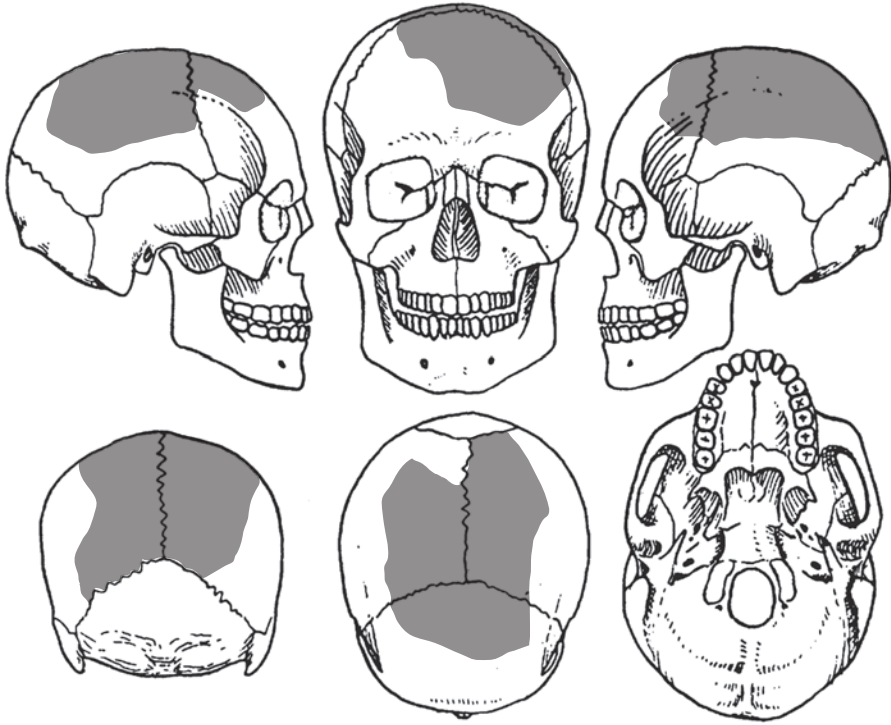
人骨番号	C地区11号人骨	九大人骨番号	C-11
特記事項			
			

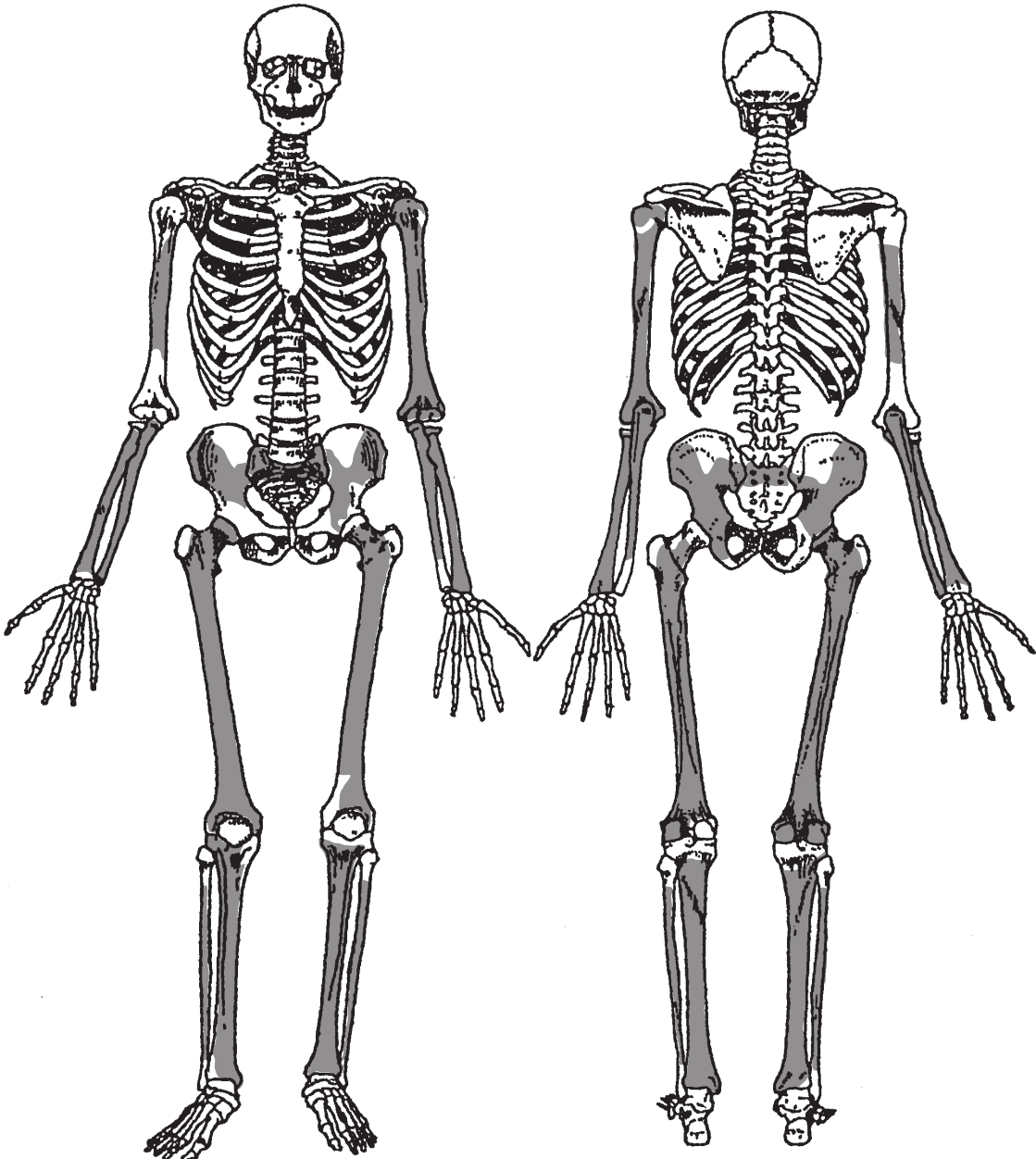
調査次数	第2次	層位	下層	性別	男性
人骨番号	C地区12号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	成年
九大人骨番号	C-12	埋葬方法	一次葬	抜歯	左上I2C
副葬品					
貝輪	竜佩		ガラス玉		
オオツタノハ	マクラガイ科製玉類		二孔板状貝製品		
ゴホウラ	イモガイ科製玉類	873	円盤状貝製品		
イモガイ	ノシガイ製玉類	16	ヤコウガイ製品		
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類	8	土器		
貝符	7	細型ツノガイ科玉類	61		
特記事項					
					

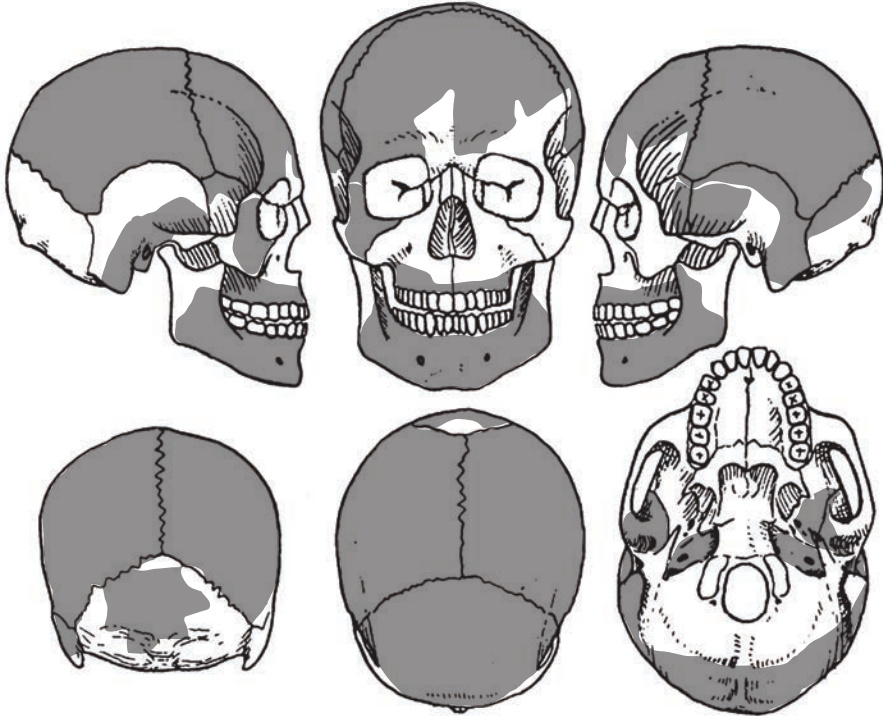
人骨番号	C地区12号人骨	九大人骨番号	C-12
特記事項			
			

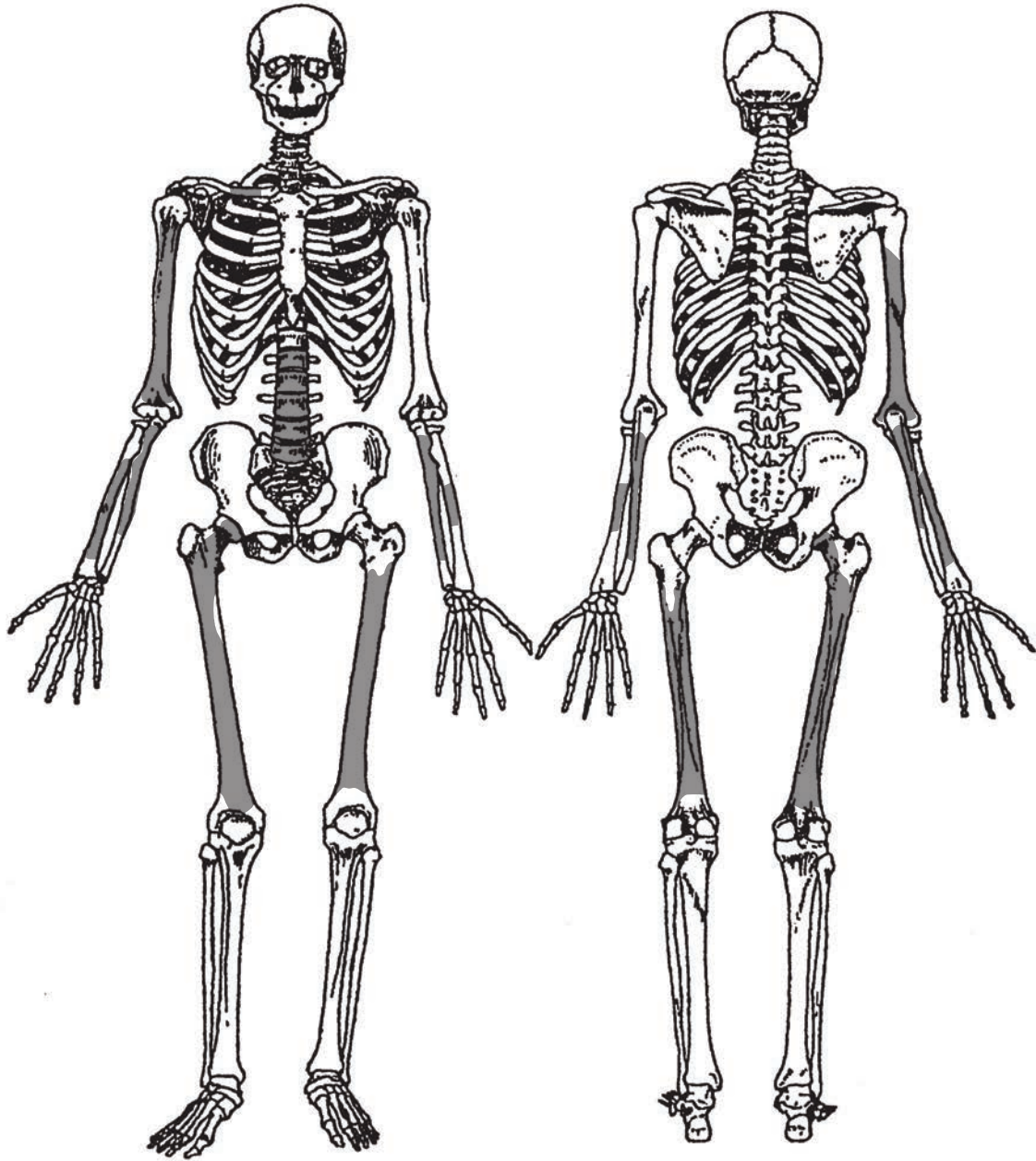
調査次数	第2次	層位	下層	性別	男性
人骨番号	C地区13号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	熟年
九大人骨番号	C-13	埋葬方法	一次葬	抜歯	右上I2C
副葬品					
貝輪	竜佩	2	ガラス玉		
オオツタノハ	3	マクラガイ科製玉類	二孔板状貝製品		
ゴホウラ		イモガイ科製玉類	617(622)	円盤状貝製品	
イモガイ	1	ノシガイ製玉類	20	ヤコウガイ製品	1
オニ・ボウ		大型ツノガイ科玉類	102	土器	
貝符	4	細型ツノガイ科玉類	352		
特記事項					
					

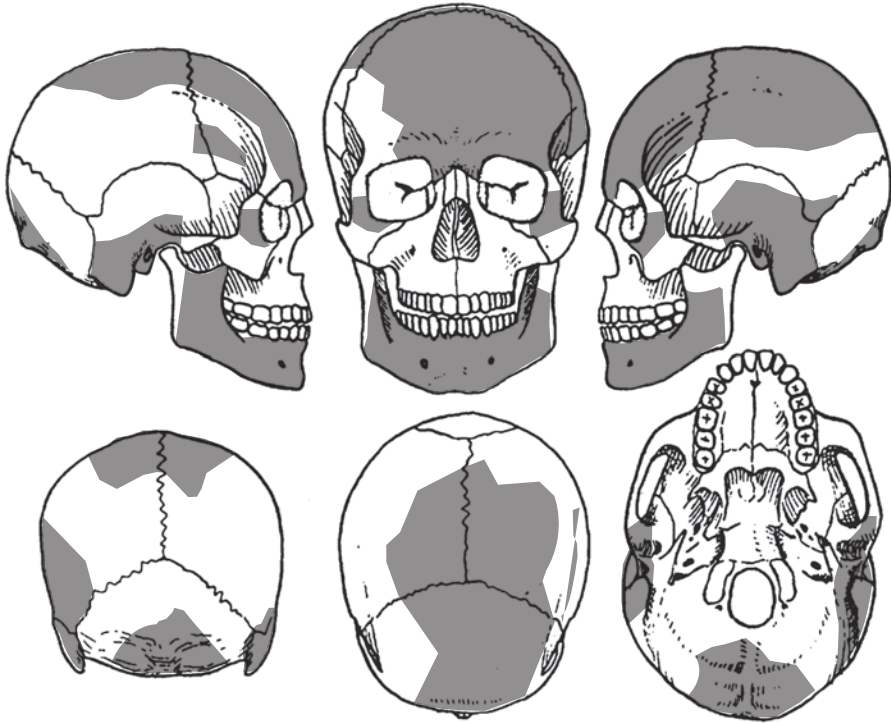
人骨番号	C地区13号人骨	九大人骨番号	C-13
特記事項			

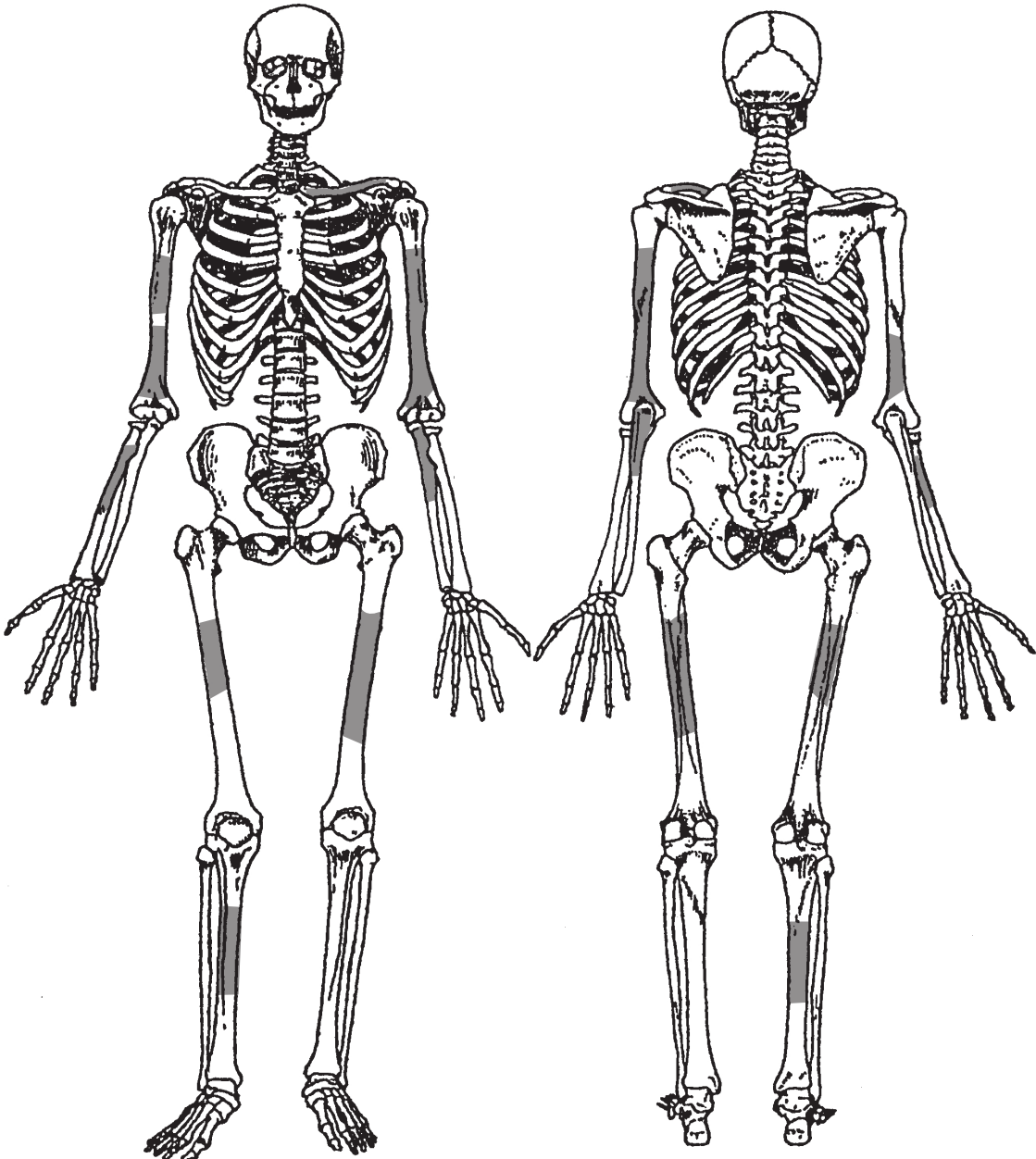
調査次数	第2次	層位	下層	性別	女性
人骨番号	C地区14号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	成年
九大人骨番号	C-14	埋葬方法	一次葬	抜歯	左上I2C
副葬品					
貝輪	竜佩	3	ガラス玉		
オオツタノハ	35	マクラガイ科製玉類	二孔板状貝製品		
ゴホウラ	2	イモガイ科製玉類	169	円盤状貝製品	1
イモガイ		ノシガイ製玉類	6	ヤコウガイ製品	
オニ・ボウ		大型ツノガイ科玉類	31	土器	
貝符	1	細型ツノガイ科玉類	102		
特記事項					
・成人骨2体分（男性と女性）あり。					
					

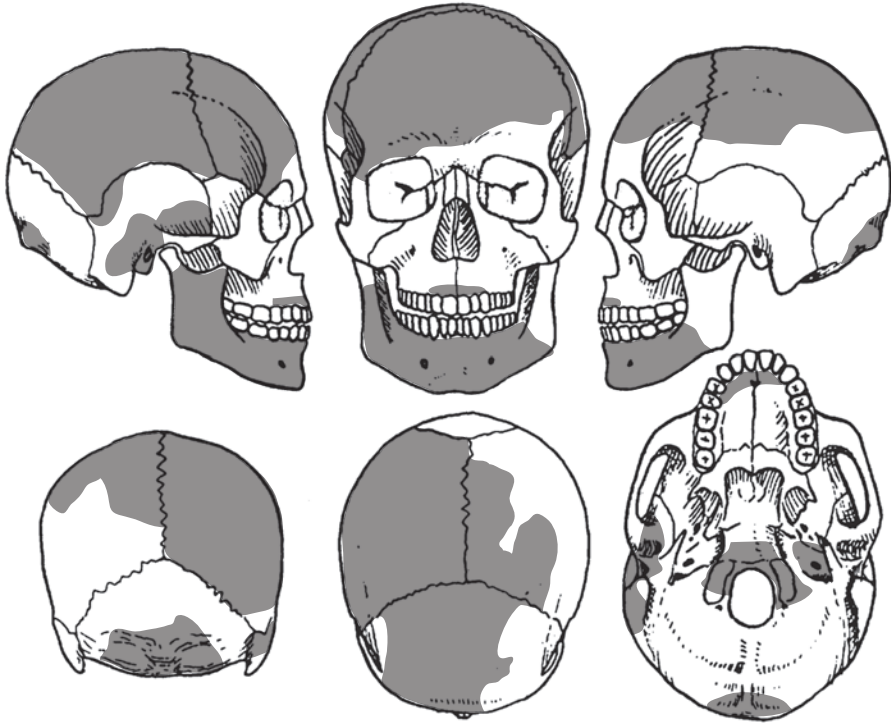
人骨番号	C地区14号人骨	九大人骨番号	C-14
特記事項			
			

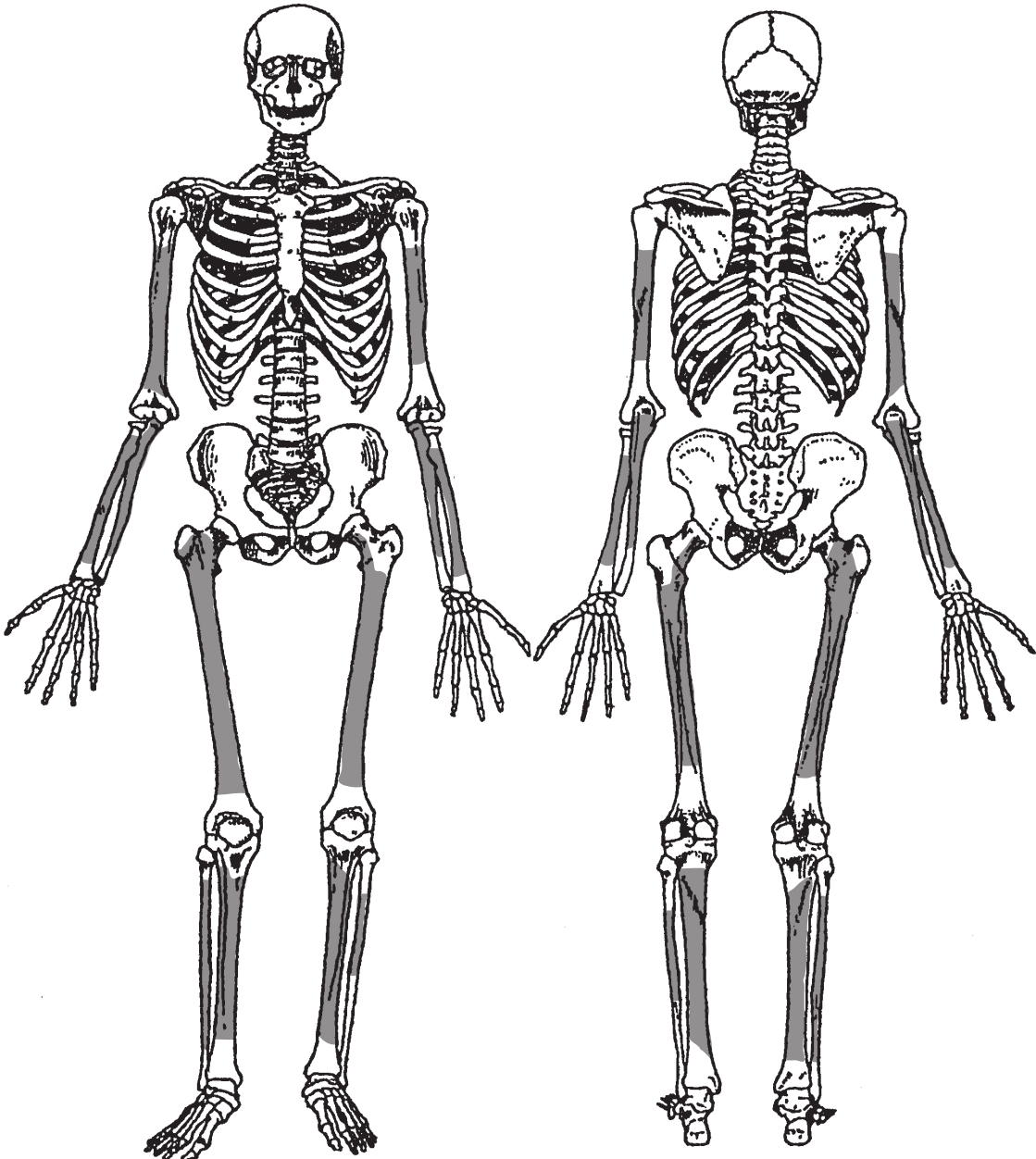
調査次数	第2次	層位	下層	性別	男性
人骨番号	C地区14号人骨	埋葬施設	土墳墓	年齢	成年
九大人骨番号	C-14	埋葬方法	一次葬	抜歯	左上I2C
副葬品					
貝輪	竜佩	3	ガラス玉		
オオツタノハ	35	マクラガイ科製玉類	二孔板状貝製品		
ゴホウラ	2	イモガイ科製玉類	169	円盤状貝製品	1
イモガイ		ノシガイ製玉類	6	ヤコウガイ製品	
オニ・ボウ		大型ツノガイ科玉類	31	土器	
貝符	1	細型ツノガイ科玉類	102		
特記事項					
・成人骨2体分（男性と女性）あり。					
					

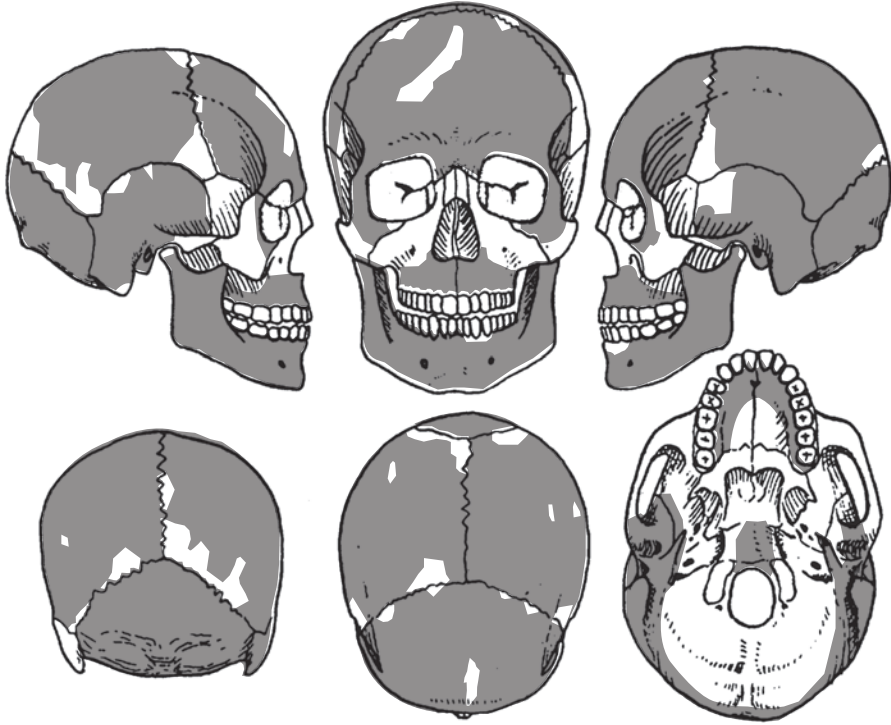
人骨番号	C地区14号人骨	九大人骨番号	C-14
特記事項			
			

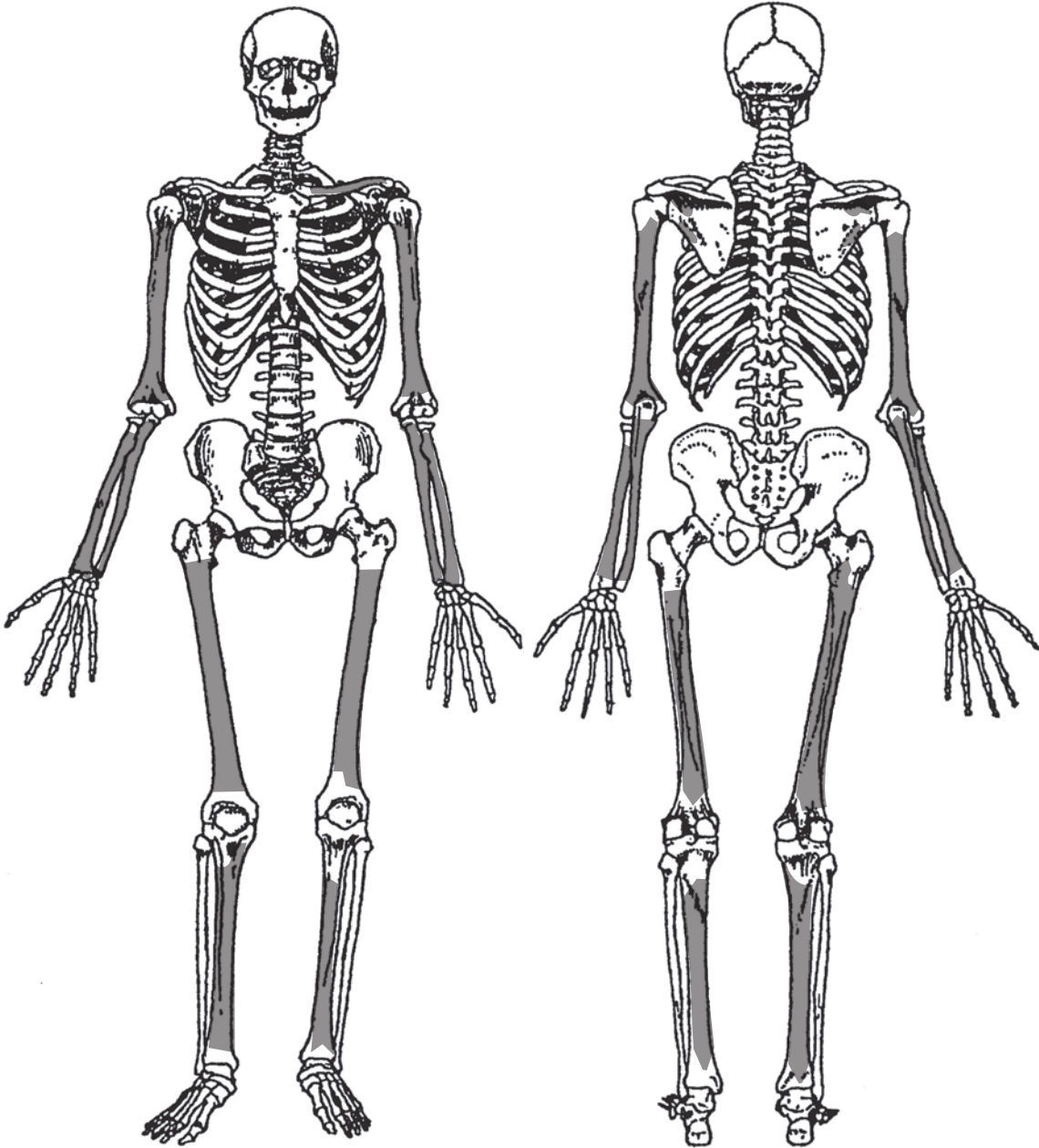
調査次数	第2次	層位	下層	性別	男性
人骨番号	A地区1号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	熟年
九大人骨番号	A-4-1	埋葬方法	一次葬	抜歯	不明
副葬品					
貝輪	竜佩	ガラス玉			
オオツタノハ	マクラガイ科製玉類	二孔板状貝製品			
ゴホウラ	イモガイ科製玉類	円盤状貝製品			
イモガイ	ノシガイ製玉類	ヤコウガイ製品			
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類	土器			
貝符	6	細型ツノガイ科玉類			
特記事項					
					

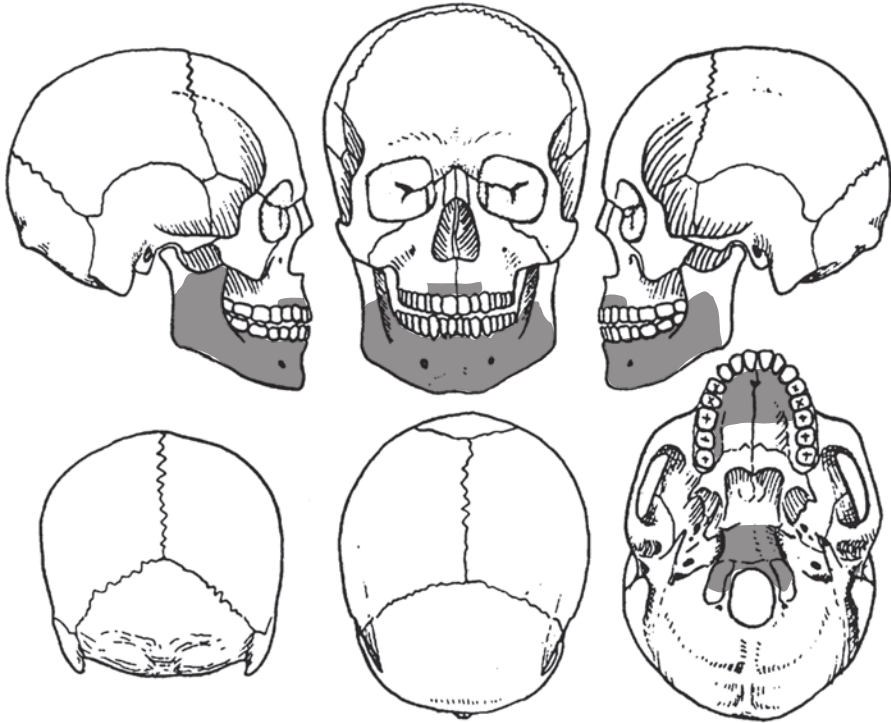
人骨番号	A地区1号人骨	九大人骨番号	A-4-1
特記事項			
			

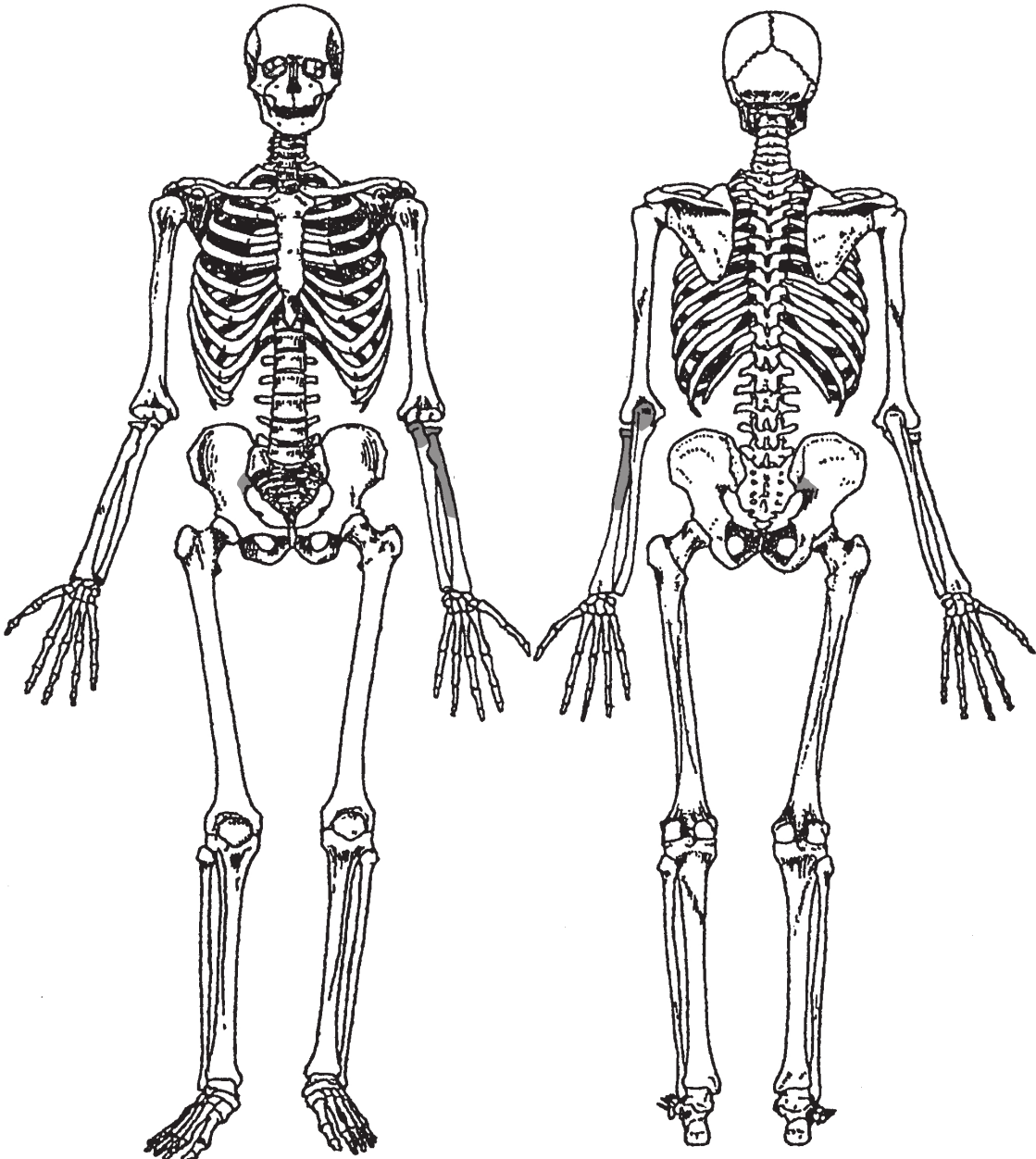
調査次数	第2次	層位	下層	性別	女性
人骨番号	A地区4号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	成年
九大人骨番号	A-IV-4	埋葬方法	一次葬	抜歯	左上I2C
副葬品					
貝輪	竜佩	ガラス玉			
オオツタノハ 1	マクラガイ科製玉類	二孔板状貝製品			
ゴホウラ 7	イモガイ科製玉類 97	円盤状貝製品			
イモガイ	ノシガイ製玉類 37	ヤコウガイ製品			
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類 6	土器			
貝符 3	細型ツノガイ科玉類 3				
特記事項					
					

人骨番号	A地区4号人骨	九大人骨番号	A-IV-4
特記事項			
			

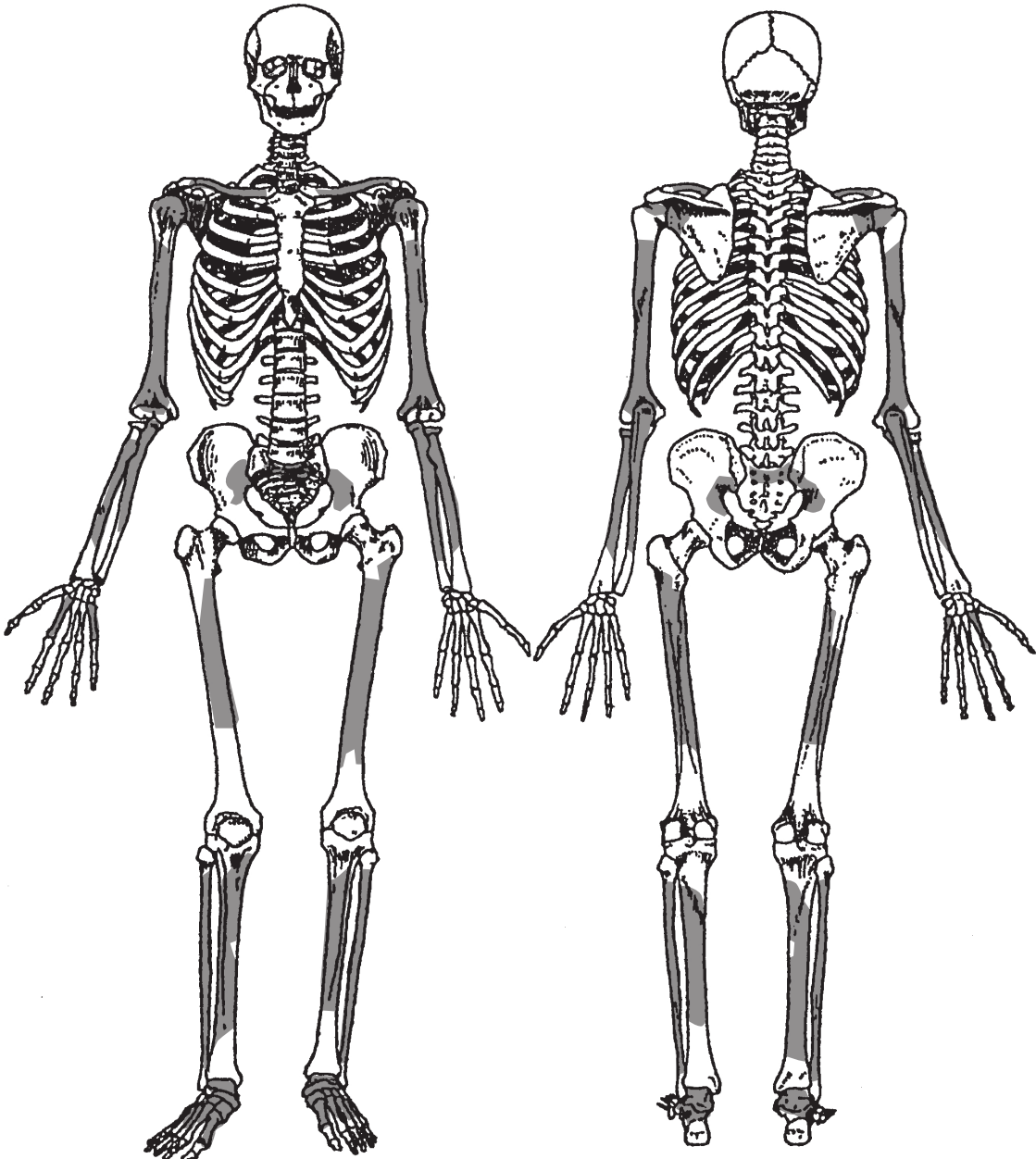
調査次数	第2次	層位	下層	性別	男性
人骨番号	A地区5号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	成～熟年
九大人骨番号	A-5	埋葬方法	一次葬	抜歯	不明
副葬品					
貝輪	竜佩		ガラス玉		
オオツタノハ 23	マクラガイ科製玉類		二孔板状貝製品		
ゴホウラ	イモガイ科製玉類	1	円盤状貝製品		
イモガイ	ノシガイ製玉類		ヤコウガイ製品		
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類	10	土器	1	
貝符 6	細型ツノガイ科玉類	112			
特記事項					
・釣針1点、獣形貝製品1点出土。					
					

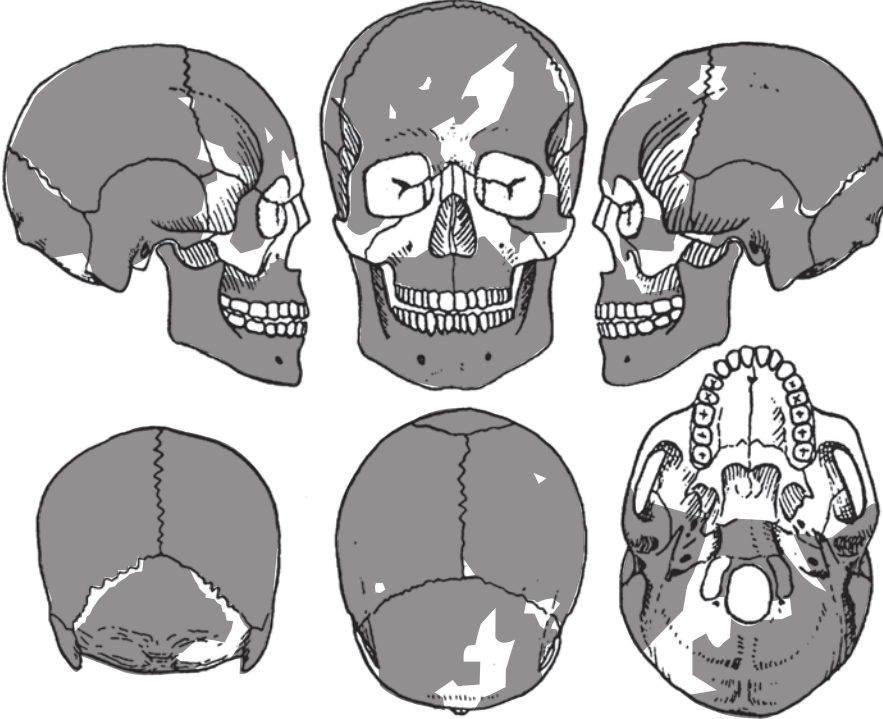
人骨番号	A地区5号人骨	九大人骨番号	A-5
特記事項			
			

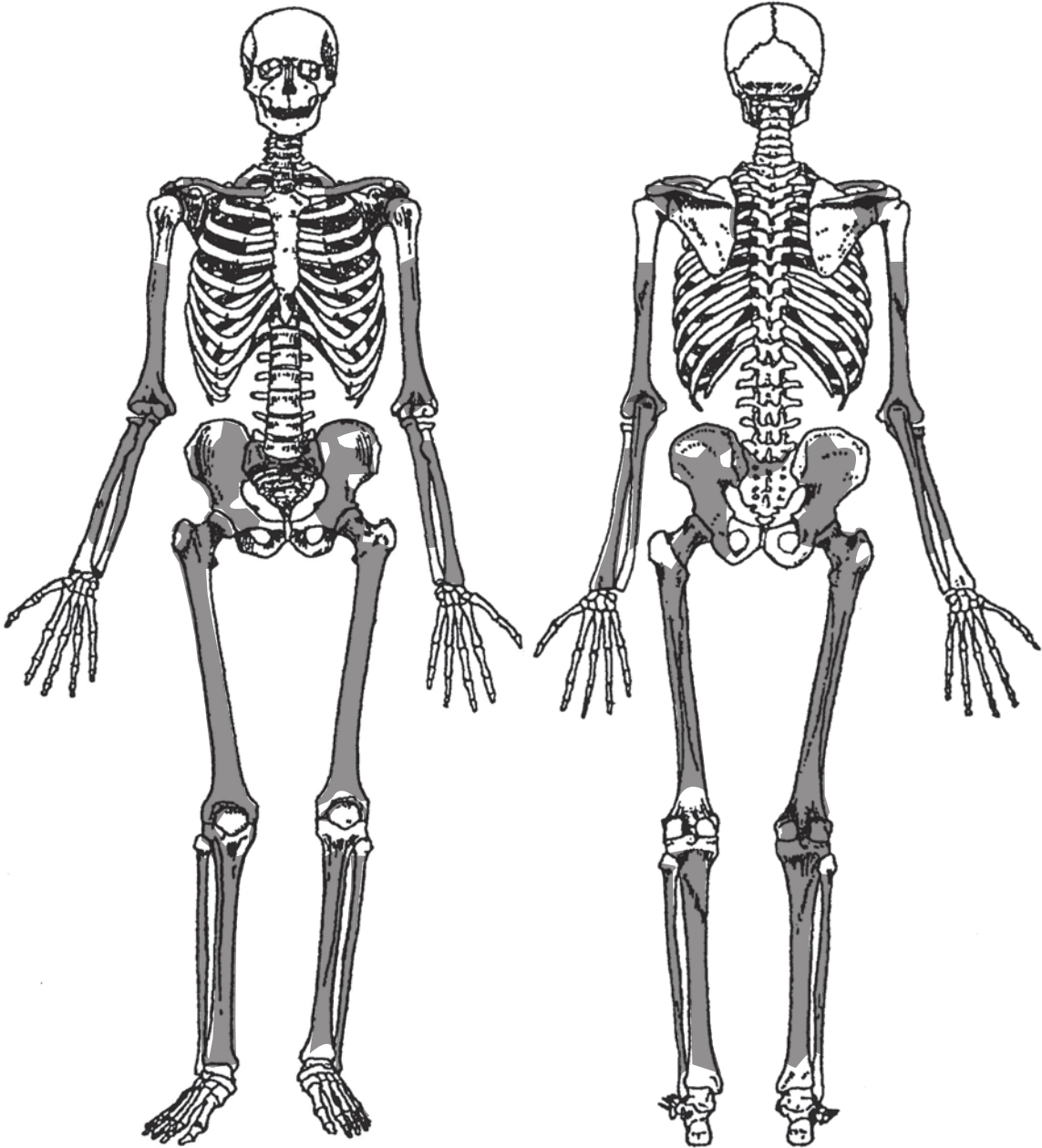
調査次数	第2次	層位	下層	性別	女性？
人骨番号	A地区6号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	熟年
九大人骨番号	A-IV-6	埋葬方法	一次葬	抜歯	左上I・I2C
副葬品					
貝輪	竜佩	ガラス玉			
オオツタノハ 2	マクラガイ科製玉類 2	二孔板状貝製品 8			
ゴホウラ	イモガイ科製玉類	円盤状貝製品			
イモガイ	ノシガイ製玉類	ヤコウガイ製品			
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類	土器 1			
貝符	細型ツノガイ科玉類				
特記事項					
					

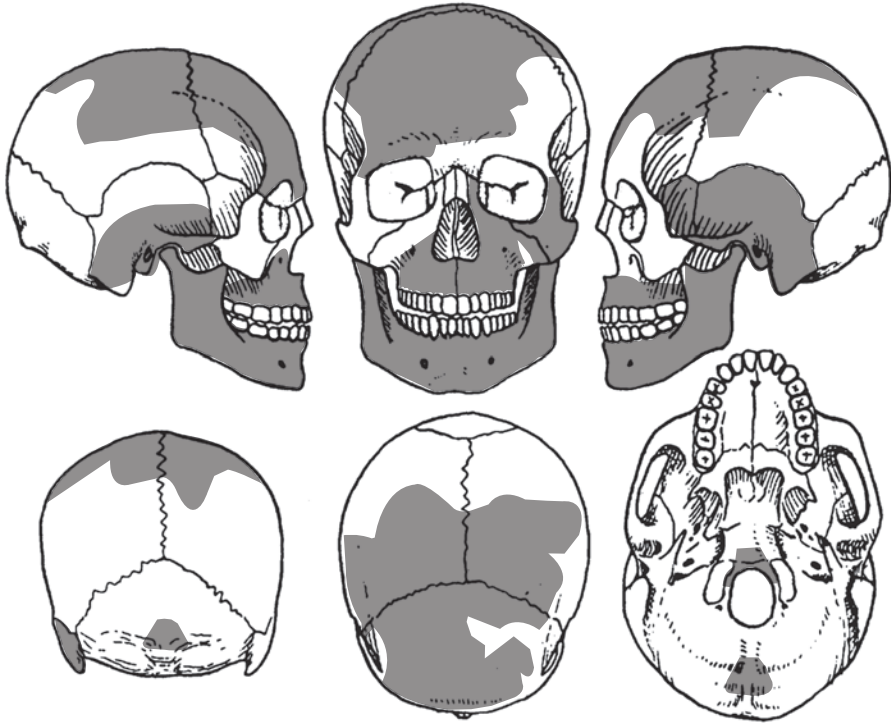
人骨番号	A地区6号人骨	九大人骨番号	A-IV-6
特記事項			
			

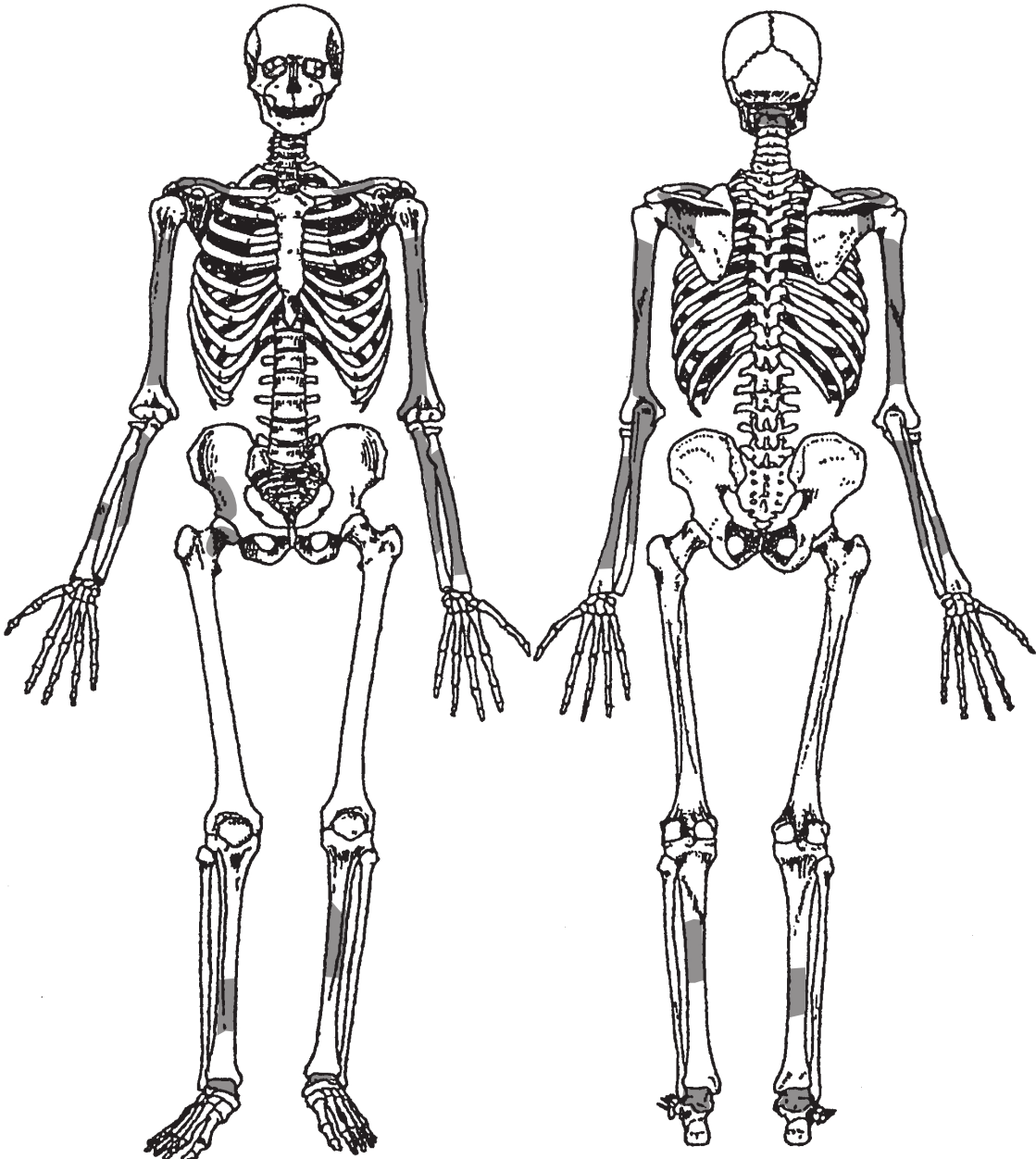
調査次数	第2次	層位	下層	性別	女性？
人骨番号	A地区7号人骨	埋葬施設	箱形石槨 タイプ	年齢	熟年
九大人骨番号	A-7	埋葬方法	一次葬	抜歯	右上I2
副葬品					
貝輪	竜佩		ガラス玉	1	
オオツタノハ	マクラガイ科製玉類		二孔板状貝製品		
ゴホウラ	6 イモガイ科製玉類	974	円盤状貝製品		
イモガイ	ノシガイ製玉類	1	ヤコウガイ製品		
オニ・ポウ	大型ツノガイ科玉類	26	土器	1	
貝符	4 細型ツノガイ科玉類	58(50)			
特記事項					

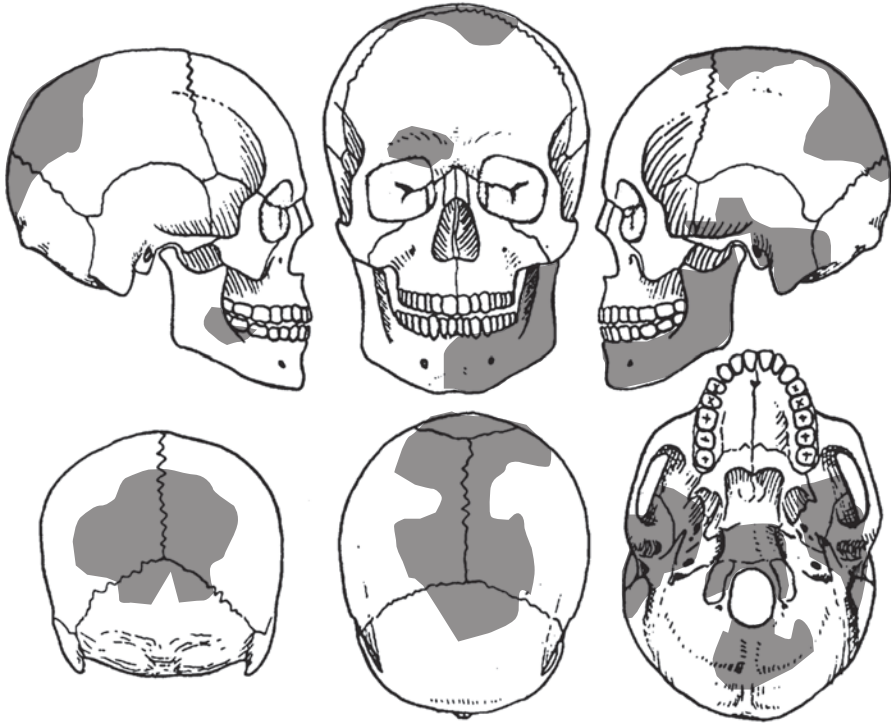
人骨番号	A地区7号人骨	九大人骨番号	A-7
特記事項			
			

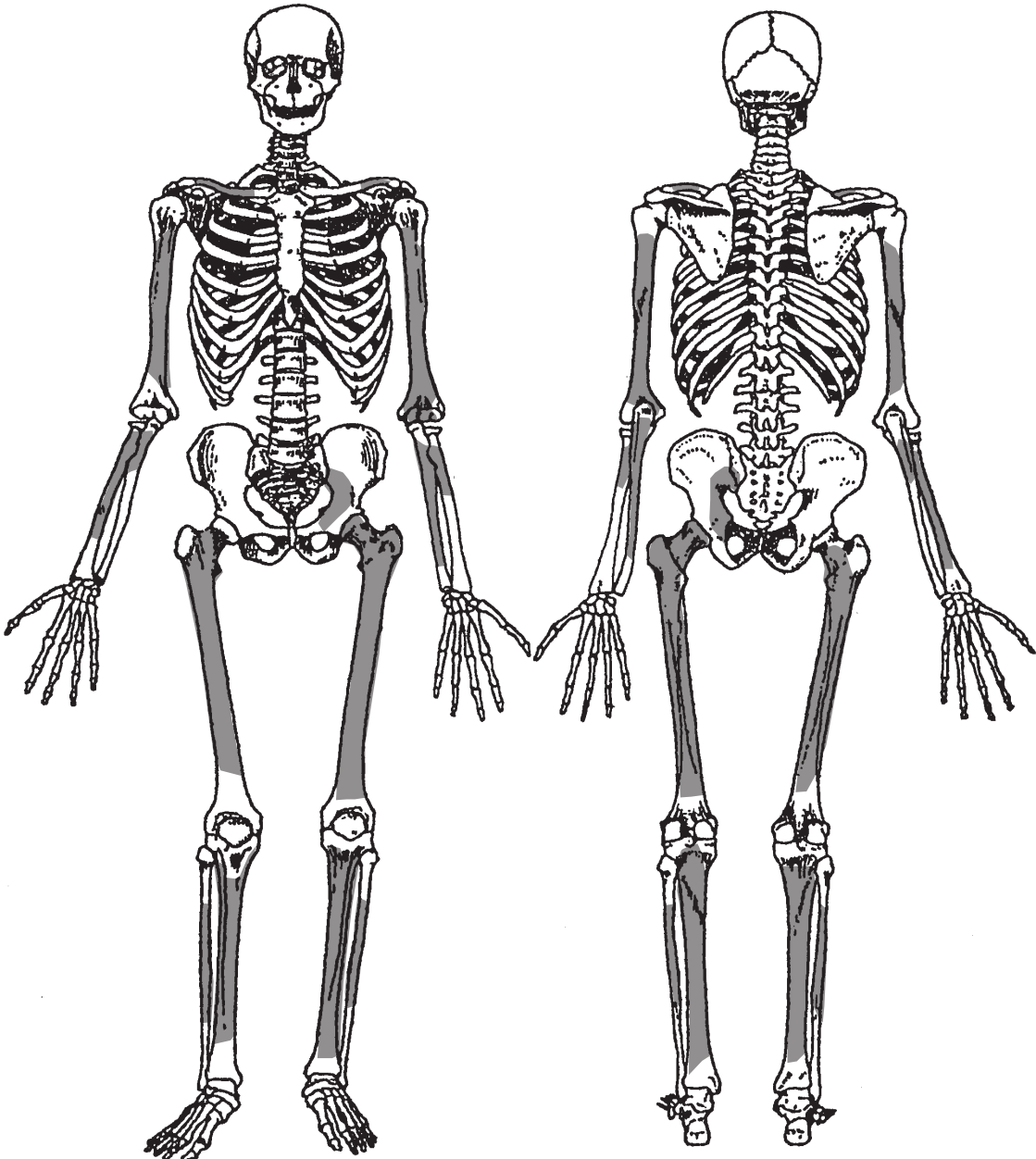
調査次数	第2次	層位	下層	性別	男性
人骨番号	A地区8号人骨	埋葬施設	箱形石槨 タイプ	年齢	成年
九大人骨番号	A-8	埋葬方法	一次葬	抜歯	左上I2C
副葬品					
貝輪	竜佩	2	ガラス玉		
オオツタノハ 1	マクラガイ科製玉類		二孔板状貝製品		
ゴホウラ 2	イモガイ科製玉類	1840	円盤状貝製品		
イモガイ	ノシガイ製玉類	7	ヤコウガイ製品	1	
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類	6	土器	5	
貝符 (1)	細型ツノガイ科玉類	147			
特記事項					
					

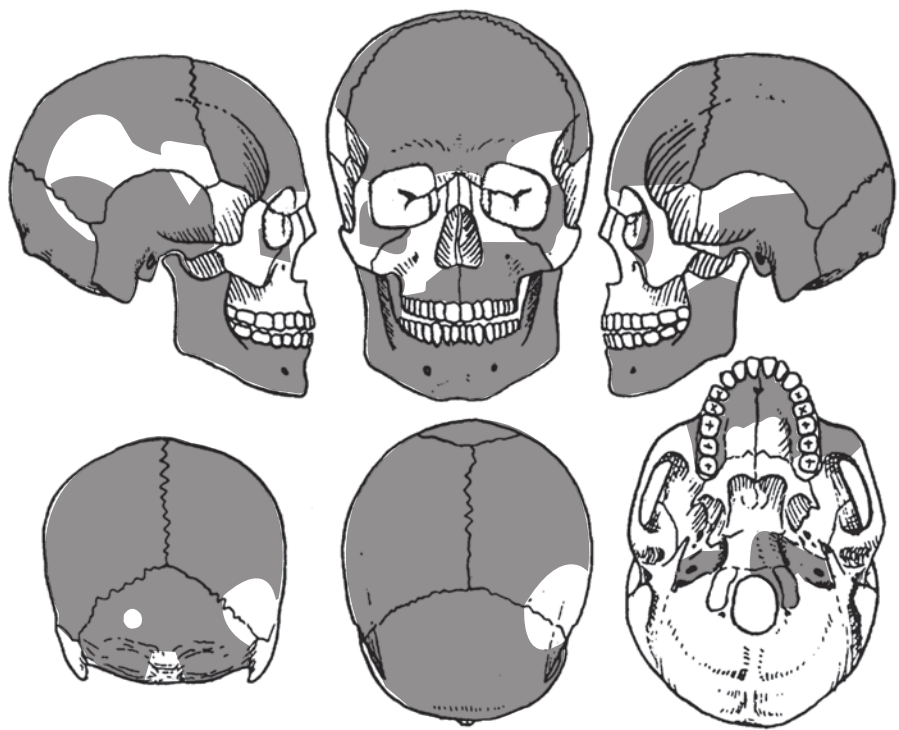
人骨番号	A地区8号人骨	九大人骨番号	A-8
特記事項			
			

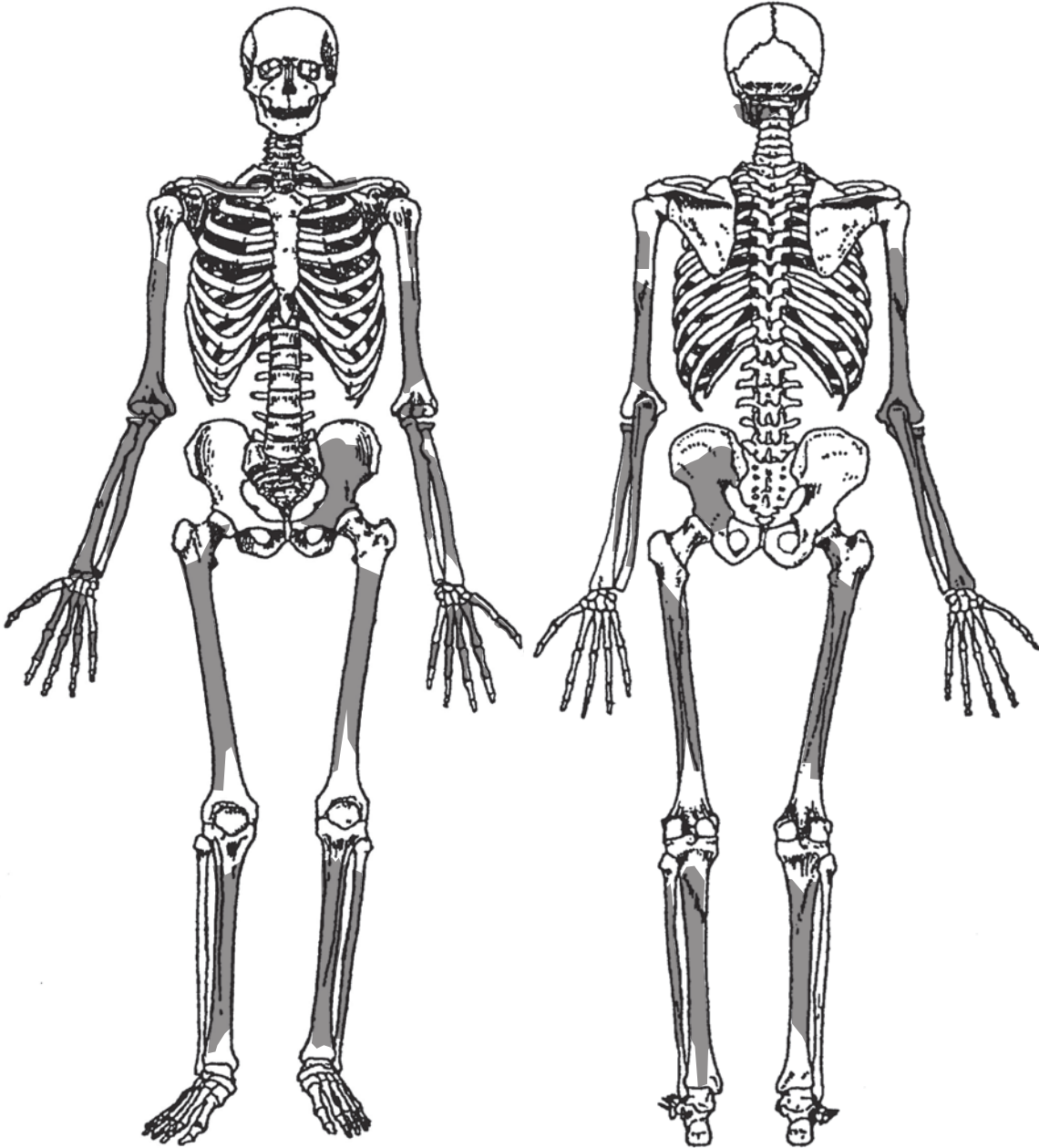
調査次数	第2次	層位	下層	性別	男性
人骨番号	A地区9号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	成年
九大人骨番号	A-9	埋葬方法	一次葬	抜歯	左上I2C
副葬品					
貝輪	竜佩		ガラス玉	1	
オオツタノハ 5	マクラガイ科製玉類		二孔板状貝製品		
ゴホウラ	イモガイ科製玉類		円盤状貝製品		
イモガイ	ノシガイ製玉類	34	ヤコウガイ製品		
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類	1	土器	20	
貝符	細型ツノガイ科玉類	1			
特記事項					
・ ガラス小塊の焼けたもの1点。					
					

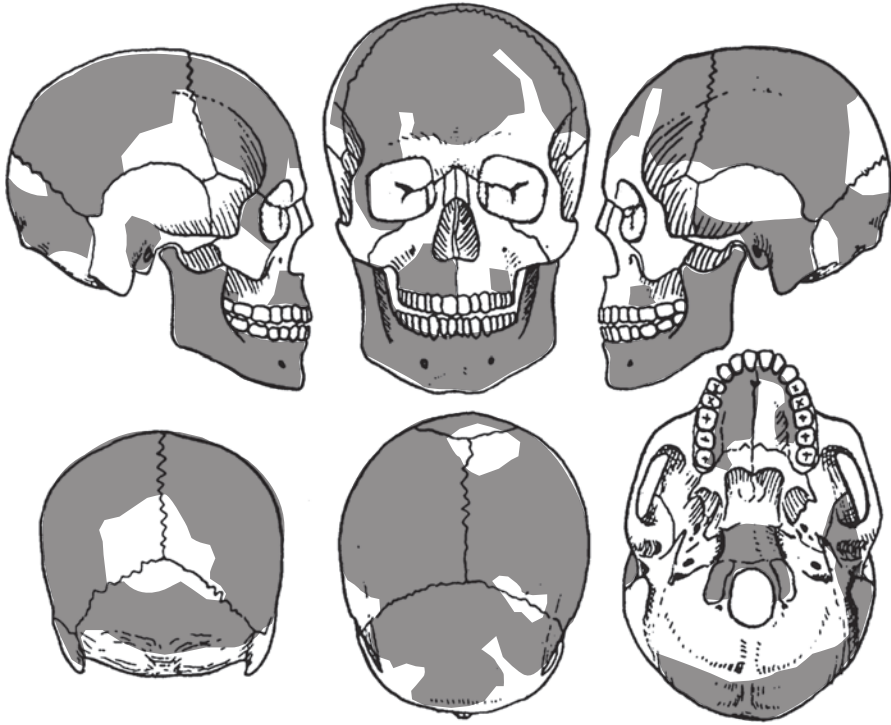
人骨番号	A地区9号人骨	九大人骨番号	A-9
特記事項			
			

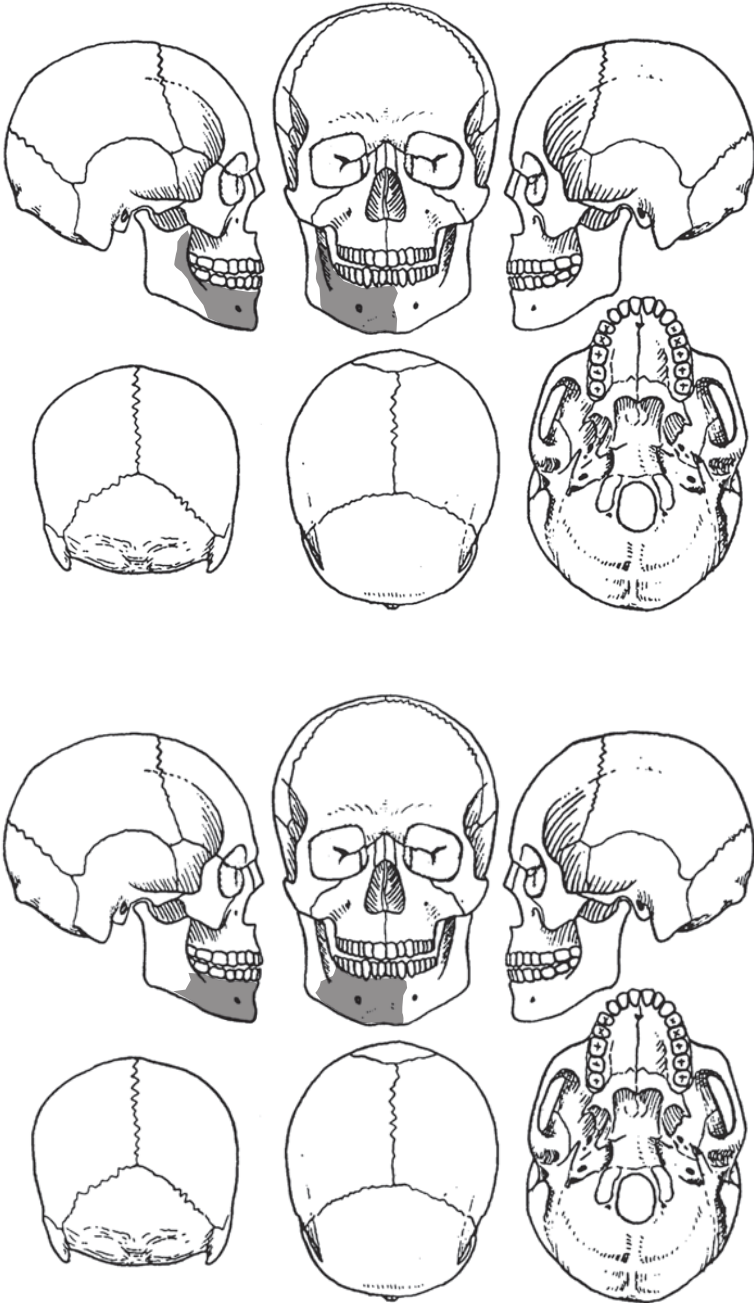
調査次数	第2次	層位	下層	性別	女性
人骨番号	A地区10号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	成年
九大人骨番号	A-10	埋葬方法	一次葬	抜歯	不明
副葬品					
貝輪	竜佩	1	ガラス玉		
オオツタノハ 6	マクラガイ科製玉類		二孔板状貝製品		
ゴホウラ	イモガイ科製玉類	2	円盤状貝製品		
イモガイ	ノシガイ製玉類	8	ヤコウガイ製品		
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類	2	土器	2	
貝符	細型ツノガイ科玉類	12			
特記事項					
					

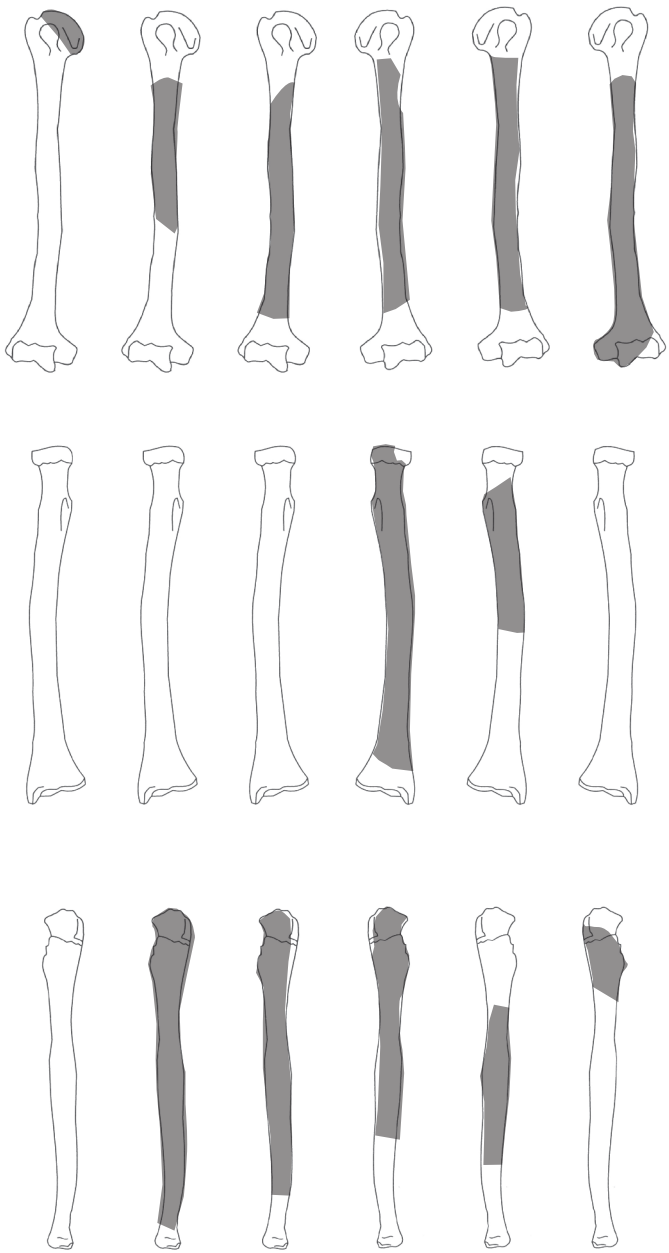
人骨番号	A地区10号人骨	九大人骨番号	A-10
特記事項			
			

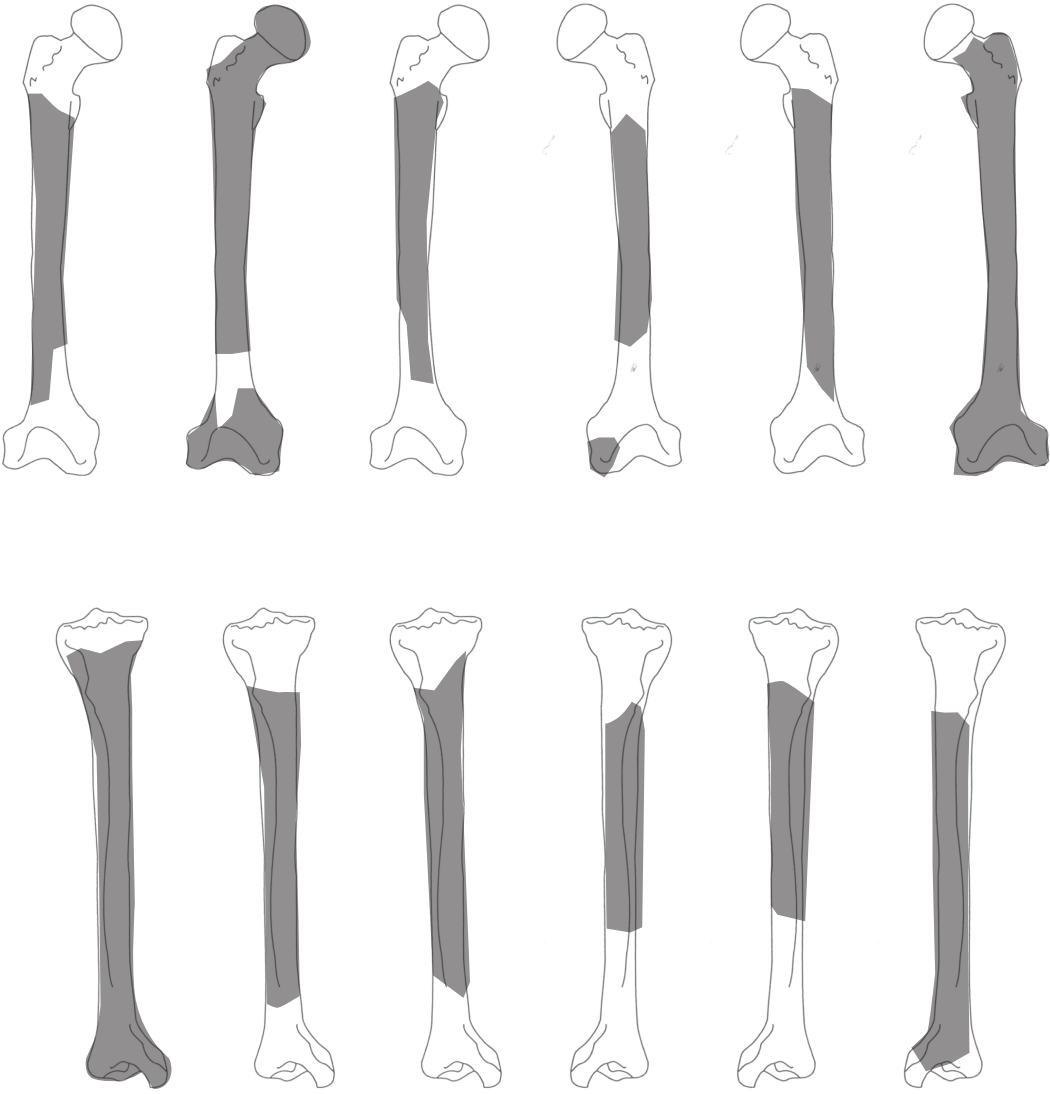
調査次数	第2次	層位	下層	性別	男性
人骨番号	A地区11号人骨	埋葬施設	覆石 タイプ	年齢	成年
九大人骨番号	A-11	埋葬方法	一次葬	抜歯	左上C2?
副葬品					
貝輪	竜佩		ガラス玉		
オオツタノハ 9	マクラガイ科製玉類	13	二孔板状貝製品		
ゴホウラ	イモガイ科製玉類	58	円盤状貝製品		
イモガイ	ノシガイ製玉類		ヤコウガイ製品		
オニ・パウ	大型ツノガイ科玉類		土器	10数点	
貝符	細型ツノガイ科玉類	59			
特記事項					
・イモガイ5点、フクトコブシ2点出土。					
					

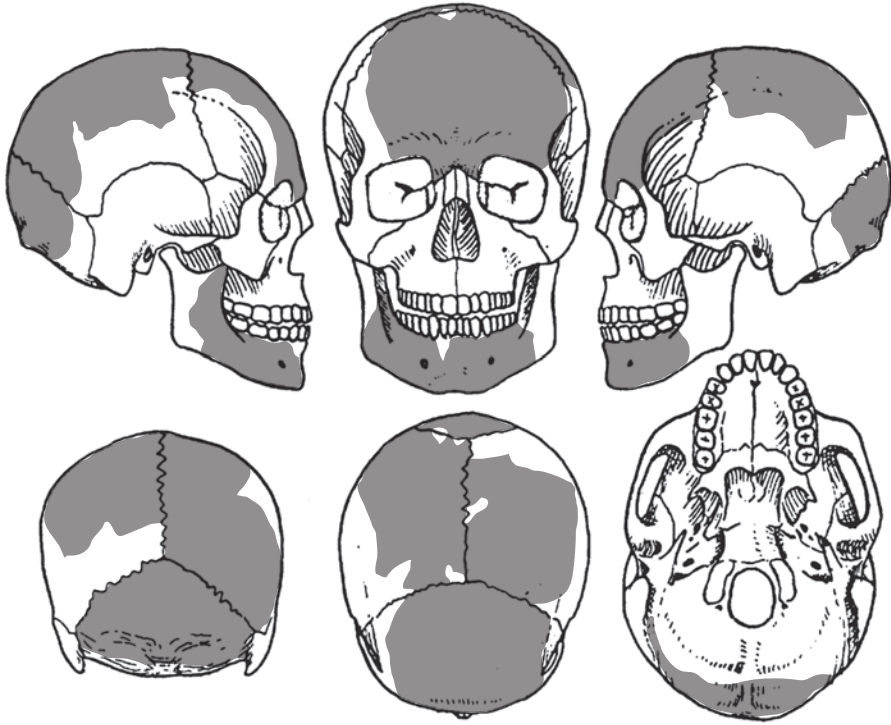
人骨番号	A地区11号人骨	九大人骨番号	A-11
特記事項			
			

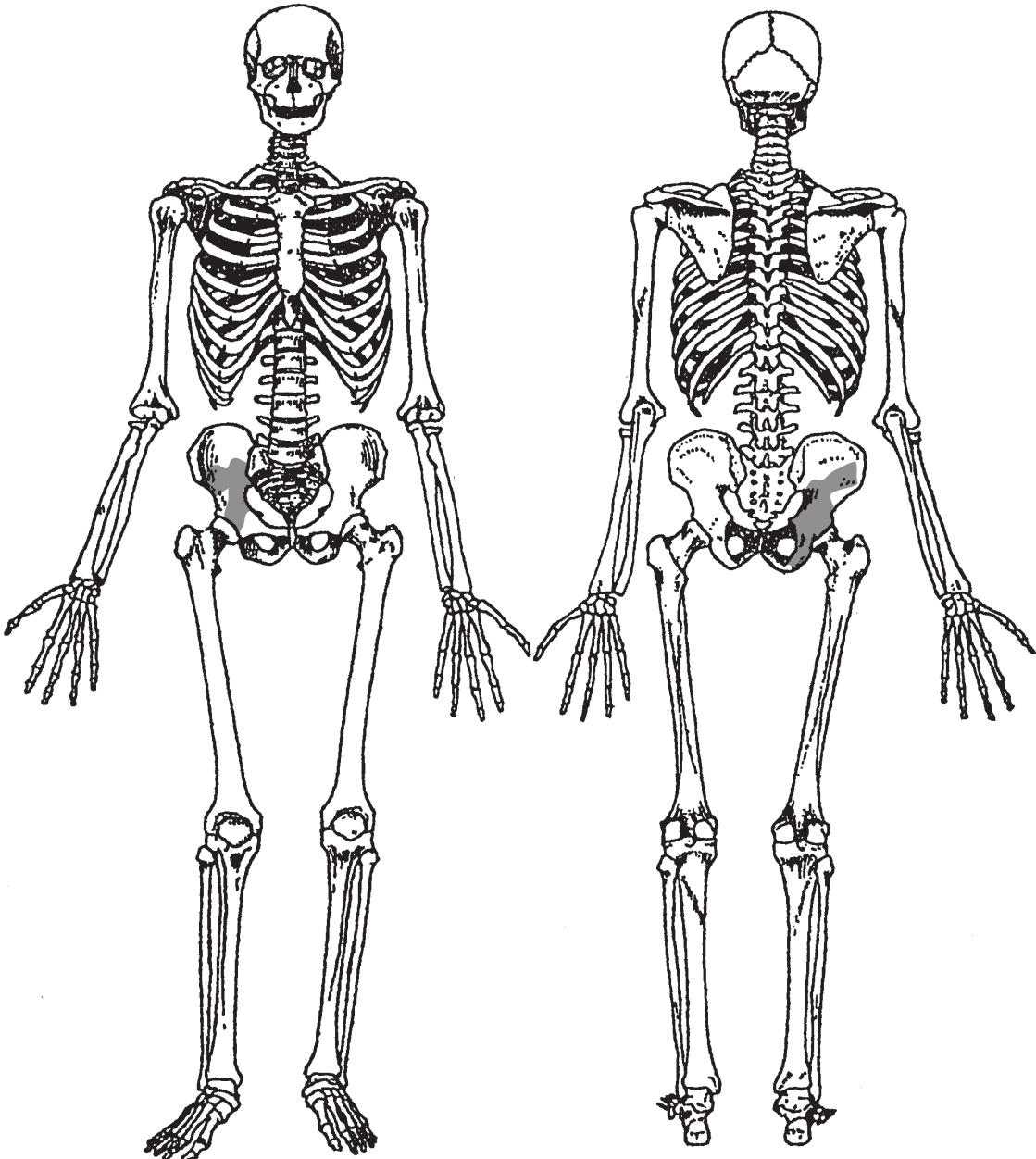
調査次数	第3次	層位	下層	性別	女性
人骨番号	D I 地区3号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	成年
九大人骨番号	D- I -3集骨	埋葬方法	二次葬	抜歯	—
副葬品					
貝輪	竜佩		ガラス玉	1	
オオツタノハ	マクラガイ科製玉類		二孔板状貝製品		
ゴホウラ	11 イモガイ科製玉類	938(155)	円盤状貝製品		
イモガイ	ノシガイ製玉類		ヤコウガイ製品	1	
オニ・ボウ	1 大型ツノガイ科玉類	19(12)	土器		
貝符	1 細型ツノガイ科玉類	168(2)			
特記事項					
・カサガイ2点出土。					
					

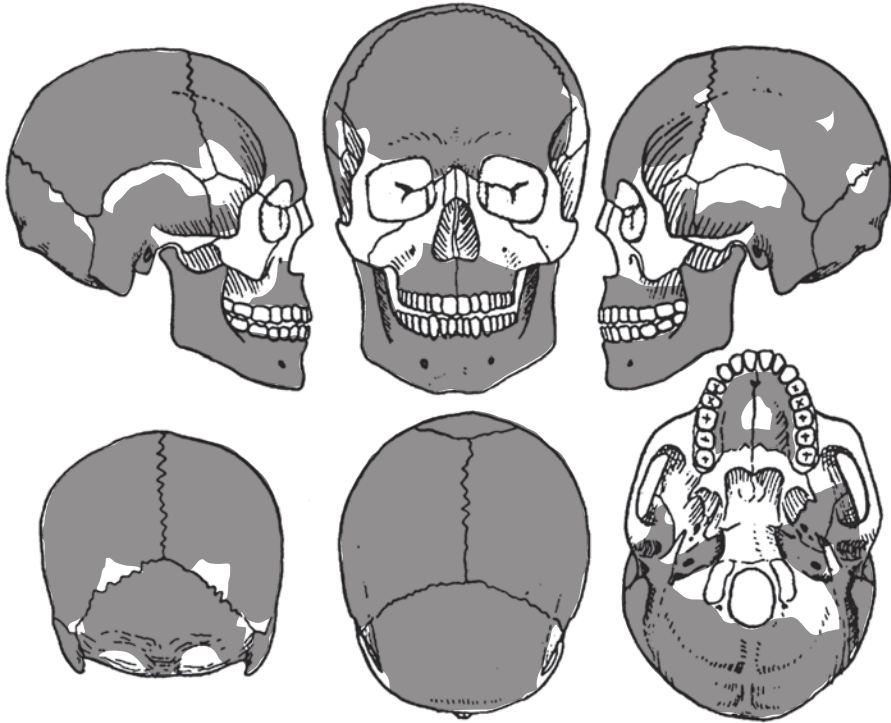
人骨番号	D I 地区3号人骨	九大人骨番号	D- I -3集骨
特記事項			
 <p>The image displays two identical sets of anatomical drawings of a human skull. Each set consists of six views arranged in two rows. The top row of each set shows three views: a left lateral view, a frontal view, and a right lateral view. The bottom row shows three views: a posterior view, a superior view, and an inferior view. The drawings are detailed line art, showing the structure of the cranium, facial bones, and teeth.</p>			

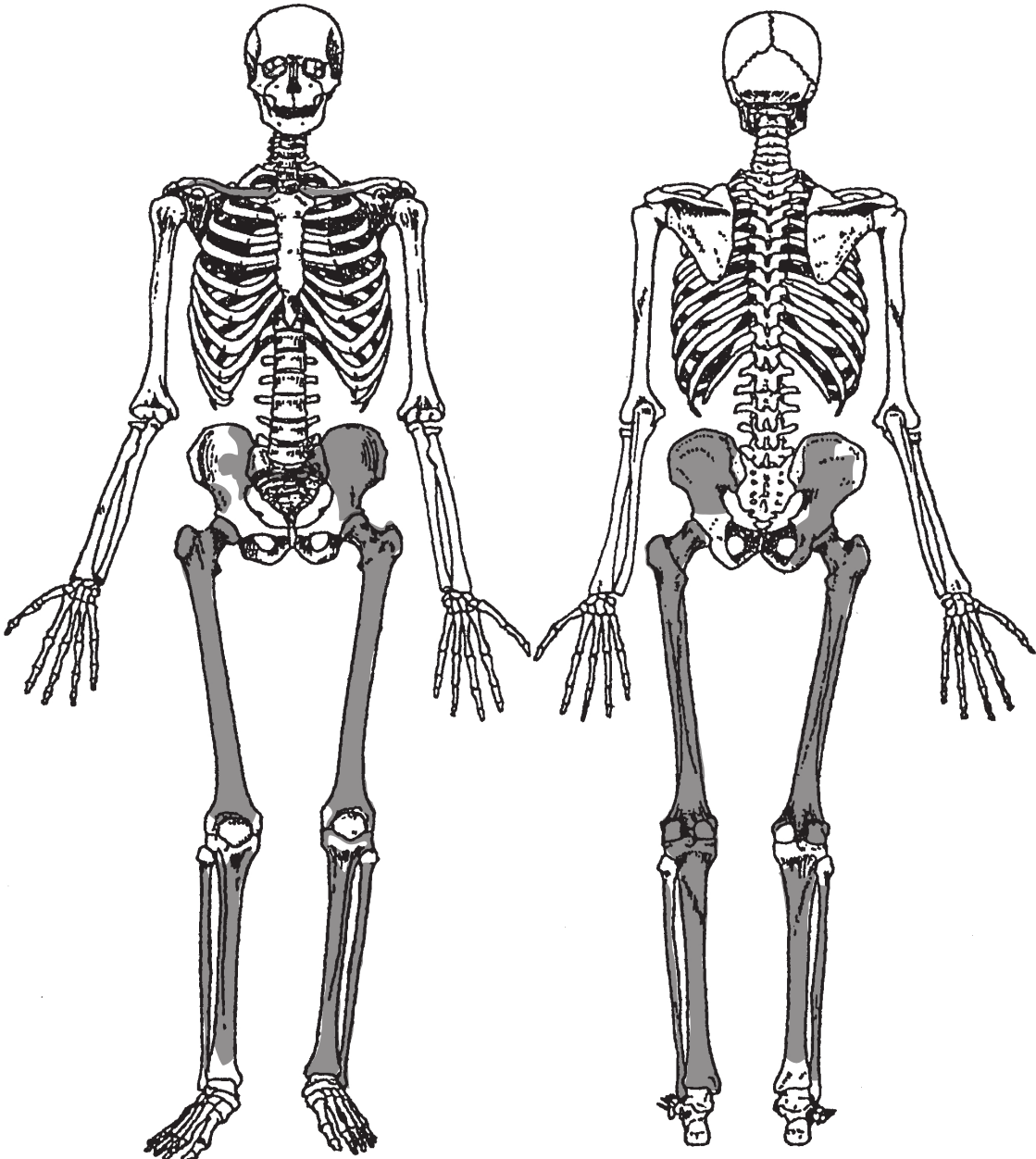
人骨番号	D I 地区3号人骨	九大人骨番号	D- I -3集骨
特記事項			
			

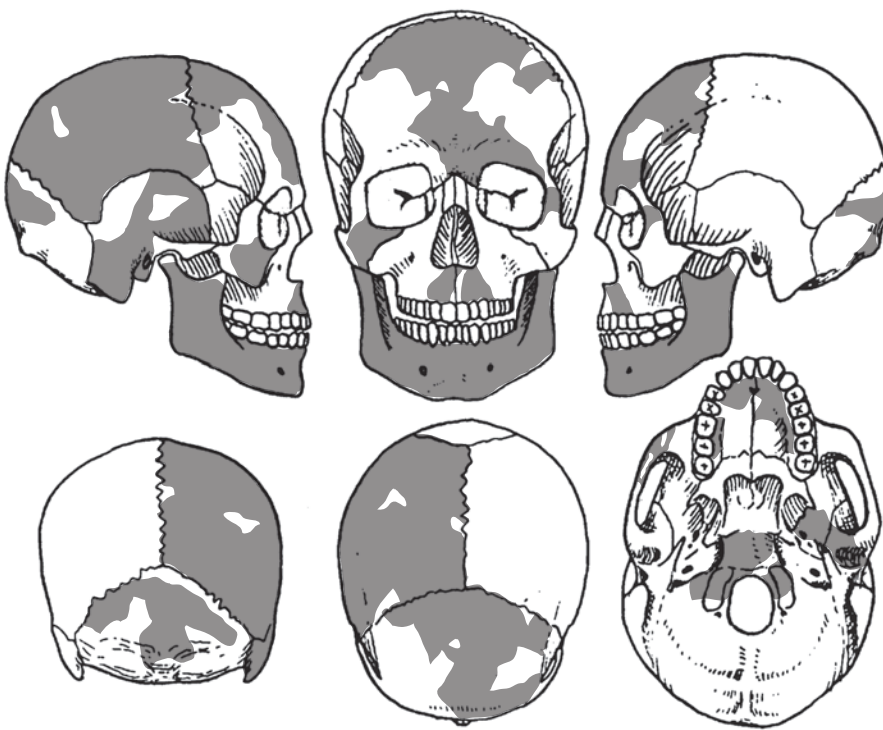
人骨番号	D I 地区3号人骨	九大人骨番号	D- I -3集骨
特記事項			
 <p>The image displays two rows of six human long bones, likely humeri and ulnae, arranged in two rows of six. Each bone is shown in a vertical orientation. The bones are rendered in a simple line-art style with varying degrees of dark shading. The shading patterns are as follows:</p> <ul style="list-style-type: none"> Row 1 (Top): <ul style="list-style-type: none"> Bone 1: Shaded from the proximal end down to approximately the middle of the shaft. Bone 2: Shaded from the proximal end down to approximately the middle of the shaft, with a small white patch at the distal end. Bone 3: Shaded from the proximal end down to approximately the middle of the shaft. Bone 4: Shaded from the proximal end down to approximately the middle of the shaft, with a small white patch at the distal end. Bone 5: Shaded from the proximal end down to approximately the middle of the shaft. Bone 6: Shaded from the proximal end down to approximately the middle of the shaft, with a small white patch at the distal end. Row 2 (Bottom): <ul style="list-style-type: none"> Bone 1: Shaded from the proximal end down to approximately the middle of the shaft. Bone 2: Shaded from the proximal end down to approximately the middle of the shaft. Bone 3: Shaded from the proximal end down to approximately the middle of the shaft. Bone 4: Shaded from the proximal end down to approximately the middle of the shaft. Bone 5: Shaded from the proximal end down to approximately the middle of the shaft. Bone 6: Shaded from the proximal end down to approximately the middle of the shaft. 			

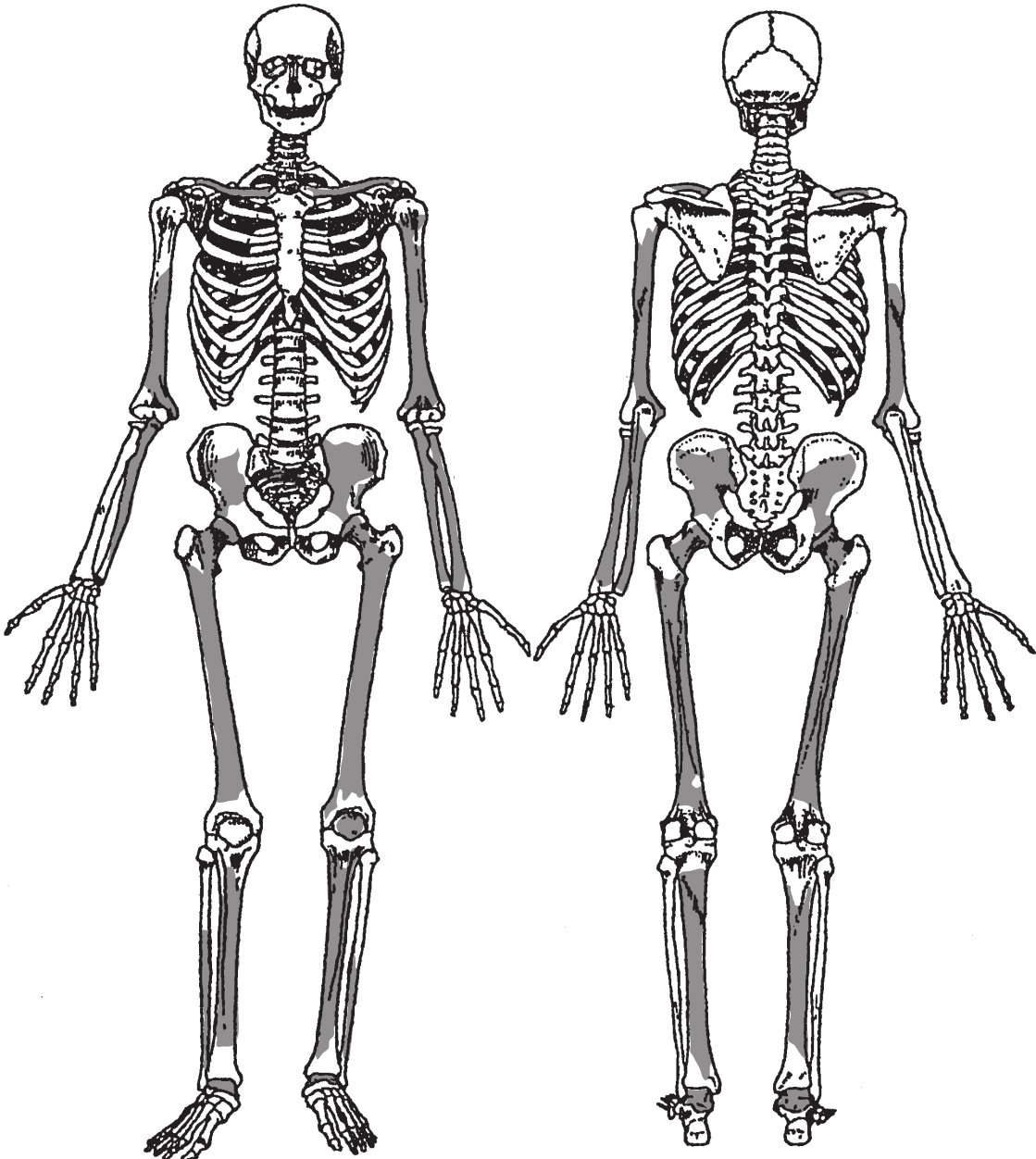
調査次数	第3次	層位	下層	性別	女性
人骨番号	D I 地区4a号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	成年
九大人骨番号	D- I -4集骨	埋葬方法	二次葬	抜歯	—
副葬品					
貝輪	竜佩	ガラス玉			
オオツタノハ	マクラガイ科製玉類	二孔板状貝製品			
ゴホウラ 5	イモガイ科製玉類	円盤状貝製品			
イモガイ	ノシガイ製玉類	ヤコウガイ製品			
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類	土器	1		
貝符	細型ツノガイ科玉類				
特記事項					
					

人骨番号	D I 地区4a号人骨	九大人骨番号	D- I -4集骨
特記事項			
			

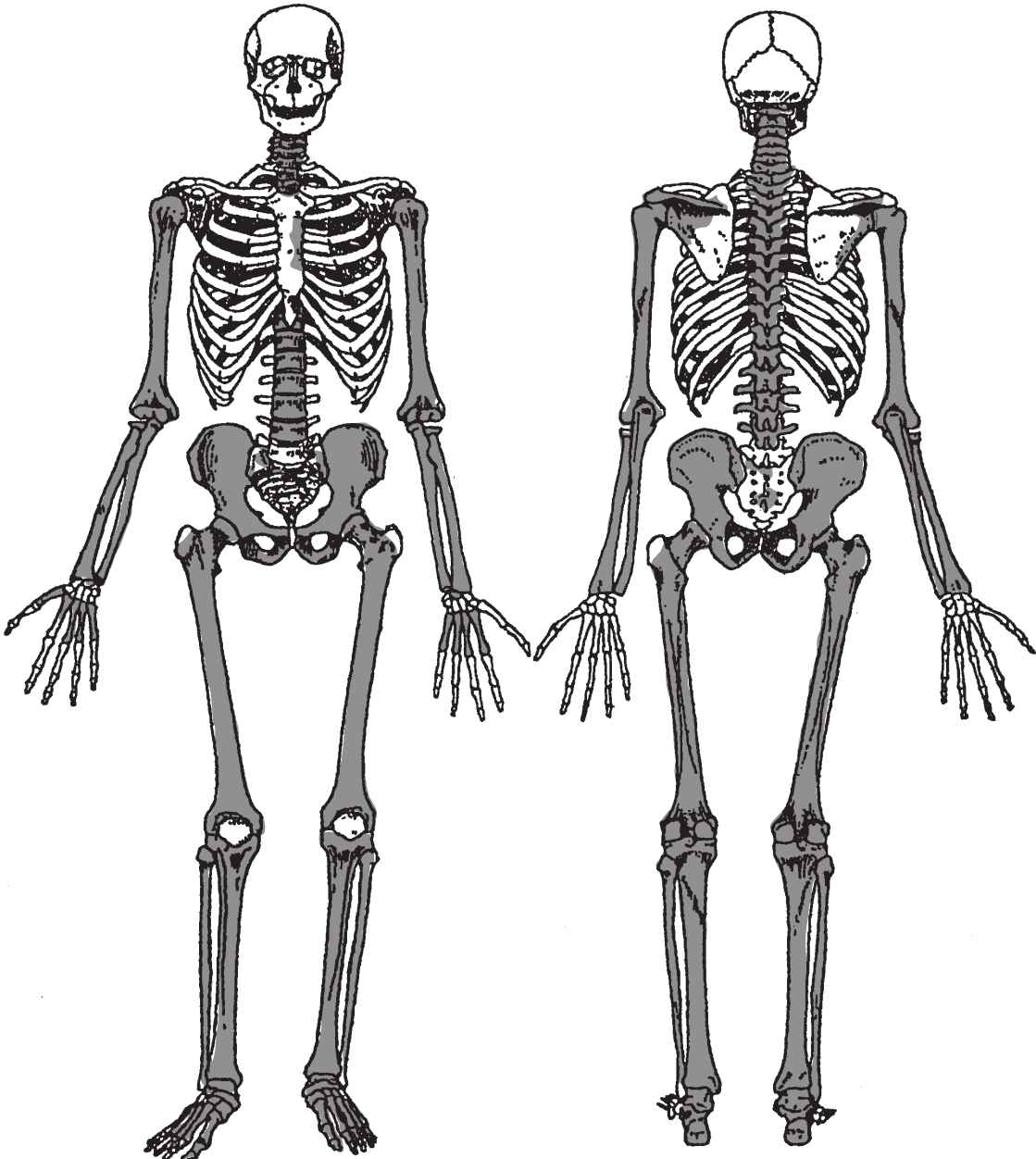
調査次数	第3次	層位	下層	性別	—
人骨番号	D I 地区4b号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	—
九大人骨番号	—	埋葬方法	二次葬	抜歯	—
副葬品					
貝輪	竜佩	18	ガラス玉	1	
オオツタノハ	マクラガイ科製玉類		二孔板状貝製品		
ゴホウラ	12 イモガイ科製玉類	5419	円盤状貝製品		
イモガイ	ノシガイ製玉類	3	ヤコウガイ製品	1	
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類	121	土器		
貝符	5 細型ツノガイ科玉類	1062			
特記事項					
					

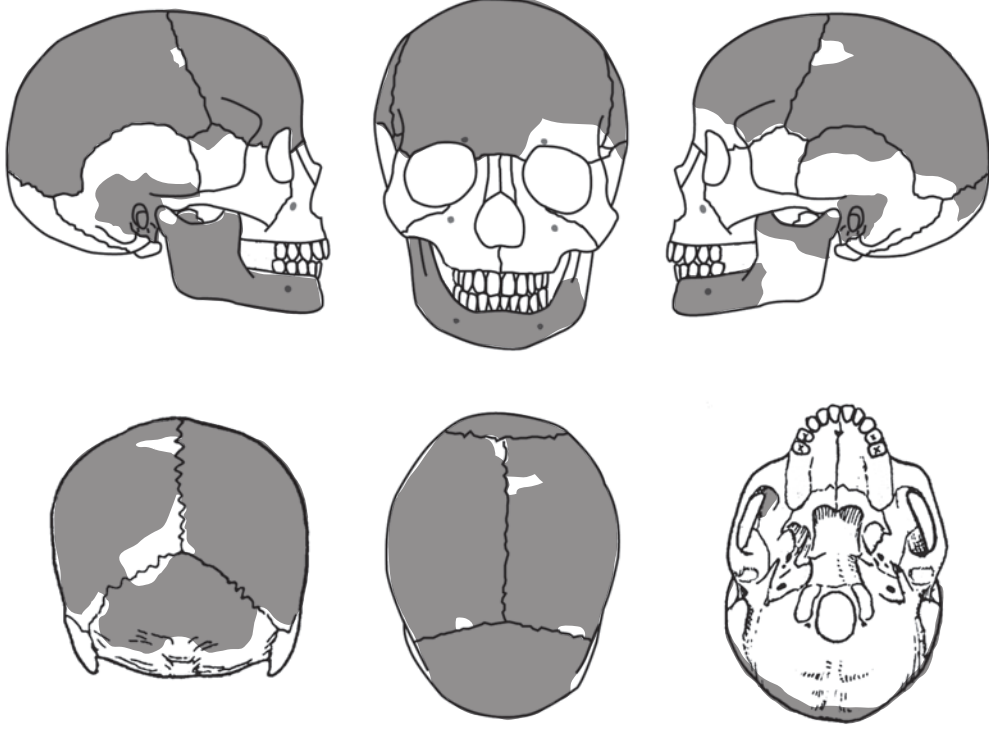
人骨番号	D I 地区4b号人骨	九大人骨番号	—
特記事項			
			

調査次数	第3次	層位	下層	性別	男性
人骨番号	D I 地区5号人骨	埋葬施設	覆石 タイプ	年齢	成年
九大人骨番号	D- I -5	埋葬方法	一次葬	抜歯	左上I2C
副葬品					
貝輪	竜佩	3	ガラス玉	1(2)	
オオツタノハ 33	マクラガイ科製玉類	112	二孔板状貝製品	5	
ゴホウラ	イモガイ科製玉類	2	円盤状貝製品		
イモガイ	ノシガイ製玉類	55	ヤコウガイ製品	1	
オニ・ボウ	太型ツノガイ科玉類	1	土器	38	
貝符 5	細型ツノガイ科玉類	179			
特記事項					
					

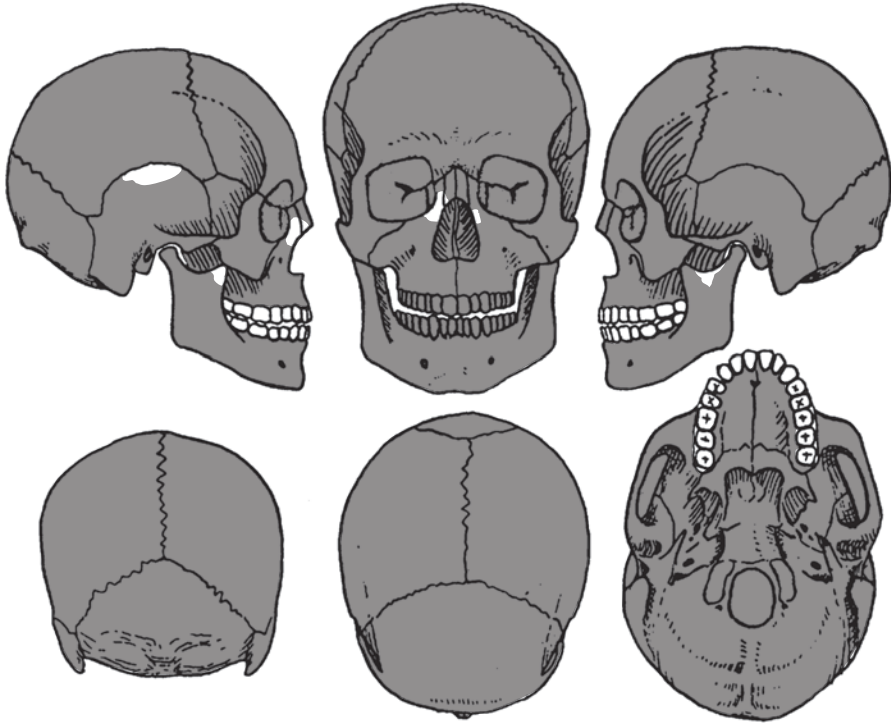
人骨番号	D I 地区5号人骨	九大人骨番号	D- I -5
特記事項			
			

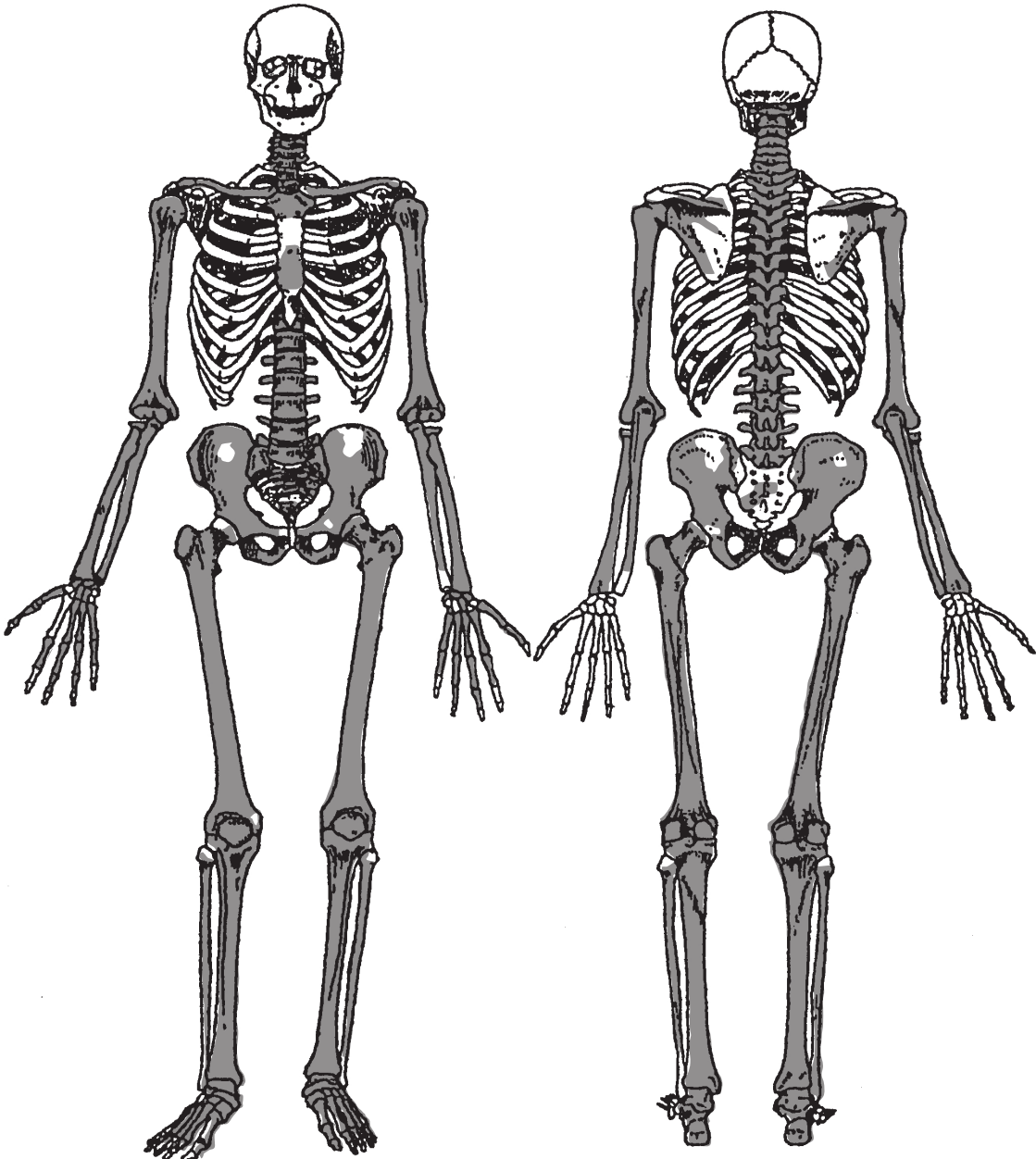
調査次数	第3次	層位	下層	性別	女性
人骨番号	D II 地区3号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	成年
九大人骨番号	D-II-3	埋葬方法	一次葬	抜歯	右上I2
副葬品					
貝輪	竜佩		ガラス玉	1	
オオツタノハ	マクラガイ科製玉類		二孔板状貝製品		
ゴホウラ 9	イモガイ科製玉類	2124	円盤状貝製品		
イモガイ	ノシガイ製玉類		ヤコウガイ製品		
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類	1	土器		
貝符	細型ツノガイ科玉類	18			
特記事項					

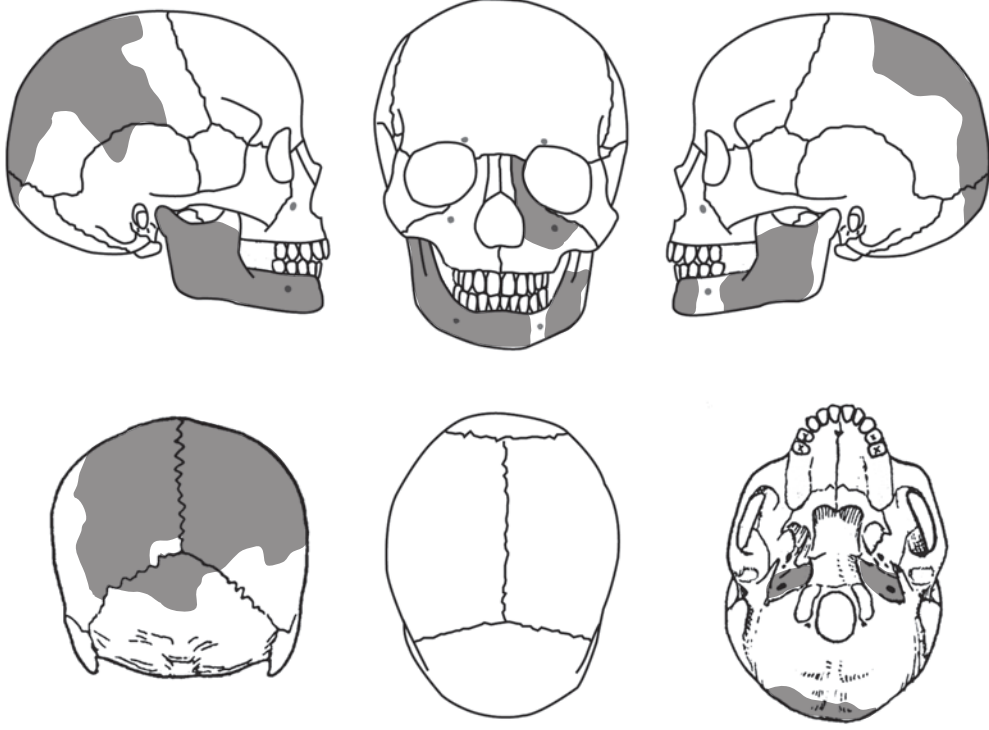
人骨番号	DII地区3号人骨	九大人骨番号	D-II-3
特記事項			
			

調査次数	第3次	層位	下層	性別	不明
人骨番号	D II 地区4号人骨	埋葬施設	馬蹄状配石 タイプ	年齢	小児
九大人骨番号	D-II-4	埋葬方法	一次葬	抜歯	なし
副葬品					
貝輪	竜佩	8	ガラス玉	12	
オオツタノハ	マクラガイ科製玉類		二孔板状貝製品		
ゴホウラ	イモガイ科製玉類	1950	円盤状貝製品		
イモガイ	ノシガイ製玉類	30	ヤコウガイ製品	1	
オニ・ボウ	太型ツノガイ科玉類	109	土器	1	
貝符	2	細型ツノガイ科玉類	564		
特記事項					
					

人骨番号	DII地区4号人骨	九大人骨番号	D-II-4
特記事項			
<p>The drawing illustrates a collection of human skeletal remains, organized into several rows. The top row features two curved ribs, a central vertebral body, and another rib. The second row shows two scapulae and a central vertebral body. The third row contains two humeri, two radius/ulna pairs, and two femora. The fourth row displays two acetabula, a central vertebral body, and two more acetabula. The bottom row shows two pairs of tibia/fibula bones. Some bones are shaded to indicate specific features or damage.</p>			

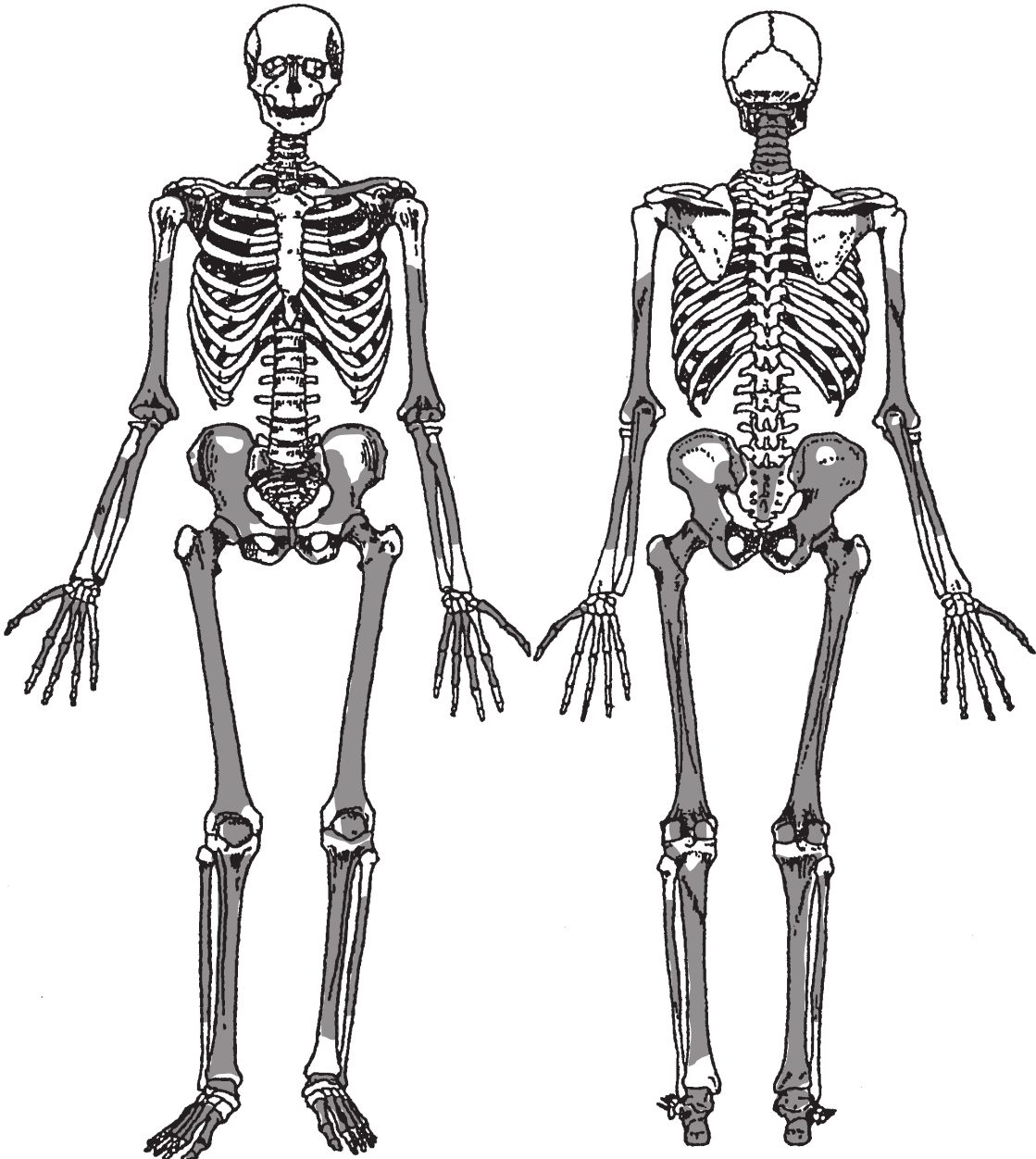
調査次数	第3次	層位	下層	性別	男性
人骨番号	D II 地区5号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	成～熟年
九大人骨番号	D-II-5	埋葬方法	一次葬	抜歯	左上I2C
副葬品					
貝輪	竜佩	ガラス玉			
オオツタノハ	マクラガイ科製玉類	二孔板状貝製品			
ゴホウラ	イモガイ科製玉類	円盤状貝製品			
イモガイ	ノシガイ製玉類	ヤコウガイ製品			
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類	土器			
貝符	細型ツノガイ科玉類				
特記事項					
					

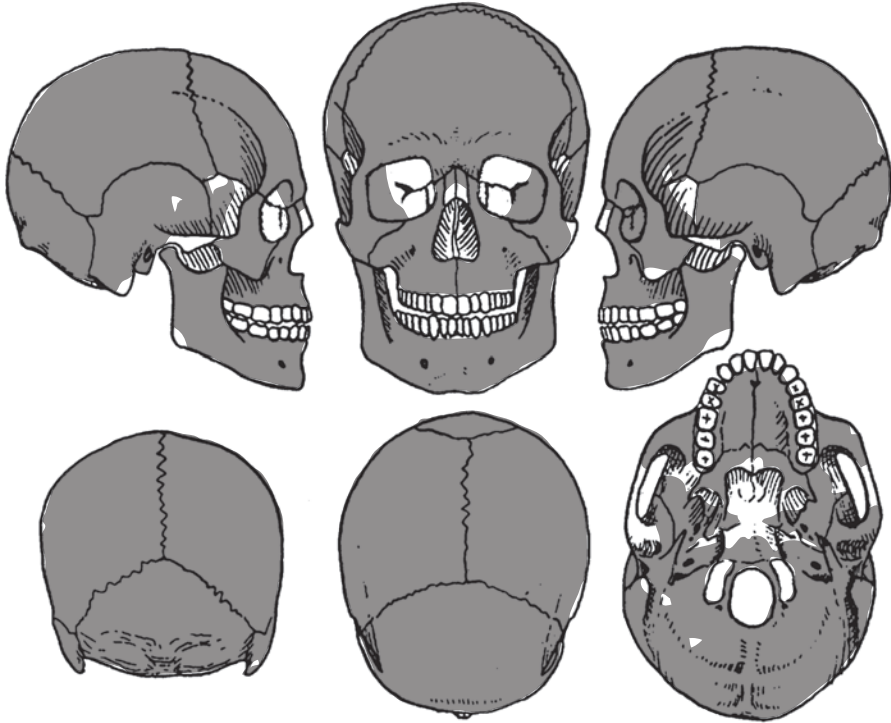
人骨番号	DII地区5号人骨	九大人骨番号	D-II-5
特記事項			
			

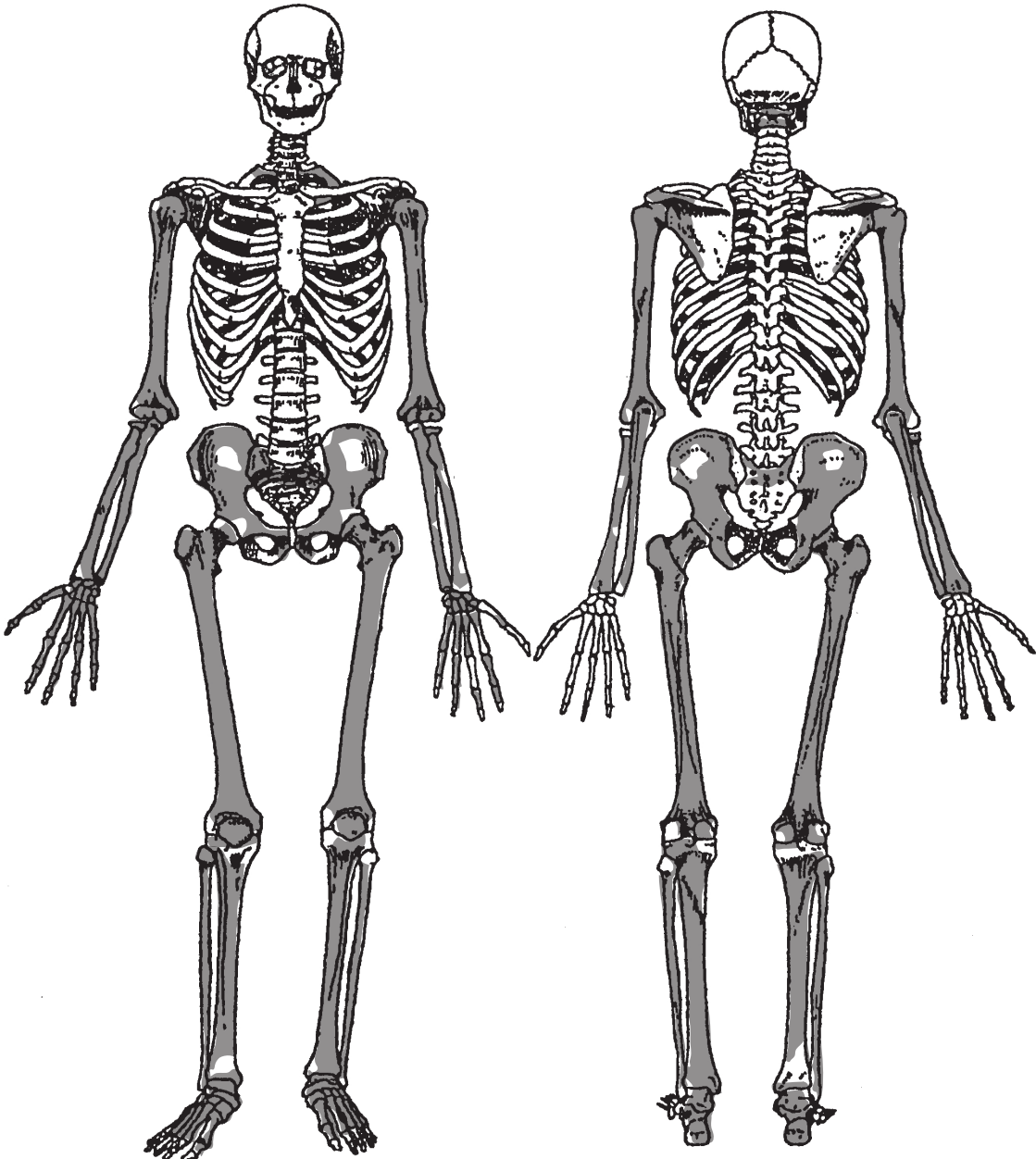
調査次数	第3次	層位	下層	性別	不明
人骨番号	D II 地区6号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	幼児
九大人骨番号	D-II-6	埋葬方法	一次葬	抜歯	なし
副葬品					
貝輪	竜佩		ガラス玉		
オオツタノハ	マクラガイ科製玉類		二孔板状貝製品		
ゴホウラ	イモガイ科製玉類	2	円盤状貝製品		
イモガイ	ノシガイ製玉類		ヤコウガイ製品		
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類	2	土器		
貝符	細型ツノガイ科玉類	35			
特記事項					
					

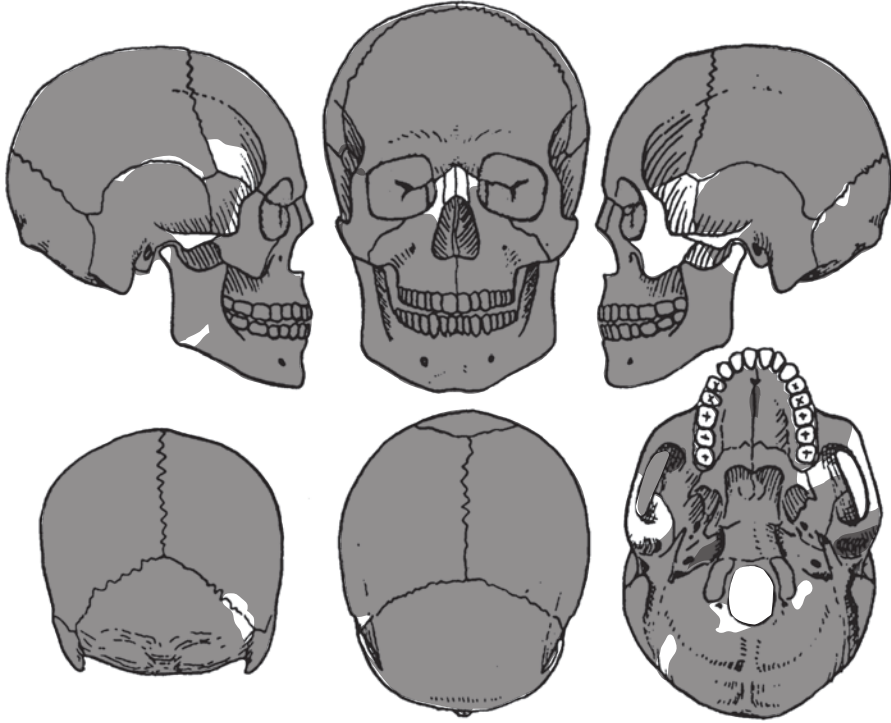
人骨番号	DII地区6号人骨	九大人骨番号	D-II-6
特記事項			
<p>The drawing illustrates a collection of human skeletal remains, organized into several groups:</p> <ul style="list-style-type: none"> Top Row: Two curved ribs, a central section of three vertebrae, and two scapulae. Second Row: Two humeri, one on each side, with their respective heads and acromioclavicular joints. Third Row: Two sets of forearm bones (radius and ulna) and two femora, arranged symmetrically. Fourth Row: Two views of a pelvic bone (acetabulum), a central section of three vertebrae, and two views of a small, rounded bone (possibly a tarsal or metatarsal). Fifth Row: Two sets of lower leg bones (tibia and fibula) and two femora, arranged symmetrically. 			

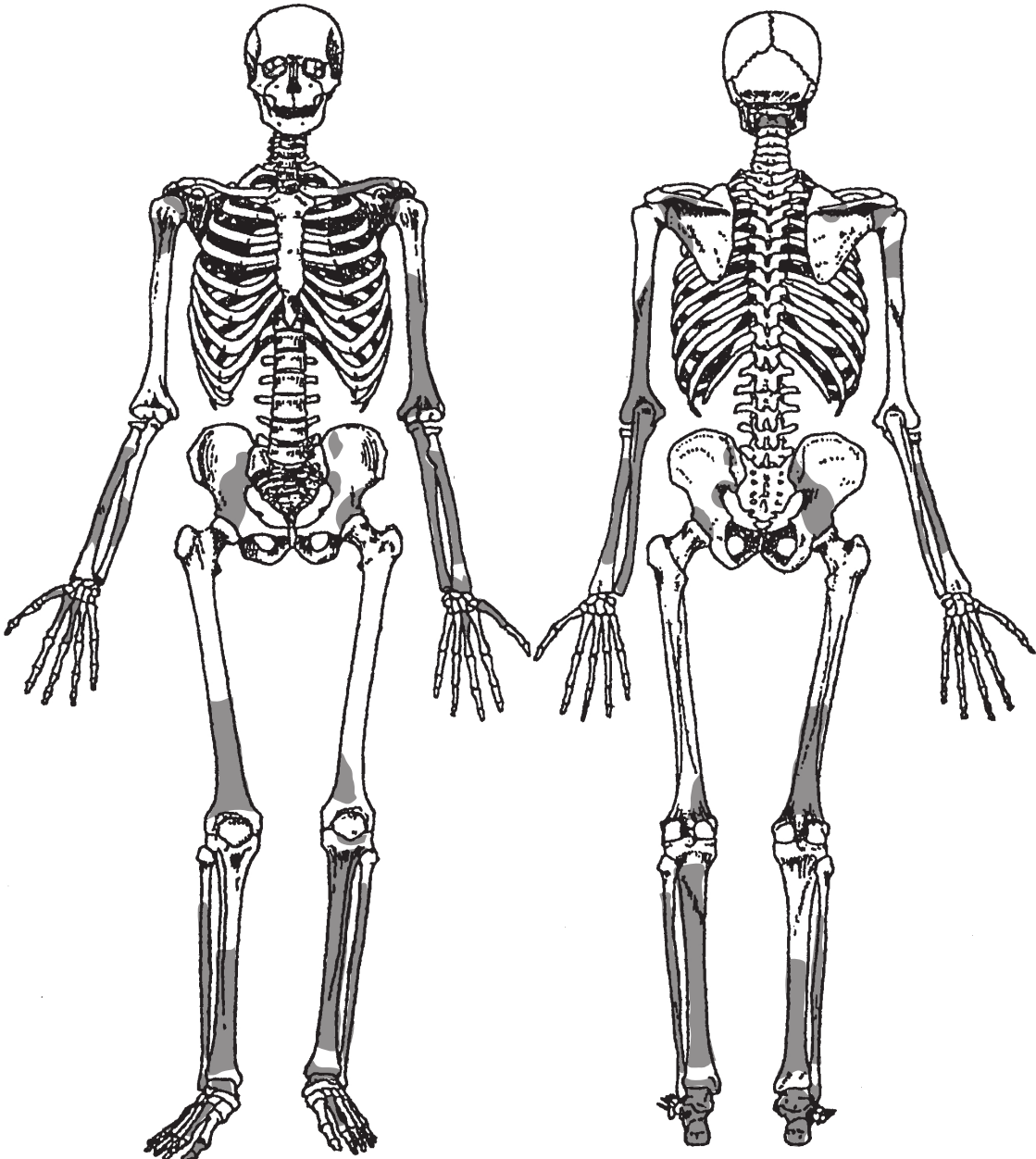
調査次数	第3次	層位	下層	性別	男性
人骨番号	DIII地区1号人骨	埋葬施設	箱形石槨 タイプ	年齢	熟年
九大人骨番号	D-III-1	埋葬方法	一次葬	抜歯	右上I2C
副葬品					
貝輪	竜佩	5	ガラス玉		
オオツタノハ	マクラガイ科製玉類		二孔板状貝製品		
ゴホウラ	イモガイ科製玉類	330	円盤状貝製品		
イモガイ	ノシガイ製玉類	20	ヤコウガイ製品		
オニ・ボウ	2 太型ツノガイ科玉類	13	土器	直上で土器片多数	
貝符	細型ツノガイ科玉類	157			
特記事項					

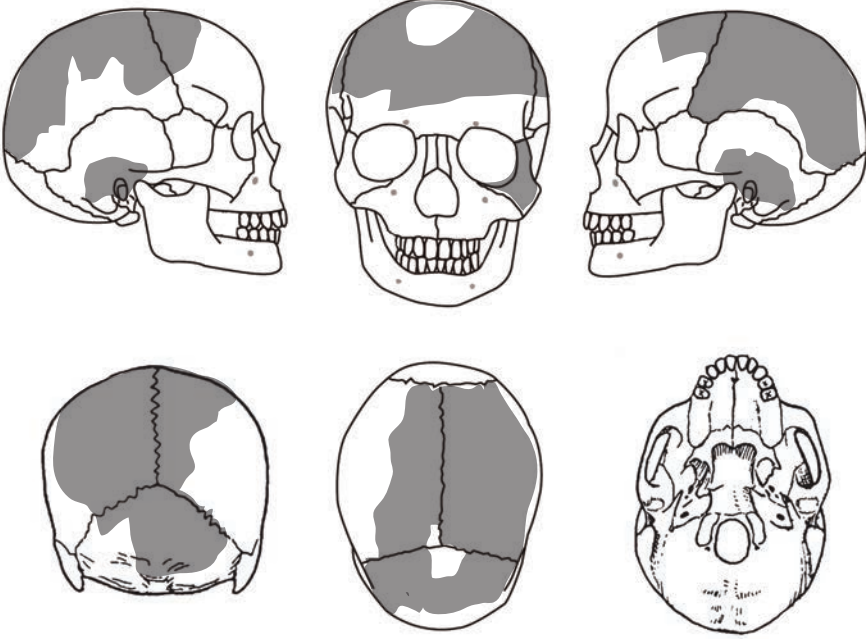
人骨番号	DIII地区1号人骨	九大人骨番号	D-III-1
特記事項			
			

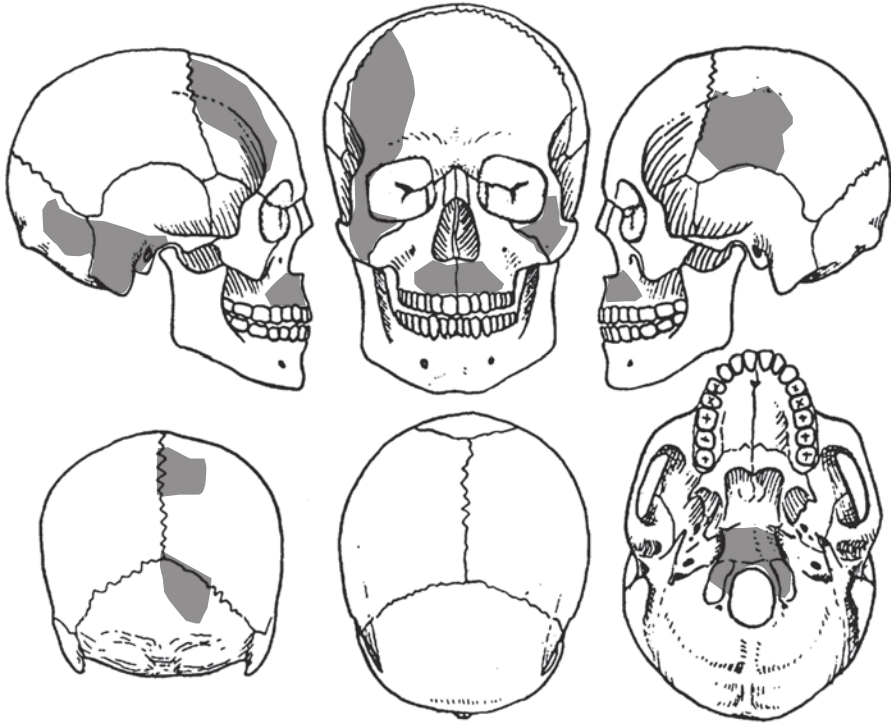
調査次数	第3次	層位	下層	性別	男性
人骨番号	DIII地区2号人骨	埋葬施設	馬蹄状配石 タイプ	年齢	若年
九大人骨番号	D-III-2	埋葬方法	一次葬	抜歯	—
副葬品					
貝輪	竜佩	25	ガラス玉	1	
オオツタノハ 2	マクラガイ科製玉類		二孔板状貝製品		
ゴホウラ 5	イモガイ科製玉類	4609	円盤状貝製品		
イモガイ	ノシガイ製玉類	23	ヤコウガイ製品		
オニ・ボウ	太型ツノガイ科玉類	1584	土器		
貝符 9	細型ツノガイ科玉類	2185			
特記事項					
					

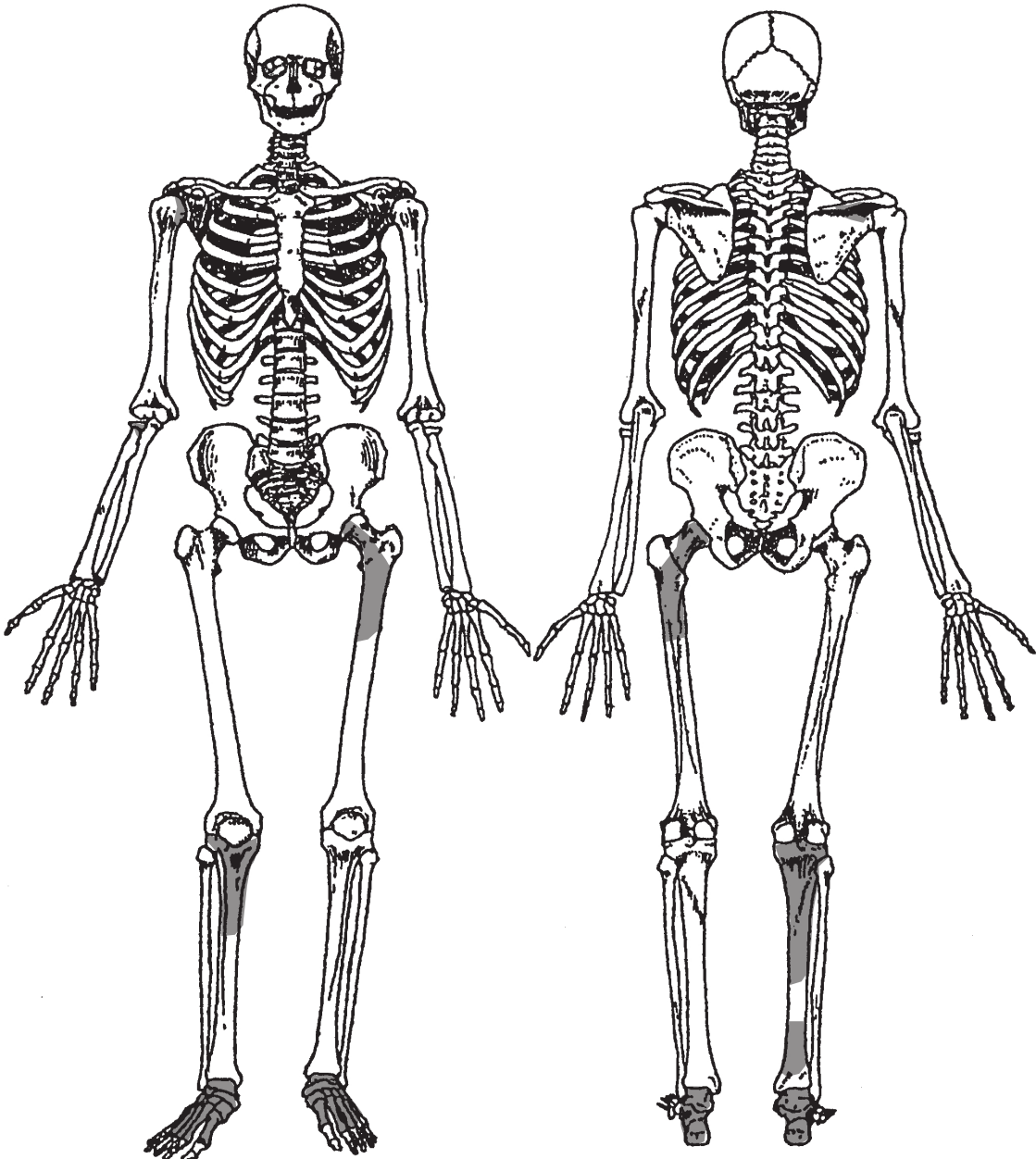
人骨番号	DIII地区2号人骨	九大人骨番号	D-III-2
特記事項			
			

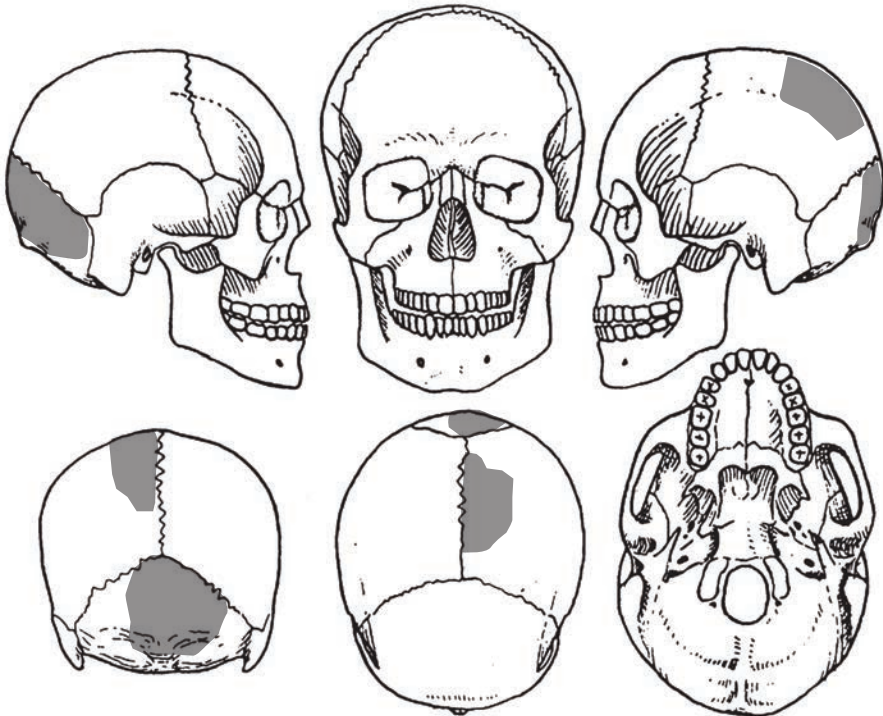
調査次数	第3次	層位	下層	性別	男性
人骨番号	DIV地区1号人骨	埋葬施設	不明	年齢	成年
九大人骨番号	D-IV-1	埋葬方法	二次葬	抜歯	—
副葬品					
貝輪	竜佩	1	ガラス玉		
オオツタノハ	マクラガイ科製玉類	(1)	二孔板状貝製品		
ゴホウラ	イモガイ科製玉類	656	円盤状貝製品		
イモガイ	ノシガイ製玉類	2	ヤコウガイ製品	1	
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類	2	土器	1	
貝符	2	細型ツノガイ科玉類	35		
特記事項					
・2体分（成人骨と未成人骨）あり。					
					

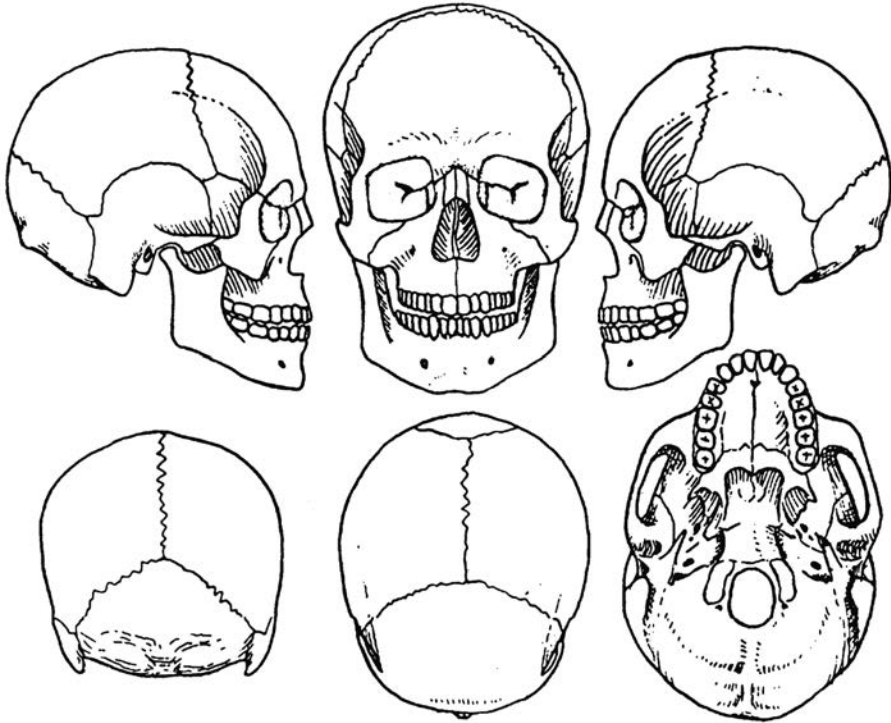
人骨番号	DIV地区1号人骨	九大人骨番号	D-IV-1
特記事項			
			

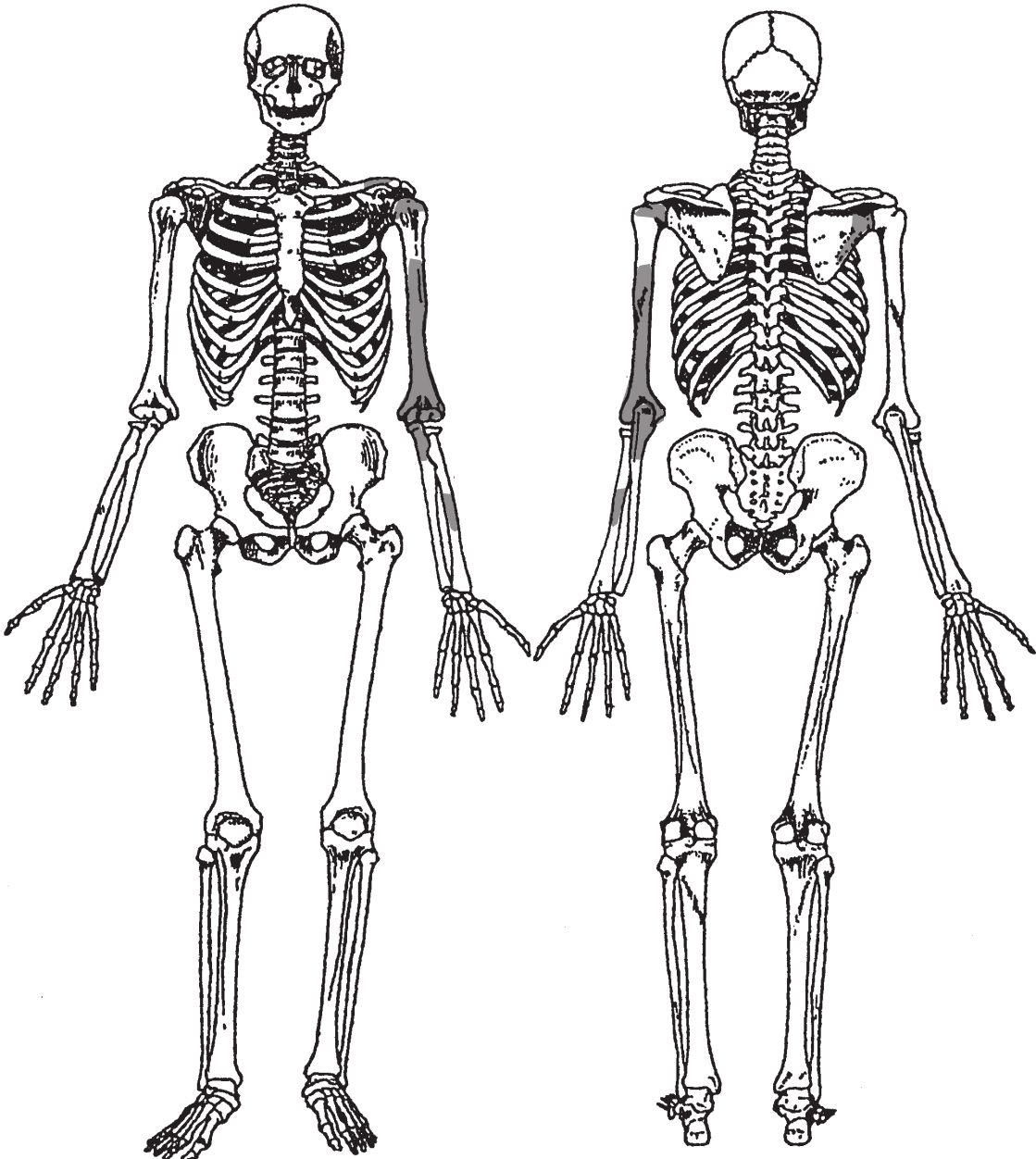
人骨番号	DIV地区1号人骨	九大人骨番号	D-IV-1
特記事項			
			

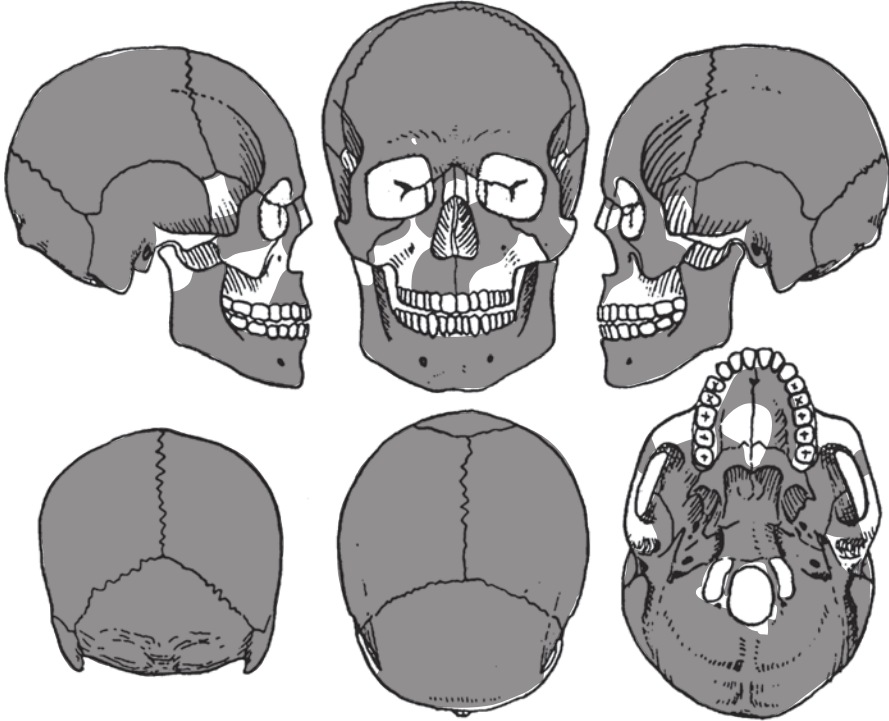
調査次数	第3次	層位	下層	性別	女性？
人骨番号	DIV地区4号	埋葬施設	不明	年齢	—
九大人骨番号	D-IV-4	埋葬方法	二次葬	抜歯	—
副葬品					
貝輪	竜佩	ガラス玉			
オオツタノハ	マクラガイ科製玉類	二孔板状貝製品			
ゴホウラ (1)	イモガイ科製玉類	円盤状貝製品			
イモガイ	ノシガイ製玉類	ヤコウガイ製品			
オニ・ボウ	太型ツノガイ科玉類	土器			
貝符	細型ツノガイ科玉類				
特記事項					
・成人骨2体分（男性と女性）あり。					
					

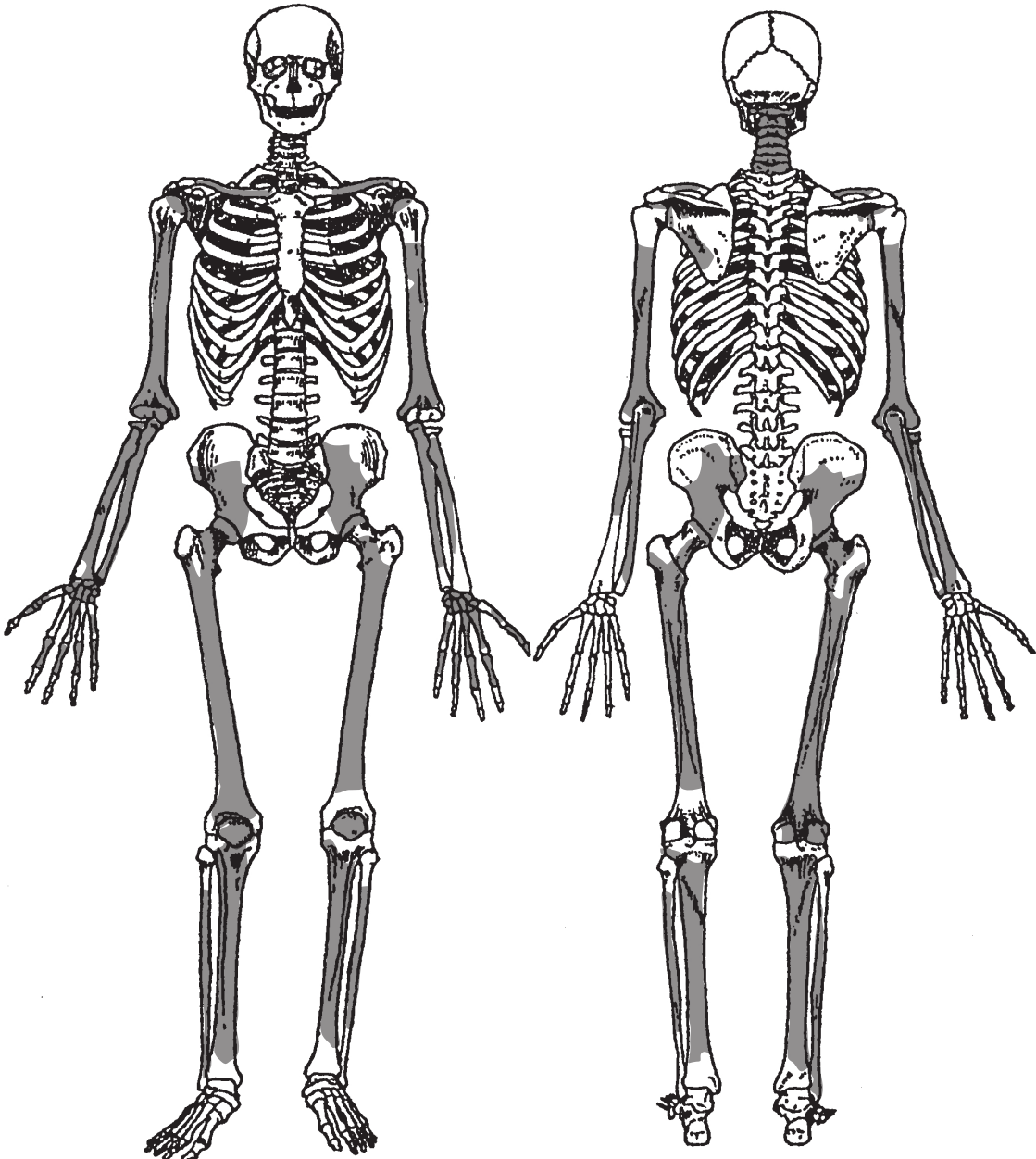
人骨番号	DIV地区4号	九大人骨番号	D-IV-4
特記事項			
			

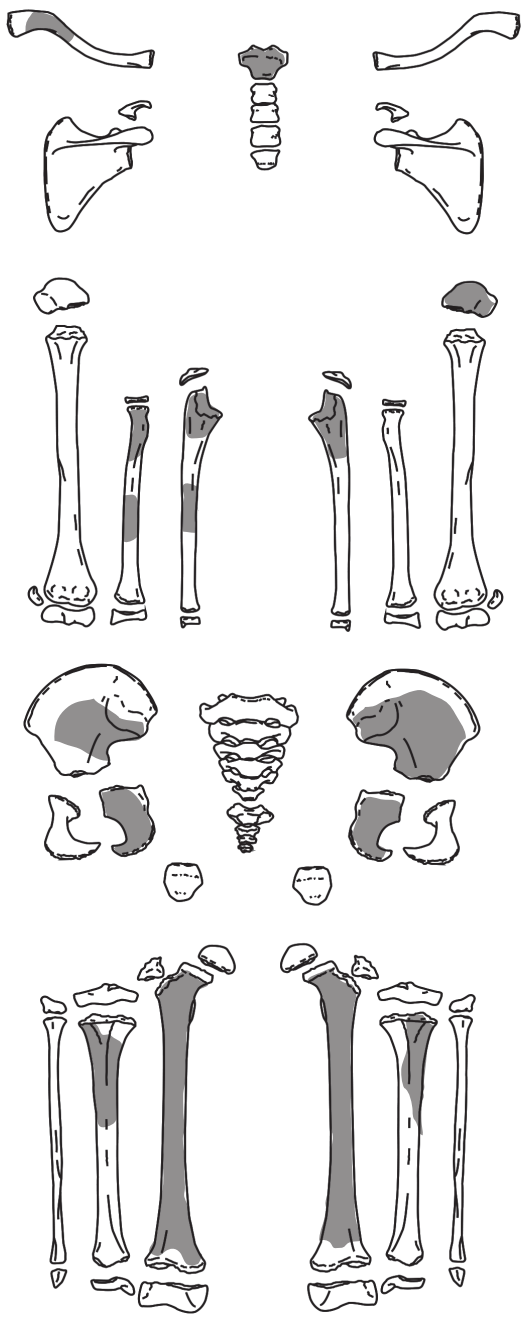
調査次数	第3次	層位	下層	性別	男性
人骨番号	DIV地区4号	埋葬施設	不明	年齢	—
九大人骨番号	D-IV-4	埋葬方法	二次葬	抜歯	—
副葬品					
貝輪	竜佩	ガラス玉			
オオツタノハ	マクラガイ科製玉類	二孔板状貝製品			
ゴホウラ (1)	イモガイ科製玉類	円盤状貝製品			
イモガイ	ノシガイ製玉類	ヤコウガイ製品			
オニ・ポウ	大型ツノガイ科玉類	土器			
貝符	細型ツノガイ科玉類				
特記事項					
・成人骨2体分（男性と女性）あり。					
					

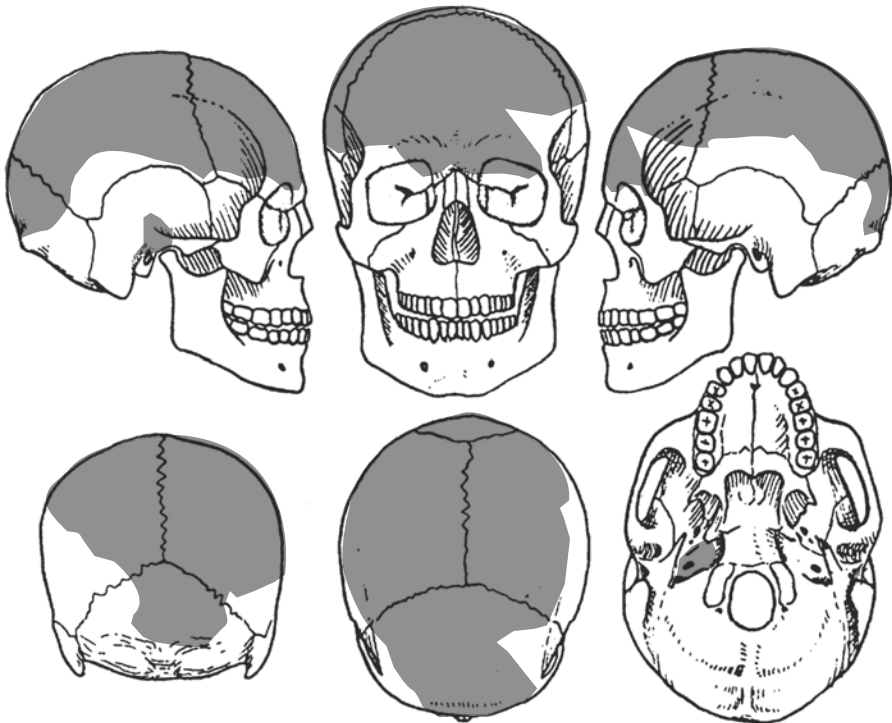
調査次数	第3次	層位	下層	性別	不明
人骨番号	DIV地区5号	埋葬施設	不明	年齢	不明
九大人骨番号	D-IV-5	埋葬方法	一次葬	抜歯	不明
副葬品					
貝輪	竜佩	1	ガラス玉		
オオツタノハ	マクラガイ科製玉類	1	二孔板状貝製品		
ゴホウラ	イモガイ科製玉類	359	円盤状貝製品		
イモガイ	ノシガイ製玉類	2	ヤコウガイ製品		
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類	6	土器		
貝符	細型ツノガイ科玉類	28			
特記事項					
					

人骨番号	DIV地区5号	九大人骨番号	D-IV-5
特記事項			
			

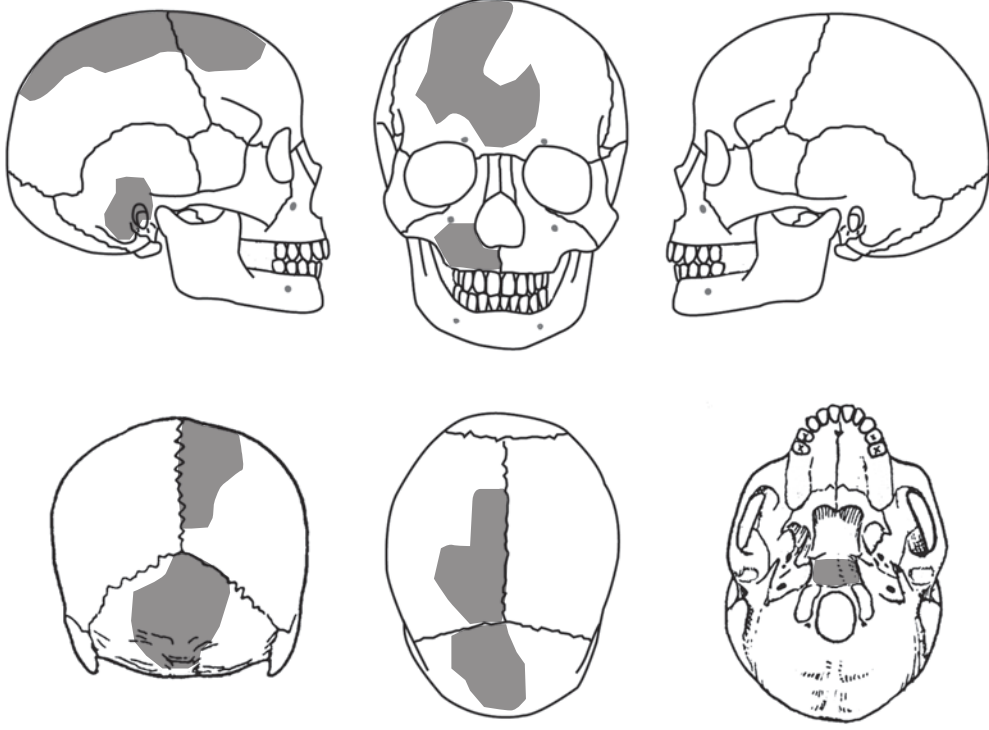
調査次数	第3次	層位	下層	性別	男性
人骨番号	DIV地区6号	埋葬施設	覆石 タイプ	年齢	熟年
九大人骨番号	D-IV-6	埋葬方法	一次葬	抜歯	左上I2C
副葬品					
貝輪	竜佩		ガラス玉		
オオツタノハ	マクラガイ科製玉類	14	二孔板状貝製品		
ゴホウラ	イモガイ科製玉類	54	円盤状貝製品		
イモガイ	ノシガイ製玉類		ヤコウガイ製品		
オニ・ボウ	太型ツノガイ科玉類	5	土器	1	
貝符	細型ツノガイ科玉類	25			
特記事項					
					

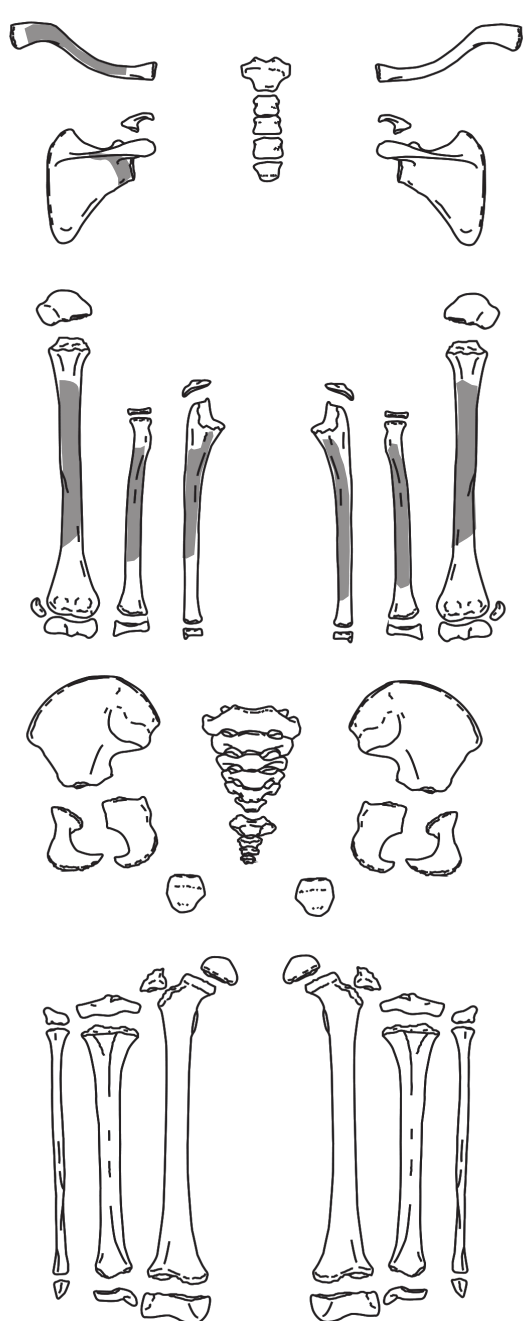
人骨番号	DIV地区6号	九大人骨番号	D-IV-6
特記事項			
			

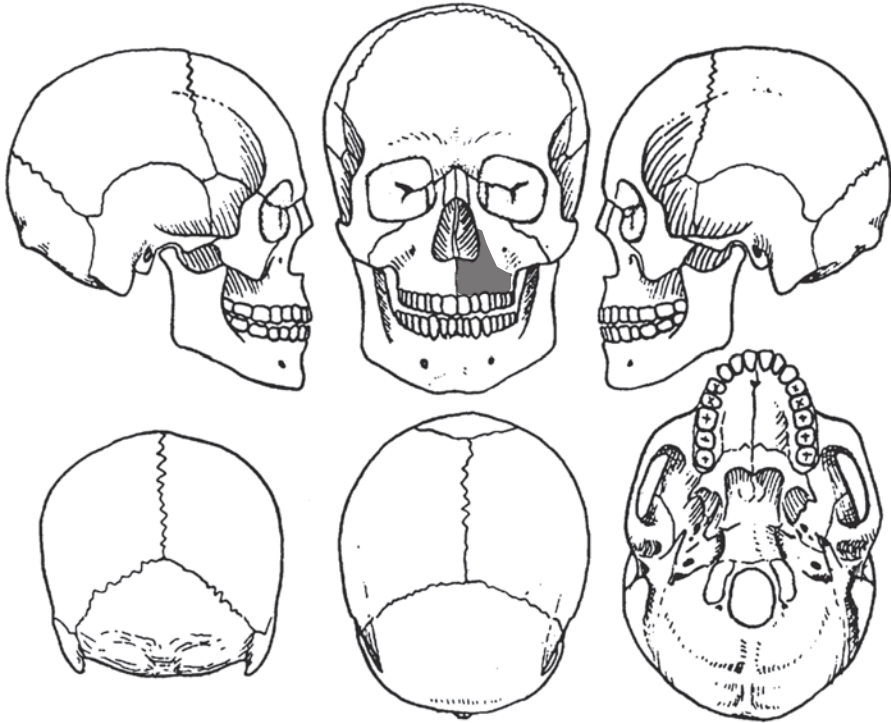
人骨番号	DIV地区6号	九大人骨番号	D-IV-6
特記事項			
<p>・成人骨に伴い出土の未成人骨。</p>			
 <p>The illustration shows a collection of human skeletal remains arranged in four rows. The top row features two curved ribs, a central vertebra, and another rib. The second row shows two scapulae and a central vertebra. The third row displays two sets of long bones (humeri and radii/ulnae) with their respective epicondyles and distal ends. The fourth row shows two skull fragments, a central vertebra, and two sets of long bones (femurs and tibiae/fibulae) with their distal ends. The bones are drawn in a simple, line-art style with some shading to indicate depth and texture.</p>			

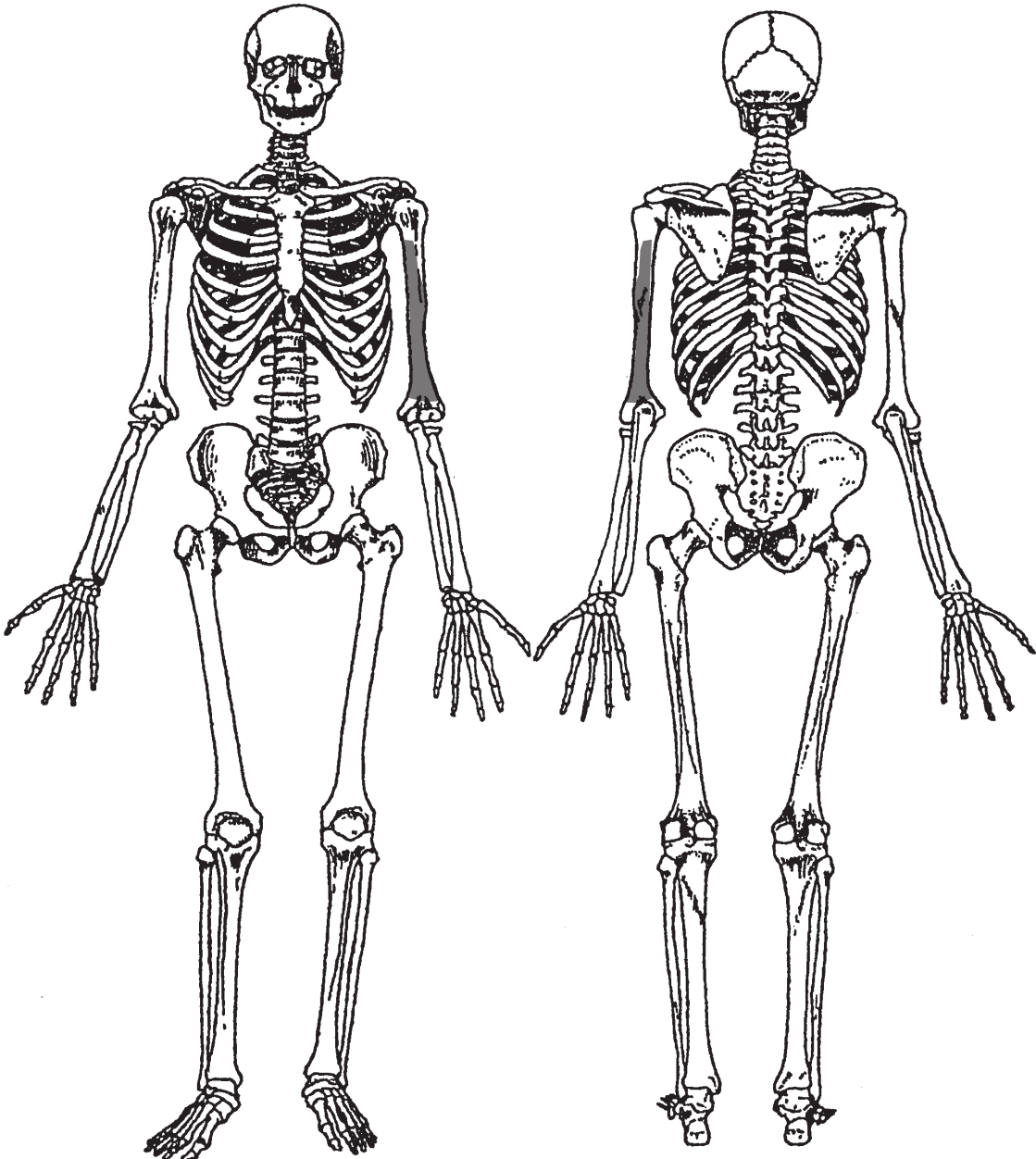
調査回数	第3次	層位	下層	性別	不明
人骨番号	DIV地区7号	埋葬施設	不明	年齢	成人～
九大人骨番号	D-IV-7	埋葬方法	一次葬	抜歯	不明
副葬品					
貝輪	竜佩	ガラス玉			
オオツタノハ	マクラガイ科製玉類	二孔板状貝製品			
ゴホウラ	イモガイ科製玉類	円盤状貝製品			
イモガイ	ノシガイ製玉類	ヤコウガイ製品			
オニ・ボウ	太型ツノガイ科玉類	土器			
貝符	細型ツノガイ科玉類				
特記事項					
・ 3体分の成人骨が出土。					
					

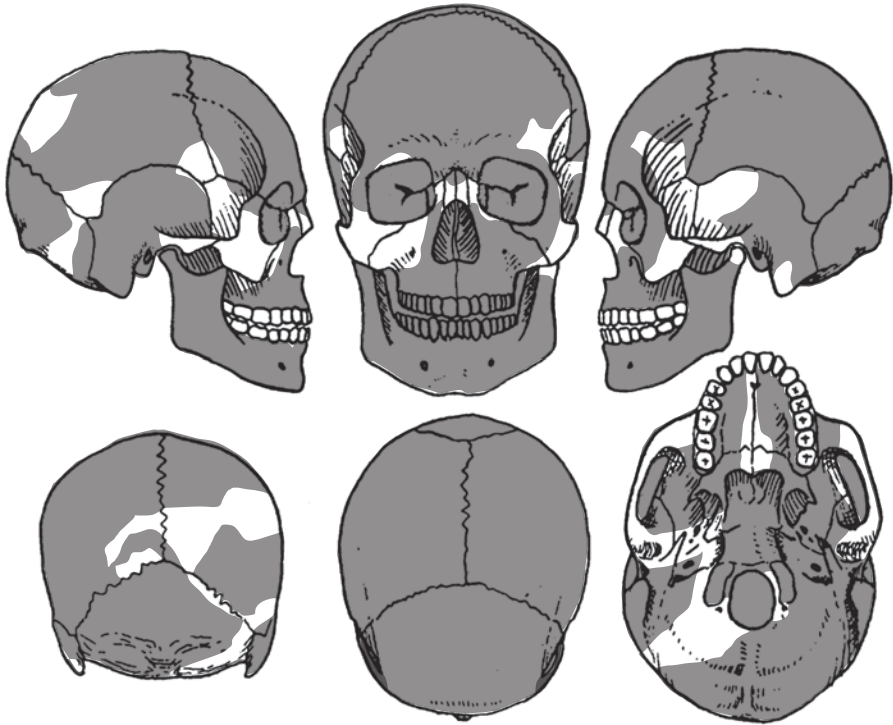
人骨番号	DIV地区7号	九大人骨番号	D-IV-7
特記事項			

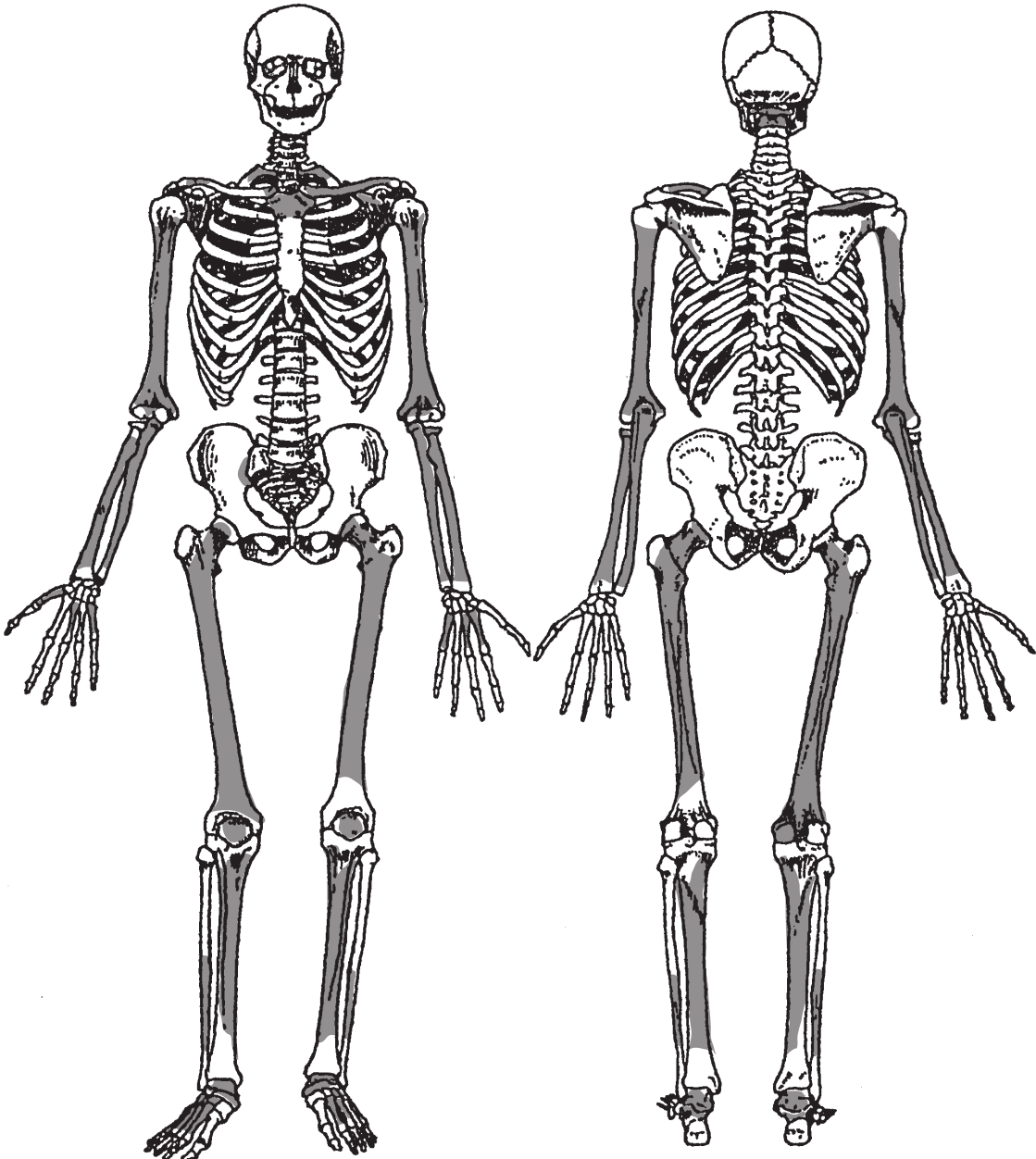
調査次数	第3次	層位	下層	性別	不明
人骨番号	DV地区1号	埋葬施設	不明	年齢	幼児
九大人骨番号	D-V-1	埋葬方法	一次葬	抜歯	—
副葬品					
貝輪	竜佩	ガラス玉			
オオツタノハ	マクラガイ科製玉類	二孔板状貝製品			
ゴホウラ	イモガイ科製玉類	円盤状貝製品			
イモガイ	ノシガイ製玉類	ヤコウガイ製品			
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類	土器			
貝符	細型ツノガイ科玉類				
特記事項					
・赤色顔料使用。					
					

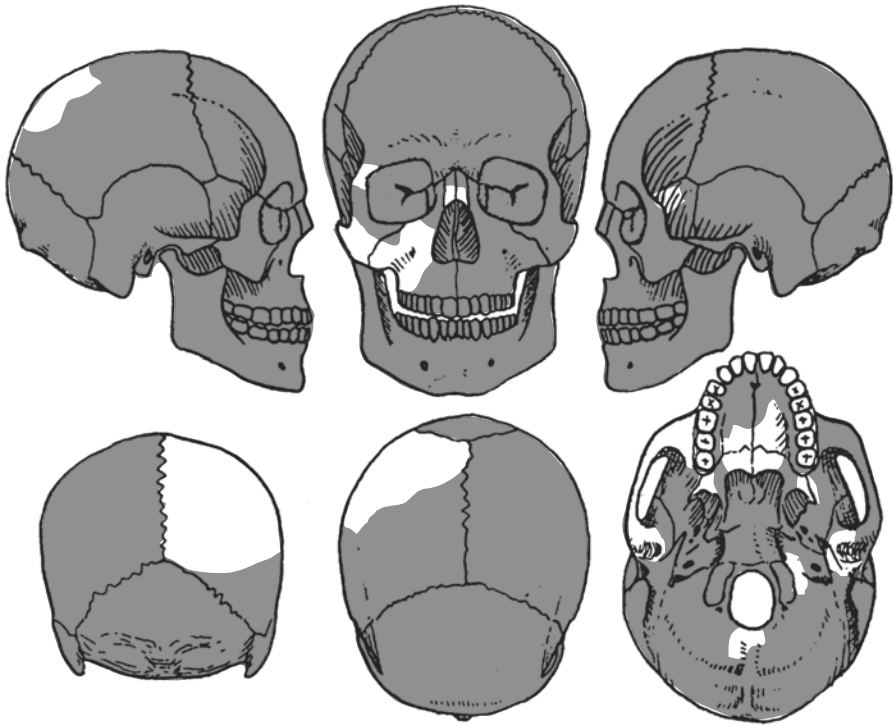
人骨番号	DV地区1号	九大人骨番号	D-V-1
特記事項			
 <p>The image displays a series of anatomical drawings of human bones, organized into four rows. The first row shows two curved ribs, a central vertebra, and another rib. The second row features two scapulae and a central vertebra. The third row contains two humeri, two radius and ulna pairs, and two femurs. The fourth row shows two femurs, two radius and ulna pairs, and two tibia and fibula pairs. The drawings are detailed line art, showing the structure and articulation of the bones.</p>			

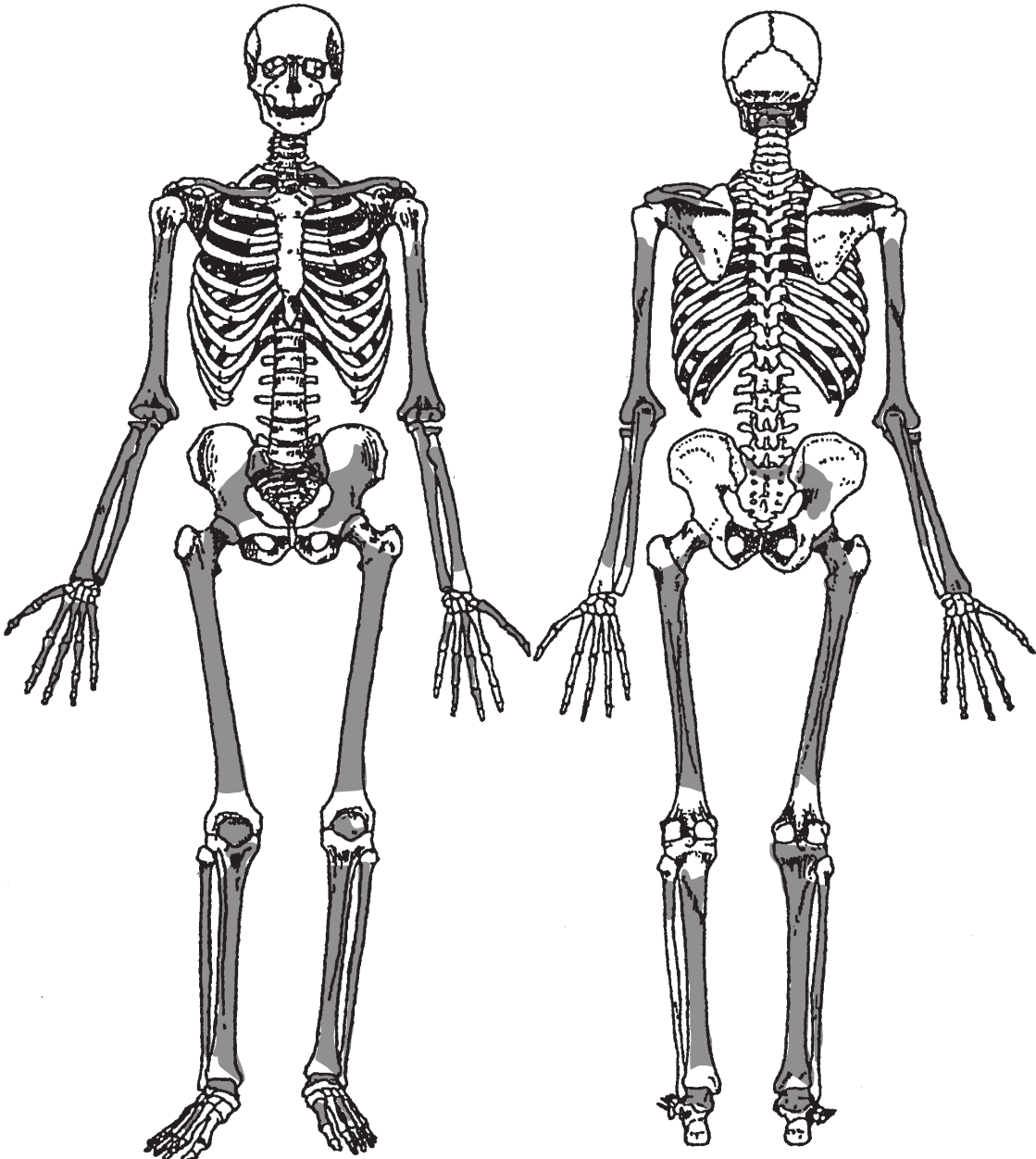
調査次数	第3次	層位	下層	性別	不明
人骨番号	DV地区1号	埋葬施設	不明	年齢	成人
九大人骨番号	D-V-1	埋葬方法	一次葬	抜歯	—
副葬品					
貝輪	竜佩	ガラス玉			
オオツタノハ	マクラガイ科製玉類	二孔板状貝製品			
ゴホウラ	イモガイ科製玉類	円盤状貝製品			
イモガイ	ノシガイ製玉類	ヤコウガイ製品			
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類	土器			
貝符	細型ツノガイ科玉類				
特記事項					
・未成人骨と共伴。					
					

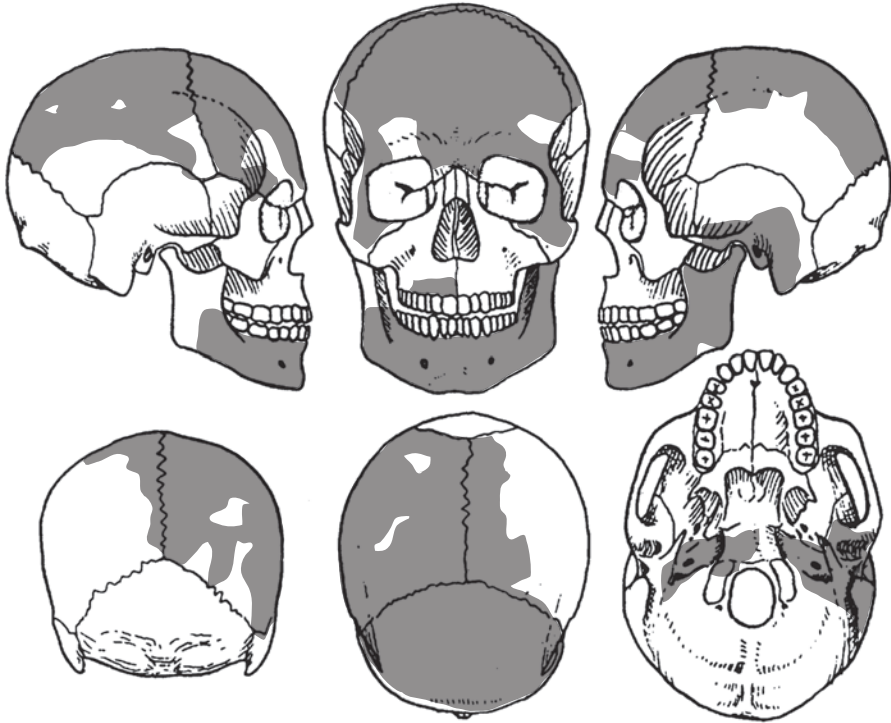
人骨番号	DV地区1号	九大人骨番号	D-V-1
特記事項			
<ul style="list-style-type: none"> ・未成人骨と共伴。 			
			

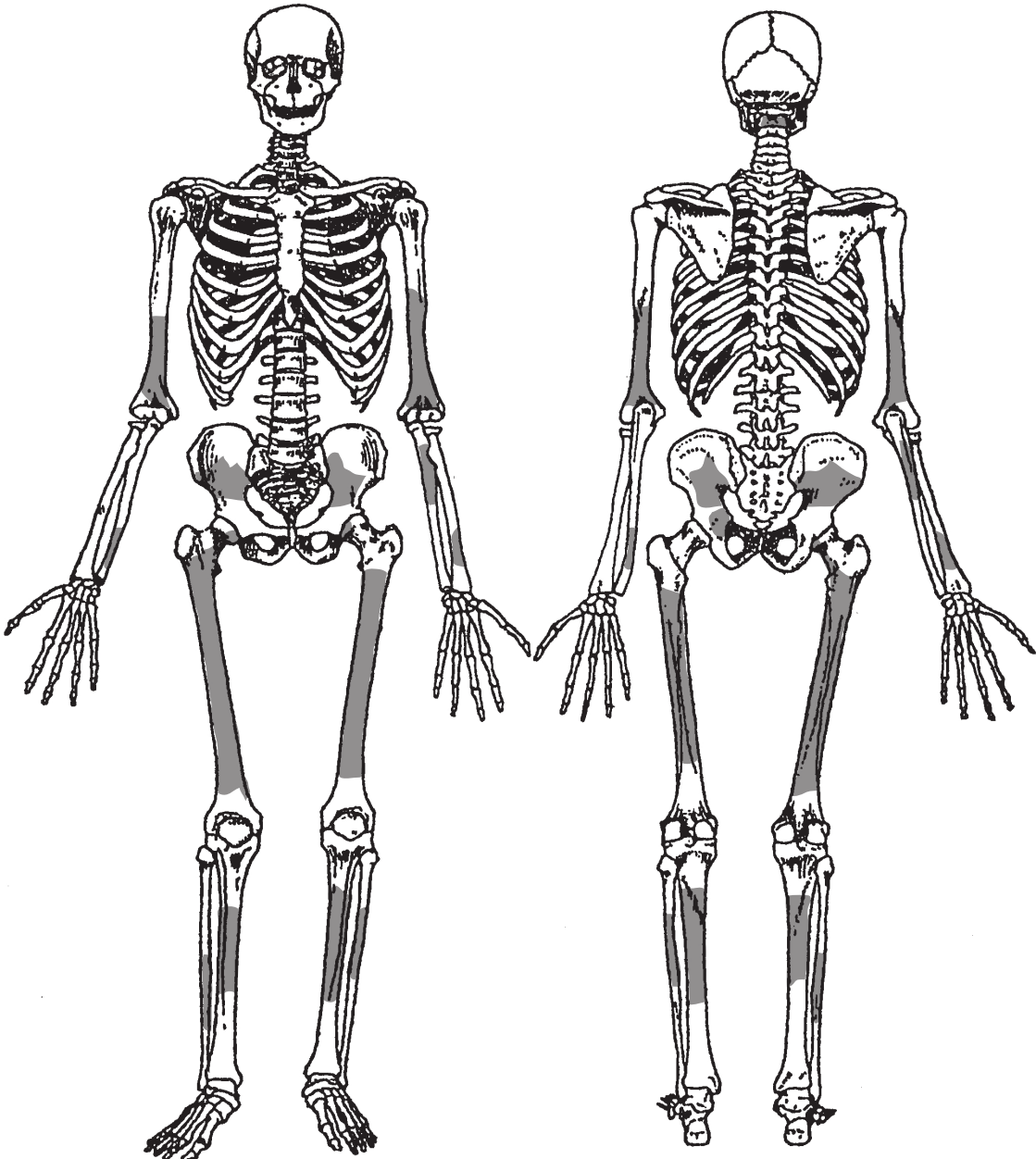
調査次数	第3次	層位	下層	性別	男性
人骨番号	DVII地区1号	埋葬施設	不明	年齢	若～成年
九大人骨番号	D-VII-1	埋葬方法	一次葬	抜歯	右上I2
副葬品					
貝輪	竜佩	3	ガラス玉		
オオツタノハ	マクラガイ科製玉類		二孔板状貝製品		
ゴホウラ	イモガイ科製玉類	69	円盤状貝製品		
イモガイ	ノシガイ製玉類		ヤコウガイ製品		
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類	1	土器		
貝符	1	細型ツノガイ科玉類	17		
特記事項					
・赤色顔料使用。					
					

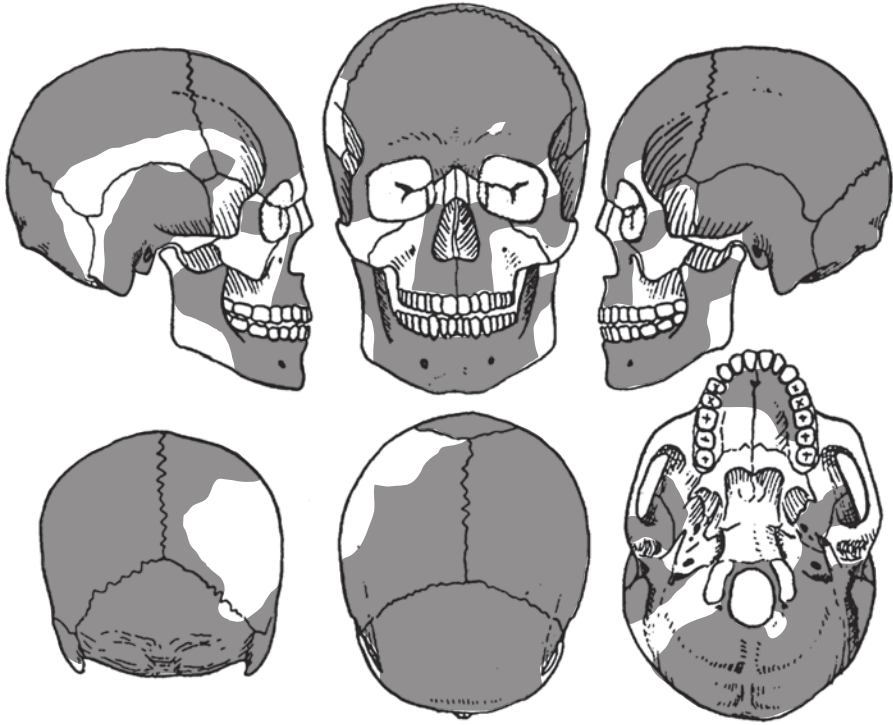
人骨番号	DVII地区1号	九大人骨番号	D-VII-1
特記事項			
			

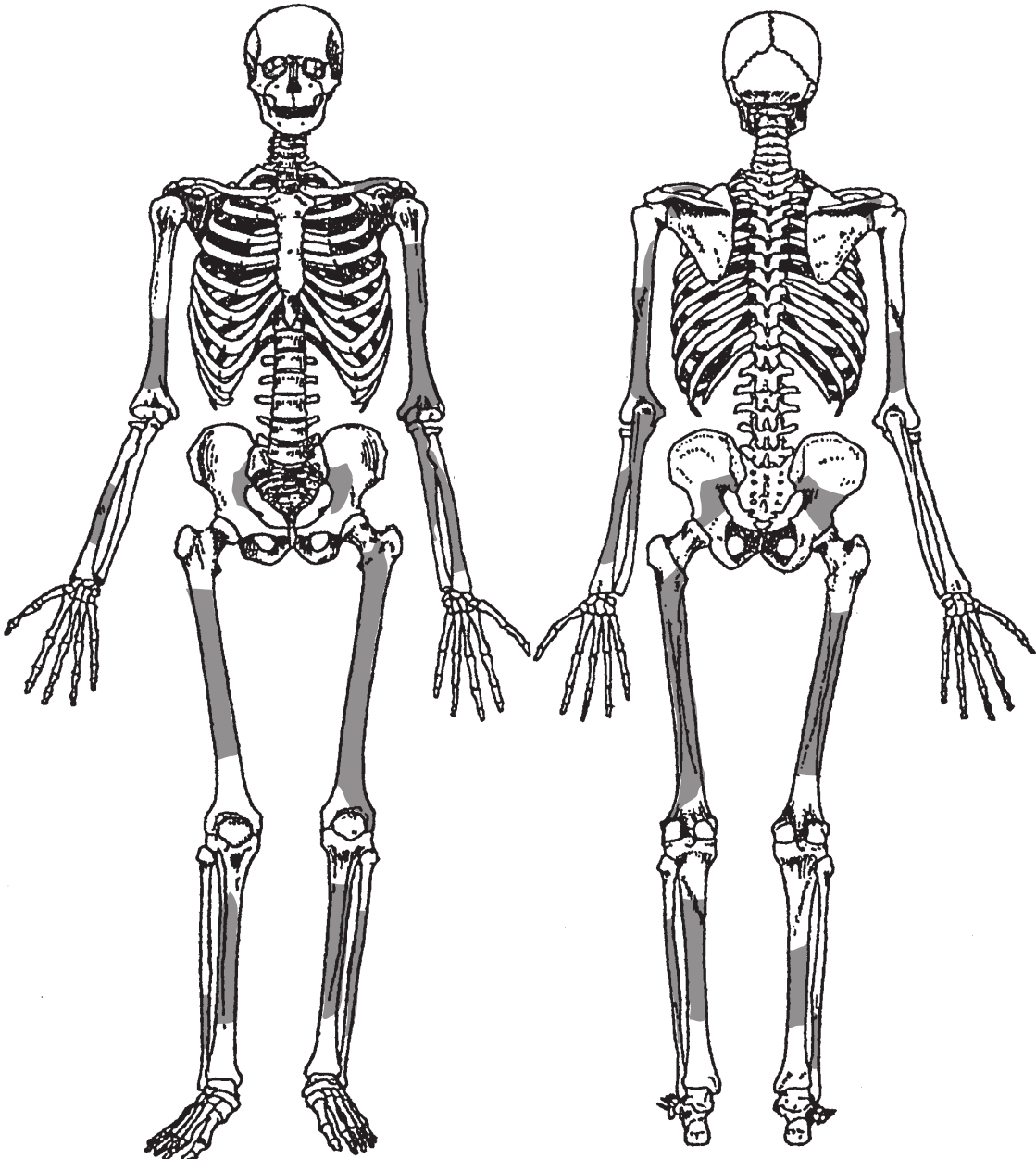
調査次数	第3次	層位	下層	性別	男性
人骨番号	DIX地区1号	埋葬施設	馬蹄状配石 タイプ	年齢	成年
九大人骨番号	D-IX-1	埋葬方法	一次葬	抜歯	右上I2C
副葬品					
貝輪	竜佩	ガラス玉			
オオツタノハ	マクラガイ科製玉類	二孔板状貝製品 14			
ゴホウラ	イモガイ科製玉類	円盤状貝製品			
イモガイ	ノシガイ製玉類	ヤコウガイ製品			
オニ・ボウ	太型ツノガイ科玉類	土器			
貝符	細型ツノガイ科玉類				
特記事項					
					

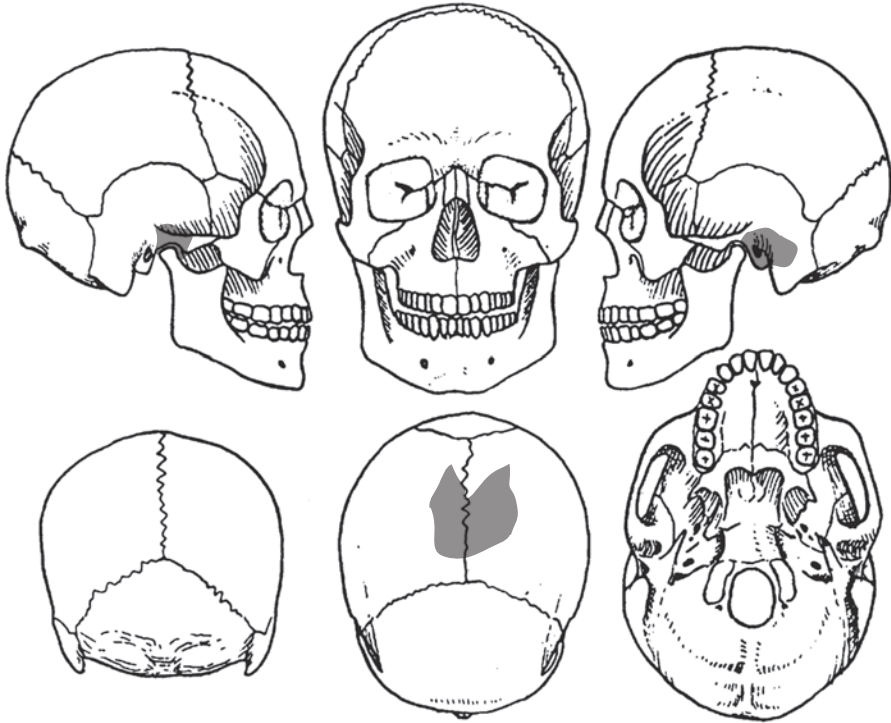
人骨番号	DIX地区1号	九大人骨番号	D-IX-1
特記事項			
			

調査次数	第3次	層位	下層	性別	男性
人骨番号	EⅡ地区1号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	成年
九大人骨番号	E-Ⅱ-1	埋葬方法	一次葬	抜歯	左上I2C
副葬品					
貝輪	竜佩	ガラス玉	3		
オオツタノハ 8	マクラガイ科製玉類	二孔板状貝製品	11		
ゴホウラ	イモガイ科製玉類	円盤状貝製品			
イモガイ 1	ノシガイ製玉類 32	ヤコウガイ製品			
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類	土器			
貝符	細型ツノガイ科玉類				
特記事項					
					

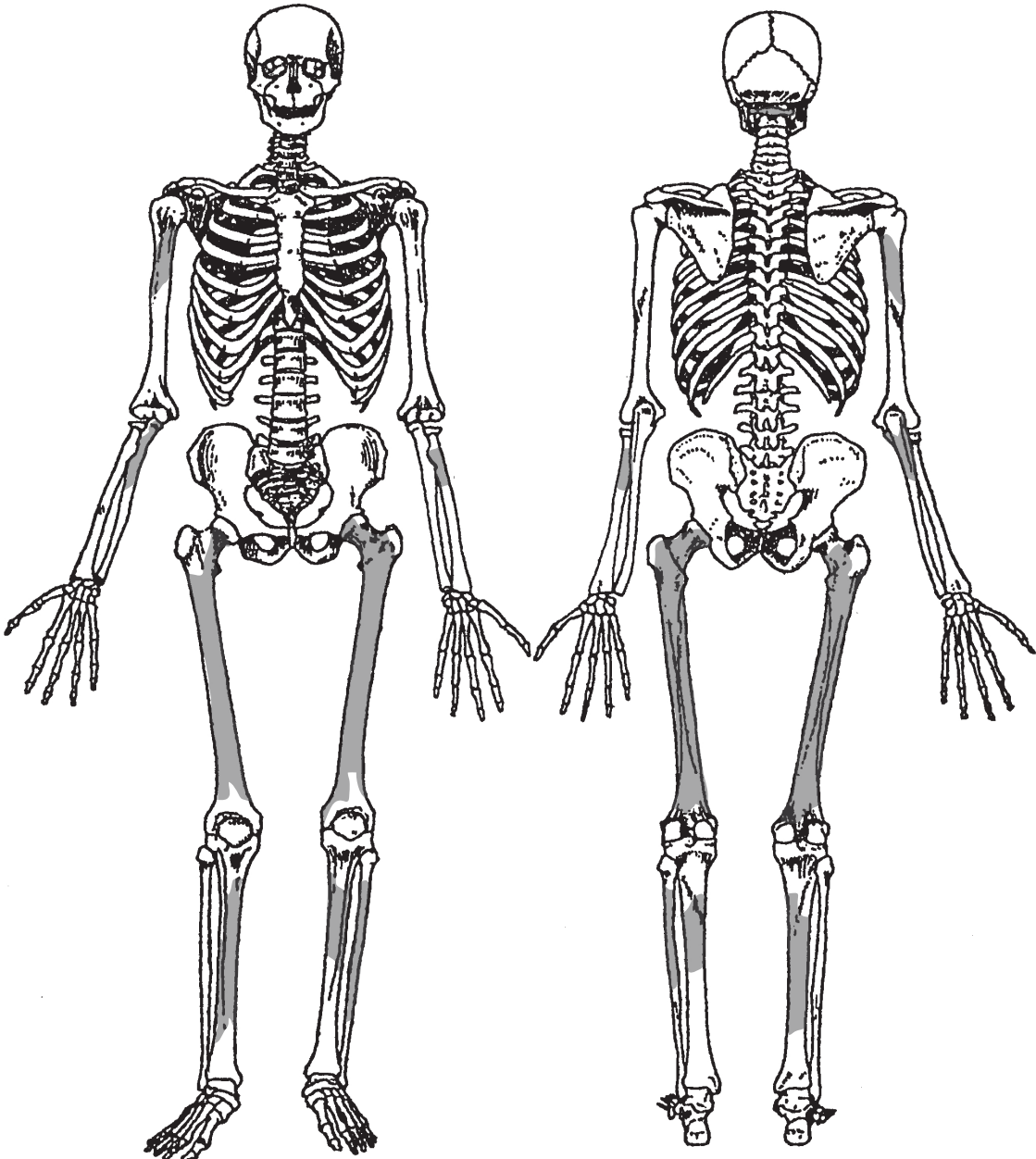
人骨番号	E II 地区1号人骨	九大人骨番号	E-II-1
特記事項			
			

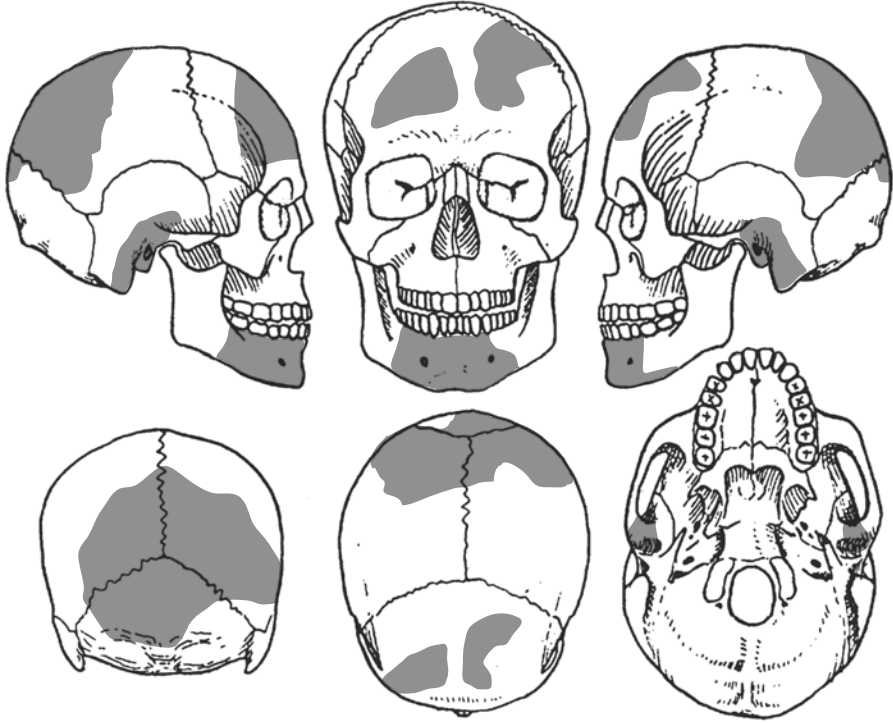
調査次数	第3次	層位	下層	性別	男性
人骨番号	E II 地区2号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	熟年
九大人骨番号	E-II-2	埋葬方法	一次葬	抜歯	なし
副葬品					
貝輪	竜佩	ガラス玉			
オオツタノハ	マクラガイ科製玉類	二孔板状貝製品			
ゴホウラ	イモガイ科製玉類	円盤状貝製品			
イモガイ	ノシガイ製玉類	ヤコウガイ製品			
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類	土器			
貝符	細型ツノガイ科玉類				
特記事項					
					

人骨番号	E II 地区2号人骨	九大人骨番号	E- II -2
特記事項			
			

調査次数	第3次	層位	下層	性別	不明
人骨番号	E II 地区3号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	不明
九大人骨番号	E-II-3	埋葬方法	一次葬	抜歯	不明
副葬品					
貝輪	竜佩	ガラス玉			
オオツタノハ 9	マクラガイ科製玉類	二孔板状貝製品			
ゴホウラ	イモガイ科製玉類	円盤状貝製品			
イモガイ	ノシガイ製玉類	ヤコウガイ製品			
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類	土器			
貝符	細型ツノガイ科玉類				
特記事項					
					

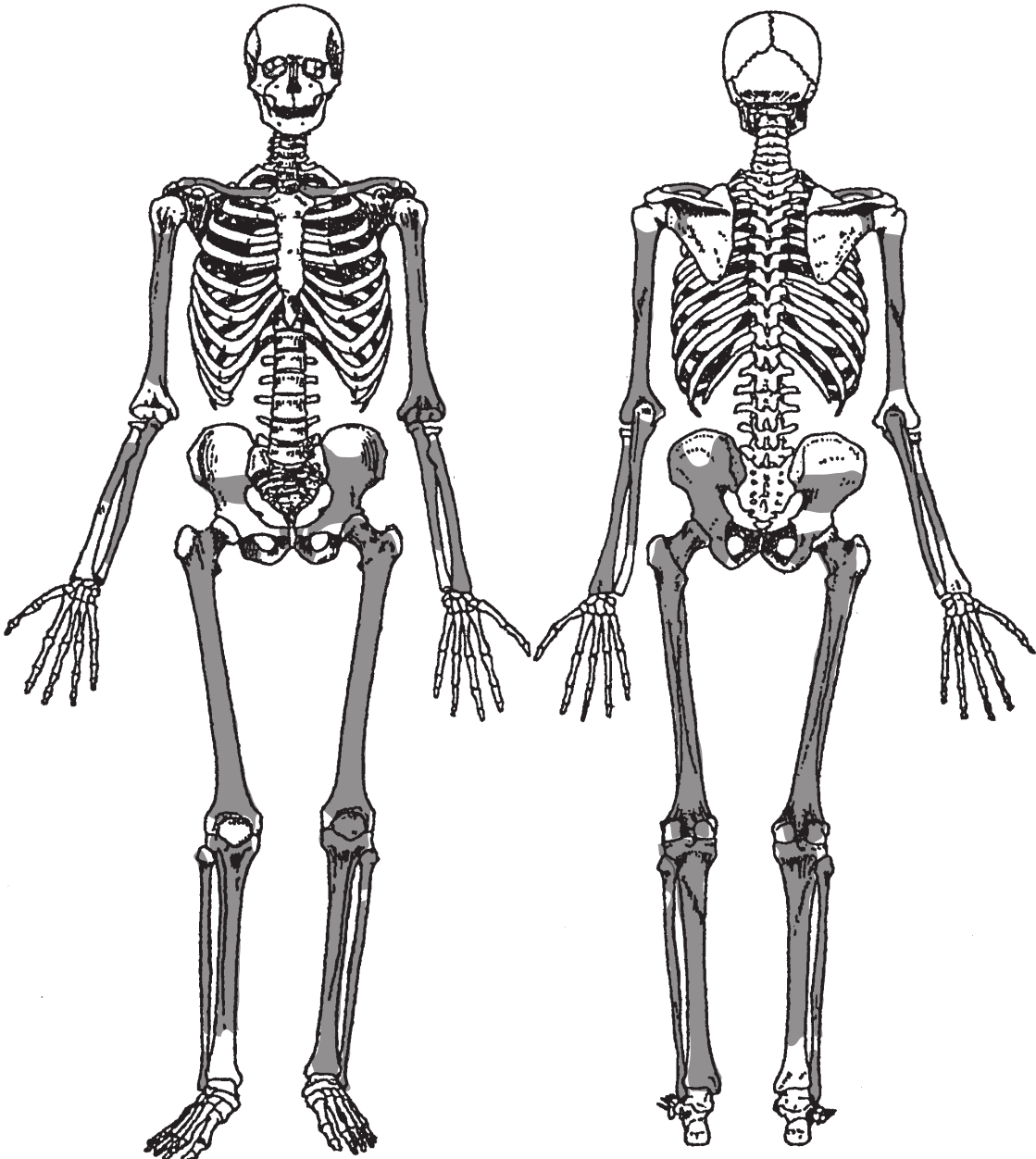
調査次数	第3次	層位	下層	性別	女性
人骨番号	EⅢ地区1号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	若年
九大人骨番号	E-Ⅲ-1	埋葬方法	一次葬	抜歯	不明
副葬品					
貝輪	竜佩	ガラス玉			
オオツタノハ 1	マクラガイ科製玉類	二孔板状貝製品			
ゴホウラ 7	イモガイ科製玉類	円盤状貝製品			
イモガイ	ノシガイ製玉類	ヤコウガイ製品			
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類	土器			
貝符	細型ツノガイ科玉類				
特記事項					

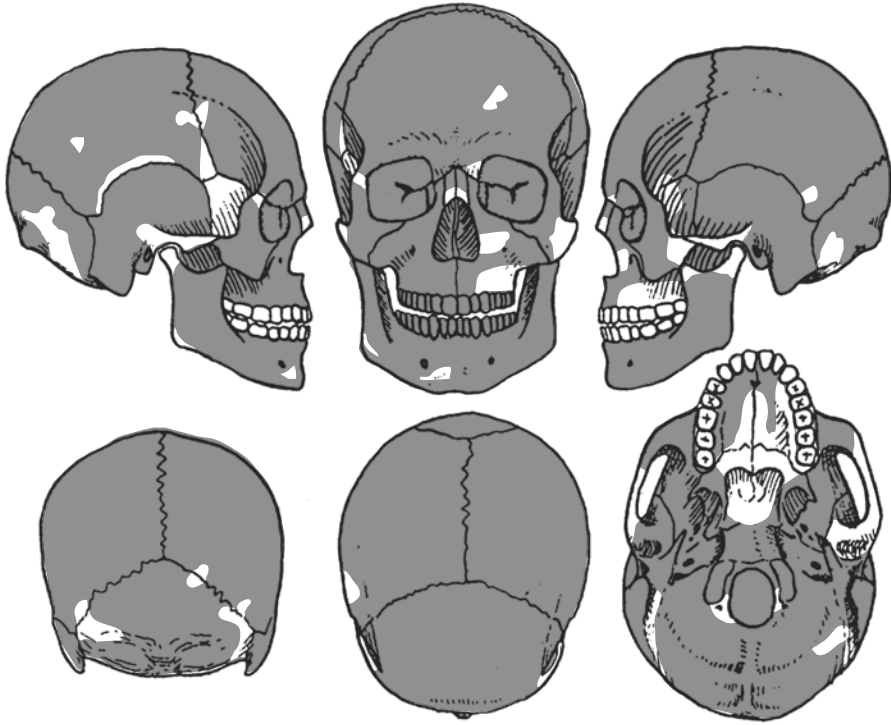
人骨番号	EⅢ地区1号人骨	九大人骨番号	E-Ⅲ-1
特記事項			
			

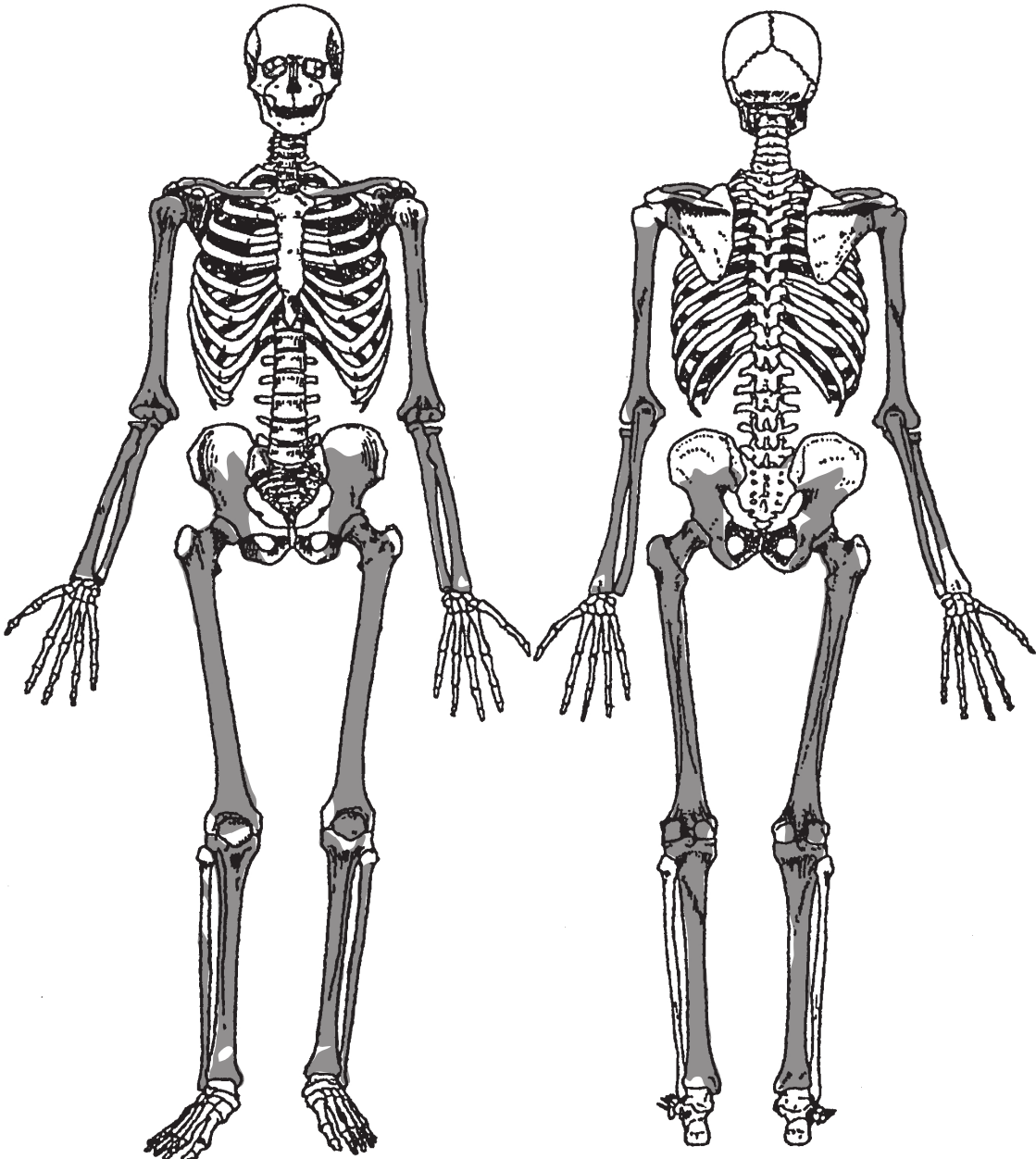
調査次数	第3次	層位	下層	性別	男性？
人骨番号	EIII地区2号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	成年
九大人骨番号	E-III-2	埋葬方法	一次葬	抜歯	不明
副葬品					
貝輪	竜佩		ガラス玉		
オオツタノハ	マクラガイ科製玉類		二孔板状貝製品	2	
ゴホウラ	13	イモガイ科製玉類	325	円盤状貝製品	
イモガイ		ノシガイ製玉類	9	ヤコウガイ製品	3
オニ・ボウ		大型ツノガイ科玉類		土器	
貝符		細型ツノガイ科玉類	3		
特記事項					
					

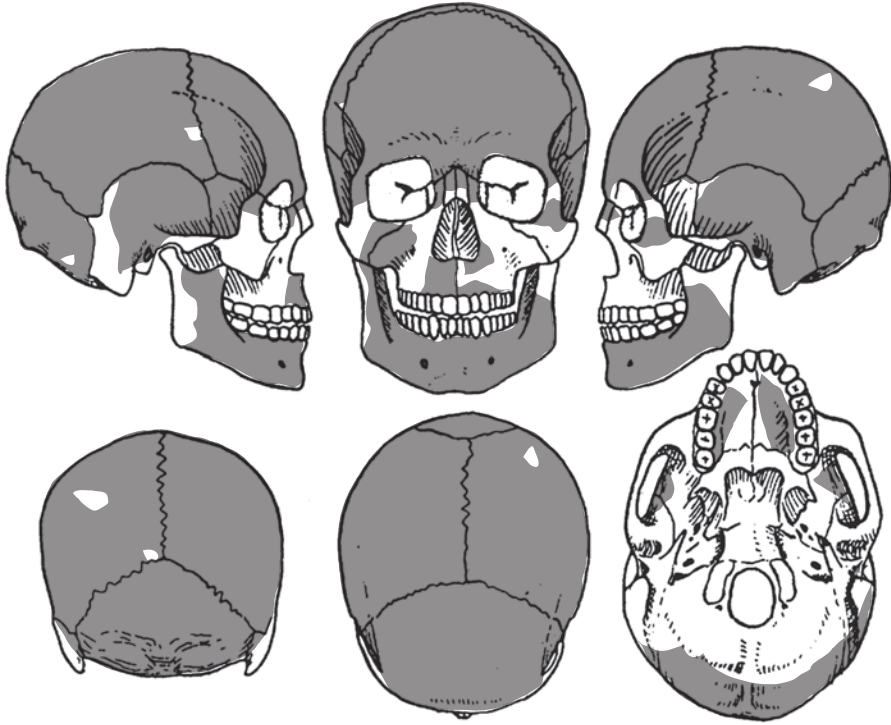
人骨番号	EⅢ地区2号人骨	九大人骨番号	E-Ⅲ-2
特記事項			

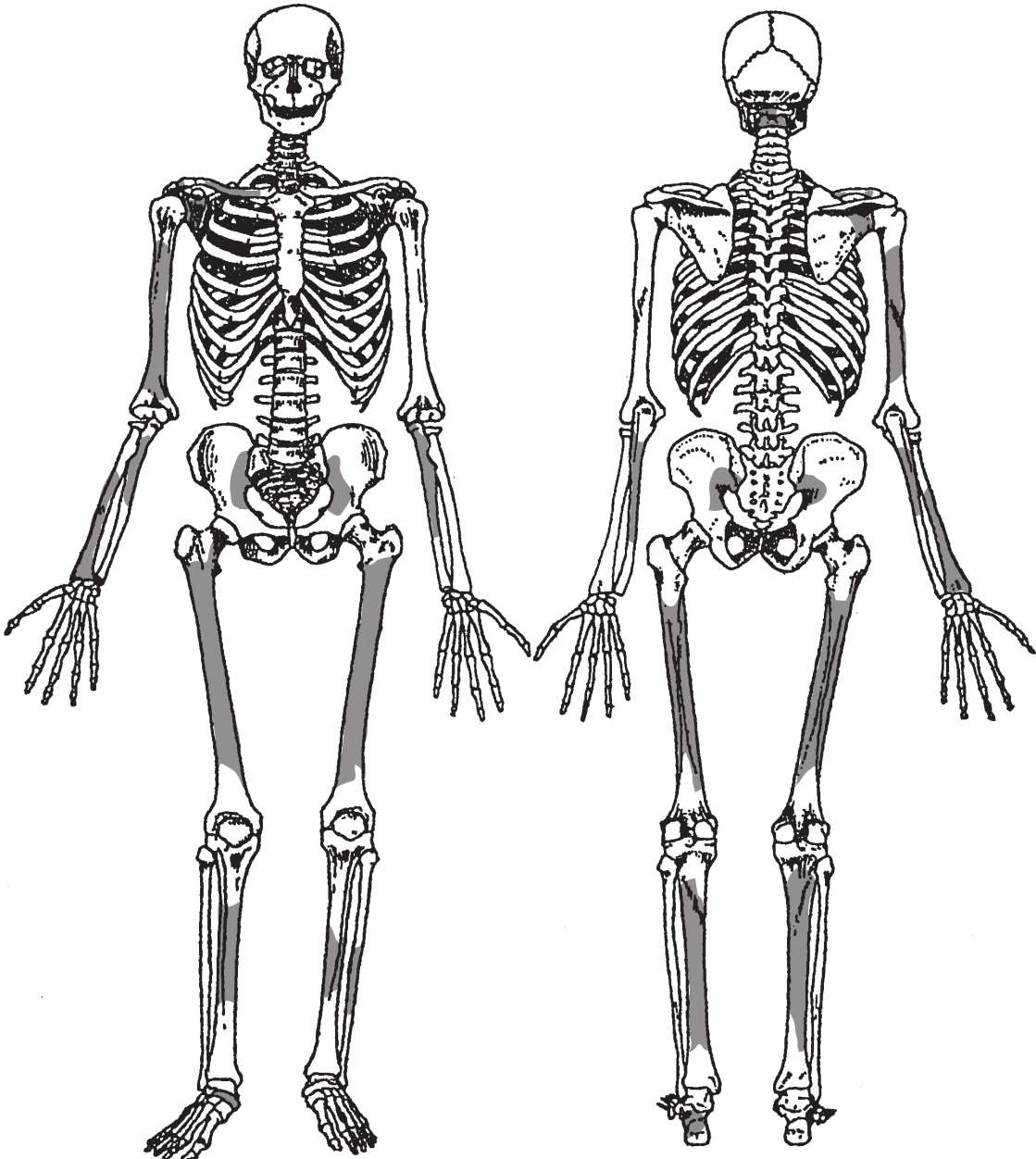
調査次数	第3次	層位	下層	性別	女性
人骨番号	EIV地区1号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	熟年
九大人骨番号	E-IV-1	埋葬方法	一次葬	抜歯	なし
副葬品					
貝輪	竜佩		ガラス玉		
オオツタノハ	マクラガイ科製玉類		二孔板状貝製品		
ゴホウラ 5	イモガイ科製玉類	1957(2129)	円盤状貝製品		
イモガイ	ノシガイ製玉類	1	ヤコウガイ製品		
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類	3	土器		
貝符 8	細型ツノガイ科玉類	147			
特記事項					
					

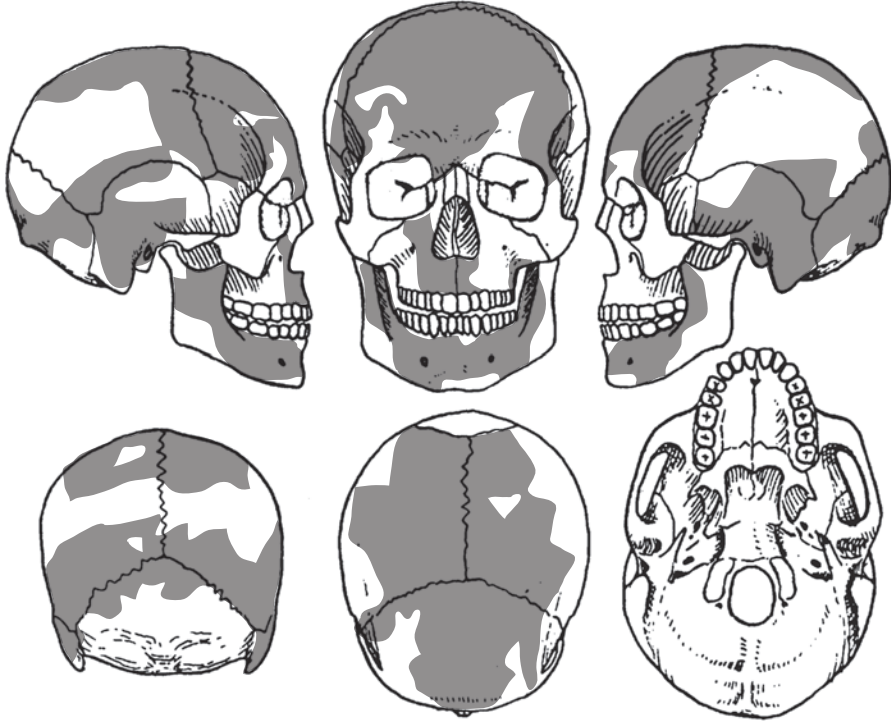
人骨番号	EIV地区1号人骨	九大人骨番号	E-IV-1
特記事項			
			

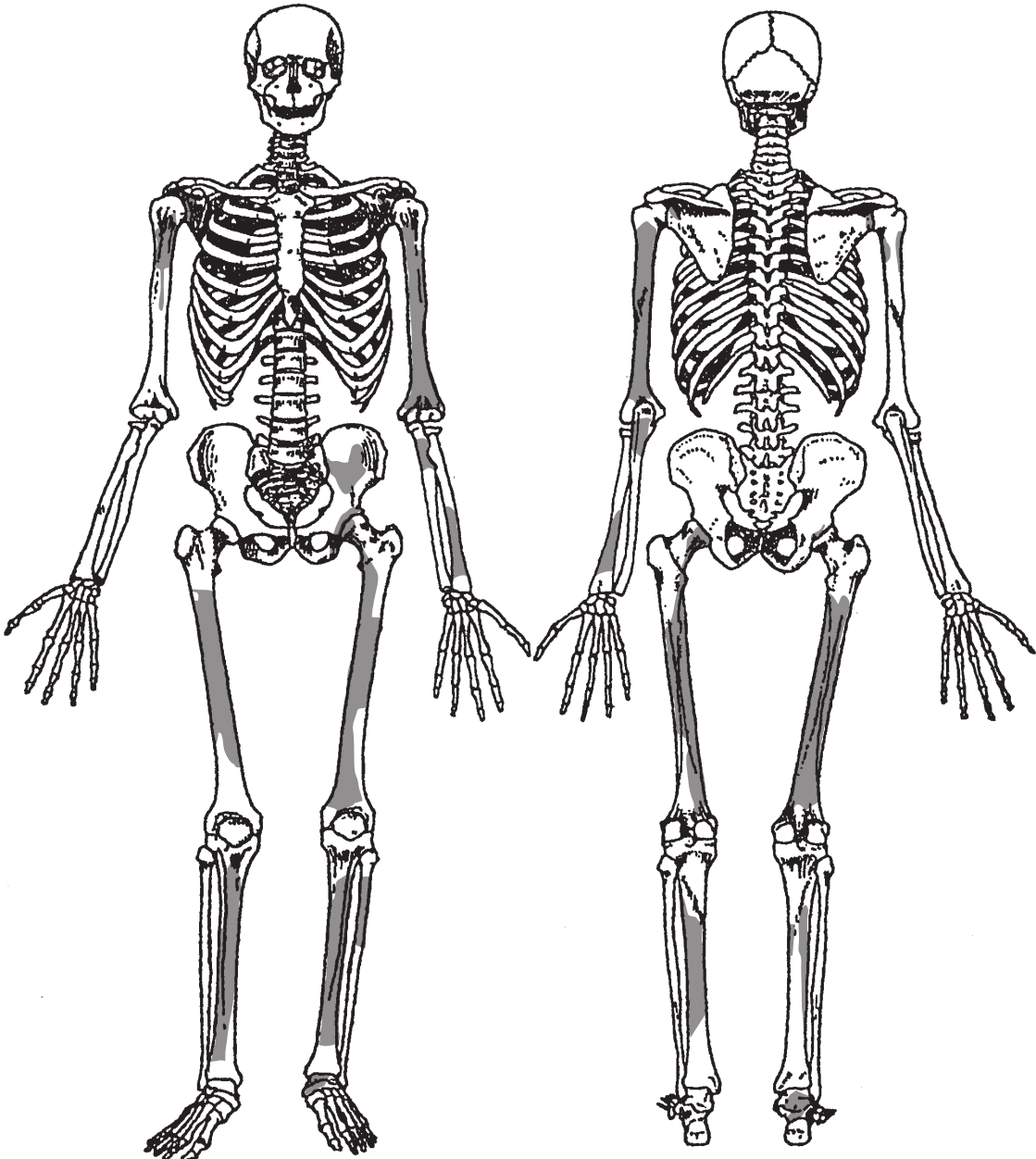
調査次数	第3次	層位	下層	性別	男性
人骨番号	EIV地区2号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	成年
九大人骨番号	E-IV-2	埋葬方法	一次葬	抜歯	左右上I2
副葬品					
貝輪	竜佩	ガラス玉			
オオツタノハ	マクラガイ科製玉類	二孔板状貝製品			
ゴホウラ	イモガイ科製玉類	円盤状貝製品			
イモガイ	ノシガイ製玉類	ヤコウガイ製品			
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類	土器			
貝符	細型ツノガイ科玉類				
特記事項					
					

人骨番号	EIV地区2号人骨	九大人骨番号	E-IV-2
特記事項			
			

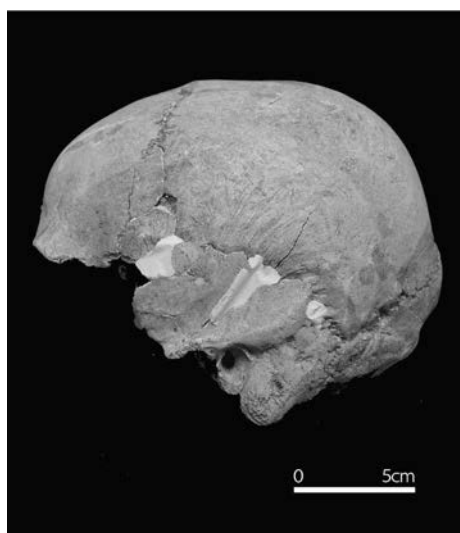
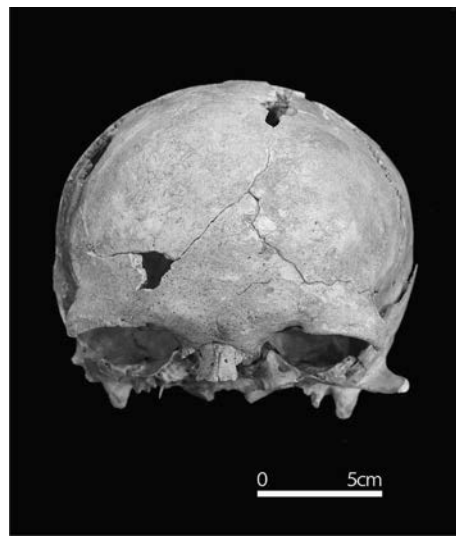
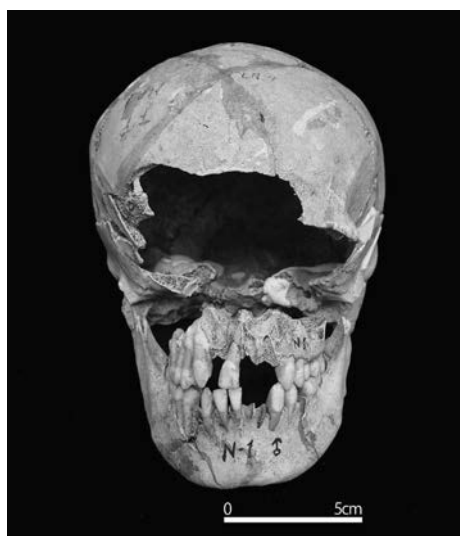
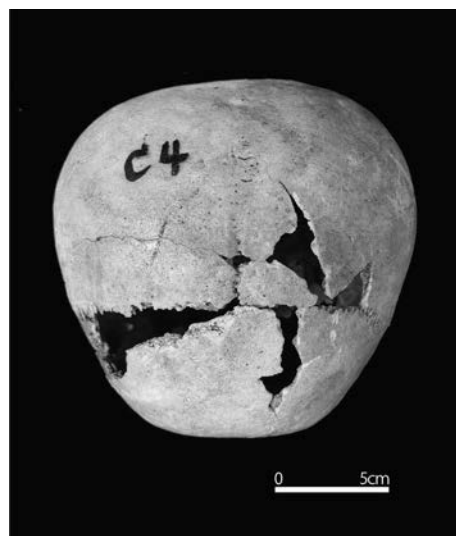
調査次数	第3次	層位	下層	性別	女性
人骨番号	EX地区1号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	成年
九大人骨番号	E-X-1	埋葬方法	一次葬	抜歯	右上I2
副葬品					
貝輪	竜佩	ガラス玉			
オオツタノハ	マクラガイ科製玉類	二孔板状貝製品			
ゴホウラ 4	イモガイ科製玉類	円盤状貝製品			
イモガイ	ノシガイ製玉類	ヤコウガイ製品 2			
オニ・ボウ	大型ツノガイ科玉類	土器			
貝符 1	細型ツノガイ科玉類				
特記事項					
					

人骨番号	EX地区1号人骨	九大人骨番号	E-X-1
特記事項			
			

調査次数	第3次	層位	下層	性別	女性
人骨番号	EX地区2号人骨	埋葬施設	土壙墓	年齢	成年
九大人骨番号	E-X-2	埋葬方法	一次葬	抜歯	なし
副葬品					
貝輪	竜佩	2	ガラス玉		
オオツタノハ	2	マクラガイ科製玉類	二孔板状貝製品		
ゴホウラ	17(14)	イモガイ科製玉類	848	円盤状貝製品	
イモガイ		ノシガイ製玉類	1	ヤコウガイ製品	2
オニ・ボウ		大型ツノガイ科玉類	2	土器	
貝符		細型ツノガイ科玉類	252		
特記事項					
					

人骨番号	EX地区2号人骨	九大人骨番号	E-X-2
特記事項			
			

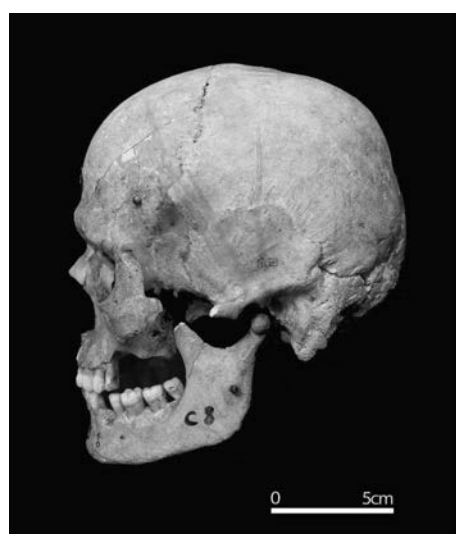
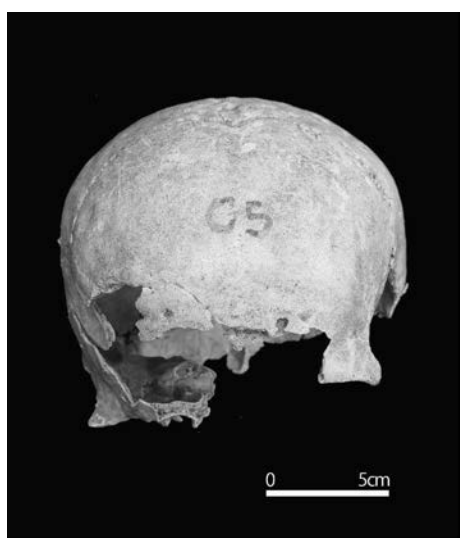
広田遺跡
出土人骨写真図版



N1 号人骨

C 地区 4 号人骨

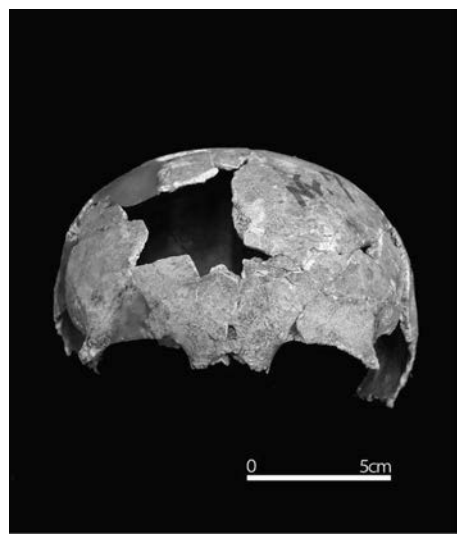
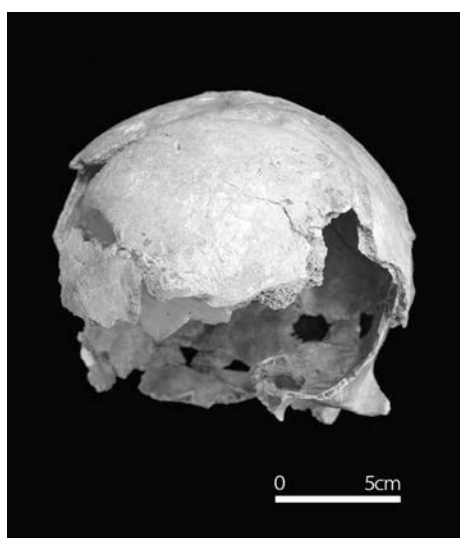
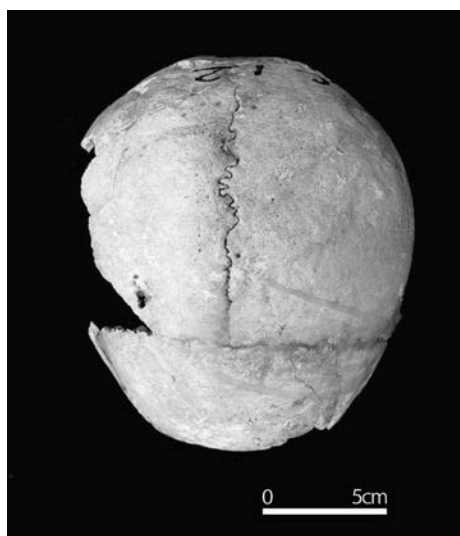
写真 1



C 地区 5 号人骨

C 地区 8 号人骨

写真 2



A 地区 7 号人骨

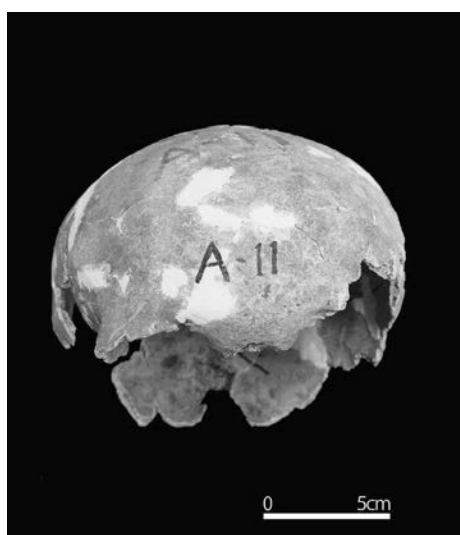
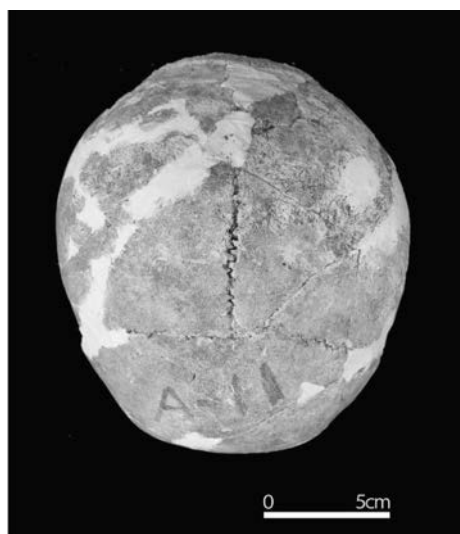


C 地区 12 号人骨

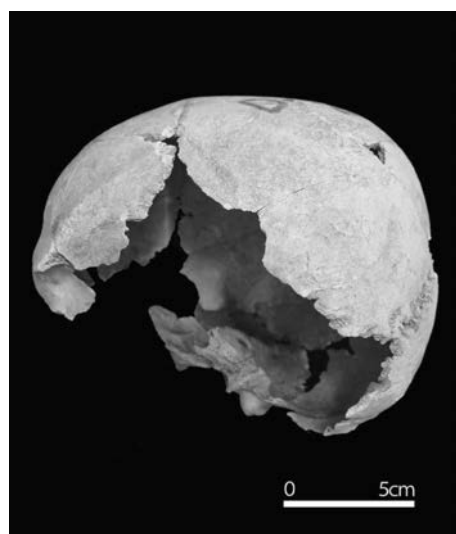


A 地区 9 号人骨

写真 3

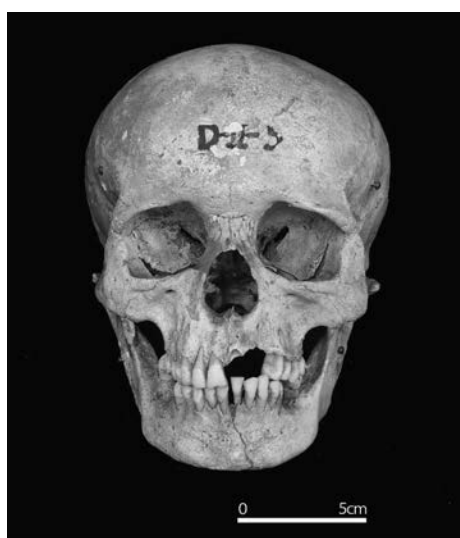
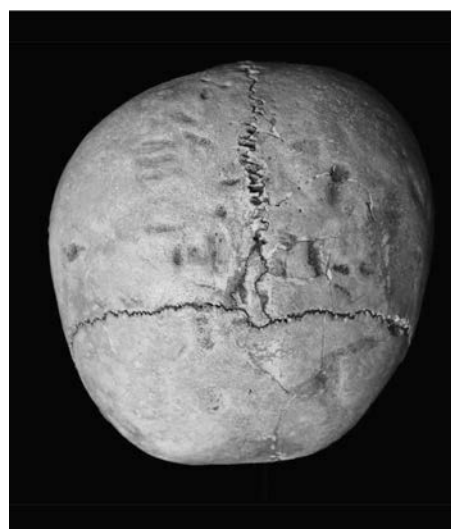
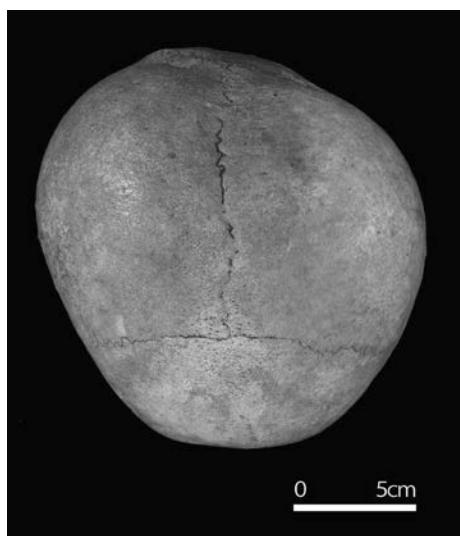


A 地区 11 号人骨



D I 地区 4b 号人骨

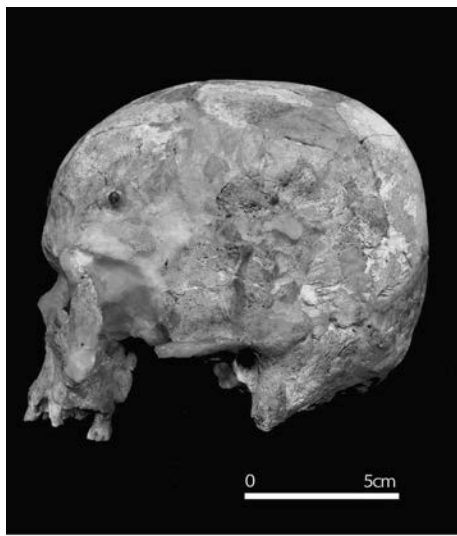
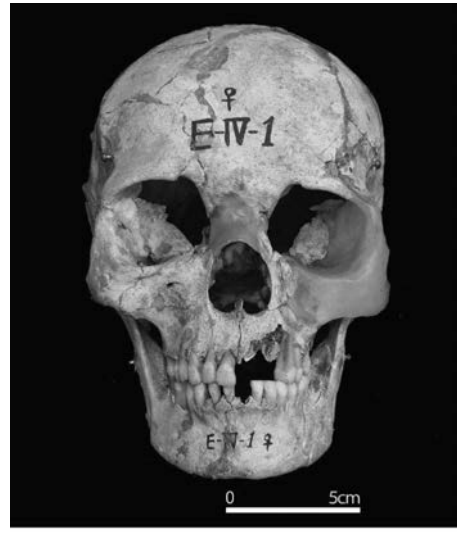
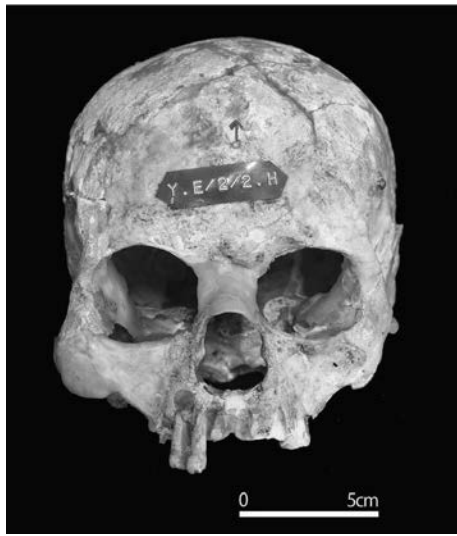
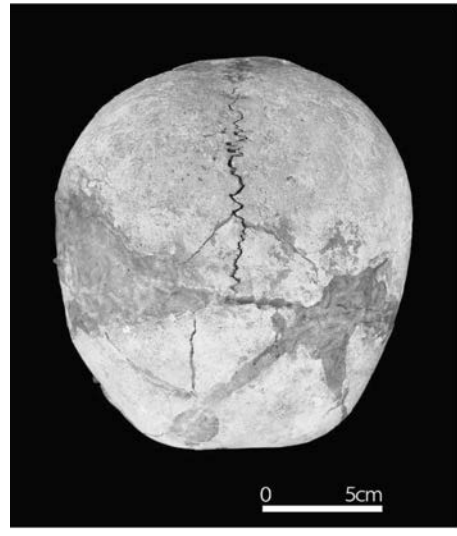
写真 4



D II地区 5号人骨

D III地区 2号人骨

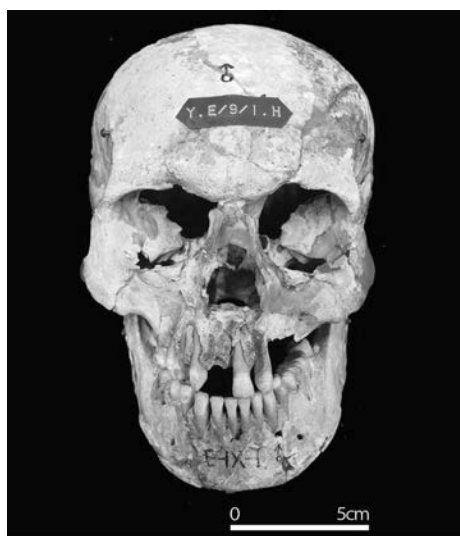
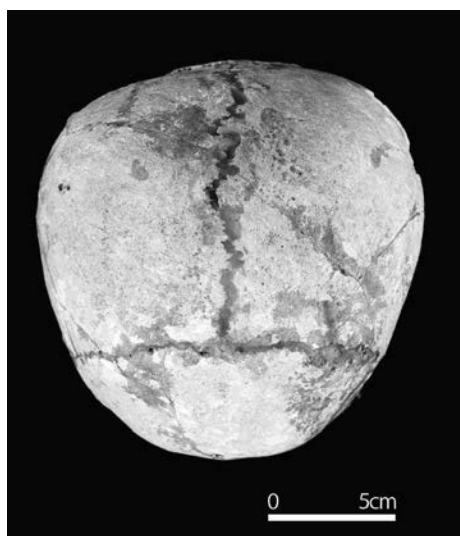
写真5



E II 地区 2 号人骨

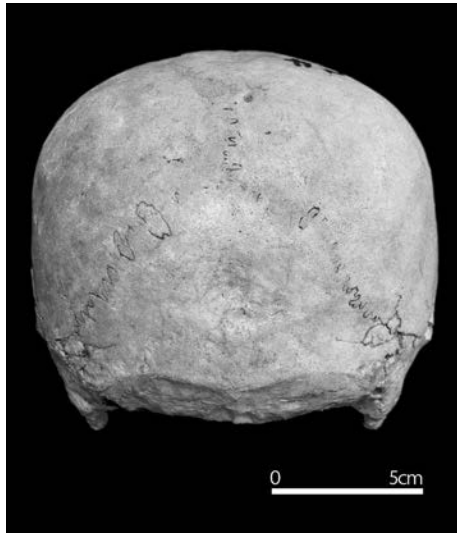
E IV 地区 1 号人骨

写真 6



E IV地区 2号人骨

写真7



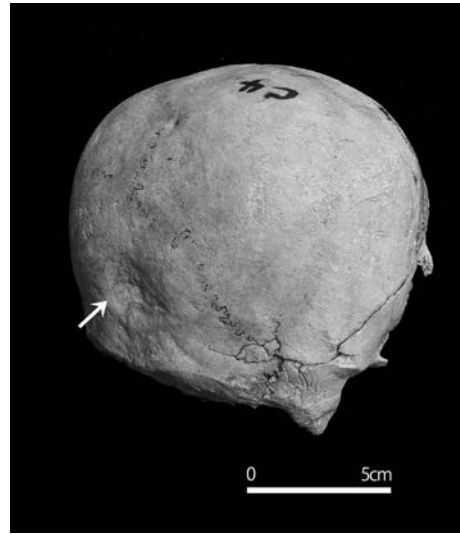
過剰縫合 (C地区4号人骨)



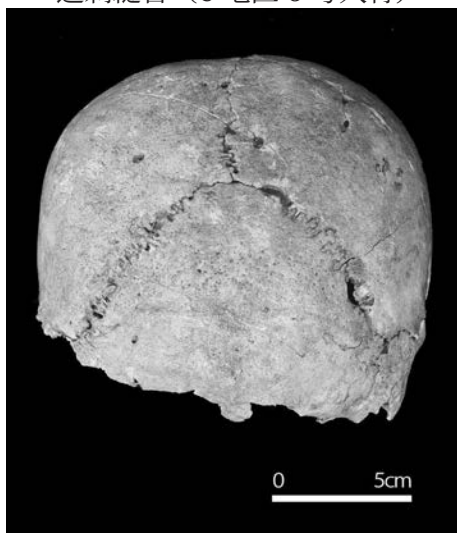
後頭骨の小孔 (C地区12号人骨)



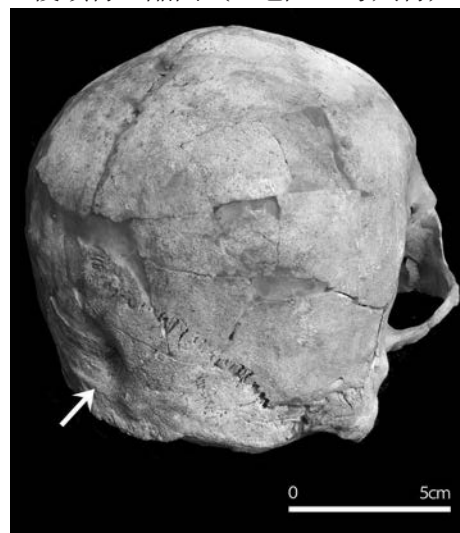
過剰縫合 (C地区6号人骨)



後頭骨の陥凹 (C地区4号人骨)



後頭骨の小孔 (C地区5号人骨)



後頭骨の陥凹 (N2号西側人骨)

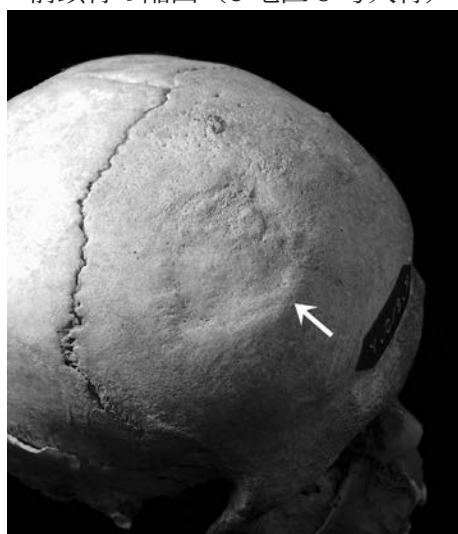
写真8



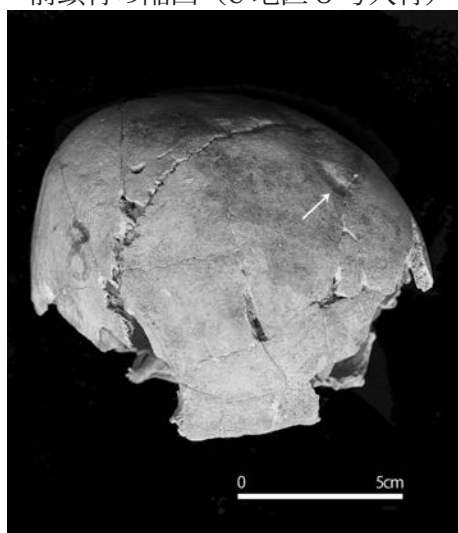
前頭骨の陥凹 (C 地区 5 号人骨)



右側寛骨の骨折痕(C 地区 8 号人骨)



前頭骨の陥凹 (C 地区 8 号人骨)



前頭骨の陥凹 (A 地区 8 号人骨)

写真9



(右上腕骨)



(左上腕骨)



(右橈骨・尺骨)



(左橈骨・左尺骨)



(右大腿骨)



(左大腿骨)

变形性關節症 (C 地区 8 号人骨)
写真10

第4章 2. 広田遺跡上層人骨個票

高椋浩史

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
MUSEUM

米元史織

九州大学総合博物館

TAKAMUKU Hirofumi

DOIGAHAMA SITE ANTHROPOLOGICAL

YONEMOTO Shiori

The Kyushu University Museum

本稿は、広田遺跡第1次調査（1957年、昭和32年）から第3次調査（1959年、昭和34年）において出土した人骨について、上層から出土した人骨と、出土情報が不明の人骨について記載した個票である。

出土人骨の番号は、2003年に刊行された『種子島広田遺跡』（広田遺跡学術調査研究会編）に依拠した。なお、九州大学総合研究博物館に保管されている資料との整合性をはかるため、「九大人骨番号」もあわせて記載している。出土人骨の情報は、調査次数順に記載している。個票には、出土人骨の個体数と残存部位の認定、性別判定、年齢推定について表記した。副葬品の出土遺構と数量については『種子島広田遺跡』（広田遺跡学術調査研究会編）に依拠した。

なお、紙幅の都合上、オニシ製貝輪とボウシュボラ製貝輪について、表中では「オニ・ボウ」と一括・省略した。また、副葬品の数量については、発掘調査時の日誌に記された数量と現存する数量が異なるため、『種子島広田遺跡』（広田遺跡学術調査研究会編）の267頁から268頁の一覧表に記された数量を基本的に踏襲し、報告書の本文中の数量と異なる場合は本文中の数量を括弧書きで併記している。

本稿を執筆するにあたり、以下の方々の協力をいただいた。

【九州大学】足達悠紀、内田千種、亀川微香、鈴木沙弥、田中佑希乃、田中利紗、出見優人、唐尚輝、永島さくら、長谷川桃子、諸岡初音、山下理呂

【土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム】弘重久美子

上層人骨個票データは付属CDに収録している。

個票目次

- 第1次調査
 - 第1人骨群
 - 第2人骨群
 - 第3人骨群
 - 第4人骨群
 - 第5人骨群
 - 第6人骨群
 - 第7人骨群

第 2 次調査

- D 地区15号人骨
- A 地区第 1 集骨

第 3 次調査

- D I 地区第 1 集骨
- D I 地区第 2 集骨
- D I 地区～ A 地区人骨
- D I 地区 E 集骨
- D II 地区第 1 集骨
- D II 地区第 2 集骨
- D III 地区集骨
- D VII 地区第 1 トレンチ南端集骨
- D VIII 地区第 1 集骨

出土情報不明資料

- F 区散乱人骨
- D トレンチ人骨
- 101号人骨
- 102号人骨
- 113号人骨
- 114C あげ人骨
- 114C 人骨
- 101図人骨
- 101,102,103,114C 人骨の集骨
- 118図人骨
- A 区人骨
- A 区114d 人骨
- A 区114b 人骨
- A 区114c 人骨
- A 区 I40/I41人骨
- B トレンチ人骨
- 大森教授送付による骨
- B 地点崖面表採人骨